

COE研究シリーズ3

COE研究シリーズ3

大学院教育と学位授与に関する研究

全国調査の報告

広島大学高等教育研究開発センター編

COE Publication Series No. 3

Research on Graduate Programs and Degree Conferral in Japan:

a Report on National Dean and Graduate Student Surveys

大学院教育と学位授与に関する研究 全国調査の報告



Research Institute for Higher Education
HIROSHIMA UNIVERSITY

March 2004

ISBN 4-938664-96-8

広島大学高等教育研究開発センター



大学院教育と学位授与に関する研究

－全国調査の報告－

広島大学高等教育研究開発センター編

広島大学高等教育研究開発センター

COE研究シリーズの刊行にあたって

広島大学高等教育研究開発センターは、略称を高教研と称し、英語名を Research Institute for Higher Education, 略称をRIHEとしております。その前身は広島大学大学教育研究センターですが、1972年5月に、さらにその前身の大学問題調査室を発展的に継承して、文部省令による教育研究施設として、日本最初の高等教育研究の専門機関として設置されました。爾来、年輪を重ねる中で着実に研究教育活動を展開し、内外の高等教育研究に重要な役割を果たしてきましたが、お陰様で昨年2002年には創立30周年を迎えるに至りました。

この節目の年に、文部科学省の21世紀COEプログラムの人文科学領域において、本センターのプロジェクト「21世紀型高等教育システム構築と質的保証」（拠点リーダー：有本章）が113件（うち人文が20件）の拠点の一つとして選定されました。このことは高等教育研究の発展に鋭意取り組んできたセンターの歴史の中でも特筆すべき快挙であると、当センターの関係者一同率直に喜んでおります。とりわけ高等教育の分野では全国唯一の拠点に選定されましたことは、これまでの実績と今後の可能性が認知された点でも、長年にわたって積み重ねてきた努力が報われた点でも、実に名誉なことでありますと同時に、責任の重さを痛感する次第であります。これも高等教育研究が一種のタブー視された時代から盛況を呈するに至った今日まで、数多くの先輩やコリーグ諸氏に支えられて営々と築かれた伝統や風土や精神の賜と考えております。したがって、「巨人の肩に乗った小人」であるとの謙虚な気持ちでこのような機会を受け止めますとともに、これを契機にさらなるフロンティア開拓の精神を醸成し、斯界の発展において一層の貢献を実現したいと祈念しているところであります。

本プロジェクトは、主題に掲げました研究を推進するために、5年間にわたって取り組むものですが、具体的にはFD・SDの制度化と教育システムの質的保証、研究システムの質的保証、大学組織編成と質的保証などの問題を中心に、データベースの構築、若手研究者の養成などの問題に重点的に取り組むことを期しております。さらに、研究成果を積極的に国内外へ公表し、研究成果を紹介することによって拠点としての研究ネットワークの形成に努め、日英両語による出版物を精力的に刊行することにしております。そして、その一環として、このような体裁でCOE研究シリーズを刊行することにいたしました。その目的は、主として、センターのCOEプログラムと関連して取り組んでいる研究活動の実績を記録にとどめることとその国内外への発信によって研究ネットワークの形成を着実に推進することに置かれています。

本企画によって世に送り出される刊行物が、国内外の高等教育研究者はもとより、高等

教育に関心のある多くの人々に貴重な価値ある情報を提供することができれば、望外の幸せであります。また、研究ネットワークの一層の発展のために、読者の皆様から絶大なご支援とご協力を賜りますことができましたら、この上ない喜びです。何卒よろしく願い申し上げます。

2003年3月

21世紀COEプログラム
拠点リーダー 有本 章

は し が き

本書は、21世紀COEプログラムに採択された「21世紀型高等教育システム構築と質的保証」プロジェクトの研究システム班において実施された大学院に関する調査研究の最初の報告書である。研究システム班（代表者：山野井敦徳）においては、大学教授市場、教員の任期制をはじめいくつかの研究が進行中である。大学院教育と学位授与に関する調査研究もその一つである。

日本の大学院に関する研究は、これまでいくつかの書物があるが制度的な研究が多く、大学院の「教育」や「学位授与」などプロセスに関してはこれまで十分な調査や実証的研究が行われていなかった。象牙の塔の内部は、関係者のみが経験的に知っているのみで、それも自己の専門領域に限られている。われわれは、研究科長と大学院学生に対する全国調査を実施し、大学院教育の中核部分にアプローチを試みようとした。

さて、1987年9月に設置された大学審議会は、1990年代以降、おびたしい数の答申を行ったが、大学院はその中で大きな比重を占めていた。それは、大学審議会の部会編成からも明らかである。第1期においては、大学院部会と大学教育部会の2つの部会が置かれた。第2期には、高等教育計画部会が加わり、3部会制となり、第3期には、高等教育計画部会に代わって組織運営部会と入試部会が設置され、4部会制となった。大学院部会は、大学審議会の活動期間のすべてにおいて、筆頭部会として存在していたのである。

大学院に大きな期待がかけられたのは、現代の高等教育において大学院が、高度な教育と研究の中核的な組織であるからである。我が国の高等な教育と研究の質をさらに向上させるには、大学院を強化することが必要であると考えられたからである。

1980年代末から10数年の間、大学院に関する答申とその後の法令改正が相次いだ。この間、各大学は、大学院の部局化・重点化に大きなエネルギーを傾注し、教員は、大学院の改組案の作成に忙殺されたが、答申や法令改正の理解だけでも大変であった。世の中のめまぐるしい変化についていくのにため息が出るくらいであった。

そのような慌ただしい年月が久しく経過した21世紀初頭のいま、大学院は想像以上に大きな変貌を遂げている。われわれは、一時それを振り返り、現実がどのようなものであるかについて、全体的な鳥瞰を得ることが必要であろう。本報告は、我が国の高等教育関係者に、大学院教育の実態認識を提供したいと考えている。今後の大学院に関する政策の立案や各大学・研究科等での改革案の作成の際の基礎資料になれば幸いである。

なお最後になったが、ご多忙中にもかかわらず本調査の質問紙にご回答いただいた全国の大学院研究科長と大学院生の皆様に感謝申し上げる次第である。また、資料整理にあた

り，広島大学大学院博士課程後期学生櫻田裕美子さんの尽力を得たことを記しておく。

2004年2月

山崎 博敏

目次

COE研究シリーズの刊行にあたって
はしがき

第1部 研究の目的と背景

第1章 研究の目的と概要	1
第2章 近年における大学院と学位授与の変化	8

第2部 研究科長調査

第1章 研究科長調査の概要	15
第2章 大学院入試	18
第3章 就職	22
第4章 大学院教育の目的と博士号の概念	24
第5章 カリキュラムと学位の水準	32
第6章 課程博士と博士論文	35
第7章 博士号の審査	39
第8章 標準修業年限での課程博士取得の困難さ	42
第9章 大学院の制度と政策に関する意見	46

第3部 大学院生調査

第1章 大学院生調査の概要	49
第2章 大学院への進学動機と修了後の希望進路	53
第3章 大学院生の生活と学会活動	58
第4章 課程博士の取得可能性	62
第5章 博士論文に関する研究	67
第6章 博士課程入学以前の教育・学習と自己能力の評価	73
第7章 アシスタントシップと物的・資金的条件	76
第8章 大学院教育の改善方策	82

資料編

1. 自由記述意見	85
2. 回答結果集計表	135
3. 質問紙調査表	193

<執筆者一覧>

山崎博敏 第1部、第2部第1章、第4章—第9章

福留東土 第3部第1章、第3章—第8章

葛城浩一 第2部第2章・第3章、第3部第2章

第1部 研究の目的と背景

第1章 研究の目的と概要

第1節 研究の目的

大学院の拡充発展は1990年代以降のわが国の大学改革の中でもとりわけ重要な課題となっている。それは、大学院が、高度な専門教育の場として、そして研究の場として、期待されているからである。現代高等教育において、大学院は学問の中心であり、高度な専門教育の中心になっている。大学院は高度な教育と研究を遂行するための重要な組織であり、一国の経済社会文化の発展にとって戦略的な位置を占めている。大学院の充実は、単に大学だけの問題ではなく、一国全体の問題となっている。

これまで我が国の企業や公共部門における基幹部門の要員は大学学部の卒業者を中心としていたが、研究開発だけでなくあらゆる部門で職務が高度化し専門化し、国際的な競争が激化した現在、高度に専門的な知識と技能を有する人材が求められている。経済社会の発展に対する大学の役割の大きさが改めて認識され、高度の専門的な知識技能を有する人材の養成が大学院に期待されている。さらに、独創的な研究の振興に加えて、大学のみならず産学官を含めたあらゆる研究機関で活躍する研究者の養成が大学院に求められている。大学院におけるそのような教育研究の発展が、我が国における新しい産業の育成、経済社会の発展、さらには国際貢献に通じることが期待されている。

大学審議会は1988年12月に「大学院制度の弾力化について」を答申して以来、博士課程における高度専門職業人の教育、夜間大学院、修業年限と入学資格の弾力化、大学院固有の教育研究組織の整備、大学院規模の飛躍的増大など大学院の規模拡大と質的充実のために数度の答申を行った。また1996年に閣議決定された科学技術基本計画により、多額の科学技術関係経費が投じられ、研究者の養成と確保にも力が入れたが、これは大学院と密接に関連していた。

これらの政策の結果、大学院の規模は急速に拡大し、大学院組織も大きく変貌している。多くの大学で学部から大学院への部局化・重点化がすすめられ、新たに独立大学院や多様な形態の独立研究科・独立専攻等の設置が行われた。博士課程を置く大学の数は、1984年には183校だったが、1992年には233校、2000年には346校、2002年には376校へと増加している。また大学院生の数は、1992年から2002年の10年間に修士課程・博士課程とも2倍以上に増加している。

それを反映して、博士学位の授与数が急増している。しかも、これまでわが国の大学院は学位を取得するのがきわめて困難であると批判され、論文博士が大部分を占めてきたが、

人文、社会、教育系でも課程博士が増加しつつある。他の主要諸国並みにキャリアの早い段階で学位を授与することの必要性は古くから主張されてきたが、数字の上ではそのような方向に進みつつある。

大学院制度の拡大とともに、入学者の選抜方法も多様化し、大学院学生も多様になった。大学院教育も急激に変化してきた。高度な専門教育を目的とする新しい専門職大学院や専攻が創設され、昼夜開講制など教育方法の特例を利用するものも増えている。一部には、急増した入学定員を充足させるために、大学院への入学が急速に易化するという現象も生じつつある。「大学（＝学士課程）の大衆化」はもはや言い古された言葉だが、今や「大学院の大衆化」が進行している。学士課程よりも修士課程の水準低下の方を問題視する声も聞かれるようになった。

近年、高等教育における質の保証がきわめて重要な課題となっているが、これは大学院教育についても同様である。高度な専門教育に対する大学院の役割は大きい。そして、国際的に通用する研究活動を推進するためには、それらの中核的な担い手を育成する大学院における教育と研究の質と水準を維持し、向上させていくことが必要である。大学院教育は、わが国の今後の学術と高等教育の行方を大きく左右する問題でもある。

この間の大学院の制度上および実態面での変貌は著しいものがある。現実の変化はわれわれの認識をはるかに越えており、実態を正確に把握することすらできない状況にある。大学審議会が大学院の量的質的拡充が答申されて 15 年たち、大学院の整備が一つの段階を過ぎた現在、急速に変貌した我が国の大学院教育の実態を把握し、その成果を振り返る時期にさしかかっていると見えよう。

これまで、大学院については 1990 年代以降だけでも、数冊の書物が刊行されている。たとえば、市川昭午・喜多村和之編『現代の大学院教育』（1995）、石井紫朗編『転換期の大学院教育』（1996）、有本章編『大学院の研究』（1994）などがある。また、優れた論文もいくつか公表されている。しかし、大学院教育や学位授与の実態に関する調査研究はそれほど多くない。古くは、日本学術会議学術体制委員会「大学院に関する調査報告書」（1961）や北海道大学大学院生協議会「北海道大学大学院白書」（1965）などがある。近年、大学の研究環境に関する調査報告書がいくつか刊行されているが、大学院教育や学位取得を直接調査したものは意外と少ない。新堀通也編『夜間大学院』（1999）は研究科長や院生を対象とする様々な調査を行っているが、対象が社会人大学院（生）に限られている。なお、筆者は 2001 年 5 月の第 4 回高等教育学会（北海道大学）において「日本とハンガリーにおける大学院生の進学動機と研究指導」（サボー・オルシヨヤ、山崎博敏）を発表したが、対象となった日本の大学院は数校に限られていた。今回の調査では、その時の質問紙を大幅に見直し、改良するとともに、全国の博士課程を有する大学院研究科すべてを対象とした。

この調査では、1990 年代に大規模化し大衆化した我が国の大学院教育、特に博士課程レ

ベルの教育と学位授与に焦点を当て、その実態の多様性を主として専門分野別に分析し、大学院教育の質の改善について考察する。

第2節 調査の概要

われわれは、2003年夏に、全国の博士課程を有するすべての研究科を対象として実施した「大学院教育に関する研究科長調査」（以後、「研究科長調査」とも略称）と「大学院生の学習・研究活動に関する調査」（以後、「大学院生調査」とも略称）を実施した。

2003年6月末に博士課程を持つ全国の大学の研究科長920名に対して、「大学院教育に関する研究科長調査」調査票を配布し、回答を依頼した。またこれと同時に、調査対象となった研究科長に対して、博士課程後期の大学院生を対象とする「大学院生の学習・研究活動に関する調査」の配布を依頼した。いずれも回答者から郵送によって回収した。研究科長調査では、有効回答者数は470名（回収率51.1%）、大学院生調査では、8,024部の配布に対して有効回答者数は2,656名（回収率は33.1%）であった。

2つの調査では、大学院教育が拡大し、学位授与数が急増している現在、博士課程の教育はどのように位置づけられ、そこで授与される博士号にはどのような意味が付与され、大学院生はどのような研生活を送り、どのように論文を書き、どのように審査されているのか、そこにはどのような困難な問題が横たわっているのか、さらには、大学院教育と博士号の質を保証・維持・改善してゆくためには何が求められるのか、などを、立場が異なる研究科長と大学院生が、それぞれどのように捉えているかを複眼的にアプローチしようとした。その際、この報告書では、大学院研究科の専門分野と大学院生の学年による違いを中心に分析することにした。これらの分析結果は、第2部と第3部で詳細に報告することにする。

第3節 調査結果の概要

以下、2つの調査の結果を要約しておこう。

研究科長調査

入試と就職

博士課程前期では、年2回以上大学院入試を実施している研究科が75%を越えている。社会人特別選抜は約7割、留学生特別選抜は6割以上の研究科で実施されている。外国語は、1カ国語が約8割、部分的にでも辞書持ち込みを許可している研究科は5割を越える。

就職は前期も後期もおおむね順調だが 10 年前と比べて悪化している。

大学院の役割

研究科長は、大学院の役割を博士課程の前期と後期で異なったものとしてとらえている。博士課程前期は専門職業人の養成（92%）、後期は広い意味での研究者の養成（97%）が圧倒的に多い。博士課程（後期）の役割が大学教員の養成であると考える者は約 75%である。そして、博士号はもはや「その分野の権威であることを証明する」（10%）ものではなく、「自立した一人前の研究者としての資質を証明するものである」という考え方が支配的（84%）である。

大学における専門教育は学部教育だけでは不十分であり、修士段階までの学習が必要だに賛成する者は約 8割もいる。文系と学際系では、「修士の段階で研究者養成の課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである」に賛成する者が多い（49%、44%）。研究科長は、この 10 年間に博士課程後期の学生の質が多様になったことを認めている。大学院生多様化の結果、留学生や社会人学生に対して授業や研究指導で配慮しなければならないことが増加し、64%の研究科長が「かつて学部教育で教えていたことを大学院で教えなければならなくなった」と答えている。自研究科の大学院教育の質が向上したと思う者は全体の約 3分の1にとどまった。

大学院教育と学位の水準

研究科長の 7割以上は、他大学と比べて自研究科の博士後期のカリキュラムや博士号の水準はほぼ同等だと考えている。しかし、博士号の水準は大学間で異なっていると考えている者は 3分の2を越えている。日本の博士号の国際的な水準は、文系ではアメリカより高いがヨーロッパよりも低く、理系は同等、医療系では欧米よりもかなり低いと評価されている。

課程博士と学位論文

課程博士論文の典型的な長さは 400 字原稿用紙で約 250 枚の長さで、分野別には文系 500 枚、理系 200 枚、医療系 40 枚、学際系 350 枚程度である。

取得者全体の 8割以上は日本人であるが、文系では外国人が 3割程度を占めている。取得時の年齢は平均で 31.8 歳、文系は 35 歳を越えている。博士課程（後期）に入学後、4.2 年（文系では 5.6 年）後に博士号を取得しており、博士論文のテーマを実質的に研究しはじめて 5-6 年（医療系では 4 年）かかっている。理系や医療系では、博士課程（後期）入学者のほとんどが課程博士を取得するのに対し、文系では、取得者は入学者の半分以上である。文系では研究科長の半数が標準修業年限（3 年）以内に取得するのは困難であると回答している。

審査と博士号の取得

博士号の審査にあたる審査委員会の約8割は、3、4人の教員で編成され、他講座・他専攻の教員が参加している。他大学の教員が審査員に加わることはそれほど多くない。学位論文提出のための前提条件として、理系や医療系、学際系では全国的・国際的な学会誌への論文掲載が求められているが、文系ではそのような要件を課していない研究科が多い。

標準修業年限内で課程博士を取得することは文系では特に困難であると認識されている。その原因はどこにあるのだろうか。研究科長は、「研究成果を期間内に出すこと」、「院生本人の力量が不十分であること」、「博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと」、「学部時代の基礎的学習が不十分であること」、「論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること」などをあげていた。研究科長の立場からは、院生に対する期待の大きさを反映しているのだろうが、院生の力量や意欲に対する評価には厳しいものがある。

改善方策

それでは、大学院での研究生活をどのように改善したらよいのだろうか。研究科長は、指導教員の研究指導、大学院のカリキュラムや授業内容、学内外の研究会への参加などをあげていた。施設・設備などハードの事項よりも教育・研究上の事項、とりわけ教員側の努力が必要であると認識されている。院生だけでなく教員の努力も必要である。

大学院政策

最後に、近年の大学院政策に対しては、既に博士課程が設置済みであることを反映してか、これ以上の大学院博士課程の設置には消極的であった。また、1990年代以降、様々なタイプの評価が実施されているが、興味深いことに、設置審や視学委員、大学評価・学位授与機構、大学基準協会などの外部評価よりも、大学・学部・研究科による自己点検・評価が改善に役立つと考えている者が多かった。

大学院生調査

進学動機

大学院への進学、特に博士課程前期（修士課程）から博士課程（後期）への進学は、人生において決断を要する大きな問題である。理系や学際系の院生の半数近くは修士を終えた後、医療系の院生の半分以上は学部卒業後、博士課程（後期）への進学以外の進路を考えていた。これに対して文系では、就職を考えた者の割合は少ない。悩んだ末、博士課程（後期）への進学に踏み切ったのは、「大学で専門をさらに深めたかったから」「研究する機会を得るため」「将来、研究者として活躍するため」といった内発的な動機であった。進路選択に際して、大学院での指導教員が大きな影響を与えていたことは注目される。

研究生生活と学会活動

博士課程の学生は、博士論文に関する文献購読や調査・実験に生活時間の多くの時間を割き、学会発表の準備活動にも時間を使っている。その他に文系の院生は授業や学内外の研究会への出席に多くの時間を使っている。医療系や文系ではアルバイトに忙しい者が多いが、理系ではそうではない。

理系，医療系，学際系の院生は，国内学会での口頭発表経験者は8割前後にのぼるが，文系では5割にも満たない。また理系，医療系，学際系の院生の4割以上は国際的・全国的な学会誌への論文執筆の経験があるが，これに対して，文系では院生の5割近くが大学等の紀要論文に論文を執筆した経験を持っている。

課程博士の取得可能性

文系の院生の3割は在学中に課程博士を取得するのが困難と考えているが，理系ではそれは1割程度しかおらず，「十分可能」と「努力すれば可能」をあわせると9割近くにもなる。課程博士を取得することがなぜ困難かを聞いてみると，全体としては，「論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと」，「論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること」，「学位論文が長いので執筆に時間がかかること」の他に，「自分自身の力量が不十分であること」，「自分自身のテーマ設定が曖昧なこと」「博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと」など自分自身の能力や研究への取り組み方に原因を求める意見もみられた。

博士論文に関する研究

院生の研究テーマはどのようにして決定されるのだろうか。全体では「指導教員と相談して選んだ」が6割近くを占めているが，文系では，「自分自身で選んだ」が過半数を占めている。また，全体ではテーマは「指導教員が得意とする研究領域の一部」であることが多いが，文系では「指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ」を選ぶ者も4割近くいる。

指導教員の研究指導に対する満足度は良好で，「とても十分」または「少な目だが十分」と答えた者の割合は全体の85%程度を占めている。

博士課程入学以前の教育と自己能力の評価

博士課程での研究活動に対して過去に受けたどのような教育が最も役立っているのだろうか。全体では，「修士論文のための研究」，「学部時代の専門教育」，「修士時代の授業」，「学部時代の卒業研究」など現在の研究活動と直接関連する専門的な教育が上位を占めていた。ただし，「大学院への受験勉強」，「高校までの学習」と「学部時代の教養教育・一般教育」などもこれらに次いで役立っていると回答されていた。

研究科長は院生の能力に対して批判的であったが、院生自身は自己の能力を研究科長ほど不十分であるとはみていない。しかし、外国語を書くこと、話すことについては、十分であると回答したものは1割程度であった。なお、分野別には、文系の院生があらゆる分野で自己の能力に対して最も肯定的であった。

アシスタントシップと経済的条件

回答のあった博士課程院生の約3分の1が現在ティーチング・アシスタント（T.A.）を担当しており、過去も含めると約3分の2がT.A.の経験者である。また、回答者の2割弱が現在リサーチ・アシスタントを担当しており、経験者は3割程度いる。

回答者のうち日本学術振興会の特別研究員（DC）に採用されている者は、わずかに5%弱であった。分野別には理系が最も高かった。院生の数に比べて採用枠が少ないことからある程度は予想されることとはいえ、極めて難関である。それでも、約4割の院生は、PDやDCに「努力すれば採用される」と答えている。

大学院教育の改善方策

最後に、大学院における研究生生活を充実したものとするにはどのようなことが必要なのだろうか。院生の意見で多くあがっていたのは、全体では、「論文を執筆する機会」、「指導教員と相談する機会」、「指導教員の研究指導の内容」、「コンピュータの利用」、「学会で発表する機会」、「図書館の充実度」などであった。コンピュータと図書館という大学全体のインフラの充実とともに、指導教官の密接な研究指導と研究成果の発表という中核的な事項が挙げられていることは、当然であるとはいえ、指導教官は改めて肝に銘じておく必要があるだろう。

これらの詳細な結果は第2部と第3部の各章で示すことにする。以下では、それに先立ち、文部科学省から公表された統計資料を基にして、主として制度的なマクロな観点から、近年の大学院教育と学位授与における大きな変貌を鳥瞰しておく。

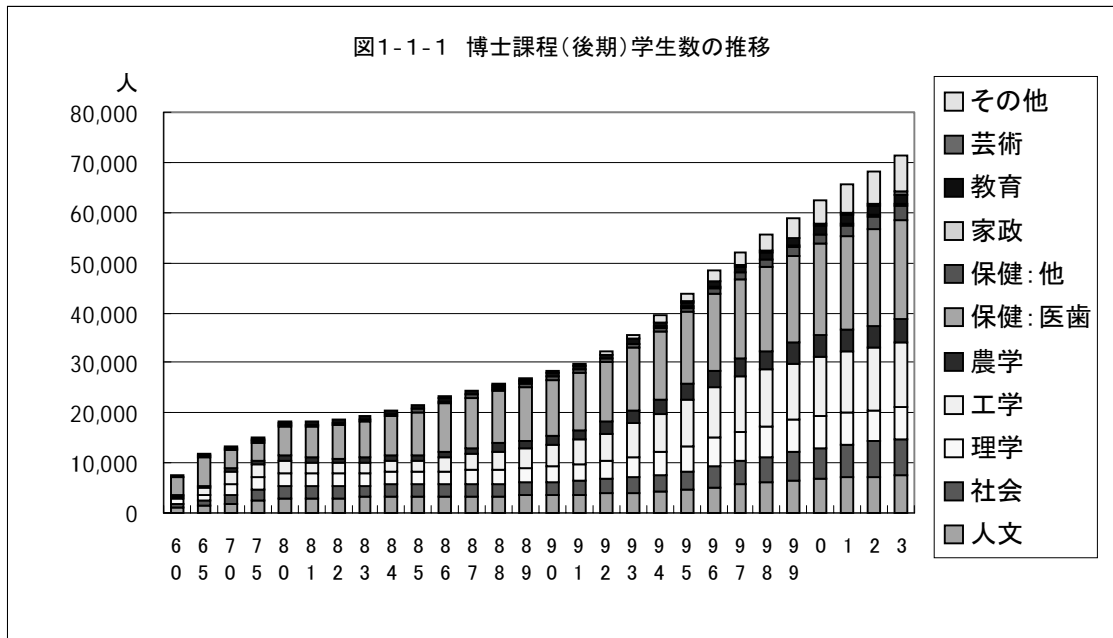
第2章 近年における大学院と学位授与の変化

第1節 大学院の拡大

我が国の大学院教育は、1990年代以降、21世紀初頭の今日までの短期間の間に、驚くほど大きく変貌を遂げている。それは、統計的な数字にはっきりと現れている。

『学校基本調査報告書』の統計データで1990年代を中心とする大学院の変化について確認しておこう。

図1-1-1は、博士課程学生数が1993年頃からいかに急速に増大したかを示している。



これらに大きな影響を与えた大学審議会の答申のうち、大学院に関するものは以下の通りである。

「大学院制度の弾力化について」(1988.3)

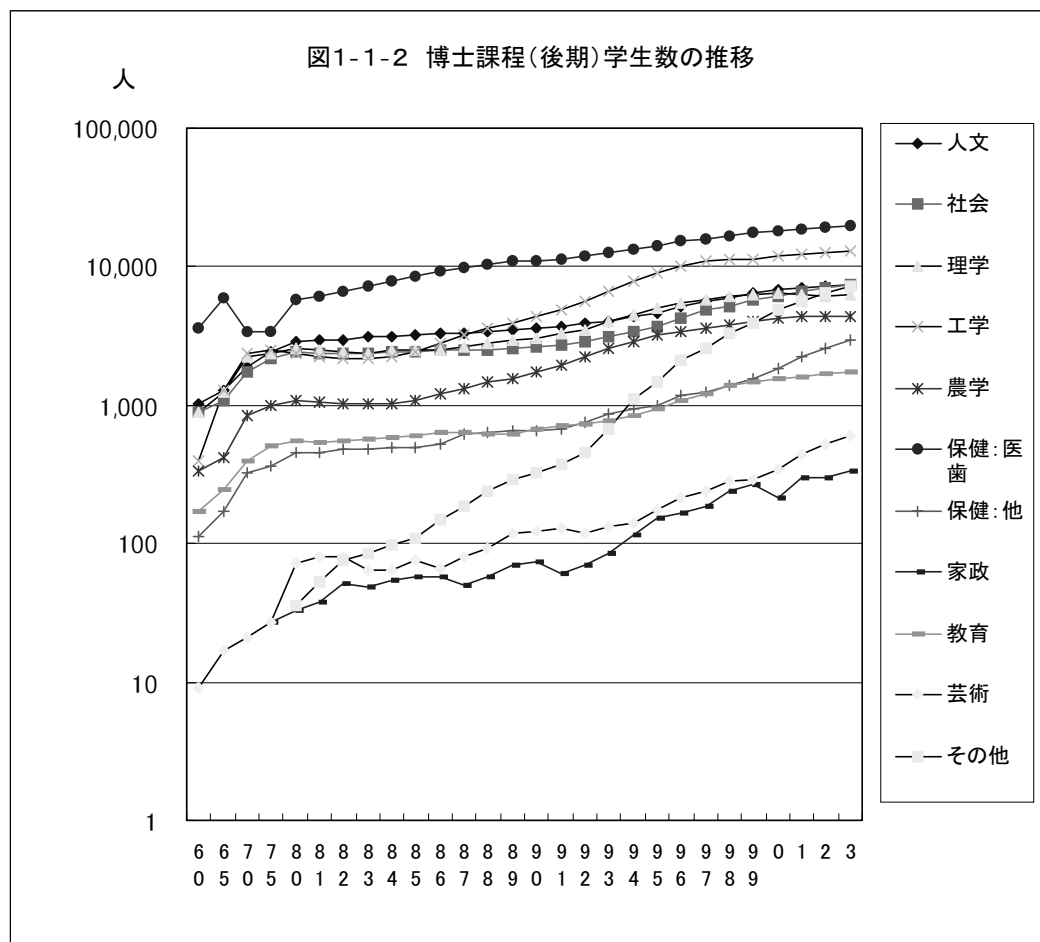
「学位制度の見直し及び大学院の評価について」(1991.2)

「大学院の整備拡充について」(1993.5)

「大学院の量的整備について」(1991.3)

「夜間に教育を行う博士課程等について」(1993.5)

「通信制の大学院について」(1997.12)



博士課程学生数の急増が「大学院の整備拡充について」(1993.5)答申以後起きたことは注目される。実態の変化と政策はあまりにも符合している。数字を示せば、1992年から2002年までの10年間に、大学院生数は2倍以上に増加し、修士課程では、76,954人から155,267人へ、博士課程では32,154人から68,245人へととなっている。

もちろん、博士課程学生数の急増の程度は専門分野別に異なっている。図1-1-2が明確に示すように、すべての分野で急増しているが、特に増加が著しいのは、工学と保健(医学と歯学を除く保健分野)、および「その他」である。また、学生数そのものは少ないが、家政や芸術は増加率が著しく大きい。これに対して、保健(医学と歯学)、人文、社会、

理学は、成長はなだらかである。なお、農学は、1980年代半ばから1990年代半ばまでの10年間は急増したが、1990年代半ば以降は成長が停滞している。

このような傾向を総括すれば、基礎科学の分野よりも、応用科学、学際科学の分野が急成長していると言えよう。

最後に、大学院学生の入学と就職の状況の変化に触れておく。表1-1-1に示しているように、1980年代以降、修士課程、博士課程とも、大学院入試の志願倍率は低下の傾向にある。そして、入学者に占める他大学出身者の割合は増加しており、おおよそ3割程度になっている。学部と大学院との間で学生の流動性が高まっているといえる。これは、大学院学生の入学定員は増加したのに、学部の入学定員が臨時増募の解消などで減少したために、自校の学士課程卒業生だけでは大学院の学生入学定員を充足することができなくなったために起きたものと考えられる。

表1-1-1 大学院への入学と就職の状況

		1980	1985	1990	1995	2000	2002	
博士課程 (前期)	入学状況	入学志願者	37,114	42,988	54,666	100,292	123,017	126,564
		入学者	16,844	23,594	30,733	53,842	70,336	73,636
		志願倍率	2.20	1.82	1.78	1.86	1.75	1.72
		当該大学出身者		18,780	23,422	40,410	50,510	51,947
		他大学出身者		3,809	5,074	10,388	15,939	16,871
		外国・その他		1,005	2,217	3,044	3,887	4,818
		当該大学出身者 (%)		79.6%	76.2%	75.1%	71.8%	70.5%
	就職状況	卒業者計	15,258	19,315	25,804	41,681	56,038	65,275
		進学者	2,837	3,196	4,035	6,990	9,338	9,226
		就職者	9,731	13,408	18,835	28,019	35,104	43,137
		上記以外	2,690	2,711	2,934	6,672	11,596	12,912
		進学者 (%)	18.6%	16.5%	15.6%	16.8%	16.7%	14.1%
		専門的・技術的職業就職者	8,709	12,383	16,764	24,219	29,321	35,087
		うち大学教員	374	309	317	446	387	462
うち短大教員	56	48	62	118	131	113		
大学短大教員 (%)	4.4%	2.7%	2.0%	2.0%	1.5%	1.3%		
博士課程 (後期)	入学状況	入学志願者	6,361	7,614	9,804	16,433	21,379	21,647
		入学者	4,669	5,877	7,813	13,074	17,023	17,234
		志願倍率	1.36	1.30	1.25	1.26	1.26	1.26
		当該大学出身者		4,758	6,034	9,399	11,635	11,643
		他大学出身者		853	1,138	2,297	3,790	4,037
		外国・その他		266	641	1,378	1,598	1,556
	当該大学出身者 (%)		81.0%	77.2%	71.9%	68.3%	67.6%	
	就職状況	卒業者計	3,614	4,358	5,812	8,019	12,375	13,642
		うち就職者	2,238	2,796	3,762	4,984	6,911	7,697
		うち満期退学者	1,968	2,027	2,022	2,350	3,639	3,948
		満期退学者 (%)	54.5%	46.5%	34.8%	29.3%	29.4%	28.9%
		専門的・技術的職業就職者	2,193	2,698	3,674	4,803	6,495	7,120
		うち大学教員	1,101	1,043	1,415	1,684	1,749	1,853
		うち短大教員	53	58	44	61	69	62
大学短大教員 (%)		51.4%	39.3%	38.6%	34.8%	46.4%	24.9%	

卒業後の状況も大きく変化している。修士課程の学生増加を反映してか、修士課程から博士課程への進学者の割合は若干減少し、就職する者の割合が増えている。なお、近年の経済情勢も反映してか、「進学者、就職者以外の者」が修士・博士ともに増加している。就職先については、「専門的・技術的職業従事者」の比率が減少し、「事務・販売・サービス職業従事者」の比率が特に修士課程修了者の間で増加している。さらに、「専門的・技術的職業従事者」のうち「大学・短大教員」の割合は減少しており、博士課程では、卒業者の4分の1にまでになっている。一方、表には示していないが、博士課程においては、「科学研究者」の割合は、1992年には11.0%であったが2002年には18.6%に増加し、「技術者」の割合は、12.9%から15.9%に増加している。

このように、大学院修了者の進路は多様化しており、博士課程修了者の一般的な進路先と考えられてきた「大学・短大教員」に課程修了後すぐに従事する者は少数派になりつつある。

第2節 学位授与数

学位授与数（課程博士と論文博士の合計）は、図1-1-3のように、1970年代は増加しなかったが、1980年代以降、急速に増加しており、2000年度には1万6千件を越えている。

図1-1-4は、各専門分野の成長を示している。197,80年代には保健や農学の分野で急増していたが、1990年代にはいると、家政を除くほとんどの分野で急増している。特に、人文科学・社会科学・教育など、これまで課程博士号の取得が困難であるとされてきた分野での増大が顕著である。ただし、保健と工学では増加はなだらかになっている。

図1-1-5は、課程博士の授与数の増加状況をすべての分野について示している。どの分野でも1990年代に急激に上昇している。図1-1-6は、博士号授与数に占める課程博士の割合の推移を、5つの主要分野別について示している。これより、1999年度以降、5つの主要分野ではすべて、課程博士の割合は50%を突破している。従来、論文博士が主流であった人文科学、社会科学でも課程博士の割合が50%を越えていることには驚かされる。なかでも、社会科学の近年の増加ぶりはめざましい。人文科学や社会科学の分野でも、論文博士よりも課程博士の方が多くなっていることは、正規の大学院博士課程在学中に博士論文を執筆して課程を修了する者が増加していることを示している。

なお、博士課程において標準修業年限を超えて在学した上で修了する者の比率が上昇している。1年以上超過した者の比率は1992年には36.3%であったが、2002年に、41.0%にもなっている。それは、就職難もあって、在学期間を延長して課程博士を取得するものが増えていることを示しているといえよう。

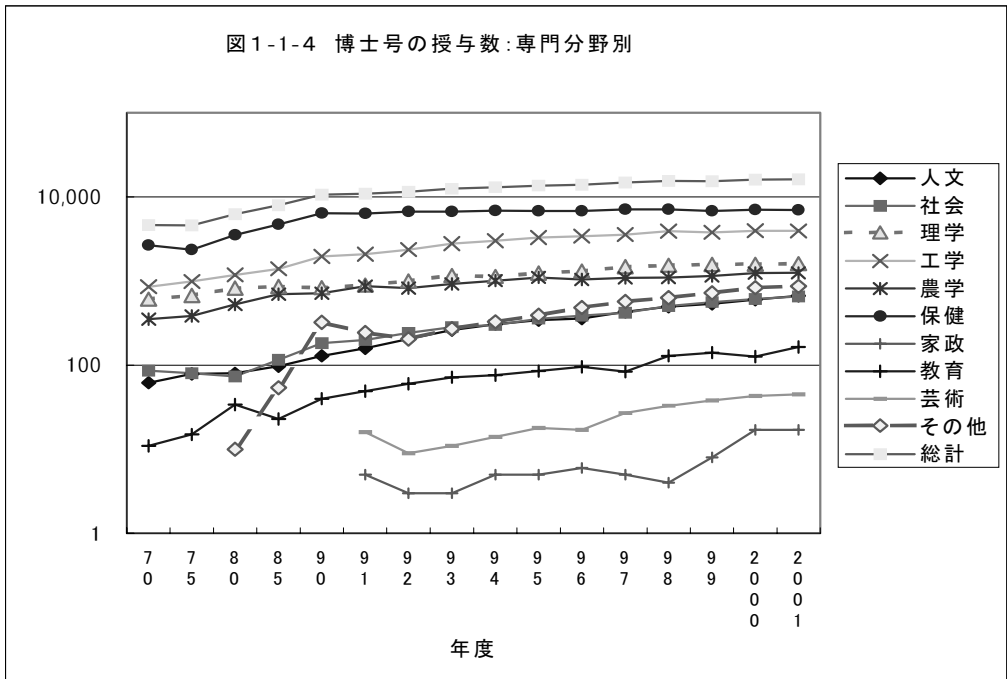
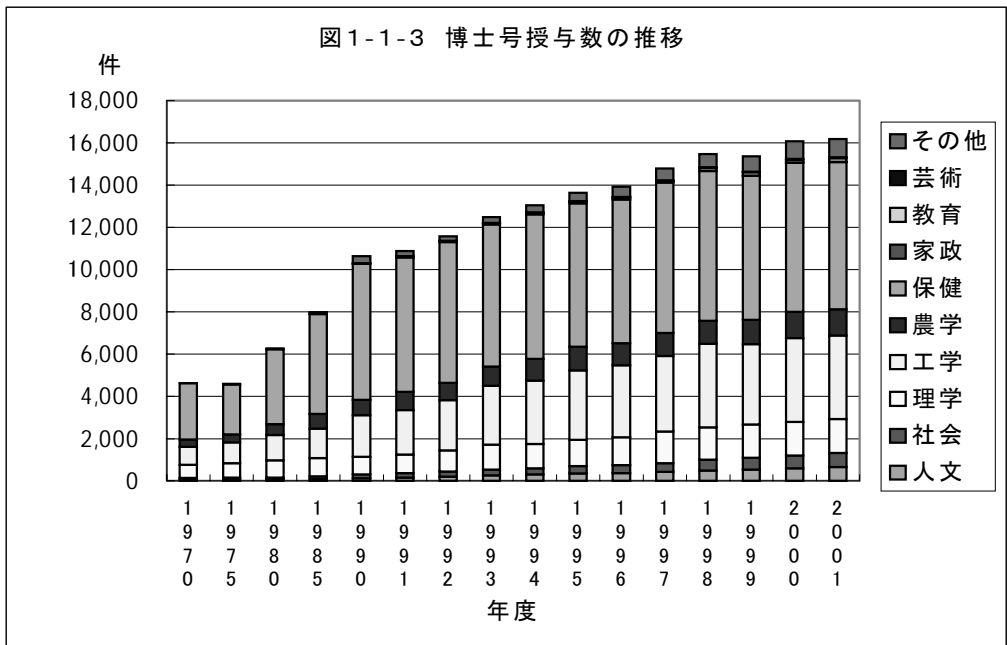


図 1-1-5 課程博士の授与数:専門分野別

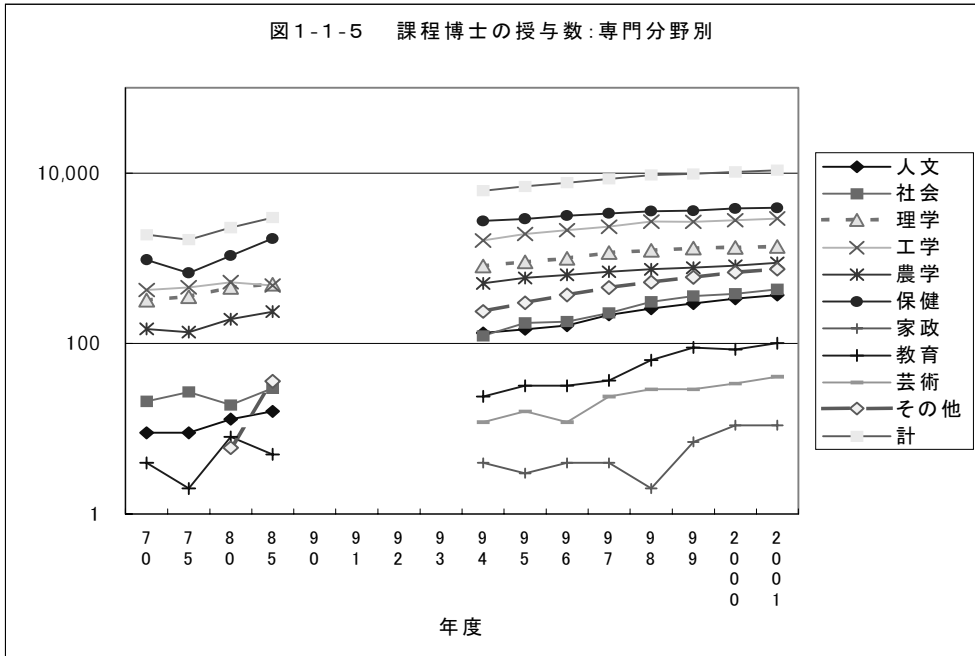


表 1-1-6 課程博士の割合

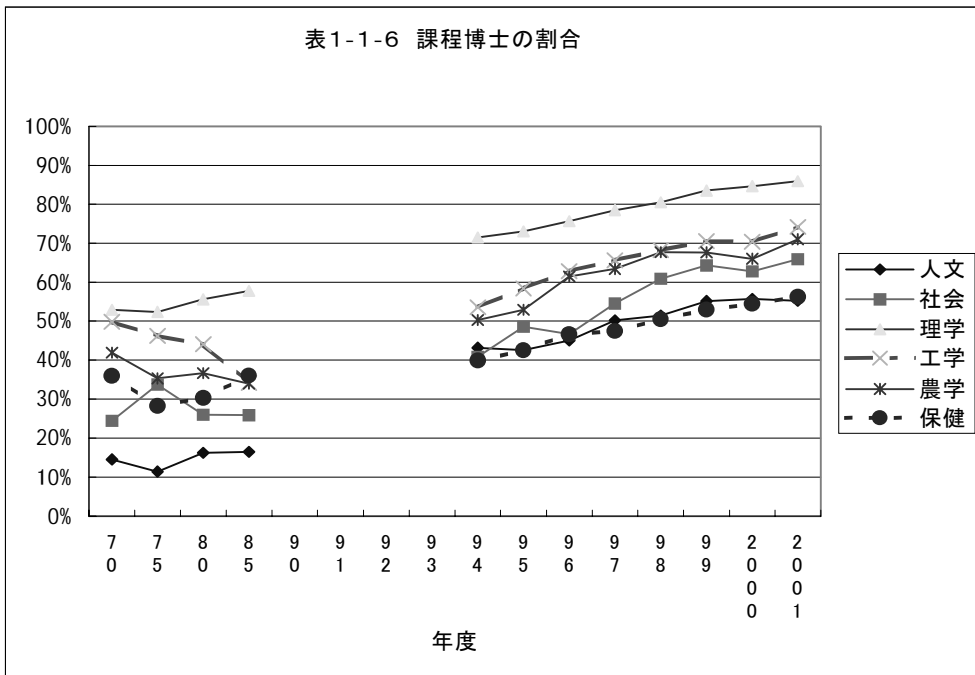


表 1-1-2 近年の学位授与状況：専門分野別・甲乙別

	年度	昭 45	昭 50	昭 55	昭 60	平 6	平 7	平 8	平 9	平 10	平 11	平 12	平 13
		1970	1975	1980	1985	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
課程 博士 甲	人文	9	9	13	16	133	147	162	217	256	295	335	369
	社会	21	27	19	30	123	174	181	229	308	362	383	432
	理学	323	354	457	497	811	908	995	1,163	1,242	1,319	1,343	1,376
	工学	425	456	523	480	1,613	1,925	2,143	2,350	2,684	2,680	2,791	2,934
	農学	148	136	193	237	509	587	641	694	745	776	819	886
	保健	957	671	1,071	1,703	2,735	2,886	3,175	3,372	3,580	3,613	3,836	3,914
	家政					4	3	4	4	2	7	11	11
	教育	4	2	8	5	24	32	32	37	64	90	85	101
	芸術					12	16	12	24	29	29	34	41
	その他			6	36	239	301	371	453	524	599	683	743
合計	1,887	1,655	2,290	3,004	6,203	6,979	7,716	8,543	9,434	9,770	10,320	10,807	
論文 博士 乙	人文	53	70	67	81	175	198	198	215	242	240	266	299
	社会	65	53	54	86	178	184	207	191	198	201	227	224
	理学	287	322	365	363	324	335	320	318	300	260	243	226
	工学	428	530	663	924	1,396	1,372	1,268	1,230	1,250	1,120	1,173	1,021
	農学	205	249	334	460	503	521	402	400	355	371	422	362
	保健	1,705	1,700	2,466	3,024	4,122	3,896	3,625	3,736	3,511	3,212	3,217	3,048
	家政					1	2	2	1	2	1	6	6
	教育	7	13	26	18	52	53	64	47	65	51	42	64
	芸術					2	2	5	3	4	9	9	4
	その他			4	18	88	90	114	116	109	122	151	122
合計	2,750	2,397	3,979	4,974	6,841	6,653	6,205	6,257	6,036	5,587	5,756	5,376	
合 計	人文	62	79	80	97	308	345	360	432	498	535	601	668
	社会	86	80	73	116	301	358	388	420	506	563	610	656
	理学	610	676	822	860	1,135	1,243	1,315	1,481	1,542	1,579	1,586	1,602
	工学	853	986	1,186	1,404	3,009	3,297	3,411	3,580	3,934	3,800	3,964	3,955
	農学	353	385	527	697	1,012	1,108	1,043	1,094	1,100	1,147	1,241	1,248
	保健	2,662	2,371	3,537	4,727	6,857	6,782	6,800	7,108	7,091	6,825	7,053	6,962
	家政					5	5	6	5	4	8	17	17
	教育	11	15	34	23	76	85	96	84	129	141	127	165
	芸術					14	18	17	27	33	38	43	45
	その他			10	54	327	391	485	569	633	721	834	865
合計	4,637	4,592	6,269	7,978	13,044	13,632	13,921	14,800	15,470	15,357	16,076	16,183	

(出典：文部（科学）省大学課『大学資料』各年度版より作成。1985年度以前の分類は1994年度以降の分類に合わせた。¹⁾ 1988年度から1993年度まで6年間については、甲乙別の詳細な集計は公表されていない。)

第2部 研究科長調査

第1章 研究科長調査の概要

「大学院教育に関する研究科長調査」の質問紙はB5版8頁からなり、大きく8つの部分に分かれている。すなわち、研究科に関する全体的な質問、大学院入試に関する質問、就職に関する質問、大学院の目的に関する質問、カリキュラムと学位の水準に関する質問、博士号の授与と審査に関する質問、大学内外における評価に関する質問、大学院教育の問題点や改善点に関する自由記述の質問、から構成されている。このうち、最初の研究科に関する全体的な質問は、回答者の属性、研究科の授与学位や学生数などフェイスシートにあたる質問である。博士号の授与と審査に関する質問には、博士号や大学院政策に関する質問を含んでいる。

質問紙は2003年6月下旬に博士課程（後期）を持つ全国すべての国私立大学の大学院研究科長920名に対して郵送により配布し、7月末を締め切りとして郵送により返送を求めた。8月中旬までに返送された有効回答者の数は470名、回収率は51.1%であった。

なお、研究科長調査の質問紙発送に際し、研究科長に対して、博士課程後期の大学院生を対象とする「大学院生の学習・研究活動に関する調査」の調査票を同封し、院生への配布を依頼した。「大学院生調査」の詳細については、第3部で報告する。

回収状況

設置者別の回収状況は、表2-1-1に示している。回収率は全体で51.1%であったが、設置者別には国立が65.1%と最も高く、公立（48.1%）と私立（44.5%）は50%を若干下回っていた。

表2-1-1 研究科長調査の回収状況

設置者	配布数（研究科数）	有効回答数	回収率（%）
国立	261	170	65.1
公立	77	37	48.1
私立	582	259	44.5
全体	920	470*	51.1

* 設置者不明の4を含む。

回答者と研究科の属性

以後、質問紙の質問項目にそって分析結果を報告するが、それに先立って回答者の属性を示しておく（表2-1-2参照）。回答者数470人の設置者別内訳は、私立が55.6%と最も多く、次いで国立36.5%、公立7.9%となっている。私立の割合が過半数を超えているのは、大学学部の数と同様、大学院博士課程を有する研究科の数も私立が多いからである。

研究科の教育研究分野は10分類で回答を求めた。その結果、社会科学(17.7%)、工学(13.2%)、人文科学(12.4%)、医学・歯学(12.4%)の順に多かった。しかし、近年、大学院研究科の学際的な編成が進められていることもあってか、2つ以上の分野を選択した回答も多かった(15.4%)。

このように、用意した選択肢に必ずしも合致しない専攻分野を持つ回答者も少なくない。また、当面の分析においては、専攻分野の区分を限定してできる限り包括的な分析を進めていくため、ここでは、専攻分野をひとまず以下の4つのカテゴリーに再分類することにした。そのカテゴリーとは、表2-1-2の「専門分野(2)」に示したように、「文系」、「理系」、「医療系」、「学際系」の4つであり、それぞれの内訳は以下の通りである。以後の分析結果の集計における研究科の教育研究分野の分類には、この4分類を採用することにした。

「文系」：「人文科学」、「社会科学」、「教育学」、「芸術」、およびそのうち複数にまたがる分野
 「理系」：「理学」、「工学」、「農学」、およびそのうち複数にまたがる分野
 「医療系」：「医学・歯学」、「薬学・保健」、およびそのうち複数にまたがる分野
 「学際系」：「学際・その他」、および「文系」、「理系」、「医療系」の複数にまたがる分野

表2-1-2 研究科と回答者の属性

		人数	%
設置者	国立	170	36.5
	公立	37	7.9
	私立	259	55.6
	不明	4	—
研究科の専門分野(1)	人文科学	58	12.4
	社会科学	83	17.7
	教育学	8	1.7
	芸術	7	1.5
	理学	25	5.3
	工学	62	13.2
	農学	21	4.5
	医学・歯学	58	12.4
	薬学・保健	37	7.9
	学際・その他	38	8.1
	複数回答	72	15.4
	不明	1	—
研究科の専門分野(2)	文系	179	38.2
	理系	140	29.9
	医療系	97	20.7
	学際系	53	11.3
	不明	1	—
回答者の地位	研究科長	356	83.6
	研究科長補佐	27	6.3
	専攻長	11	2.6
	教授	32	0.8
	不明	44	—

最後に、質問紙の回答者の地位は、研究科長が多かった（83.6%）。多忙な職務の合間にご協力いただいて厚くお礼申し上げる次第である。なお、電話での問い合わせの状況を見ると、学生数や授与学位数などの質問に対する回答には、事務部門の方々が数字を記入している研究科が相当あったようである。

第2章 大学院入試

大学院学生定員が増加することは研究科にとって望ましいことだが、定員を満たすことが課題となる。いつ、どのように大学院の入試を実施するかは、研究科にとって、入学者募集上の大きな問題である。学部卒業生の就職は4年次の前期に決定してしまうことが多いので、大学院入試も就職決定時期に合わせて早期に実施する大学院や研究科も多い。しかし、卒業論文にも満足に着手していないあまり早い時期に実施すると、学生の能力を十分に見極めることができない。そこで卒業論文を書き終えた頃の2月に実施する大学院や研究科も多い。研究科にとって、9月頃に実施するか、2月に実施するか、考えどころである。年に2回以上大学院入試を実施する大学院や研究科も多い。

第1節 入試の実施回数

調査の結果、全体では、博士課程前期では、年2回実施している研究科が全体の約60%を占めている（表2-2-1）。分野別には医療系がやや特殊であり、年1回実施する研究科も年3回実施する研究科も多く、多様である。

これに対して、博士課程後期では、全体では、年1回が多く、僅差で年2回となっている（表2-2-2）。分野別には、文系と学際系では年1回が最も多いが、理系と医療系の分野では、年2回が多い。

表2-2-1 大学院入試の回数：博士課程前期 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
年1回	13.5	11.1	28.1	18.0	15.3
年2回	68.4	57.9	42.1	60.0	60.4
年3回	12.3	20.6	24.6	16.0	17.1
年4回	2.9	4.8	1.8	4.0	3.5
年5回以上	2.9	5.6	3.5	2.0	3.7

表2-2-2 大学院入試の回数：博士課程（後期） (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
年1回	72.3	24.4	32.6	48.1	47.1
年2回	26.0	57.8	55.4	42.3	43.4
年3回	1.2	12.6	6.5	9.6	6.6
年4回	0.6	2.2	3.3	0.0	1.5
年5回以上	0.0	3.0	2.2	0.0	1.3

第2節 特別選抜

社会人や留学生に対する特別選抜もよく行われている。語学等の負担を軽減し小論文を課すなど、一般入試とは異なる試験の方法を採用し、大学院設置基準 14 条の「修士課程の教育方法の特例」を利用した教育を行う研究科も多い。

特別選抜で多いのは、社会人特別選抜と留学生特別選抜である。

社会人特別選抜（表 2-2-3）は、博士課程前期では、全体の 7 割近い研究科で実施されており、博士課程（後期）では、約 5 割の研究科で実施されている。いずれも学問分野による違いが大きい。医療系は博士課程前期・後期とも、社会人特別選抜はそれほど実施されていない。文系では、前期では実施されているが、後期ではあまり実施されていない。理系では、博士課程前期・後期とも実施されている。

留学生特別選抜（表 2-2-4）も過半数以上の研究科で実施されている。理系は博士課程前期で 75%程度、後期でも 65%程度の研究科で実施されている。次いで、文系では、博士課程前期で 65%程度、後期でも 45%程度の研究科で実施されている。医療系は社会人特別選抜と同様、実施している研究科の割合は比較的低い。

表 2-2-3 社会人特別選抜の実施 (％)

		文系	理系	医療系	学際系	全体
博士課程 前期	実施している	75.7	69.3	50.9	72.0	69.8
	実施していない	24.3	30.7	49.1	28.0	30.2
博士課程 (後期)	実施している	35.3	73.2	41.9	54.9	50.6
	実施していない	64.7	26.8	58.1	45.1	49.4

表 2-2-4 留学生特別選抜の実施 (％)

		文系	理系	医療系	学際系	全体
博士課程 前期	実施している	64.8	75.8	44.6	57.1	64.7
	実施していない	35.2	24.2	55.4	42.9	35.3
博士課程 (後期)	実施している	46.1	65.2	40.0	39.2	50.1
	実施していない	53.9	34.8	60.0	60.8	49.9

第3節 一般選抜における外国語の試験

大学院入試で、外国語の試験は、大きな問題である。大学院での高度な教育や研究に適応していくためには、英語をはじめとする外国語は必須である。それらは、学問がコスモポリタンな性格をもっているため、既存の研究成果を読んだり聞いたり、新しい研究成果を発表するコミュニケーションの道具として必要である。さらにまた、古典は、外国語、特に欧米言語によって書かれており、それらは研究者や文化人にとって教養の一部をなしている。このような観

点からみれば、英語とヨーロッパ等の言語の2カ国語を課すことが望ましいことになる。しかし、現在の社会では、英語が事実上世界の標準語となっており、英語の読み書きができれば、研究上および多くの仕事の職務遂行上、十分であると考えられている。さらにまた、大学院における教育上も研究上も外国語がそれほど必要であるとはいえない分野もある。大学院を終えて社会での職務の遂行に外国語が重要でない分野にあつては、厳格な外国語の試験は必要でない場合もあろう。しかも、外国語を課すことによって、多数の入学志願者を確保することが難しくなる恐れもある。

このような学問的・社会的な背景の下で、我が国の大学院研究科は何カ国語の外国語を課し、どのような試験をしているのだろうか。ここでは日本人を対象とする一般選抜について調査の結果をみてみよう。

博士課程前期では、8割近くが1カ国語であった(表2-2-5)。おそらく、ほとんどの受験者は英語を選択しているであろう。2カ国語を課している研究科は、わずか2.5%で、専攻によって1カ国語または2カ国語を課す研究科も6%と少なかった。外国語を課していない研究科は約8分の1の12.2%もあった。

研究科の専攻分野による違いは大きい。文系では、1カ国語を課す研究科、1カ国語または2カ国語を課す研究科の割合は高いが、驚くべきことに、外国語を課していない研究科の割合も高い。これに対して、理系と医療系はほとんどすべてが1カ国語であった。

外国語を課す場合、辞書の持ち込みを許可するかどうかも大きな問題である。外国語が不得意な受験生は多い。数多くの受験生に志願してもらうには、外国語の障壁を低くするために、辞書の持ち込みを許可することも多い。調査の結果(表2-2-6)、博士課程前期では、まったく辞書の持ち込みを許可していない研究科は、全体で43.7%であった。すべての専攻で持ち込みを許可している研究科は37.0%であった。分野別にみると、文系と医療系ですべての専攻で辞書の持ち込みを許可している研究科の割合が高く、理系で持ち込みを許可していない研究科が多いことに注目される。

表2-2-5 大学院入試における外国語の科目数(日本人・一般選抜)

: 博士課程前期

(%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
2カ国語	6.0	0.0	0.0	0.0	2.5
1カ国語または2カ国語(専攻による)	13.9	0.0	0.0	2.1	6.0
1カ国語	59.6	93.7	100.0	83.0	79.4
課していない専攻あり	20.5	6.3	0.0	14.9	12.2

表 2-2-6 外国語試験における辞書持ち込み（日本人・一般選抜）

：博士課程前期

(%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
すべての専攻で許可している	46.0	13.6	57.1	40.5	37.0
許可している専攻がある	22.0	23.7	1.6	23.8	19.3
すべての専攻で許可していない	32.0	62.7	41.3	35.7	43.7

他方、博士課程後期では、外国語の試験の事情が異なる。自校出身者、他校出身者問わず「全員に外国語に試験を課している」研究は全体の6割近くに達している（表2-2-7）。「特に課していない」は、17.6%にすぎない。また、すべての専攻で2ヶ国語を課している研究科は、10%に満たない（表2-2-8）。「すべての専攻で1カ国語」は82%にのぼっており、将来、大学等の研究者になる可能性の高い博士課程後期においても、1カ国語しか課していない研究科が圧倒的に多いといえる。

表 2-2-7 大学院入試における外国語（日本人・一般選抜）

：博士課程後期

(%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
全員に課している	66.9	46.6	68.8	53.1	59.8
他大学院からの進学者にのみ課している	12.2	15.8	17.2	12.2	14.3
特に課していない	10.5	25.6	12.9	30.6	17.6
専攻により異なる	10.5	12.0	1.1	4.1	8.3

表 2-2-8 大学院入試における外国語の科目数（日本人・一般選抜）

：博士課程後期

(%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
2ヶ国語	21.6	0.0	3.8	0.0	9.8
1カ国語または2カ国語 (専攻による)	18.7	2.3	0.0	0.0	8.3
1カ国語	59.7	97.7	96.3	100.0	82.0

第3章 就職

第1節 博士課程前期

大学院学生数が大幅に増加し、社会では不況が長期化している現在、大学院生の就職はどのようになっているだろうか。また、研究科長は、現状を10年前と比べてどのようになっているだろうか。

博士課程前期（表2-3-1）については、研究科長全体の約44%が「おおよそ順調」、約4割近くが「ふつう」と答えており、「あまり良くない」は17%に過ぎない。

専門分野別には、特に理系と医療系で「おおよそ順調」と回答する者の割合が非常に高い。ただし、文系では「おおよそ順調」と「あまり良くない」が拮抗している。それは高校等の学校教員への就職が不振であることも反映していると思われる。現在、全体としては、博士課程前期の就職は好調と認識されているとみてよいだろう。しかし、10年前と比べると、どの分野でも、「良くなった」と回答する者よりも「悪くなった」と回答する者の方が多くなっている。

表2-3-1 就職状況：博士課程前期 (%)

		文系	理系	医療系	学際系	全体
現在	おおよそ順調	25.3	61.4	74.5	29.3	44.2
	ふつう	47.5	30.7	19.1	51.2	38.6
	あまり良くない	27.2	7.9	6.4	19.5	17.2
10年前 と比べて	良くなった	10.4	7.0	14.3	4.2	9.1
	変わらない	67.2	61.4	60.0	58.3	63.5
	悪くなった	22.4	31.6	25.7	37.5	27.4

第2節 博士課程後期

一方、博士課程後期の就職状況（表2-3-2）は、博士課程前期ほど順調ではないようである。回答者全体で、「ふつう」が約4割、「おおよそ順調」が3割強、「あまり良くない」が23%程度となっている。博士課程前期に比べて、「おおよそ順調」が少なく、代わって「ふつう」と「あまり良くない」が多くなっている。

専門分野別には、明暗が分かれているとあって良い。医療系では「おおよそ順調」が75%にもものぼり就職は順調であるが、文系では、「あまり良くない」が40%を越えている。10年前と

比べると、どの分野でも、「良くなった」と回答する者よりも「悪くなった」と回答する者の方が多くなっている。特にこれは、文系で顕著である。従来から文系にとって最大の就職先である大学が18歳人口の低下に伴い、教員需要を減少させていることを反映していると考えられる。

表 2-3-2 就職状況：博士課程後期 (％)

		文系	理系	医療系	学際系	全体
現 在	おおそり順調	18.4	36.7	75.0	22.6	36.7
	ふつう	40.8	48.4	22.6	51.6	40.3
	あまり良くない	40.8	14.8	2.4	25.8	23.0
10年前 と比べて	良くなった	6.8	7.6	3.8	4.5	6.2
	変わらない	63.6	76.2	89.7	77.3	74.5
	悪くなった	29.5	16.2	6.4	18.2	19.3

第4章 大学院教育の目的と博士号の概念

第1節 大学院の役割

研究科長に対して、自己の研究科が果たしている役割や機能について様々な角度から尋ねた。

大学教員・研究者・専門職業人の養成

まず、「貴研究科が果たしている主な役割は何だとお考えですか」という質問に続いて、大学教員の養成、研究者の養成、専門職業人の養成について、それぞれ、そう思うか、そう思わないかの二者択一で回答してもらった。

博士課程前期（修士課程）では、「専門職業人の養成」を肯定する者が90%以上と圧倒的に多かった。いまや修士課程は、どの専門分野でも専門職業人の養成の場として捉えられるようになってきている（表2-4-1）。次いで、研究者の養成は50%前後、大学教員の養成は20%程度となっている。専門分野別には、医療系では、博士課程前期の教育に、研究者の養成と大学教員の養成を期待している者が多いのに対して、理系では大学教員の養成を期待している者は非常に少ない。このような医療系の特異な結果は、近年新設が相次いでいる看護等のパラメディカル分野や福祉分野などの状況を反映しているのではないかと考えられる。

表2-4-1 研究科の主な役割：博士課程前期（「そう思う」の%）

	文系	理系	医療系	学際	全体
大学教員の養成	27.1	8.5	31.3	17.5	20.3
研究者の養成	49.0	49.2	68.6	52.5	52.1
専門職業人の養成	90.1	90.5	95.9	97.8	91.9

表2-4-2 研究科の主な役割：博士課程後期（「そう思う」の%）

	文系	理系	医療系	学際	全体
大学教員の養成	83.6	69.2	73.0	68.2	75.4
研究者の養成	97.1	97.7	96.8	91.3	96.6
専門職業人の養成	53.9	74.4	74.7	51.2	64.6

これに対して、博士課程後期では（表2-4-2）、「研究者の養成」が全体の96.6%、「大学教員の養成」が75.4%、「専門職業人の養成」が64.6%となっている。博士課程後期が研究者養成の場であることについては、ほとんど異論がない。しかし、注目すべきことに、「大学教員の

養成」については約4分の1が否定的回答を示している。

専門分野別にみると、文系では、「大学教員の養成」83.6%の者が「そう思う」と回答しているが、理系、医療系、学際系では、「大学教員の養成」は70%前後となっている。文系を除くほとんどの分野で、従来のような「博士課程＝大学教員養成の場」という図式は崩れつつあるといえよう。博士課程後期は、むしろ大学教員の養成だけでなく企業や研究所等の研究者をも含めた多様な研究者を養成・輩出する場ととらえられている。

大学院教育の目的

次いで、大学院教育の目的を内容の観点から分析する。自身の研究科にとって4つの事項について二項背反する目的のどちらが重要だと思うかを質問した。4つの事項とそれに関する二項背反する目的は次の通りである。

- A：訓練か、教育か
- B：技能の修得か、創造性の開発か
- C：専門を深めるか、幅を広げるか
- D：専門職業人の養成か、研究者の養成か

これらの選択の結果を博士課程前期と後期の別に示したのが図2-4-1から図2-4-4の4つの図である。まず、A「訓練か、教育か」(図2-4-1)については、どの分野でも、また博士課程の前期も後期でも、「訓練」よりも「教育」が相対的に多く選択されていた。回答の割合では、「同等」を選ぶ者が最も多かった。多くの研究科長は、どちらか一つだけを選択することは難しく、どちらも必要だと考えている。しかし、どちらかというところ、大学院生に知識を注入したり教え込んだりすることよりも、院生の主体性を尊重し潜在力を引き出すという教育の方が良いと考えられている。

B「技能の修得か、創造性の開発か」(図2-4-2)については、博士課程の前期と後期の間で回答が大きく異なっている。博士課程前期では、「創造性の開発」よりも「技能の修得」の方が選択される傾向が強いものに対して、博士課程後期では、「創造性の開発」が圧倒的に多く選択されている。

C「専門を深めるか、幅を広げるか」(図2-4-3)については、全体では、博士課程前期では両者は拮抗しているが、博士課程後期では「専門を深める」が圧倒的に多く選択されている。

最後に、D「専門職業人の養成か、研究者の養成か」(図2-4-4)では、博士課程前期ではどの分野でも「専門職業人の養成」が40%程度選択されていたが、博士課程後期では、「研究者の養成」が圧倒的に多く選択されていた。

図2-4-1 訓練 VS 教育

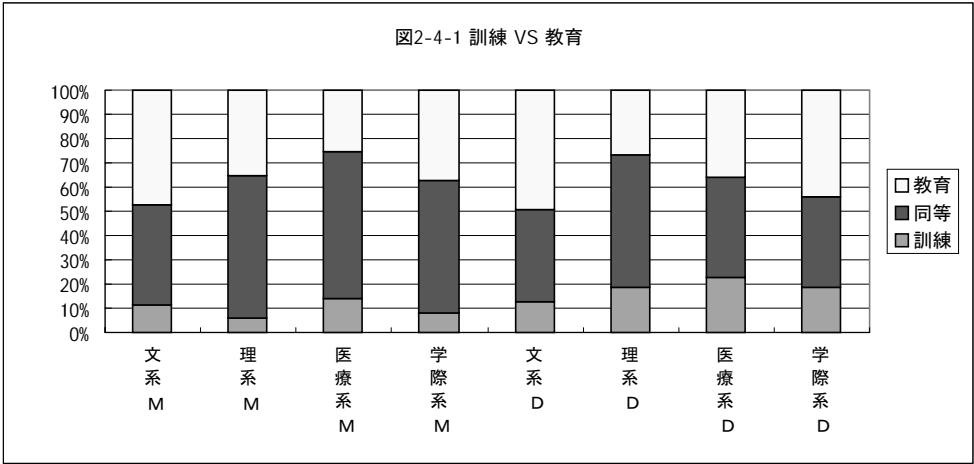


図2-4-2 技能の修得 VS 創造性の開発

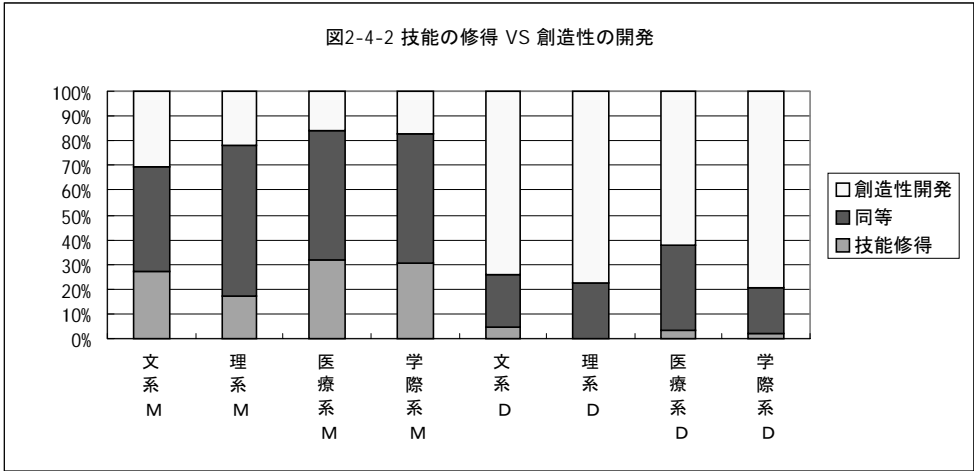
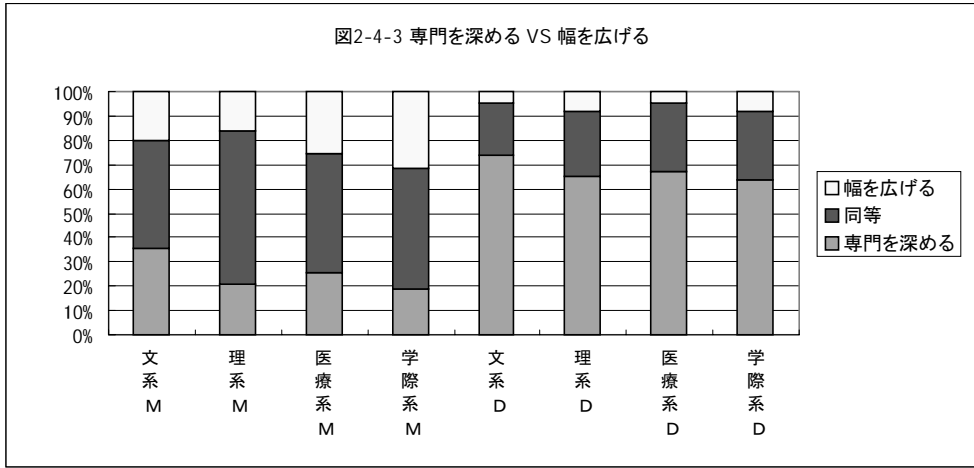
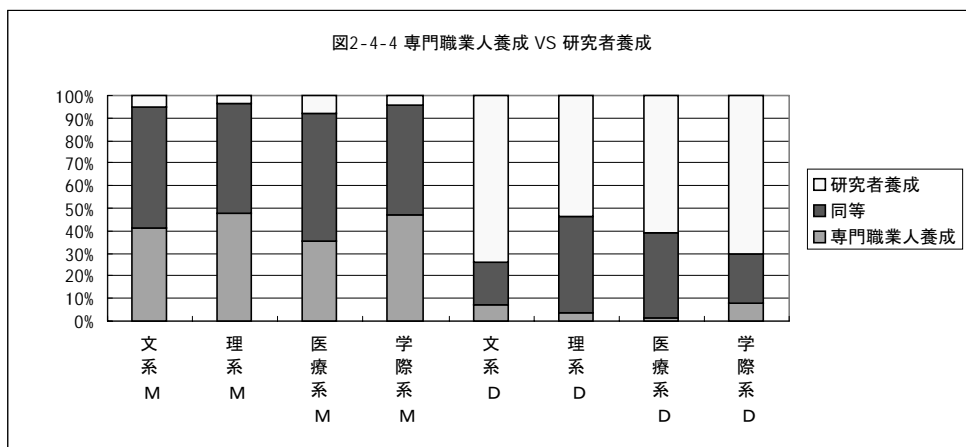


図2-4-3 専門を深める VS 幅を広げる





以上の結果から、博士課程前期と後期では、教育の目的はかなり異なっていると言えよう。博士課程前期では、それぞれの専門分野での幅広い基礎的能力を形成することに主眼が置かれ、専門職業人の養成を目指しているのに対して、博士課程後期では、特定の専門領域において深い研究能力を育成することに主眼が置かれ、独創的で創造性豊かな研究者の養成が目指されている、と言えよう。

第2節 博士号の概念

これまでの分析で、博士課程後期が、大学の教員だけでなく企業や研究機関等を含めた研究者の養成の場であることが広く認識されていることが明らかとなった。一部だが、専門職業人の養成の場であると考える者もいた。そして、博士課程後期では、特定の専門領域において深い研究能力を育成することに主眼が置かれ、独創的で創造性豊かな研究者の養成が目指されている。これは、従来の博士課程に対する考え方よりも広いといえる。

とすれば、博士課程後期の課程を修了した証明書である博士号は、どのようなものとして捉えられるのだろうか。そこで、研究科長に対して、博士号に対する様々な考え方をどの程度肯定するかを調べてみた。

表2-4-3によれば、「博士号はその分野の権威であることを証明するものである」に対して、「そう思う」は10.0%、「博士号は幅広い分野の学識を有する者に与えられるべきである」は30.4%と少なかった。一方、「博士論文は、その分野の学問の発展に大きく貢献した研究成果を示したものである」に対しては47.6%、「博士論文は狭くても『一隅を照らす』ような研究成果を示したものである」は64.3%の者が肯定した。さらに「博士号は、自立した一人前の研究者としての資質を証明するものである」には84.3%の者が肯定した。しかも、専門分野別にみても数字に際違った違いはない。

これらの結果より、どの専門分野においても、博士号は、もはや生涯をかけてまとめ上げた研究物に対して授与されるものでも、それをまとめあげた「大家」や「碩学」に授与されるものではないことが明らかである。むしろ、博士号は広い意味での研究者のキャリアの出発点において、何らかの小さな知見を得た論文をたしかに執筆したことをもって、有能な専門的研究者として資質を証明するものと考えられているといえよう。

表 2-4-3 博士号に関する認識 (「そう思う」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
博士号は、その分野の権威であることを証明するものである	10.5	6.6	13.4	11.5	10.0
博士号は、幅広い分野の学識を有する者に与えられるべきである	32.7	29.1	28.9	29.4	30.4
博士論文は、その分野の学問の発展に大きく貢献した研究成果を示したものである	47.1	51.1	45.8	44.0	47.6
博士論文は、狭くても「一隅を照らす」ような研究成果を示したものである	58.1	67.4	71.9	62.0	64.3
博士号は、自立した一人前の研究者としての資質を証明するものである	88.4	85.4	74.2	86.5	84.3

第3節 大学院教育と学部教育の接続

大学院教育の目的が広範になった背後には、大学院の規模拡大の他に、大学院学生の多様化という要因がある。大学院には、社会人学生や外国人留学生が大量に入学するようになった。さらにまた、学部4年間の教育を終えて大学院へ入学してくる学生も大幅に多様化した。規制緩和・自由化政策の影響を受け、大学入試センター試験が導入された1990年代以降、国立や公立の大学・学部で入学試験の科目数を従来の5教科から3教科やそれ以下に削減するところが増加した。1993年の大学設置基準の大綱化により一般教育と専門教育の区分が撤廃され、大学・学部が独自の教育課程を編成できるようになった。

これらの入学者の多様化は、従来からの一般教育、学部段階の専門教育、大学院博士課程前期の教育、後期の教育という教育の連続性と積み上げに何らかの影響を与えたに違いない。

修士と博士の教育

研究科長は、博士課程前期と後期の教育の連続性をどのように捉えているのだろうか。表2-4-4は、大学院の博士課程前期と後期の教育に対する意見を示している。まず、全体の8割近くの者が「大学における専門教育は学部教育では不十分で、修士段階までの学習が必要だ」を肯定している。理系ではそれは93%にも上っている。

大学院教育の機能が多様化し、専門職業教育が必要だとしても、従来の博士課程前期と後期

の教育では不十分で、従来型の学術的な博士課程前期の課程とは異なった専門職業人養成の課程を新たに設置することが必要なのだろうか。アメリカのように、法学分野のロースクール、経営学分野のビジネススクールのような、専門職養成の大学院課程が必要なのだろうか。

「修士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである」に対しては、全体では 37%近い研究科長が賛成している。「博士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである」に対しては、全体の 34%の研究科長が賛成している。

表 2-4-4 修士と博士の教育 (「そう思う」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
大学における専門教育は学部教育では不十分で、修士段階までの学習が必要だ	74.1	93.2	65.1	86.3	79.6
修士段階の教育ではじめて、教員の研究と教育が一致する	52.0	60.3	40.5	63.5	53.9
修士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである	49.1	18.7	35.4	44.2	36.9
博士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである	40.2	28.9	30.9	33.3	34.1
専門職業人の養成を十分に行うためには大学外から専門家を専任教員として招聘するべきである	69.0	66.9	67.4	64.6	67.6
博士号所有者は大学教員になることが多いから博士課程で大学教育に関する教育を行うべきである	34.7	22.6	21.6	40.0	28.8

しかし専門分野による違いが大きい。文系では、修士及び博士の課程ともに専門職業人養成の課程を別個に設けるべきであると答える者が多いが、医療系では、修士課程だけについて専門職業人養成の課程が必要だと答える者が多い。興味深いことに、理系では、修士課程、博士課程ともに、専門職業人養成の課程の設置が必要だと考えている者は少ない。近年、日本で法科大学院や経営管理分野の大学院など、専門職大学院が社会科学分野において急速に発展しているのは、これらの専門分野では大学教員の研究活動と不可分に結びついた教育の在り方が新しい時代の人材養成ニーズと合致しなくなっていること、もっといえば、教育や学習に対するレバンスを欠いた研究の在り方に問題があることを示していると言えよう。

なお、「専門職業人の養成を十分に行うためには大学外から専門家を専任教員として招聘するべきである」については、どの分野でも 3分の2程度の者が肯定している。しかし、大学院での教育が重要になっているからといって、「博士号所有者は大学教員になることが多いから博士課程で大学教育に関する教育を行うべきである」に対して賛成する者は全体的に少ない(28.8%)。分野別には理系と医療系でそれが低く、文系(34.7%)と学際系(40.0%)でやや高くなっているのは、修了者が大学教員に就職することが多いからであろう。

学部教育と大学院教育

続いて、学部教育、大学院の修士・博士の教育の連続性について研究科長の意見を分析してみよう。表2-4-5によれば「博士課程前期と学部教育の間に教育上の連続性が不足している」に「そう思う」と答えた者は全体で約41%にのぼる。分野別には文系と医療系で割合がやや高くなっている。また、博士課程前期と後期の間では、連続性が不足していると答えた者は全体で約23%、専門分野別には、理系と医療系がやや高くなっている。

表2-4-5 学部教育と大学院教育の連続性 (「そう思う」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
博士課程前期と学部教育の間に教育上の連続性が不足している	45.0	33.3	45.5	42.9	41.2
博士課程後期と博士課程前期の間に教育上の連続性が不足している	22.4	26.0	25.4	15.7	23.3

このように、大学院博士課程の前期と後期の間よりも、学部教育と大学院教育との間で連続性が欠けていることが明らかである。その原因の一つは、学部から大学院への進学に際し、所属している学部の上に設置されている研究科とは異なる研究科や学部を持たない独立研究科に進学する者が増加していることにあると思われる。従来、大学院研究科にはすぐ下の学部からそのまま進学する者が多かったが、近年は、入学定員が増加した大学院研究科では、自校の学部出身者だけでなく、他大学・学部出身者をかなり受け入れており、中には他大学出身者の方が多い研究科も多い。特に独立研究科では、様々な大学・学部からの学生からなり、出身大学・学部や専攻分野は多種多様である。学生の流動性の増大、リクルート源の多様化は望ましいことではあるが、近年の大学院教育は、学部教育との接続に関して大きな問題を抱えている。

第4節 大学院生の多様化の影響

学部教育と大学院教育の接続が問題となるいまひとつの要因は、外国人留学生と社会人学生の増大である。外国人留学生の場合、日本語という言語の問題に加えて、出身国で受けてきた大学教育と日本の大学教育のカリキュラムの違いや、日本の大学や生活への適応の問題がある。社会人学生の場合、年齢の幅が非常に広く、大学卒業後数年の者と定年退職後入学した者とはかなり問題が異なる。社会人としての経歴や出身大学・学部も多様で、入学資格の弾力化の中で、(4年制)大学を卒業していない者も入学するようになっている。実務経験は豊富な反面、高等教育機関を卒業後長い年月を経ているため、大学院での教育に必要な基礎的な学問領域に関する知識とスキルを忘却している者も多い。

これら、新しい「非伝統的」大学院生の増加は、従来行われてきた学部教育を終えたばかりの若い日本人の大学院学生を対象とする教育に影響を与えたと思われる。表2-4-6の最初

の3つの質問は、外国人留学生、社会人学生、他大学出身の学生の増加がもたらした教育への影響を聞いている。

外国人留学生と社会人学生については、過半数の回答者が、授業や研究指導で配慮しなければならなくなったと答えている。大学院教育が大衆化するにつれ、大学院入学者は多様化の一途をたどっている。これまでは大学院は「煙突型大学院」、すなわち学部・学科の上に大学院研究科・専攻が設置されるタイプが主流であった。しかし、1993年の大学設置基準の大綱化以後、学部教育と組織上切り離された大学院が増加した。その上、大学院学生定員の増加により、他大学・学部からの出身者が増加することになった。これらの結果、学部教育と大学院教育の接続の問題が大きく浮上することになった。「かつて学部教育で教えていたことを大学院で教えなければならなくなった」という質問に対して、回答者の64%以上の者が「そう思う」と答えているのは、そのことを雄弁に示している。いまや、高校教育と大学教育の接続の問題と同様、大学教育と大学院教育の接続の問題も大きな問題になっているといえよう。

表2-4-6 大学院生多様化の影響 (「そう思う」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
外国人留学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった	63.6	54.1	44.4	56.3	56.2
社会人学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった	58.7	45.5	53.9	61.2	54.1
他大学出身の学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった	31.2	25.2	29.0	44.9	30.4
かつて学部教育で教えていたことを大学院で教えなければならなくなった	69.9	74.3	37.2	68.6	64.4

第5章 カリキュラムと学位の水準

第1節 大学間比較

博士号の授与が増大するにつれ、その質や水準のそのものだけでなく、大学間の質や水準の同質性も問題になってくる。研究科長に対して、博士課程後期のカリキュラムと博士号の水準に関する自己評価をしてもらった。

表2-5-1と表2-5-2は、自分の各研究科のカリキュラムと授与する博士号の水準が、同分野の他大学と比べてどのように評価するかを尋ねた結果を示している。いずれについても、回答者の7割前後の者が「ほぼ同等だと思う」と答えていた。

しかし、博士号の水準は大学間でかなり異なっているようである。表2-5-3で示しているように、「あなたの分野で授与される博士号の水準は、大学間でどの程度異なっていますか」という質問に対して、「おおよそ同等」と答えた者は全体の3割程度で、5割前後の者が「大学間でやや異なっていると思う」、約16%が「大学間でかなり異なっていると思う」と答えていた。すなわち、自らの属する研究科の授与する学位については、約7割が「他大学とほぼ同等」と認識しているにもかかわらず、他大学で授与される学位に対しては、同じく約7割が「水準が異なっている」と考えているのである。

表2-5-1 他大学と比べた自研究科博士課程後期のカリキュラム (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
優れていると思う	26.0	18.0	18.9	22.4	21.7
ほぼ同等だと思う	65.3	79.7	76.8	73.5	72.9
やや劣っていると思う	8.7	2.3	4.2	4.1	5.3

表2-5-2 他大学と比べた自大学の博士号の水準 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
優れていると思う	26.6	28.8	26.6	16.7	26.3
ほぼ同等だと思う	68.6	68.9	70.2	81.0	70.3
やや劣っていると思う	4.7	2.3	3.2	2.4	3.4

表2-5-3 博士号の水準は大学間でどの程度異なっているか (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
おおよそ同等	29.9	34.3	34.4	36.7	32.8
大学間でやや異なっている	49.4	53.0	51.6	49.0	51.0
大きく異なっている	20.7	12.7	14.0	14.3	16.2

第2節 国際的に見た日本の博士号の水準

表2-5-4のAからEまでの5つの表は、自己の専門分野における日本の博士号の水準を、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、中国の5カ国と比較してもらった結果を示している（ただし、表中の比率は「分からない」と回答した者を除いた全体に対する比率である）。例えば、アメリカと比較して、日本の文系の学位は同等、または高いと評価されている。これに対して、医療系では、アメリカよりも圧倒的に「日本の方が低い」と評価されている。

図2-5-1は、「日本の方が高い」から「外国の方が高い」を引いた数値を4つの専門分野について図示している（ただし、中国を除いている）。この数値が正であれば日本の学位が外国の学位よりも質が高いことになる。

これより、理系については、日本の学位は欧米4カ国と同等であるといえよう。しかし、文系では、日本はアメリカよりも高く、ヨーロッパ3カ国よりも低いと評価されている。そして、医療系では、日本の博士号はどの国よりも低いと評価されている。

ただし、この数字は、日本の大学の研究科長による評価であり、自国中心主義のバイアスが働いている可能性があるから、数字の解釈は慎重でなければならない。日本以外の外国あるいは第三国の回答者による評価が待たれるところである。

表2-5-4 A 外国と比べた日本の博士号の水準（アメリカ） (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
日本の方が高い	39.2	21.1	5.8	21.1	24.8
同等	40.8	61.4	37.7	50.0	47.8
日本の方が低い	20.0	17.5	56.5	28.9	27.4

表2-5-4 B 外国と比べた日本の博士号の水準（イギリス） (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
日本の方が高い	16.2	14.0	13.7	6.9	14.3
同等	54.3	69.9	41.2	55.2	57.0
日本の方が低い	29.5	16.1	45.1	37.9	28.7

表2-5-4 C 外国と比べた日本の博士号の水準（ドイツ） (%)

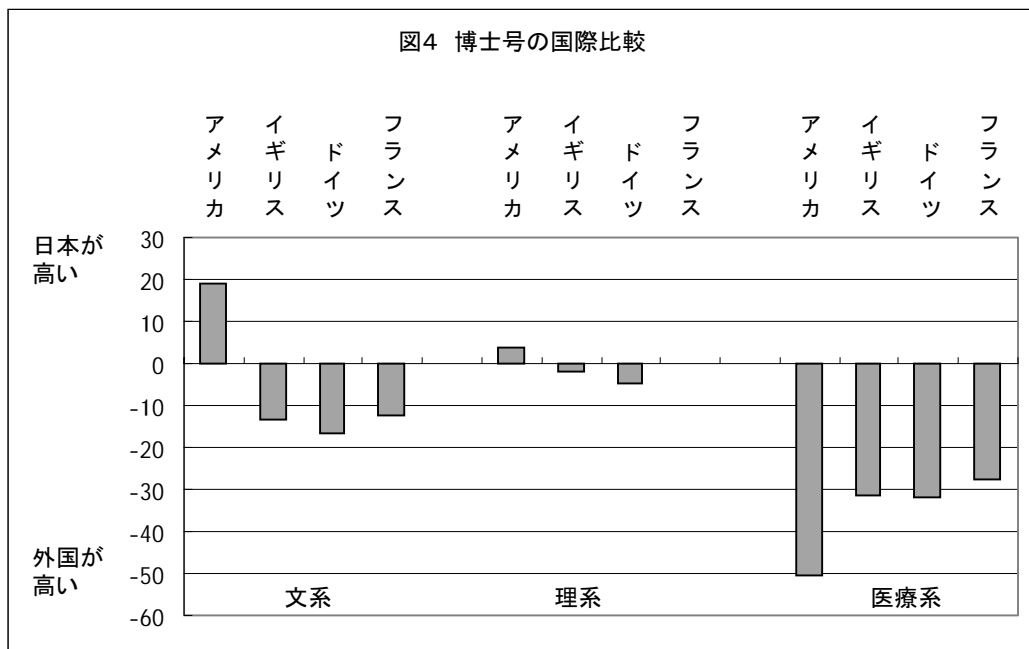
	文系	理系	医療系	学際系	全体
日本の方が高い	15.3	7.1	12.0	7.4	10.9
同等	52.9	81.0	44.0	51.9	60.7
日本の方が低い	31.8	11.9	44.0	40.7	28.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表2-5-4 D 外国と比べた日本の博士号の水準（フランス） (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
日本の方が高い	16.7	11.6	12.5	8.0	13.0
同等	54.2	76.8	47.5	60.0	61.4
日本の方が低い	29.2	11.6	40.0	32.0	25.6

表 2-5-4 E 外国と比べた日本の博士号の水準（中国） (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
日本の方が高い	81.0	88.2	93.2	94.4	87.1
同等	17.5	11.8	6.8	5.6	12.4
日本の方が低い	1.6	0.0	0.0	0.0	0.5



第6章 課程博士と博士論文

第1節 博士論文

実際に博士論文はどのようなものなのだろうか。学術雑誌の論文とどのように異なっているのだろうか。研究科長に自分自身が最近授与した典型的な課程博士の論文について答えてもらった。

表2-6-1に示しているように、文系では、8割以上が日本語で書かれ、原稿の長さは400字原稿用紙換算で平均535枚、中央値で500枚である。これに対して、理系では、日本語と英語など外国語の比率は半々で、原稿の長さは平均294枚、中央値は200枚と、文系の半分程度の長さである。学際系は、使用言語は理系や医療系に近いが、原稿の長さは文系に近く、長い。これに対して、医療系では、日本語と英語など外国語の比率は半々であるが、論文は極めて短く、平均値で94枚、中央値で40枚となっている。

図2-6は、文系・理系・医療系について、博士論文の長さ（400字原稿用紙換算のページ数）の度数分布を図示している。どの分野も一部例外的に長い論文があるが、それらを除いてもなお、論文の長さはきわめて多様である。長い論文もあれば短い論文もある。

表2-6-1 最近授与した典型的な課程博士論文の特性

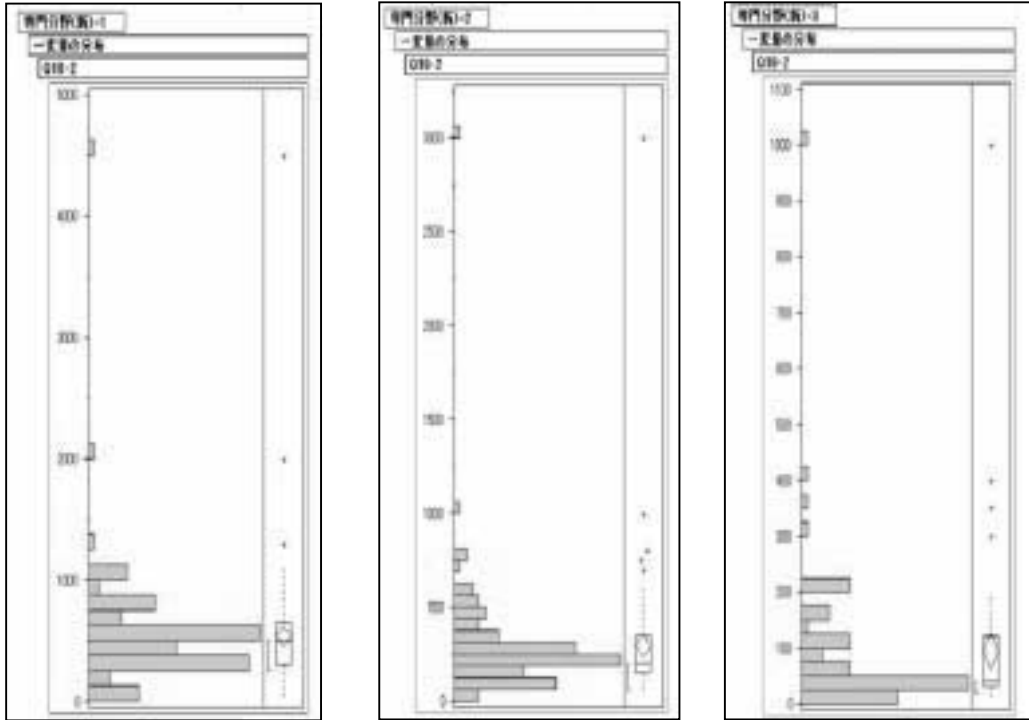
		文系	理系	医療系	学際系	全体
論文の使用言語 (%)	英語等の外国語	13.9	46.1	48.3	38.9	34.6
	日本語	86.1	53.9	51.7	61.1	65.4
原稿の長さ (400字原稿用紙換算)	平均値	535枚	294枚	94枚	458枚	354枚
	(中央値)	(500枚)	(200枚)	(40枚)	(350枚)	(250枚)
論文の作成方法 (%)	既存論文を編集したもの	8.7	10.9	17.6	20.0	12.4
	書き下ろし	91.3	89.1	82.4	80.0	87.6

たしかに博士論文の長さは多様である。しかし、全体としては、表2-6-2に示しているように、研究科長は、どの専門分野であれ、長すぎるとは考えていないようである。

表2-6-2 博士論文の長さに対する意見 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
博士論文の長さ（ページ数）は、長すぎる	238	124	158	184	180

図 2-6 博士論文の長さの分布：文系・理系・医療系



第 2 節 取得者と取得に必要な年数

最近授与した典型的な課程博士の取得者の特性は表 2-6-3 に示している。文系は外国籍の者（ほとんどが留学生であろう）の割合が高く、取得時の年齢も 35 歳と高い。学部卒業後 11 年、博士課程後期に入学後 5 年半を経過し、博士論文のテーマを研究して 6.7 年にもなる。博士課程後期の標準修業年限 3 年の 2 倍近い長さを要して念願の博士号を取得している。文系で外国籍の者が多く日本人が少ないのは、外国人留学生在が目標とする学位取得まで大学院に長期在学しているのに対して、日本人は学位取得前に就職してしまうことが多いからであろう。これに対して、理系と医療系は、日本人が圧倒的で、取得時の年齢は 30 歳程度で、博士課程（後期）に入学後 3 年半程度で博士号を取得している。文系と理系・医療系のこのような取得年数や取得時の年齢の大きな違いは、無視できないほど大きい。

表 2-6-3 最近授与した典型的な課程博士の取得者

	文系	理系	医療系	学際系	全体	
取得者の国籍 (%)	日本国籍	70.3	86.5	94.4	82.9	82.3
	外国籍	29.7	13.5	5.6	17.1	17.7
取得者の取得時の年齢 (平均値)	35.2 歳	29.6 歳	29.9 歳	32.4 歳	31.8 歳	
博士課程後期入学後の年数 (平均値)	5.6 年	3.3 年	3.6 年	3.6 年	4.2 年	
学部卒業後の年数 (平均値)	11.1 年	6.7 年	6.6 年	8.9 年	8.3 年	
そのテーマを実質的に研究して何年か (平均値)	6.7 年	5.3 年	4.1 年	6.2 年	5.6 年	

博士課程後期入学者の博士号取得について、専門分野別にやや詳しく分析してみよう。研究科長に博士課程後期入学後おおよそ何年で博士号を取得しているか、博士課程（後期）入学者の何パーセントが課程博士を取得しているかを質問した結果を表 2-6-4 に示している。

表 2-6-4 博士課程後期入学者全体の博士号取得：必要な年数と取得可能性

	文系	理系	医療系	学際系	全体	
博士課程後期入学後、取得までの年数 (平均値)	早くて	3.7 年	2.4 年	3.1 年	2.6 年	3.0 年
	平均して	5.2 年	3.4 年	3.8 年	3.8 年	4.2 年
	遅くて	7.2 年	5.2 年	5.5 年	5.5 年	6.0 年
博士課程後期入学者で課程博士を取得する者の割合 (%)	10%未満	31.4	0.0	0.0	7.7	12.6
	10-25%	28.9	1.5	0.0	7.7	12.1
	25-50%	22.0	4.6	0.0	17.9	11.4
	50-75%	10.1	36.2	10.6	30.8	20.1
標準修業年限内 (3年、医歯獣医系4年)での課程博士の輩出 (%)	75%以上	7.5	57.7	89.4	35.9	43.8
	十分可能	9.8	42.5	60.4	20.0	31.3
	何とか可能	41.0	56.0	35.4	60.0	46.3
	困難	49.1	1.5	4.2	20.0	22.5

表から明らかなように、第 1 に、博士課程入学から博士号取得までの年数は、文系では早くて 3.7 年、遅くて 7.2 年、平均して 5.2 年だと答えている。この数字をみると、法令で定められている博士課程の標準修業年限 3 年は、文系では短すぎるといわねばならない。これに対して、理系では、早くて 2.4 年、遅くて 5.2 年、平均して 3.4 年となっており、標準修業年限 3 年を少し上回る程度である。医療系では、早くて 3.1 年、遅くて 5.5 年、平均して 3.8 年と回答されており、標準修業年限の 3 年、または 4 年は現実的に妥当であるといえよう。

第 2 に、理系では回答者の半数以上、医療系では 90%近くが、博士課程後期入学者の 75%以上が課程博士を取得すると回答している。これに対して、文系では取得者の割合は極めて少なく、60%近い回答者が、博士号を取得する者の割合は入学者の 25%未満であると回答している。

第 3 に、標準修業年限（通常 3 年、医歯獣医系では 4 年）内での課程博士の輩出は、理系と医療系ではほとんどの者が「十分可能」または「何とか可能」と答えているが、文系では、「困難」が半数近くを占めている。

このような数字から総合的に判断すると、理系と医療系では大学院博士課程（後期）の標準

修業年限は、ほぼ現実の学位取得年数と見合っており、妥当であると判断される。しかし、文系では、標準修業年限 3 年の規定は、現実的ではないことが明らかである。文系では「標準修業年限」をどの程度にするかを再検討する必要すらあると言えよう。

第7章 博士号の審査

第1節 博士論文提出の前提条件

標準修業年限内での博士号の取得が特に文系では困難であることが前章において明らかになった。学問分野の違いは大きいですが、困難な理由にはさまざまなものがある。ここでは、博士号の審査と審査を受けるための博士論文提出の条件について分析しよう。全国の各大学院研究科では博士号の授与に対して実際にどのような条件を課し、どのような審査を行っているのだろうか。

学会発表、学術論文等について、課程博士論文提出の条件として定めている内容について尋ねた。

表2-7-1から明らかなおと、学会発表についての要件は65.1%が「特になし」としているが、学術論文等については「特になし」は26.2%にとどまり、多くの研究科で学術雑誌等への寄稿と掲載が学位取得の前提条件とされている。文系では、全国的な学会誌論文1本以上を課す研究科が調査対象中51研究科、国際的な学会誌論文1本以上を課す研究科が3研究科あった。回答が寄せられた研究科の半数近く（45.5%）の研究科において、何らかの形で博士論文提出の前提条件として学会誌論文が必要とされている。理系や医療系、学際系では、全国的ないし国際的な学術雑誌への論文掲載がもっと高い割合で要求されている。

表2-7-1 学位論文提出以前の要件

			文系	理系	医療系	学際系	全体
口 頭 発 表	国際学会での口頭発表 (回答数)	1以上	2	13	1	4	20
		2以上	1	5	0	1	7
		3以上	0	1	0	1	2
	特になし (%)		62.4	67.6	77.3	47.2	65.1
学 術 論 文 掲 載	全国的な学会誌論文 (回答数)	1以上	31	16	7	9	63
		2以上	10	27	5	6	48
		3以上	10	7	1	3	21
	国際的な学会誌論文 (回答数)	1以上	1	24	10	11	20
		2以上	1	14	10	1	7
		3以上	1	8	5	1	2
	特になし (%)		54.5	13.0	26.0	6.5	26.2

学位論文の提出に先立って、学位論文の一部をなす論文が学術雑誌に掲載されていることを要求するのは、各大学が自己の研究科内の審査に先立ち、学位請求論文の一部が一定の学術的

水準に達していることを確認するためである。指導教授の独断で学位を授与するようなことがないよう、教授会の内部に審査委員会が設置される。さらにそのうえ、提出される学位論文の重要な一部が、審査付きの学術雑誌に掲載されることを要求することは、大学が授与する学位論文の質を全国的な水準で維持するための予防的な手段なのである。これらの要件は、各大学・研究科によってやや異なっている。要件が厳しい大学院研究科では学位授与数は当然少なくなるが、その研究科で授与される学位は信頼されるだろう。

第2節 審査委員会の構成

博士論文の審査委員会について尋ねた。まず、審査委員会の規模である。表2-7-2に示すように、「審査委員会を最低何人で編成することになっていますか」に対しては、全体では、「3人以内」が最も多く、続いて「4人以内」、「5人以内」となっている。医療系と学際系では、少数だが6人以上で審査されるところもある。

表2-7-2 審査委員の数 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
3人以内	75.3	62.0	62.8	64.0	67.5
4人以内	12.6	14.6	19.1	20.0	15.4
5人以内	10.3	20.4	9.6	10.0	13.2
6人以上	1.7	2.9	8.5	6.0	3.9

次に、「審査委員会の中に、他講座あるいは他専攻の教員が参加しますか」に対しては、「よくある」が50%を越えており、「ときどき」を合計すると84.1%になる(表2-7-3)。分野別には、医療系で「よくある」の割合が多い。これは、医学部が小講座制をとっているためであろう。学際系で「よくある」が多いのは、研究科が様々な分野の教員から成り立っているため、提出された論文の内容に通じた審査委員を外部の講座や専攻に求めていることも一因であると思われる。そもそも、他講座・他専攻の教員が審査に参加するのは、学位論文の研究内容が隣接領域にまたがっていることが大きな要因であるが、審査の信頼性を担保するために他講座や他専攻の教員を加えているからである。研究科の内部規定で隣接分野の教員が審査委員として加わることを定めている大学や研究科も数多くある。

しかし、審査委員に他大学の教員が参加することはあまりないようだ(表2-7-4)。「よくある」は全体で15%たらず、「ときどき」は40%にとどまり、逆に「ほとんどない」が45%を占めている。学位審査は、単一大学の枠内で進められるケースが最も多く、他大学の教員が審査に加わるというケースがときどきあるといった状況である。

しかし、「博士号の全国的な水準を維持するため、他大学の教員を審査員として加えるべきで

ある」という意見に賛成する者は、全体の 62%もいる（表 2-7-5）。現在のところ、博士号の審査は、同一研究科内の委員を中心に、場合によっては他研究科の委員を加えて行われており、他大学の教員が審査委員として参加することは多くない。

とはいえ、研究科長たちは、他大学の教員が審査委員に加わることを希望している。それは学位審査の信頼性を高め、全国的な質の水準を維持することに役立つだろう。そのためには、外部の審査委員に対する旅費や謝金といった助成措置を整えることも必要である。

表 2-7-3 審査委員会への他講座・他専攻の教員の参加 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
よくある	34.3	50.4	83.0	57.9	51.9
ときどき	41.6	40.6	6.4	26.3	32.2
ほとんどない	24.1	9.0	10.6	15.8	16.0

表 2-7-4 審査委員会への他大学の教員の参加：現実 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
よくある	19.8	19.7	0.0	12.8	14.8
ときどき	38.9	56.1	11.8	59.0	40.0
ほとんどない	41.3	24.2	88.2	28.2	45.1

表 2-7-5 審査委員会への他大学の教員の参加：理想 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
博士号の全国的な水準を維持するため、他大学の教員を審査員として加えるべきである	64.0	62.9	54.3	68.6	62.0

第8章 標準修業年限での課程博士取得の困難さ

第1節 さまざまな理由

博士号は誰でも取得できるものでないことは明らかである。しかし、6章で示したように、博士課程に入学後、博士号を実際に取得する者の割合は非常に少ない。特に文系では標準修業年限内に課程博士を取得する者は少ない。難しいとすれば、どのような障壁があるのだろうか。研究科長の意見を聞いてみよう。

表2-8-1は、13の要因を回答の多かった順に並べたものである。全体で、研究科長が最も多く指摘する上位5位までの理由は、「研究成果を期間内に出すこと」(79.4%)、「院生本人の力量が不十分であること」(69.9%)、「博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと」(53.4%)、「学部時代の基礎的学習が不十分であること」(53.1%)、「論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること」(44.9%)であった。

このほか、分野別に相対的に数多く選択されていた理由を挙げると、文系では「学位論文の要求水準が高すぎること」(45.6%)、「院生のテーマ設定が曖昧なこと」(43.9%)、理系では、「修士論文のテーマと一貫していないこと」(39.2%)、学際系では、「学位論文の要求水準が高すぎること」(46.5%)、「院生のテーマ設定が曖昧なこと」(46.3%)「企業等で本業の仕事を抱えていること」(45.5%)などがある。

表2-8-1 博士号取得が困難な理由 (「非常に重要」と「少し重要」の合計の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと	71.5	85.2	87.2	76.2	79.4
院生本人の力量が不十分であること	66.0	75.4	71.4	65.1	69.9
博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと	45.5	62.9	51.2	59.5	53.4
学部時代の基礎的学習が不十分であること	57.3	56.7	36.5	61.0	53.1
論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること	43.0	58.5	24.4	56.1	44.9
学位論文の要求水準が高すぎること	45.6	33.6	29.1	46.5	38.7
院生のテーマ設定が曖昧なこと	43.9	32.5	31.0	46.3	38.0
アルバイトをしなければならないこと	38.0	28.1	35.7	40.9	34.9
修士論文のテーマと一貫していないこと	30.1	39.2	25.8	41.5	33.4
企業等で本業の仕事を抱えていること	24.0	29.4	28.6	45.5	28.9
学位論文が長いと執筆に時間がかかること	38.8	8.3	9.5	26.2	22.4
家族を抱えていること	17.7	10.1	12.2	20.5	14.6
博士号の水準が曖昧なこと	23.1	4.3	5.9	19.0	13.5

このように、研究科長の立場からは、どうしても大学院生の側に問題の所在を見出してしまいう傾向がある。それ以外の、制度上あるいは教員側の要因としては、「論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること」と「学位論文の要求水準が高すぎること」などが主なものである。これについては、第3部の大学院生調査で、大学院生に対して同じ質問を行った調査結果が報告されているので、合わせて参照していただきたい。

第2節 院生の力量に対する評価

先の表で、研究科長は、博士号取得が困難な主な理由の一つに大学院学生の力量をあげていた。ここでは、院生の資質をどのようにみているか、検討してみよう。

研究科長は、博士課程前期に入学してくる学生に対しては、満足度が全体的に低い。表2-8-2に示しているように、特に外国語について不満が大きく、教養的知識についても満足度が低い。

博士課程後期の学生に対しては（表2-8-3）、博士課程前期よりは満足度は高くなるが、それでも、外国語を書くこと、話すことについては依然として満足度は低い。

表2-8-2 学生の力量に対する評価：博士課程前期 (「満足」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
外国語(例えば英語)を読むこと	8.6	12.5	22.4	16.7	12.6
外国語(例えば英語)を書くこと	3.1	1.6	4.1	6.3	3.1
外国語(例えば英語)を話すこと	3.7	1.6	4.1	0.0	2.6
作文能力(日本語)	12.3	4.7	10.2	14.3	9.7
専門分野の知識	12.1	12.7	18.8	8.2	12.6
教養的知識	9.7	6.3	12.2	6.1	8.4
思考力	13.6	14.2	14.3	14.3	13.9

(注：選択肢は、満足、どちらでもない、不満の3カテゴリーである。表2-8-3も同様。)

表2-8-3 学生の力量に対する評価：博士課程後期 (「満足」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
外国語(例えば英語)を読むこと	26.9	36.8	29.7	26.5	30.4
外国語(例えば英語)を書くこと	7.6	6.6	11.0	8.2	8.1
外国語(例えば英語)を話すこと	6.5	4.4	7.7	4.1	5.8
作文能力(日本語)	29.6	20.6	15.4	26.0	23.5
専門分野の知識	33.9	40.0	34.4	40.0	36.5
教養的知識	18.6	11.0	12.1	12.0	14.2
思考力	25.7	32.1	25.3	26.0	27.5
博士課程後期学生としての総合的資質	25.0	28.6	26.4	24.5	26.2

大学院での研究生生活を充実させるのに必要な事項（表2-8-4）については、最上位に挙げられているのは、指導教員の研究指導に関することがらであり、次いで大学院のカリキュラム

や授業内容に関する事項，学内外の研究会への参加の機会などである。施設や設備などハードの事項よりも，教育・研究上の事項が重要であると認識されている。

表 2-8-4 大学院での研究生活を充実させるのに必要な事項
 (「非常に重要」と「少し重要」の合計の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
指導教員の研究指導の内容	97.1	96.3	98.9	100.0	97.6
指導教員と相談する機会	93.7	92.6	93.8	98.0	93.9
授業の内容	92.5	77.8	83.0	94.1	86.3
他大学の院生や研究者との交流	85.5	85.4	87.5	88.2	86.2
大学院のカリキュラム	87.3	78.7	75.5	94.0	83.0
指導教員と院生の研究テーマの関連性	71.7	89.7	89.5	88.0	82.6
コンピュータの利用	78.5	82.5	88.5	82.7	82.3
学内での研究会への参加	84.1	67.2	84.4	88.2	79.6
図書館の充実度	85.5	70.4	77.9	76.9	78.5
専用机や居室スペースの拡充	78.6	79.4	77.1	76.9	78.3
外国語習得の機会	66.1	78.8	77.1	82.7	74.1
学会参加への経済的支援	62.8	88.2	65.6	65.4	71.3
海外奨学金や留学の機会	67.1	69.1	69.8	61.5	67.6
論文を執筆する機会	60.3	73.3	69.8	80.8	66.3
十分な奨学金を得ること	51.7	58.4	43.8	55.8	50.3
学会で発表する機会	38.7	66.9	44.8	67.3	49.5
研究助手(R.A.)の経験	43.2	53.3	49.5	51.0	48.5
教育助手(T.A.)の経験	40.1	45.6	42.7	42.3	42.5

第3節 日本学術振興会の特別研究員制度

若手研究者の育成には日本学術振興会の特別研究員制度が大きな役割を果たしており，近年採用数も増加している。研究科長はこの制度をどのようにみているのだろうか。まず，採用状況を聞いてみると（表 2-8-5），DC（博士課程在学者対象）全体では「多数いる」は 5.5%と極めて少なく，「いない」が 62.1%と圧倒的に多い。

表 2-8-5 日本学術振興会の特別研究員への採用状況 (%)

		文系	理系	医療系	学際系	全体
DC (博士課程在学者対象)	多数いる	3.0	10.7	3.3	4.2	5.5
	少しいる	22.0	51.1	22.8	35.4	32.4
	いない	75.0	38.2	73.9	60.4	62.1
PD (博士号取得者対象)	多数いる	3.1	8.5	1.1	4.2	4.4
	少しいる	23.3	53.1	30.4	41.7	35.8
	いない	73.6	38.5	68.5	54.2	59.8

分野別には、理系が最も採用されているようで、「多数いる」と「少しいる」を合計すると60%を越えている。しかし、それ以外の3分野では「いない」が圧倒的に多い。PD（博士号取得者対象）も同様の状況である。これらから、DC、PDとも、大学・研究科間および専門分野間で、採用状況は大きく異なっているといえそうだ。

表2-8-6 日本学術振興会の特別研究員への採用の難易度 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
努力すれば採用される	20.5	18.9	16.5	16.3	18.7
採用されるのはやや難しい	35.9	37.8	35.3	34.9	36.3
採用されるのは極めて難しい	43.6	43.3	48.2	48.8	45.0

そのためか、多くの研究科長は、特別研究員に採用されることは難しいと答えている。「努力すれば採用される」は20%にも満たない。「採用されるのは極めて難しい」が45%という数字になっていることをみれば、同制度が将来のエリート研究者を対象としている制度とはいえ、大学院生を鼓舞するにはあまりにも不十分な採用実績は少ないと言えよう。

第9章 大学院の制度と政策に関する意見

大学審議会が発足して以来、大学院に関する重要な政策が答申され、実施に移された。その結果、1990年代に、我が国の大学院と大学院教育は急速に変貌した。この章では、研究科長がそれらの政策をどのように受け止めているかを分析する。

第1節 大学院の制度に関する意見

表2-9-1は、大学院政策や大学院の現状に関する研究科長の意見を示している。まず、「博士課程後期は、もっと多くの大学に設置されるべきである」に対して「そう思う」と回答した研究科長は、全体でわずか21.5%であった。回答者はすべて既に博士課程後期を有する大学院研究科の研究科長であるから、これ以上大学院博士課程が設置されることに対して消極的な態度を示していることは理解できる。これら既得権者は、新規参入により、質の低下、競争激化が起きることを危惧していることであろう。それを反映するかのよう、「博士課程後期を特定の大学に重点的に整備するのは、よいことである」という質問に対しては、44.1%の者が「そう思う」と回答している。分野別には、学際系でそのような「制限論者」が多い。

表2-9-1 大学院の制度に関する意見 (「そう思う」の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
博士課程後期は、もっと多くの大学に設置されるべきである	24.1	15.8	26.9	17.6	21.5
博士課程後期を特定の大学に重点的に整備するのは、よいことである	43.0	44.0	36.8	62.0	44.0
大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生数は大幅に増加した	23.0	33.1	29.7	36.4	28.9
大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生の質は多様になった	40.9	47.6	41.3	60.5	45.0
大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の大学院教育の質は向上した	26.4	40.7	34.1	33.3	32.9

次に、研究科長は、1990年代の約10年間に、大学院がどのように変化したとみているのだろうか。まず、「大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生数は大幅に増加した」と回答した者は28.9%であった。第2章で示したように統計データでは博士課程（後期）学生数は急激に増大しているから、この数字は意外に少ないように思える。

今後の分析が必要であるが、それは、博士課程学生数の急増が一部の大学院研究科に偏っているためかもしれない。

さらに、「大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生の質は多様化した」に対しては、全体で45.0%が肯定している。これに対して、「大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の大学院教育の質は向上した」には「そう思う」は32.9%と、低くなっている。このように、大学院の量は拡大したが、院生の質はそれほど向上せず、多様性が増大したことを示している。大学院学生の力量に対する研究科長の評価が厳しいことの原因の一つは、ここにあるのかもしれない。

第2節 評価に関する意見

1990年代の重要な高等教育政策の一つは、評価である。大学設置基準に自己点検・評価を実施することが明記され、大学評価・学位授与機構による第三者評価も導入されるようになった。私立大学が中心であるが、大学基準協会による評価においても、従来の加盟校評価の他に加盟校の相互評価も行われるようになった。さらにまた、従来から組織の新設改組時には大学設置審議会による審査が行われており、視学委員（文部科学省）による視察もある。

果たして、これらの評価は、大学院教育をはじめとする教育研究の改善にどの程度役立ったのだろうか。表2-9-2は、「改善に役立つと思う」に「はい」と回答した者の割合を事項別に示している。なお、研究科によっては、未経験の評価も数多い。そのため、この表には回答者数が40以上のものについてのみ数字を掲載している。最も多くの者が改善に役立つと思うと回答された評価をあげると、大学・学部・研究科レベルの自己点検・評価が90%程度と最も多い。大学評価・学位授与機構による分野別教育評価は、学部教育と大学院教育を含んだものだが、相対的には、それほど高く評価されていない。

表2-9-2 各種評価に関する意見

	「改善に役立つと思う」の%	回答数
大学設置審議会による審査	75.8	132
視学委員（文部科学省）による視察	87.3	158
大学評価・学位授与機構による分野別教育評価	60.5	43
大学基準協会による相互評価	84.1	107
大学基準協会による加盟校評価	67.2	58
大学・学部レベルの自己点検・評価（学部教育の評価）	91.0	223
大学・研究科レベルの自己点検・評価（大学院教育）	91.7	228
大学・学部レベルの自己点検・評価（研究評価）	91.1	213

第3部 大学院生調査

第1章 大学院生調査の概要

「大学院生の学習・研究活動に関する調査」は、第2部で分析した研究科長調査と並行して行った。研究科長調査を郵送する際に大学院生調査の調査票を同封し、所属研究科の博士課程後期に所属する大学院生に配布するよう依頼した。調査票の配布・回収状況は以下の表3-1-1の通りである。

表3-1-1 大学院生調査の回収状況

設置形態	配布数	有効回答数	回収率 (%)
国立	4,205	1,576	37.5
公立	680	175	25.7
私立	3,139	898	28.6
全体	8,024	2,656*	33.1*

*設置者不明の7を含む。

また、質問紙のはじめの部分で、回答者の基本的な属性について尋ねた。質問した具体的な項目は、年齢、性別、家族の状況、国籍、大学・研究科・専攻の名称と専攻分野、経歴である(Q1-7)。以下の表3-1-2に、これらの点について調査回答者の属性をまとめておく。

表3-1-2 大学院生調査回答者の属性

		人数	%
所属大学の 設置形態	国立	1,576	59.5
	公立	175	6.6
	私立	898	33.9
	不明	7	—
学年	D 1	841	32.5
	D 2	755	29.2
	D 3以上	992	38.3
	不明	68	—
性別	男	1,932	73.0
	女	715	27.0
	不明	9	—
年齢	20歳代	1815	68.6
	30歳代	653	24.7
	40歳代	112	4.2
	50歳代以上	64	2.4
	不明	12	—
国籍	日本国籍	2317	87.7
	外国籍	324	12.3
	不明	15	—
配偶者の有無	配偶者なし	2029	76.7
	配偶者	615	23.3
	不明	12	—

所属大学の設置形態

回答者の所属する大学の設置者は国立大学 1,576 名 (59.5%)、公立大学 175 名 (6.6%)、私立大学 898 名 (33.9%) であった (無回答は 7 名)。文部科学省の学校基本調査報告書 (2003 年度速報版) に基づいて全国の博士課程学生数を所属大学の設置形態別にみると、国立 50,311 名 (70.5%)、公立 4,038 名 (5.7%)、私立 17,015 名 (23.8%) である。この数値と比較すると、本調査の回答者サンプルは、実際よりも国立大学所属者がやや少なく、その分、公立大学、私立大学の所属者がやや多いということになる。

学年・入学年度

回答者の博士課程後期における学年、および博士課程後期への入学年度を記入してもらった。博士課程は医学系・歯学系を除いて、標準修業年限は 3 年である。医学系・歯学系では 4 年次に属する者もあり、またそれ以外の専攻分野でも標準修業年限を超えて博士課程に在学する者がいる。今回の報告では、回答者の学年を、博士課程の「1 年次」、「2 年次」、「3 年次以上」という 3 つのカテゴリーにまとめることとした。「4 年次以上」というカテゴリーを設けることも考慮したが、このカテゴリーを設けた場合、そのサンプル数が少なく、また医学系・歯学系に属する者の比率が高くなり、カテゴリー自体に専攻分野の特性によるバイアスが強くかかるため、今回、調査全体をまとめるに際しては、上記の 3 つの分類を採用することとした。

この分類に基づく、博士課程 1 年次に属する者は 841 名 (32.5%)、2 年次に属する者は 755 名 (29.2%)、3 年次以上に属する者は 992 名 (38.3%) であった (無回答は 68 名)。

文部科学省の学校基本調査報告書 (2003 年度速報版) によると、博士課程学生全体のうち、博士課程 1 年次に属する者は 27.5%、同じく 2 年次は 25.4%、3 年次以上は 47.1% である。本調査のサンプルはこれと比較すると、3 年次以上のカテゴリーが少なく、その分、1 年次および 2 年次の比率が高いものとなっている。

その他の属性

性別については、男性 1,932 名 (73.0%)、女性 715 名 (27.0%) であった (無回答は 9 名)。年齢は、20 歳代と 30 歳代で全体の 9 割以上を占め、大学における生涯学習化が進む近年の状況下においても博士課程については若年層が大部分を占めていることが窺われた。また、国籍については日本人が 9 割近く、配偶者の有無については、配偶者のいない者が 8 割近くを占めた。

専門分野

専攻分野について、質問紙では以下の 10 の専攻分野を選択肢として設け、そのうちひとつを選択してもらった。すなわち、「人文科学」、「社会科学」、「教育学」、「理学」、「工学」、「農学」、「医学・歯学」、「薬学・保健」、「芸術」、「学際・その他」である。この分類による回答者の比

率は表の「専門分野 (1)」に示す通りである。今回の分析においては、第 2 部で分析した研究科長調査の場合と同様、専攻分野をひとまず以下の 4 つのカテゴリーに再分類することにした。そのカテゴリーを再掲しておく、表 3-1-3 の「専門分野 (2)」に示したように、「文系」、「理系」、「医療系」、「学際系」の 4 つであり、それぞれの内訳は以下の通りである。

「文系」：「人文科学」、「社会科学」、「教育学」、「芸術」、およびそのうち複数にまたがる分野
 「理系」：「理学」、「工学」、「農学」、およびそのうち複数にまたがる分野
 「医療系」：「医学・歯学」、「薬学・保健」、およびそのうち複数にまたがる分野
 「学際系」：「学際・その他」、および「文系」、「理系」、「医療系」の複数にまたがる分野

表 3-1-3 大学院生調査回答者の専門分野 (%)

専門分野(1)	専門分野(2)	人数	(%)
専門分野(1)	人文科学	284	10.9
	社会科学	330	12.7
	教育学	81	3.1
	芸術	16	0.6
	理学	356	13.7
	工学	633	24.4
	農学	162	6.3
	医学・歯学	423	16.3
	薬学・保健	158	6.1
	学際・その他	154	5.8
	複数回答	51	—
	不明	8	—
専門分野(2)	文系	729	27.5
	理系	1,166	44.0
	医療系	590	22.3
	学際系	163	6.2
	不明	8	—

この分類に基づく回答結果は、文系 729 名 (27.5%)、理系 1,166 名 (44.0%)、医療系 590 名 (22.3%)、学際系 163 名 (6.2%) となった (無回答は 8 名)。再び、文部科学省の学校基本調査報告書 (2003 年度速報版) における数値と比較しておく。学校基本調査報告書では、本調査の「文系」に相当する「人文科学」、「社会科学」、「教育学」、「芸術」の合計は 24.1%、「理系」に相当する「理学」、「工学」、「農学」の合計は 33.3%、「医療系」に相当する「保健」(その下位分野は「医学」、「歯学」、「薬学」、「その他」) は 32.1%、学際系に相当する「家政」、「その他」の合計は 10.6% である。本調査のサンプルと学校基本調査の数値を比較すると、文系はほぼ同等だが、理系については本調査のサンプルの方が多く、その分、医療系と学際系が少ない結果となっている。

もっとも、本調査のサンプルと学校基本調査では、専攻分野の分類方法が同じでない、単純な比較はできない。学校基本調査においては、所属する研究科の名称によって専攻分野の分類が定められている。つまり、同一名称の研究科に所属する学生はすべて同じ専攻分野に分

類されることになる。しかし、本調査においてはそれとは異なり、回答者の回答、すなわち回答者本人の自己規定に基づいて専攻分野の分類を行っている。同一名称の研究科に所属していても、専攻の編成方法や所属する研究室の性格、あるいは指導教員の研究内容などによって専攻分野の自己規定は異なる場合が少なくないと考えられる。学校基本調査の分類はシンプルで分かりやすいが、このような場合については個々の学生の実態を十分に反映できない欠点もある。このようなことを考慮し、できる限り個々の専攻分野の実態に即したデータを収集する意図から、本調査においては回答者の選択を基にして専攻分野の分類を行うことにした。

第2章 大学院への進学動機と修了後の希望進路

第1節 大学院への進学動機

大学院へ進学した動機について尋ねた。具体的な質問項目は、博士課程後期への進学決定時期、博士課程後期への進学に影響を与えた人物、博士課程後期進学以外に就職を考えたか、考えた場合、それはどのような職業か、博士課程後期への進学に際し重要視したものの5項目である。以下、各設問項目について回答結果をまとめておく。

博士課程後期への進学決定時期

まず、博士課程後期への進学決定時期について尋ねた (Q8)。「高校卒業以前」、「大学入学の頃」、「大学卒業の頃」、「博士課程前期在学中」、「大学(院)卒業後社会に出てから」の5つの選択肢からひとつを選択してもらった。全体としては「博士課程前期在学中」が44.0%で最も高く、ついで「大学卒業の頃」が22.5%で高かった。「高校卒業以前」、「大学入学の頃」と回答したものはいずれも7%程度であり、大学に入学する前後に明確なキャリアパスを描いていたわけではないことがうかがえる。

表3-2-1 博士課程後期への進学決定時期：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
高校卒業以前	4.7	8.4	5.1	5.0	6.4
大学入学の頃	8.4	6.6	6.6	4.4	7.0
大学卒業の頃	23.4	16.4	33.2	22.5	22.5
博士課程前期在学中	49.9	51.9	20.6	47.5	44.0
大学(院)卒業後社会に出てから	13.5	16.7	34.4	20.6	20.0

専門分野別にみると(表3-2-1)、文系、理系、学際系で最も割合が高いのは「博士課程前期在学中」で、いずれも50%前後の値を示している(49.9%, 51.9%, 47.5%)。それに続くのが、文系では「大学卒業の頃」で23.4%、理系と学際系では「大学卒業の頃」(16.4%, 22.5%)と「大学(院)卒業後社会に出てから」(16.7%, 20.6%)で、ほぼ等しい値を示している。一方、医療系で高い値を示しているのは、「大学(院)卒業後社会に出てから」(34.4%)、「大学卒業の頃」(33.2%)である。「博士課程前期在学中」はそれに続き20.6%であり、他の分野に比して低い値を示している。ただし、医療系の72.8%は、「博士課程前期」の存在しない医学・歯学のサンプルから構成されていることに留意する必要があるだろう。

表 3-2-2 博士課程後期への進学決定時期：学年別 (％)

	D1	D2	D3 以上	全体
高校卒業以前	7.0	5.5	6.8	6.4
大学入学の頃	5.6	6.9	7.5	7.0
大学卒業の頃	20.2	20.6	25.6	22.5
博士課程前期在学中	49.7	48.3	37.1	44.0
大学（院）卒業後社会に出てから	17.4	18.6	23.0	20.0

学年別にみると（表 3-2-2），いずれの学年においても「博士課程前期在学中」が最も高く，ついで「大学卒業の頃」が高かった。なお，学年進行に伴い，「博士課程前期在学中」と回答する割合が減少しているのに対し，「大学入学の頃」，「大学卒業の頃」，「大学（院）卒業後社会に出てから」と回答する割合は増加している。各学年のコーホートは同一ではないため，この傾向は単に各学年のサンプルの特徴を示しているに過ぎないとも考えられる。しかし，大学に入学する前後に明確なキャリアパスを描けている学生や，社会人入学者のような動機付けや目的意識の強い学生は，そうでない学生に比してドロップアウトする可能性が低いかもしれない。仮にそうだとすれば，その結果として上位学年のサンプルに偏りが生じたためと考えることもできよう。

博士課程後期に進むにあたって影響を与えた人物

次に，博士課程後期へ進学するに際してその決定に影響を与えた人物について尋ねた（Q9）。「高校時代の先生」，「学部時代の先生」，「博士課程前期の指導教員」，「博士課程後期の指導教員予定者」，「大学の同級生」，「大学の上級生・院生」，「配偶者」，「両親」，「その他」，「特に誰もいない」の 10 の選択肢から 3 つまで重複回答可として選択してもらった。全体としては，「博士課程前期の指導教員」が 46.4% と最も高く，「大学の上級生・院生」（22.7%），「学部時代の先生」（19.5%）がこれに続いている。この結果から，博士課程後期への進学に影響を与えるのは，自分が進もうとしているキャリアにおける経験を既に有しているものであることが分かる。なお，「博士課程後期の指導教員予定者」が 10.4% とそれほど高くないのは，博士課程前期と指導教員が同じ場合には「博士課程前期の指導教員」を選択するようこちらが指定したためであろう。また，配偶者のあるものに限定していえば，「博士課程前期の指導教員」（34.3%），「大学の上級生・院生」（17.9%），「博士課程後期の指導教員予定者」（17.7%）に，「配偶者」（14.5%）が続き，「学部時代の先生」（12.7%）や「両親」（11.9%）よりも高い値を示している。

専門分野別にみると（表 3-2-3），文系，理系，学際系で最も割合が高いのは，「博士課程前期の指導教員」で，いずれも 50% 前後の値を示している（57.2%，51.7%，47.9%）。ついで高い割合を示しているのは，文系，学際系では「学部時代の先生」（28.9%，23.9%），理系では「大学の上級生・院生」（21.5%）であった。一方，医療系で最も割合が高いのは，「大学の上級生・院生」で 29.3% である。「博士課程前期の指導教員」はそれに続き 22.0% であり，他の分野に比して低い値を示している。これについても，医療系の 72.8% が，「博士課程前期」の存

在しない医学・歯学のサンプルから構成されていることに留意する必要がある。なお、理系、医療系では、「学部時代の先生」（14.6%，16.1%）よりも「両親」（18.1%，18.0%）の影響を認めるものの割合が高い。

表3-2-3 博士課程後期への進学決定に影響を与えた人物：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
高校時代の先生	2.2	3.3	1.0	2.5	2.4
学部時代の先生	28.9	14.6	16.1	23.9	19.5
博士課程前期の指導教員	57.2	51.7	22.0	47.9	46.4
博士課程後期の指導教員予定者	8.6	8.4	15.1	15.3	10.4
大学の同級生	6.3	9.5	14.2	7.4	9.6
大学の upper 級生・院生	20.3	21.5	29.3	19.6	22.7
配偶者	4.0	2.8	4.4	3.1	3.5
両親	15.8	18.1	18.0	16.6	17.3
その他	8.1	10.5	12.5	14.7	10.5
特に誰もいない	12.6	13.1	13.9	13.5	13.2

博士課程前期修了時に考慮した進路

続いて、博士課程前期を修了した際に博士課程後期進学以外に就職を考えたかどうかについて尋ねた (Q10)。全体としては、「考えた」と回答したものは 44.7%，「考えなかった」と回答したものは 55.3%と、若干「考えなかった」と回答する割合が高かった。

表3-2-4 博士課程前期修了時に就職を考慮したか：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
考慮した	29.9	49.4	54.1	45.2	44.7
考慮しなかった	70.1	50.6	45.9	54.8	55.3

表3-2-5 博士課程前期修了時に就職を考慮したか：学年別 (%)

	D1	D2	D3以上	全体
考慮した	48.1	44.2	41.4	44.7
考慮しなかった	51.9	55.8	58.6	55.3

専門分野別にみると (表3-2-4)、医療系でやや「考慮した」者の割合が高いものの、残りの分野に関しては「考慮しなかった」と回答する者の割合が高かった。特に文系では 70.1%と他の分野に比して高い値を示している。この結果から、いったん博士課程前期に入学した後の文系のキャリアパスがいかに閉じられたものであるかを逆説的に認識することができよう。学年別にみると (表3-2-5)、学年進行に伴って、「考慮しなかった」と回答するものが 1年次で 51.9%，2年次で 55.8%，3年次以上で 58.6%とその割合が増加している。経験の有無を問う問いであるため、この傾向は Q8 同様、単に各学年のサンプルの特徴を示しているに過ぎないとも考えられる。しかし、博士課程 (後期) 進学以外に就職を真剣に考えたものは、そ

うでないものに比べ、進学後にも他の職業への関心を捨てきれずに、キャリアチェンジする可能性が高いかもしれない。仮にそうだとすれば、その結果として3年次以上のサンプルに偏りが生じたためと考えることもできよう。

表3-2-6 博士課程前期修了時に考慮した職業：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
会社員	36.5	70.7	22.3	29.7	48.7
公務員	12.7	10.4	5.5	10.9	9.6
学校教員	21.3	3.9	2.1	7.8	6.8
大学等の教育研究職	15.7	9.1	13.1	28.1	12.6
その他の職業	13.7	6.0	57.0	23.4	22.3

さらに、博士課程後期進学以外に就職を考えた場合、それはどのような職業かについて尋ねた(Q11)。「会社員」、「公務員」、「学校教員」、「教育研究職」、「その他」の5つの選択肢からひとつを選択してもらった。全体としては「会社員」が48.7%で最も高かった。

専門分野別にみると(表3-2-6)、文系、理系、学際系では「会社員」が最も高かった(36.5%、70.7%、29.7%)。特に理系では70.7%と、他の分野に比して極めて高い値を示している。一方、医療系では、設定した選択肢に、病院関係のものが含まれていなかったためか、「その他」が57.0%と最も高かった。

博士課程後期への進学動機

博士課程後期への進学に際し重要視した項目について尋ねた(Q12)。用意した11の選択肢に対して、「非常に重要」、「少し重要」、「どちらともいえない」、「それほど重要でない」、「全く重要でない」という5つの選択肢からひとつを選択してもらった。ここでは、「非常に重要」と「少し重要」に対する回答の合計を用いて考察する。

表3-2-7 博士課程後期への進学動機(「非常に重要」と「少し重要」の合計) (%)

	全体(「非常に重要」と「少し重要」の合計)
大学で専門をさらに深めたかったから	94.0
研究する機会を得るため	91.0
将来、専門家として活躍するため	85.7
博士号を取得したかったから	73.3
家族からの支援があったから	51.9
指導教員の勧めがあったから	40.4
より良い就職の機会を得るため	39.4
日本育英会の奨学金がもらえるから	27.3
日本留学の奨学金がもらえるから(留学生)	17.8
その他国内の奨学金がもらえるから	12.0
職場からの派遣があったから	7.2

全体として（表3-2-7），重要視したとの回答の割合が最も高かったのは、「大学で専門をさらに深めたかったから」（94.0%）であった。ついで多かったのは「研究する機会を得るため」（91.0%），「将来，専門家として活躍するため」（85.7%）であった。一方，重要視したとの回答の割合が低かったのは「職場からの派遣があったから」（7.2%），「その他国内の奨学金がもらえるから」（12.0%），「日本育英会の奨学金がもらえるから」（27.3%）である。この結果から，博士課程後期への進学の見定は内発的動機付けに基づいてなされるものであり，奨学金等の外発的動機付けに基づいてなされるものではないことが分かる。ただし，留学生に限定していえば，「日本留学の奨学金がもらえるから」が11項目中6番目に高い59.6%という比較的高い値を示している。なお，専門分野別，学年別には，回答状況に大きな差違はみられなかった。

第2節 博士課程修了後の希望進路

博士課程後期修了後，希望する進路について尋ねた（Q35）。全体として，最も回答が多かったのは「大学等の教員」であり，48.3%と半数近くに上った。「民間企業等の研究者」（15.8%），「民間企業・病院等の技術者・専門家」（12.5%）が続いた。専門分野別にみると（表3-2-8），文系では81.5%が「大学等の教員」を志望している。理系では，「大学等の教員」（39.2%），「民間企業等の研究者」（27.1%）の順に多かった。医療系では，「民間企業・病院等の技術者・専門家」（37.0%）が最も多く，これに「大学等の教員」（23.7%）が続いた。学際系では「大学等の教員」（53.3%）が最も多いが，それ以外は分散しており，「その他」も13.2%に上った。学年別にみると，「民間企業等の研究者」が3年次以上で低く，その分「民間企業・病院等の技術者・専門家」が高いという傾向がみられた。

表3-2-8 博士課程後期修了後の希望進路：専門分野別 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
大学等の教員	81.5	39.2	23.7	53.3	48.3
民間企業等の研究者	3.0	27.1	12.0	9.9	15.8
民間企業・病院等の技術者・専門家	1.8	7.1	37.0	7.2	12.5
公務員	2.1	7.6	2.5	5.3	4.8
会社員	0.4	4.3	1.4	3.9	2.6
高校以下の学校の教員	1.6	1.7	0.5	0.7	1.4
その他	4.2	7.3	17.4	13.2	9.1
特になし	5.4	5.7	5.4	6.6	5.6

第3章 大学院生の生活と学会活動

第1節 活動時間

博士課程学生の活動とその時間配分について尋ねた(Q13)。用意した14の選択肢に対して、「かなりの時間を使っている」、「少し時間を使っている」、「あまり時間を使っていない」、「全く時間を使っていない」という4つの項目から選んでもらった。ここでは、「かなりの時間を使っている」と「少し時間を使っている」の項目に対する回答の合計をとって考察する。

表3-3-1 どのような活動に時間を使っているか：専門分野別
(「かなり」と「少し」の合計の%)

	文系	理系	医歯系	学務系	全体
博士論文のテーマに関する文献購読	89.0	89.6	86.7	90.1	88.8
博士論文のテーマに関する調査や実験	78.4	93.9	90.6	84.7	88.4
学会発表の準備	55.4	69.7	64.5	64.8	64.4
学会誌等の論文執筆	64.2	68.1	43.8	66.9	61.5
博士論文のテーマ以外の研究補助(含RA)	68.5	53.0	55.3	68.8	58.7
研究室内の院生・学生との研究会	49.6	65.9	52.4	50.9	57.5
大学での教育活動(TAなど)	48.7	44.0	42.8	50.9	45.4
外国語の学習	52.8	40.9	38.2	46.0	43.8
授業への出席	75.8	21.7	34.2	45.4	40.8
博士論文の執筆	41.4	33.3	41.2	38.5	37.6
アルバイト	43.4	14.7	52.8	24.4	31.7
学内の院生・学生との研究会	37.5	21.1	22.8	28.4	26.5
他大学と院生や研究者との研究会	41.0	20.5	17.9	30.4	26.2
大学等での非常勤講師	18.1	6.2	9.5	17.3	10.8

全体として時間を使っているとの回答が最も多かった活動は、「博士論文のテーマに関する文献購読」であった(88.8%)。続いて、ほぼ同程度に回答が多かったのが「博士論文のテーマに関する調査や実験」であった(88.4%)。これら2項目に続いて多かったのは、「学会発表の準備」(64.4%)、「学会誌等の論文執筆」(61.5%)であった。これらの結果から、博士論文に関わる研究が学生たちの活動の中心にあり、それに次いで、博士論文と関連する、あるいはしばしば博士論文執筆の前提条件とされる学会活動に多くの時間を割いている様子がみとれる。逆に、「大学等での非常勤講師」(10.8%)、「他大学の院生や研究者との研究会」(26.2%)、「学内の院生・学生との研究会」(26.5%)、「アルバイト」(31.7%)といった活動には相対的にあまり時間が割かれていない。

もっとも、これら、相対的に時間が割かれていない活動については専門分野ごとに格差がみ

られる(表3-3-1)。例えば、「アルバイト」については医療系、文系で数値が高い(52.8%, 43.4%)のに対し、理系では低い(14.7%)。また、周囲の大学院生や研究者との交流については、理系では、研究室での研究会に多く時間を割いている(65.9%)のに対し、学内および他大学での研究会はそれほどさかんでない(21.1%, 20.5%)。医療系も同様の傾向がみられる。これに対して文系では研究室での研究会の時間が相対的に少ない(49.6%)分、学内および他大学での研究会に時間を割く者が多い(37.5%, 41.0%)。

また、上でみた全体的な数値は、学年によっても変動がみられる(表3-3-2)。「博士論文のテーマに関する調査や実験」や「博士論文の執筆」、「学会誌等の論文執筆」など、博士論文および学会活動に関する事項は、学年を追って活動時間が増加している。それに対して、「博士論文のテーマ以外の研究活動(含むR.A.)」や「授業への出席」、「研究室の院生・学生との研究会」などは逆に学年を追って活動時間が減少している。博士課程入学直後には、授業や研究会、博士論文以外の研究など幅広い学習・研究活動にもある程度の時間が割かれているが、修業年限が近づくにしたがって、博士論文に直接関連する研究に焦点化してゆく様子を読み取ることができる。

ただし、このような傾向に反する項目として「アルバイト」と「非常勤講師」を挙げることができる。「アルバイト」について学年で分類すると、いずれの学年でも顕著な違いこそないものの、1年次から2年次、さらに3年次以上へと、徐々に時間を割く者の比率が上昇している。特に、3年次以上のカテゴリーで比率が最大となっていることは、一部の学生が博士論文に関する研究と並行してアルバイトを行わなければならないという実態を窺わせるものである。また、この3年次以上のカテゴリーには標準修業年限を超えて在学している者たちが含まれており、彼らにとって奨学金等の経済的支援が不足することとの関係も深いものと考えられる。

表3-3-2 どのような活動に時間を使っているか：学年別
(「かなり」と「少し」の合計の%)

	1年次	2年次	3年次以上	全体
博士論文のテーマに関する文献講読	86.2	89.6	90.3	88.8
博士論文のテーマに関する調査や実験	83.6	89.8	91.2	88.4
学会発表の準備	56.9	67.4	68.0	64.4
学会誌等の論文執筆	50.5	64.2	68.9	61.5
博士論文のテーマ以外の研究活動(含むRA)	60.4	57.7	57.4	58.7
研究室の院生・学生との研究会	61.9	59.1	52.6	57.5
大学での教育活動(T.A.など)	46.7	47.8	43.2	45.4
外国語の学習	49.5	44.2	38.7	43.8
授業への出席	49.4	39.1	33.9	40.8
博士論文の執筆	15.8	32.8	58.6	37.6
アルバイト	29.4	31.3	34.0	31.7
学内の院生・学生との研究会	28.3	25.5	25.7	26.5
他大学と院生や研究者との研究会	26.3	24.3	27.7	26.2
大学等での非常勤講師	8.1	10.7	13.1	10.8

第2節 学会活動

第1節で見たさまざまな活動のうち、博士課程の学生の研究活動にとって重要な学会活動の状況について、口頭での研究発表と投稿論文の執筆を取り上げて、これらをどの程度経験しているのかを尋ねた(Q14)。学会については、国際学会、国内の全国学会、地域的な学会という3つのレベルに分け、さらに論文に関する項目として「大学等の紀要」を追加した。

全体についてみると、まず口頭発表については、国際的な学会で25.6%、国内の全国レベルの学会で72.0%、地域的な学会で49.7%の者が1回以上経験している。また、論文の執筆については、国際的な学会誌で34.3%、全国的な学会誌で39.3%、地域的な学会誌で22.7%、大学等の紀要で31.7%の者が経験している。全体としてみると、口頭発表の経験は国内の全国学会および地域学会で多く、論文の執筆は全国学会、国際学会、大学紀要、地域学会の順に多いが、その比率の差はそれほど大きくはない。

また、学年別にみても、当然のことだが、以上の学会活動はすべて学年を追うごとに経験者の数、経験回数ともに上昇している。

だが、重要なことは、以上の項目を専門分野別に分析するときわめて大きな違いがみられることである(表3-3-3)。例えば、国際学会、全国学会では発表、論文ともに経験者の比率は理系が最も高い。地域学会では「医療系」が最も高い。また、大学等の紀要論文では文系が最も高い。

表3-3-3 学会活動の経験：専門分野別 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
学会での口頭発表の経験	2回以上または1回経験あり				
国際的な学会での口頭発表	9.8	38.7	18.6	26.7	25.6
国内の学会での口頭発表	45.8	87.0	72.9	77.6	72.0
地域的な学会での口頭発表	39.1	50.7	60.9	46.9	49.7
学会誌への論文執筆の経験	第一著者または2番目以下の著者として論文掲載経験あり				
国際的な学会誌への論文	4.7	49.2	43.7	23.7	34.3
全国的な学会誌への論文	27.2	44.2	44.1	40.9	39.3
地域的な学会誌への論文	18.1	22.1	28.3	26.6	22.7
大学等の紀要への論文	48.7	26.9	20.5	31.6	31.7

専門分野ごとに学会活動の傾向をみてゆくと、まず文系では、全国学会と地域学会での発表が中心で、論文については大学紀要が多く、全国学会誌がこれに続いている。国際学会での活動は他分野に比べて極端に低い。

次に、理系では、発表については全国学会、地域学会、国際学会の順に多いが、全体として他分野よりも発表の経験が多い。そして、論文については国際学会、全国学会、大学紀要の順に多く、特に国際学会での論文執筆経験の多さは他分野に比べて際立っている。

また、医療系では、発表は全国学会、地域学会が中心である。論文については全国学会、国

際学会，地域学会の順であり，全国学会と国際学会の経験はほぼ同程度である。すなわち，国際学会での活動は発表こそ少ないが，論文執筆の経験は多い。

最後に，学際系では，発表は全国学会，地域学会，国際学会の順だが，全体として発表経験が他分野に比して多く，国際学会での発表経験は「理系」に次いで多い。論文は全国学会，大学紀要，地域学会の順である。

以上のように，発表および論文執筆の機会は専門分野によってかなりの格差があり，またどのレベルの学会で発表・執筆を行うのかについても，各専門分野の性格を反映して大きな違いがあることが明らかとなった。研究科長調査（本書第2部）でも触れたように，学会での活動，特に投稿論文の執筆と採択は博士学位の条件とされることが多いが，その内容は専門分野ごとに多様であるといえる。

第4章 課程博士の取得可能性

第1節 課程博士取得に必要と考える年限

博士号の取得に何年間必要と考えているかについて尋ねた（Q16）。「3年」、「4-5年」、「6年以上」の3つから選択してもらった。全体では「3年」と「4-5年」がほぼ同数（46.2%および46.3%）であり、「6年以上」は7.5%という結果となった。専門分野別にみると（表3-4-1）、標準修業年限が4年である課程を含む医療系で「4-5年」の比率が特に高い（57.4%）が、文系、学際系でも半数以上が「4-5年」と回答している（55.4%および50.3%）。特に、文系では「6年以上」も22.0%と高い値となっている。理系では63.5%が3年で取得可能と回答し、「6年以上」とした者はわずかに1.9%であり、専門分野によって現状が多様であることが示されている。

表3-4-1 博士号の取得までの必要年数（博士課程後期入学後）：専門分野別（%）

	文系	理系	医療系	学際系	全体
3年	22.7	63.5	41.2	45.4	46.2
4-5年	55.4	34.6	57.4	50.3	46.3
6年以上	22.0	1.9	1.4	4.3	7.5

表3-4-2 博士号の取得までの必要年数（博士課程後期入学後）：学年別（%）

	1年次	2年次	3年以上	全体
3年	56.9	48.5	35.2	46.2
4-5年	36.4	45.3	55.4	46.3
6年以上	6.7	6.1	9.4	7.5

また、この必要年数に対する回答を学年別にみると（表3-4-2）、学年が上がるにつれて必要年数が長くなるという傾向がみられた（「3年」との回答は1年次から順に56.9%、48.5%、35.2%）。博士論文に取り組む過程において、次第にその完成に困難を感じるようになる者が多くなるためであると考えられる。

第2節 課程博士の取得見込み

また、合わせて、標準修業年限にかかわらず、博士課程後期在学中に学位の取得が可能と思

うかどうかを尋ねた (Q17)。「十分に可能である」、「努力すれば可能である」、「難しい」の3つの選択肢のうち、25.0%が「十分に可能である」、60.9%が「努力すれば可能である」と回答した。

専攻分野別にみると (表3-4-3)、分野によってかなりの相違がみられた。文系では「十分可能」とする者が9.9%しかいないのに対し、理系では29.1%、医療系では37.8%が「十分可能」と回答している。逆に、「難しい」としたのは、文系で30.1%に上ったのに対し、理系では8.9%、医療系では4.4%しかいなかった。

また、学年別にみると (表3-4-4)、1年次では65.9%が「努力すれば可能」と回答している。しかし、学年が進むにつれてこのようないわば曖昧な回答が次第に減少し、「十分可能」と「難しい」に二極化する傾向がみられる。自らの研究の進捗状況に照らして、より現実感のある回答をするようになるためであると考えられる。

表3-4-3 博士課程後期在学中の課程博士取得の見込み：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
十分可能	9.9	29.1	37.8	16.0	25.0
努力すれば可能	59.9	62.0	57.8	67.9	60.9
困難	30.1	8.9	4.4	16.0	14.1

表3-4-4 博士課程後期在学中の課程博士取得の見込み：学年別 (%)

	1年次	2年次	3年次以上	全体
十分可能	21.2	22.6	30.2	25.0
努力すれば可能	65.9	64.8	53.1	60.9
困難	12.9	12.6	16.7	14.1

さらに、周囲の博士課程学生がどの程度博士号の取得を目標としているのかを、「ほとんど全員が博士号取得を目指している」、「取得を目指している者がいる」、「取得を目指している者は少ない」という3つの選択肢に分けて尋ねた (Q18)。全体としては60.8%が「ほぼ全員」と回答し、「目指す者がいる」は27.7%、「目指す者は少ない」は11.5%にとどまった。

だが、専門分野別にみると (表3-4-5)、大きな格差がみられた。「ほぼ全員」との回答は医療系で80.6%に上り、学際系と理系でも64.0%と63.3%であったのに対し、文系では39.8%にとどまり、Q16、Q17と同様に、分野による学位の取得可能性の違いを浮き彫りにする結果となった。なお、学年別にみると、「ほぼ全員」が「1年次」、「2年次」に比べ、「3年次以上」でやや高い数値があらわれたが、それほど顕著な格差はみられなかった。

表3-4-5 周囲の学生の課程博士取得目標度：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
ほとんど全員が博士号取得を目指している	39.8	63.3	80.6	64.0	60.8
取得を目指している者がいる	44.5	24.3	13.6	28.0	27.7
取得を目指している者は少ない	15.7	12.3	5.8	8.1	11.5

第3節 課程博士取得の前提条件

課程博士取得の前提となる条件について、どの程度理解しているかを尋ねた（Q24）。選択肢としては「よく知っている」、「おおよそ知っている」、「あまり詳しく知らない」という3つに分けた。全体としては、「おおよそ知っている」が59.0%で最も多く、「よく知っている」が20.8%、「あまり詳しく知らない」が20.2%にとどまった。

専門分野別にみると（表3-4-6）、「よく知っている」が低かったのは医療系であり（14.6%）、医療系では逆に「あまり詳しく知らない」が高かった（31.5%）。その他の3分野には大きな違いは見られなかった。医療系では他分野に比して学位取得可能性が高く、そのためその前提条件についてもそれほど神経質にならずに済むという状況があるものと考えられる。また、学年別にみると（表3-4-7）、「よく知っている」が学年を追うにつれて増加する（18.5%→20.9%→22.5%）ものの、増加の程度はさほど大きなものではなく、3年次以上でも「あまり詳しく知らない」者が17.4%いることが目に付く。

表3-4-6 課程博士取得の前提条件に対する理解：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
よく知っている	24.6	21.2	14.6	23.9	20.8
おおよそ知っている	57.2	62.9	53.9	58.9	59.0
あまり詳しく知らない	18.2	16.0	31.5	17.2	20.2

表3-4-7 課程博士取得の前提条件に対する理解：学年別 (%)

	D1	D2	D3以上	全体
よく知っている	18.5	20.9	22.5	20.8
おおよそ知っている	59.1	58.7	60.2	59.0
あまり詳しく知らない	22.3	20.4	17.4	20.2

続いて、それら博士号取得の前提条件を満たすことをどれほど難しいと捉えているのかについて尋ねた（Q25）。「難しい」、「やや難しい」、「比較的容易である」の3つの選択肢を用意した。最も回答が多かったのは「やや難しい」で58.8%であり、「難しい」、「比較的容易である」はそれぞれ23.8%、17.4%であった。

専門分野別にみると（表3-4-8）、医療系で「難しい」が低く（14.5%）、「比較的容易である」が高かった（23.7%）。それ以外の3分野では顕著な違いはみられないが、理系でやや「難しい」が低く（25.2%）、「比較的容易である」が高かった（16.2%）。「難しい」と回答した者が多かったのは、学際系（29.4%）、文系（27.8%）、理系、医療系の順である。

また、学年別にみると（表3-4-9）、学年を追うにつれて、「難しい」とする者の比率が減少し（27.2%→23.1%→20.8%）、逆に「比較的容易」が増加する（15.1%→17.9%→19.3%）という傾向がみられた。「3年次以上」になると、すでに学位の前提条件を満たしている者も少

なくなく、あるいはそうでない場合でも条件を満たす見通しを具体的に持っている者が多くなるものと考えられる。

表3-4-8 課程博士取得の前提条件を満たすことの困難さ：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
難しい	27.8	25.2	14.5	29.4	23.8
やや難しい	56.7	58.6	61.8	58.8	58.8
比較的容易である	15.5	16.2	23.7	11.9	17.4

表3-4-9 課程博士取得の前提条件を満たすことの困難さ：学年別 (%)

	D1	D2	D3以上	全体
難しい	27.2	23.1	20.8	23.8
やや難しい	57.7	59.0	59.9	58.8
比較的容易である	15.1	17.9	19.3	17.4

第4節 課程博士取得の阻害要因

また、標準修業年限内で課程博士の取得が困難であるとすれば、どのような条件がどの程度影響しているのかについて尋ねた (Q19)。各項目について、「非常に重要」、「少し重要」、「どちらともいえない」、「それほど重要でない」、「全く重要でない」という5つの選択肢から選んでもらった。以下の表に示すのはいずれも、「非常に重要」と「少し重要」の合計の割合である。全体としてみると、「論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと」(89.4%, 1位)、「論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること」(58.7%, 3位)、「学位論文が長いいため執筆に時間がかかること」(50.9%, 4位)といった学位論文およびその前提条件に関する負担が大きいことを理由として挙げる者が多いが、同時に、「自分自身の力量が不十分であること」(68.6%, 2位)、「自分自身のテーマ設定が曖昧なこと」(48.5%, 5位)、「博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと」(45.1%, 6位)といった自分自身の能力や研究への取り組み方に原因を求める意見も少なからずみられた。

専門分野別にみても (表3-4-10)、「論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること」については医療系で低い。「博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと」は文系および学際系で高く、この点は上の第2節でみた課程博士の取得見込みと関連しているものと思われる。また、文系では、「学位論文が長いいため執筆に時間がかかること」、「学位論文の要求水準が高すぎること」、および「博士号の水準が曖昧なこと」の項目が全分野で最も高かった。こういった点からも学位取得に関わる課題がとりわけこの分野に強くあらわれていることが窺われる。また、文系では「アルバイトをしなければならないこと」も高く、この分野では金銭的、時間的な問題も深く関わっている。逆に、この項目は理系系では低い、これは理系分野では研究室単

位の研究活動に絡んで、アルバイトが制限されることが多いこと、また文系等に比して学会発表に際しての手当てが支給されることが多いことなどが関係しているものと考えられる。

また、学年別にみても（表3-4-11）、全般的にそれほど顕著な回答傾向は見出せないが、「博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと」と「アルバイトをしなければならないこと」が、「3年次以上」で高い点が目に付く。また、「企業等で本業の仕事を抱えていること」と「家族を抱えていること」も「3年次以上」で若干ではあるが、高い結果となっている。

表3-4-10 課程博士取得の阻害要因：専門分野別 (%)

順位		文系	理系	医療系	学際系	全体
1	論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと	86.4	90.5	90.2	89.9	89.4
2	自分自身の力量が不十分であること	69.3	69.1	65.8	70.3	68.6
3	論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること	61.0	60.2	51.4	64.6	58.7
4	学位論文が長いこと執筆に時間がかかること	60.5	45.5	50.5	49.7	50.9
5	自分自身のテーマ設定が曖昧なこと	55.5	44.3	48.1	50.0	48.5
6	博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと	40.9	47.3	47.2	39.9	45.1
7	学部時代の基礎的学習が不十分であること	44.5	45.9	40.3	42.4	44.2
8	学位論文の要求水準が高すぎること	49.8	36.1	40.9	41.8	41.2
9	修士論文のテーマと一貫していないこと	37.0	40.0	32.0	44.1	37.8
10	博士号の水準が曖昧なこと	43.8	30.6	32.3	39.2	35.1
11	アルバイトをしなければならないこと	44.4	25.0	41.9	30.5	34.5
12	企業等で本業の仕事を抱えていること	21.2	23.9	27.3	34.4	24.6
13	家族を抱えていること	20.7	19.2	25.8	21.1	21.1

表3-4-11 課程博士取得の阻害要因：学年別 (%)

順位		D1	D2	D3以上	全体
1	論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと	89.2	90.1	88.8	89.4
2	自分自身の力量が不十分であること	69.4	68.6	68.1	68.6
3	論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること	59.6	59.3	57.1	58.7
4	学位論文が長いこと執筆に時間がかかること	49.0	51.0	51.9	50.9
5	自分自身のテーマ設定が曖昧なこと	48.8	51.1	46.1	48.5
6	博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと	42.8	43.6	48.9	45.1
7	学部時代の基礎的学習が不十分であること	46.7	44.5	40.2	44.2
8	学位論文の要求水準が高すぎること	40.3	42.2	41.3	41.2
9	修士論文のテーマと一貫していないこと	34.3	41.5	38.1	37.8
10	博士号の水準が曖昧なこと	31.6	35.6	37.2	35.1
11	アルバイトをしなければならないこと	32.6	32.4	38.0	34.5
12	企業等で本業の仕事を抱えていること	23.3	23.3	26.4	24.6
13	家族を抱えていること	19.5	19.7	23.1	21.1

第5章 博士論文に関する研究

第1節 テーマの決定とその時期・方法

博士論文に関する研究について、まず博士論文の研究テーマの決定の時期やその方法について尋ねた(Q20-1)。博士論文のテーマの決定については、「決定している」と回答した者が全体で84.3%にのぼった(表3-5-1)。この比率は当然、学年の進行とともに高まってゆき、「1年次」で75.1%、「2年次」で84.1%、「3年次以上」で92.8%であった。4分の3の学生が1年次の時点で論文のテーマを決定して研究に取り組んでいる。また、専門分野別にみると、理系と学際系で決定している者が多く(87.2%, 87.1%)、逆に文系では決定している者がやや少なかった(79.8%)。

表3-5-1 博士論文のテーマが決定している者の割合(%)

全 体		84.3
専門分野別	文系	79.8
	理系	87.2
	医療系	83.8
	学際系	87.1
学年別	1年次	75.1
	2年次	84.1
	3年次以上	92.8

続いて、いつ頃からそれらの研究テーマに取り組み始めたのかについて尋ねた(Q20-3)。選択肢として「学部時代の卒業論文」、「博士課程前期入学後」、「博士課程後期入学後」、「就職後」の4つを用意した。全体としては、「博士課程後期入学後」が42.0%で最も高く、次いで「博士課程前期入学後」が39.0%で高かった(表3-5-2)。上でみた研究テーマの決定に関する設問(Q20-1)への回答では、4分の3の学生が1年次の時点で研究テーマを決定していたが、この設問では博士課程入学後にテーマを決定している者の比率も同時に高いことが分かった。この点について、学年別に研究開始時期を分析してみると、学年を追うにしたがって研究開始時期が遅くなってゆくことが分かる。「学部時代の卒業論文」と回答した者は1年次、2年次、3年次以上の順に19.7%、15.4%、10.6%と減少してゆく。これに対して、「博士課程後期入学後」と回答した者は、同じく30.5%、41.7%、51.2%と次第に増加してゆくのである。すなわち、学年を追って研究を進めてゆくにしたがって、テーマが深化ないしは変化してゆく過程で、そのテーマにいつ頃から取り組み始めたかという認識も変化してゆくのだと考えられ

る。

また、専攻分野別にみると、文系と学際系は類似の傾向を示しており、博士課程前期から現在の研究テーマに取り組んでいる者が最も多く、ともに4割を超えている（文系、学際系の順に46.4%および41.5%）。次いで、ともに博士課程後期に入ってから取り組んでいる者の比率が高く、3割台の後半である（38.2%および38.1%）。これに対して学部時代の卒業論文から取り組んでいる者はともに15%前後である（12.7%および17.0%）。これら2分野に対して、理系では学部時代の卒業論文からすでに現在の研究テーマに取り組んでいる者が多い。医療系では、学部時代から取り組んでいる者の比率がとりわけ低く、その分、博士課程後期入学後に開始している者が多いという結果となった。もっとも、医療系のうち医学系と歯学系については博士課程の前期と後期の区分をしていないため、今回の調査結果からは、ほとんどの者が「大学院」入学後に現在の研究テーマに取り組み始めたということは明らかとなったが、何年次頃から取り組み始めたのかについては明らかではない。

表3-5-2 博士論文に関する研究を開始した時期 (%)

		学部時代の卒業論文	博士課程前期入学後	博士課程後期入学後	就職後	計
全 体		14.9	39.0	42.0	4.1	100.0
学年別	1年次	19.7	44.9	30.5	4.9	100.0
	2年次	15.4	39.1	41.7	3.9	100.0
	3年次以上	10.6	34.7	51.2	3.5	100.0
専門分野別	文系	12.7	46.4	38.2	2.6	100.0
	理系	21.2	37.9	35.6	5.3	100.0
	医療系	4.0	30.9	61.4	3.6	100.0
	学際系	17.0	41.5	38.1	3.4	100.0

続いて、研究テーマをどのようにして選択したのかについて尋ねた（Q20-2）。選択肢として、「自分自身で選んだ」、「指導教員と相談して選んだ」、「指導教員が実際に選んだ」、「副指導教員や助手と相談して選んだ」、「先輩の院生と相談して選んだ」という5つの項目を用意した。回答を全体としてみると、「指導教員と相談して選んだ」が最も多く（58.0%）、次いで「自分自身で選んだ」が多かった（28.7%）。「指導教員が実際に選んだ」は10.3%と高くなく、また「副指導教員や助手と相談して選んだ」、「先輩の院生と相談して選んだ」はそれぞれ2.5%、0.5%であった。

表3-5-3 どのようにして研究テーマを選んだか：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
指導教員と相談して選んだ	43.7	67.1	56.5	57.4	58.0
自分自身で選んだ	53.9	21.3	13.2	33.3	28.7
指導教員が選んだ	1.8	8.7	24.2	6.4	10.3
副指導教員や助手と相談して選んだ	0.2	2.7	4.9	2.8	2.5
先輩の院生と相談して選んだ	0.5	0.2	1.2	0.0	0.5

これを専門分野別にみると（表 3-5-3）, 「自分自身で選んだ」と回答した者は文系で多く（53.9%）, 逆に「指導教員と相談して選んだ」は理系と学際系, 医療系が多かった（それぞれ 67.1%, 57.4%, 56.5%）。また, 医療系では「指導教員が選んだ」も高かった（24.2%）。また, 文系を除く 3 つの分野では, 「副指導教員や助手と相談して選んだ」と「先輩の院生と相談して選んだ」という回答も若干みられた。しかし, 文系ではこの回答はほとんどみられず, 文系では指導教員以外に研究テーマについて相談する相手とその機会が少ないことを窺わせた。

また学年別にみると（表 3-5-4）, 顕著な差はみられなかったが, 学年を追うにつれて, 「自分自身で選んだ」, および「指導教員が選んだ」とする者が若干増え, 逆に「指導教員と相談して選んだ」とする者がやや減少するという傾向がみられた。

表 3-5-4 どのようにして研究テーマを選んだか：学年別 (%)

	D1	D2	D3 以上	全体
指導教員と相談して選んだ	62.1	58.1	55.3	58.0
自分自身で選んだ	28.3	27.5	30.0	28.7
指導教員が選んだ	6.7	10.4	12.2	10.3
副指導教員や助手と相談して選んだ	2.4	3.0	2.3	2.5
先輩の院生と相談して選んだ	0.5	0.9	0.2	0.5

第 2 節 指導教員の研究との関連

上の Q20 と関連して, 各自の研究テーマと指導教員の研究との関連について尋ねた (Q21)。「自分の研究テーマは, 指導教員を中心とする共同研究の一部である」, 「自分の研究テーマは, 指導教員が得意とする研究領域の一部である」, 「自分の研究テーマは, 指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである」という 3 つの選択肢から 1 つを選択してもらった。

全体としては, 「指導教員が得意とする研究領域の一部である」(54.0%), 「指導教員を中心とする共同研究の一部である」(24.8%), 「指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである」(21.2%) という回答結果となった。

表 3-5-5 自分の研究テーマと指導教員の研究との関係：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
自分の研究テーマは, 指導教員が得意とする研究領域の一部である	57.3	54.1	50.9	51.6	54.0
自分の研究テーマは, 指導教員を中心とする共同研究の一部である	6.2	31.9	34.4	23.6	24.8
自分の研究テーマは, 指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである	36.4	14.0	14.8	24.8	21.2

もともと、この設問に対する回答は専門分野による違いが大きかった（表3-5-5）。「指導教員が得意とする研究領域の一部」あるいは「指導教員を中心とする共同研究の一部」は、医療系、理系、学際系で高かった（医療系で順に50.9%および34.4%。理系では54.1%および31.9%。学際系では51.6%および23.6%）。これに比して、文系では「指導教員が得意とする研究領域の一部」との回答は分野別にみて最も高かったものの（57.3%）、「指導教員を中心とする共同研究の一部」との回答は他分野に比して極端に低く（6.2%）、その分、「指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ」との回答が多かった（36.4%）。この設問については、専門分野による研究の進め方の特徴が顕著に出る結果となった。

また、学年別にみると（表3-5-6）、それほど顕著な違いは確認できなかったが、「3年次以上」になると「指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマ」と回答する比率が若干増加する（1年次18.8%、2年次19.9%に対し、23.8%）。そして、その分、「指導教員を中心とする共同研究の一部」および「指導教員が得意とする研究領域」との回答が若干減少している（前者は1年次25.9%、2年次25.3%に対し、3年次以上23.5%。後者は1年次55.3%、2年次54.8%に対し、3年次以上52.8%）。

表3-5-6 自分の研究テーマと指導教員の研究との関係：学年別 (%)

	D1	D2	D3以上	全体
自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域の一部である	55.3	54.8	52.8	54.0
自分の研究テーマは、指導教員を中心とする共同研究の一部である	25.9	25.3	23.5	24.8
自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである	18.8	19.9	23.8	21.2

第3節 指導教員による研究指導

指導教員による研究指導について、その満足度を尋ねた（Q22）。「とても十分である」、「少なめだが十分である」、「十分ではない」の3つからひとつを選択してもらった。全体では、「十分である」（44.8%）、「少なめだが十分である」（40.4%）という回答が得られた。「十分ではない」としたのは14.8%であり、全体的にみると多くの学生が指導教員による指導の密接度について不満を抱いていない様子が窺われた。

しかし、専門分野別にみると（表3-5-7）、学際系と文系では他分野に比して、「十分ではない」とする者の比率がやや高い（学際系で19.0%、文系で16.4%）。また、学年進行別にみると（表3-5-8）、学年が進むにつれて「十分ではない」とする者の比率が増え、逆に「十分である」とする者の比率が減少する（「十分ではない」は1年次12.4%、2年次14.6%に対して3年次以上では16.9%）。学際系と文系、および上級学生の間には他に比べて若干、指導教

員の研究指導に対する不満感が強いようである。

表3-5-7 指導教員の研究指導への満足度：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
とても十分である	38.6	48.5	47.3	37.4	44.8
少な目だが十分である	45.0	38.6	37.3	43.6	40.4
十分ではない	16.4	12.9	15.3	19.0	14.8

表3-5-8 指導教員の研究指導への満足度：学年別 (%)

	1年次	2年次	3年次以上	全体
とても十分である	48.4	42.3	43.6	44.8
少な目だが十分である	39.3	43.1	39.5	40.4
十分ではない	12.4	14.6	16.9	14.8

続いて、指導教員による研究指導の状況について、研究指導の頻度を尋ねた (Q23)。「週1回以上」、「週1回程度」、「月に1,2回程度」、「年に数回程度」、「ほとんどない」の5つからひとつを選択してもらった。全体では、「月に1,2回程度」が最も多く (34.1%)、続いて「週1回程度」 (24.4%)、「週1回以上」 (21.1%)、「年に数回程度」 (14.6%) であった。ここでも専門分野による違いは大きく (表3-5-9)、医療系と理系で指導頻度が高いのに対して、文系と学際系では指導頻度が低いという結果が出た (「週1回以上」と「週1回程度」の合計が医療系 56.9%、理系 51.1%に対し、学際系 36.4%、文系 29.5%)。

表3-5-9 博士論文についての指導教員との相談頻度：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
週1回以上	10.2	24.5	29.2	16.0	21.1
週1回程度	19.3	26.5	27.7	20.4	24.4
月に1,2回程度	37.0	35.1	28.2	37.0	34.1
年に数回程度	25.0	9.6	9.3	22.2	14.6
ほとんどない	8.6	4.2	5.7	4.3	5.8

表3-5-10 博士論文についての指導教員との相談頻度：学年別 (%)

	1年次	2年次	3年次以上	全体
週1回以上	21.2	19.9	21.7	21.1
週1回程度	26.1	25.7	21.3	24.4
月に1,2回程度	35.5	34.5	33.1	34.1
年に数回程度	11.9	14.6	17.4	14.6
ほとんどない	5.3	5.3	6.5	5.8

また、学年別にみると (表3-5-10)、学年を追うにつれて、徐々に指導頻度が下がる傾向がみられる (「週1回以上」と「週1回程度」の合計は1年次で 47.3%、2年次 45.6%、3年次以上 43.0%)。

以上の結果は、第2節でみたように、文系と学際系、とりわけ文系では指導教員から独立し

て研究を行う場合が多く、また学年が進むにつれて指導頻度が下がってゆくのは学生が次第に指導教員から独立して研究を進めるようになる傾向があるからだと考えられる。しかし、Q22で示したように、文系と学際系では研究指導に対する不足感を持つ学生が相対的に多く、また上級学生にも同様の傾向がみられる。学際系と文系の、特に上級学生に対しては研究指導をより密接に行う必要性が示唆されている。今後、指導頻度と満足度の関係について、さらに考察を進めてゆきたい。

第6章 博士課程入学以前の教育・学習と自己能力の評価

第1節 博士課程入学以前の教育・学習の有効性

また、高校以降から博士課程前期に至る諸活動について、博士課程後期での研究活動に役に立っているかどうかを11項目に分けて尋ねた(Q15)。全体としては、最も役に立つとされたのは「修士論文のための研究」であり(89.6%。ただし、「とても役に立っている」と「少し役に立っている」の合計。以下同じ。)、次いで「学部時代の専門教育」であった(82.2%)。また、これに続いたのは「修士時代の授業」(72.1%)および「学部時代の卒業研究」(69.5%)であり、博士課程後期における研究活動に直接結びつきやすい性格を持つ活動が主として役に立つと考えられていることが分かる。「大学院への受験勉強」(54.7%)および「大学への受験勉強」(45.4%)はともにそれほど高くなく、「高校までの学習」と「学部時代の教養教育・一般教育」では、前者が59.8%、後者が59.6%とほぼ同程度であった。英語の学習については「高校までの英語の学習」が63.0%に対して「大学時代の英語の学習」は47.7%と高校までの学習の方が現在の研究に役に立っていると回答した者が多かった。役に立つとの回答が最も低かったのは「大学時代の課外活動」で34.7%であった。

表3-6-1 博士課程入学以前の教育・学習の有効性：専門分野別
 (「とても役に立っている」と「少し役に立っている」の合計の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
学部時代の教養教育・一般教育	61.2	57.5	59.5	66.3	59.6
学部時代の専門教育	80.5	83.1	83.0	80.2	82.2
学部時代の卒業研究	66.2	78.3	55.0	66.0	69.5
修士時代の授業	88.4	69.5	51.5	73.0	72.1
修士論文のための研究	95.3	94.0	66.4	93.4	89.6
大学時代の課外活動	35.6	33.7	35.7	35.4	34.7
大学時代の英語の学習	50.0	46.1	47.2	51.9	47.7
高校までの英語の学習	59.4	62.9	68.5	61.7	63.0
高校までの学習	52.2	67.1	54.2	62.3	59.8
大学への受験勉強	44.6	46.7	43.4	47.2	45.4
大学院への受験勉強	62.4	58.1	37.8	57.4	54.7

専門分野別に大きな違いがみられたのは(表3-6-1)、「学部時代の卒業研究」であり、理系で78.3%の者が「役に立つ」と回答したのに対し、文系では66.2%、学際系では66.0%にとどまり、医療系では55.0%と特に低い結果となった。また、「修士時代の授業」については文系で88.4%の者が「役に立つ」としたのに対し、学際系は73.0%、理系は69.5%にとどまり、

さらに医療系は51.5%ととりわけ低かった。もっとも、医療系には博士課程前期（あるいは修士課程）を持たない専門分野を含んでいるため、修士時代の学習に関する回答（上記以外に「修士論文のための研究」）は肯定的回答が低い結果となっている。また、「高校までの学習」では理系67.1%、学際系62.3%、医療系54.2%、文系52.2%とやや格差がみられた。文系において修士課程での授業が役に立つとの回答が多かったのに対し、理系では高校での学習との連続性が他分野に比べて相対的に高いことが窺われた。また、それほど顕著な違いではないが、「学部時代の教養教育・一般教育」については、学際系で66.3%、文系で61.2%とやや高い数値が示されたが、理系では57.5%、医療系では59.5%とやや低かった。

この設問に対する回答結果を学年別にみると（表3-6-2）、いずれの項目についても顕著な相違は見出されなかった。しかし、若干ではあるが、1年次から3年次にかけて徐々に「役に立つ」との回答が増えている項目と、逆に減っている項目を挙げることができる。「役に立つ」との回答が増えている項目としては、「学部時代の教養教育・一般教育」（1年次、2年次、3年次以上の順に、57.5%、58.8%、61.3%）、「学部時代の専門教育」（同じく80.2%、82.9%、83.3%）、「大学への受験勉強」（43.4%、45.7%、47.0%）が挙げられ、逆に減っている項目としては、「学部時代の卒業研究」（72.8%、71.1%、65.7%）、「修士論文のための研究」（92.7%、91.2%、85.8%）、「大学院への受験勉強」（57.7%、55.9%、51.6%）が挙げられる。

表3-6-2 博士課程入学以前の教育・学習の有効性：学年別
（「とても役に立っている」と「少し役に立っている」の合計の%）

	D1	D2	D3以上	全体
学部時代の教養教育・一般教育	57.5	58.8	61.3	59.6
学部時代の専門教育	80.2	82.9	83.3	82.2
学部時代の卒業研究	72.8	71.1	65.7	69.5
修士時代の授業	74.2	70.8	71.1	72.1
修士論文のための研究	92.7	91.3	85.8	89.6
大学時代の課外活動	38.3	30.0	34.9	34.7
大学時代の英語の学習	50.8	44.2	47.7	47.7
高校までの英語の学習	63.7	60.9	63.8	63.0
高校までの学習	59.5	57.9	61.5	59.8
大学への受験勉強	43.4	45.7	47.0	45.4
大学院への受験勉強	57.7	55.8	51.6	54.7

第2節 自己能力の評価

自己の能力の現状をどのように評価するかについて尋ねた（Q26）。英語に関する能力、日本語の作文能力、専門的、教養的知識、思考力、全般的な資質といった項目を設定した。全体として、能力が「十分」との回答が最も多かったのは、「外国語（たとえば英語）を読むこと」（33.5%）であり、「作文能力（日本語）」（31.3%）、「思考力」（30.7%）が続いた。逆に、「十分」とする

回答が少なかったのは、「外国語（例えば英語）を話すこと」（9.8%）と「外国語（例えば英語）を書くこと」（11.0%）であった。

専門分野別にみると（表3-6-3）、ほぼすべての項目にわたって、文系の学生は自己評価が高く、逆に医療系の学生は自己評価が低いという結果となった。理系と学際系は多くの項目でその中間に位置している。また、学年別にみると、すべての項目にわたって、学年進行に従って、わずかずつだが「十分」と自己評価する回答が増加してゆくという傾向を確認することができた。

表3-6-3 自己能力の評価：専門分野別 (「十分」と回答した者の%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
外国語（例えば英語）を読むこと	36.8	34.9	27.4	31.9	33.5
外国語（例えば英語）を書くこと	12.7	11.7	7.7	11.0	11.0
外国語（例えば英語）を話すこと	14.6	9.1	5.1	9.9	9.8
作文能力（日本語）	40.8	27.9	24.4	38.9	31.3
専門分野の知識	23.1	22.0	13.2	19.6	20.2
教養的知識	24.9	23.7	16.0	21.1	22.1
思考力	33.8	33.9	21.3	29.2	30.7
博士課程後期学生としての全体的資質	24.0	20.4	16.8	13.9	20.2

第7章 アシスタントシップと物的・資金的条件

第1節 ティーチング・アシスタント，リサーチ・アシスタント，研究員

ティーチング・アシスタント（T.A.）

ティーチング・アシスタント（T.A.）の経験について、「現在担当している」、「担当したことがある」、「担当したことはない」に分けて尋ねた（Q27）。T.A.を「現在担当している」のは34.1%であり、「担当したことがある」の33.1%と合わせて67.2%の者がT.A.の経験を持っている。専門分野別にみると（表3-7-1），T.A.経験を持っているのは，理系で多く（76.8%），医療系で少なかった（55.2%）。学年別では（表3-7-2），2年次の学生に担当経験が多く，3年次以上の学生に少なかった。これは，3年次以上に医療系の学生が多く含まれていることも関係していると考えられるが，「担当したことがある」が2年次で33.8%，3年次以上で34.1%と後者の方が若干高いのに対し，「現在担当している」が2年次で36.6%，3年次以上で31.6%と格差がみられることによる。つまり，3年次以上の学生は学位論文等の個人の研究に専念するため，あまりT.A.を担当することがないということも一因となっていると考えられる。

表3-7-1 T.A.の経験：専門分野別 (%)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
現在担当している	33.4	37.2	29.8	29.6	34.1
担当したことがある	28.3	39.6	25.4	35.8	33.1
担当したことはない	38.3	23.2	44.8	34.6	32.8

表3-7-2 T.A.の経験：学年別 (%)

	D1	D2	D3以上	全体
現在担当している	35.2	36.6	31.6	34.1
担当したことがある	31.5	33.8	34.1	33.1
担当したことはない	33.4	29.6	34.3	32.8

また，合わせて，T.A.の経験がどのように役に立ったのかについても尋ねた（Q28）。「自分の研究活動の発展に役に立った」、「基礎的な知識を整理するのに役に立った」、「大学教育の方法を学ぶのに役に立った」、「たいして役に立たなかった」という4項目からひとつを選択してもらった。全体としては「基礎的な知識の整理」が37.7%で最も高く，次いで「大学教育の方法を学ぶ」（34.5%）であった。「役に立たなかった」との回答も21.2%あり，「自分の研究活動の発展に役に立った」と答えたのはわずか6.6%であった。

専門分野別にみると（表3-7-3）、「役に立たなかった」との意見が多かったのは医療系であり（28.1%）、次いで学際系の23.5%であった。文系では「大学教育の方法を学ぶのに役に立った」と回答した者が最も多く43.7%おり、それに対して理系では「基礎的な知識の整理に役に立った」とした者が43.9%と最も多かった。文系、学際系では「自分の研究活動の発展に役に立った」とした者がそれぞれ10.9%、9.2%と他分野に比べて高かった。

学年別にみると（表3-7-4）、「役に立たない」とする者が学年を追うにつれて増える傾向がみられた（17.1%→21.1%→24.6%）。学年を追うにつれて、より特化した研究テーマに没頭する機会と必要性が増え、基礎的な、あるいは幅広い知識を扱う傾向が強い教育活動を有用とみなさなくなるためであろう。このことは「大学教育の方法を学ぶのに役に立った」と回答した者が3年次以上で36.6%いるのに対し（1年次は35.0%、2年次は32.7%）、「基礎的な知識を整理するのに役に立った」とした者が1年次の41.6%、2年次の40.4%に対して3年次では31.9%に減少することにもあらわれているとみることができるだろう。

表3-7-3 T.A.経験がどのように役立ったか：専門分野別 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
自分の研究活動の発展に役に立った	10.9	4.2	6.7	9.2	6.6
基礎的な知識を整理するのに役に立った	27.8	43.9	35.8	31.6	37.7
大学教育の方法を学ぶのに役に立った	43.7	32.0	29.4	35.7	34.5
たいして役に立たなかった	17.6	19.9	28.1	23.5	21.2

表3-7-4 T.A.経験がどのように役立ったか：学年別 (％)

	D1	D2	D3以上	全体
自分の研究活動の発展に役に立った	6.3	5.9	6.8	6.6
基礎的な知識を整理するのに役に立った	41.6	40.4	31.9	37.7
大学教育の方法を学ぶのに役に立った	35.0	32.7	36.6	34.5
たいして役に立たなかった	17.1	21.1	24.6	21.2

リサーチ・アシスタント (R.A.)

リサーチ・アシスタント (R.A.) についても、T.A.と同様に、「現在担当している」、「担当したことがある」、「担当したことはない」という3項目に分けて尋ねた (Q29)。R.A.を経験したことのある者は全体の29.7%であり、T.A.経験者の67.2%に比べるとかなり少なかった。

表3-7-5 R.A.の経験：専門分野別 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
現在担当している	8.0	27.0	18.1	12.7	18.9
担当したことがある	12.3	10.7	8.2	14.6	10.8
担当したことはない	79.7	62.3	73.7	72.8	70.3

表 3-7-6 R.A.の経験：学年別 (％)

	D1	D2	D3 以上	全体
現在担当している	18.9	21.6	17.2	18.9
担当したことがある	6.1	11.1	14.8	10.8
担当したことはない	75.0	67.3	68.0	70.3

専門分野別にみると（表 3-7-5），経験者が多かったのが理系で，37.7%の者が経験している。逆に少なかったのは文系で，20.3%の者が経験しているに過ぎない。また，学年別にみると（表 3-7-6），1年次の経験者 25.0%から2年次には 32.7%へと増加するが，3年次以上では 32.0%と若干減少している。ここでも，T.A.について述べたこと（Q27）と同じく，3年次以上のカテゴリでは「現在担当している」者が2年次の 21.6%に比して，17.2%と若干少ないことが関係している。R.A.についても，3年次以上は自分の研究に専念するために担当しない者が多いものと考えられる。

続いて，T.A.の場合と同様に，R.A.の経験がどのように役立ったのかについて，「自分の研究活動の発展に役に立った」，「基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った」，「研究の方法を学ぶのに役に立った」，「たいして役に立たなかった」という4項目からひとつを選択してもらった（Q30）。「役に立たなかった」とした者は 18.0%であり，T.A.と比べて若干低い程度である。役に立ったとする意見のうち，最も多かったのは「自分の研究活動の発展に役に立った」であり，39.9%に上った。続いて，「基礎的な研究スキルを学ぶ」，「研究の方法を学ぶ」がそれぞれ 22.9%，19.2%であった。

表 3-7-7 R.A.経験がどのように役立ったか：専門分野別 (％)

	文系	理系	医療系	学際系	全体
自分の研究活動の発展に役に立った	38.6	41.0	35.4	48.8	39.9
基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った	22.8	23.0	24.3	17.1	22.9
研究の方法を学ぶのに役に立った	22.0	18.5	19.4	17.1	19.2
たいして役に立たなかった	16.5	17.5	20.8	17.1	18.0

表 3-7-8 R.A.経験がどのように役立ったか：学年別 (％)

	D1	D2	D3 以上	全体
自分の研究活動の発展に役に立った	38.1	39.1	40.1	39.9
基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った	29.8	20.0	20.7	22.9
研究の方法を学ぶのに役に立った	17.7	19.1	21.1	19.2
たいして役に立たなかった	14.4	21.8	18.0	18.0

専門分野別にみると（表 3-7-7），「役に立たなかった」と答えたのが最も多かったのは医療系であるが（20.8%），分野間の相違はそれほど大きなものではない。学際系では「自分の研究活動の発展に役に立った」とする者が多かった（48.8%）が，医療系ではむしろ「基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った」とする者が相対的に多かった（24.3%）。R.A.がどのように役に立つかという点にも分野間である程度の相違があるようである。

学年別にみると（表 3-7-8）, 「役に立たなかった」とする意見は 1 年次では少ないが, 2 年次, 3 年次以上では多くなる（順に 21.8%, 18.0%）。1 年次では他の学年に比べて「基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った」とする者が多いが（29.8%）, 2 年次以上ではこの比率は減少する（2 年次 20.0%, 3 年次以上 20.7%）。他の 2 つの項目（「自分の研究活動の発展」, 「研究の方法を学ぶ」）はむしろ学年を追うに従って若干だが増加する。このような結果から, 学生たちは次第に R.A. を「基礎的な研究スキルを学ぶ」ための手段とはみなさなくなり, そのことが全体としての R.A. の有用性の低下に結びついているということがいえる。

日本学術振興会の特別研究員

日本学術振興会の特別研究員（DC）を受けているかどうかを尋ねた（Q33）。回答者のうち, DC を受けている者は 4.4%にとどまった。専門分野別では理系でやや多く, 学年別では 3 年次以上で DC を受けている者が多かった（表 3-7-9）。

表 3-7-9 日本学術振興会特別研究員を受けている者 (%)

全体		4.4
専門分野別	文系	1.5
	理系	7.4
	医療系	2.9
	学際系	0.6
学年別	1 年次	3.5
	2 年次	3.9
	3 年次	5.6

あわせて, 日本学術振興会の特別研究員（DC および PD）の採用の可能性についてどのように考えるかを尋ねた（Q34）。「努力すれば採用される」と答えたのは, DC については 37.6%, PD については 40.3%であった（表 3-7-10）。専門分野別ではともに理系で「努力すれば採用される」とした者が多かった（42.1%, および 45.5%）。学年別にみると, とともに学年が上がるにつれて, 「努力すれば採用される」と回答する者が減少する傾向がみられた。

表 3-7-10 日本学術振興会特別研究員への採用可能性
（「努力すれば採用される」と答えた者の%）

		DC	PD
全体		37.6	40.3
専門分野別	文系	33.5	35.7
	理系	42.1	45.5
	医療系	33.5	35.1
	学際系	35.4	39.7
学年別	1 年次	43.7	42.6
	2 年次	36.3	41.6
	3 年次	33.1	37.3

第2節 物的条件

大学や研究室における研究設備について尋ねた（Q32）。自分専用の机を持っていると答えた者は80.0%，パソコンを持っていると答えた者は58.4%であった。共用の物については，机が17.1%，パソコンが37.1%であった。机に比べるとパソコンについては個人専用の物を確保している者は少ないが，共用の物を含めると，机，パソコンともにほとんどの者が利用できる環境にはある。

学年別にみると違いはほとんどないが，専門分野別にみると研究設備の格差は大きい（表3-7-11）。机については理系で92.3%，医療系で85.9%の者が専用の物があるとしたのに対して文系では56.4%にとどまった。また，パソコン環境についてはさらに格差が大きく，理系の76.6%，医療系の65.5%に対して文系では25.0%にとどまった。文系でも共用の設備によって机もパソコンも利用は可能となっているようだが，分野による物的環境の違いが浮き彫りとなる結果となった。

表3-7-11 研究室の研究設備：専門分野別 (%)

		文系	理系	医療系	学際系	全体
机	自分専用のもがある	56.4	92.3	85.9	76.1	80.0
	共用のもがある	39.4	6.1	11.2	18.4	17.1
パソコン	自分専用のもがある	25.0	76.6	65.5	53.1	58.4
	共用のもがある	67.5	20.6	30.2	41.4	37.1

第3節 経済状況

1ヶ月当たりの平均収入・支出について尋ねた（Q36）。回答数は項目によってかなりのばらつきがみられた。記入のあった回答の平均値を表3-7-12にまとめておく。

表3-7-12 1ヶ月平均の収入・支出額 (単位：千円)

収入		支出	
親からの援助	76.1	授業料・納付金	69.2
アルバイト	132.2	修学費	21.1
定職	308.8	交通費・通信費	17.7
日本育英会の奨学金	117.2	食費	40.0
日本学術振興会の奨学金	171.4	住居・光熱費	59.1
民間団体からの奨学金	85.8	保健・衛生費	12.6
文部省奨学金/奨励金 (留学生)	134.5	娯楽・嗜好費	21.4
その他	85.5	その他日常費	24.4
合計	225.1	合計	187.6

収入に関しては、平均額が最も大きい項目は「定職」であるが、もっとも定職によって収入を得ている者は200名程度とそれほど多くはない。また、日本学術振興会の奨学金も平均額自体は大きいですが、受給している者は100名強に過ぎない。多くの回答者の収入源となっているのは、アルバイトと日本育英会の奨学金である。

支出に関しては、最も大きな負担となっているのは「授業料・納付金」である。次に、「住居・光熱費」、「食費」であった。

第8章 大学院教育の改善方策

大学院における研究生生活を充実したものとするために重要な事項について尋ねた(Q31)。「非常に重要」、「少し重要」、「どちらともいえない」、「それほど重要でない」、「全く重要でない」の5つから各項目につき、ひとつを選択してもらった。以下の表ではいずれも、「非常に重要」と「少し重要」とを合計した割合を示している。

全体としてみると、「論文を執筆する機会」(95.4%)、「指導教員と相談する機会」(93.9%)、「指導教員の研究指導の内容」(93.0%)、「コンピュータの利用」(91.8%)、「学会で発表する機会」(90.9%)といった項目が上位を占めた。

専門分野別にみると(表3-8-1)、それほど顕著な差は見出せないが、例えば、「指導教員と自分の研究テーマの関連性」については若干文系で低い結果となった。また、「十分な奨学金を得ること」については医療系で低かった。また、文系、学際系では「授業の内容」や「大学院でのカリキュラム」が比較的高いのに対して、理系、医療系では低い結果となった。また、学年別にみると(表3-8-2)、いずれの項目についてもそれほど顕著な相違は見られなかった。

表3-8-1 大学院での研究生生活を充実したものにするために必要な事項：専門分野別
(「非常に重要」と「少し重要」の合計の%)

順位		文系	理系	医療系	学際系	全体
1	論文を執筆する機会	95.8	96.3	93.0	96.3	95.4
2	指導教員と相談する機会	91.8	94.8	93.8	96.9	93.9
3	指導教員の研究指導の内容	91.0	93.8	92.5	96.9	93.0
4	コンピュータの利用	91.1	90.7	93.8	95.7	91.8
5	学会で発表する機会	88.7	94.2	85.9	95.1	90.9
6	図書館の充実度	95.6	83.9	88.7	90.1	88.5
7	学会参加への経済的支援	79.4	86.2	77.7	84.7	82.3
8	指導教員と自分の研究テーマの関連性	74.7	81.8	86.5	89.6	81.4
9	外国語修得の機会	77.0	84.1	80.8	84.0	81.4
10	専用机や居室スペースの拡充	81.5	79.8	79.6	80.4	80.3
11	他大学の院生や研究者との交流	79.7	78.6	75.3	85.3	78.6
12	十分な奨学金を得ること	82.2	78.5	57.7	71.8	74.5
13	授業の内容	82.1	61.0	50.7	70.6	65.1
14	海外奨学金や留学の機会	69.3	62.6	60.3	72.2	64.5
15	学内での研究会への参加	69.5	60.8	63.9	68.8	64.3
16	大学院のカリキュラム	76.8	60.5	53.7	71.0	64.1
17	教育助手(T.A.)の経験	39.5	34.2	27.7	36.2	34.3
18	研究助手(R.A.)の経験	36.3	32.8	31.1	36.6	33.7

表 3-8-2 大学院での研究生生活を充実したものにするために必要な事項：学年別
 (「非常に重要」と「少し重要」の合計の%)

順位		D1	D2	D3 以上	全体
1	論文を執筆する機会	96.5	95.1	95.0	95.4
2	指導教員と相談する機会	95.1	93.8	92.8	93.9
3	指導教員の研究指導の内容	93.9	93.1	91.8	93.0
4	コンピュータの利用	92.7	92.0	91.1	91.8
5	学会で発表する機会	93.3	90.8	89.1	90.9
6	図書館の充実度	88.1	89.0	88.5	88.5
7	学会参加への経済的支援	84.6	82.4	80.3	82.3
8	指導教員と自分の研究テーマの関連性	81.3	80.6	81.5	81.4
9	外国語修得の機会	85.4	80.3	79.4	81.4
10	専用机や居室スペースの拡充	80.9	77.8	81.8	80.3
11	他大学の院生や研究者との交流	80.6	79.0	77.2	78.6
12	十分な奨学金を得ること	76.9	73.2	74.0	74.5
13	授業の内容	65.8	61.8	66.6	65.1
14	海外奨学金や留学の機会	67.6	62.8	63.5	64.5
15	学内での研究会への参加	66.8	62.4	63.8	64.3
16	大学院のカリキュラム	64.0	61.2	65.5	64.1
17	教育助手(T.A.)の経験	35.1	34.0	33.5	34.3
18	研究助手(R.A.)の経験	36.4	31.1	32.4	33.7

資 料 編

1. 自由記述意見

大学院教育の質を向上させるために必要な改善方策

(研究科長調査・Q31)

1. 大学・大学院制度とその位置づけ

<p>・小規模の大学院は大学院間の連携・協力が必要。・研究志向、専門教育志向その中間というように課程を容易に分けることができるような制度。(私立・学際系)</p>
<p>教育で研究のバランスをとり、産学連携をとりながら、いかに高度職業人を輩出するかのサービスに徹すべし。他者(大学、研究科)の評価を受け、教育改善に役立てること。(私立・文系)</p>
<p>中小私学において大学院を向上させることは至難のわざである。学生は授業料負担に耐えられない。国立が大学院化したまた来春独立化した時どのようなようになるか不明。本研究科は高度専門職業人としての管理栄養士を養成したいが現行の修士制度とマッチせず、法科大学院の規模を要求されるとまた設立が困難である。管理栄養士養成大学が乱立する折、教員は自前で養成する必要があり種々問題が多い。(私立・医療系)</p>
<p>大学院教育の設置形態の一つに連合研究科というのがあるが、この形態による大学教育の重要性に対する認識が不足している。地方大学の高等教育にあっては、連合という形態による単独大学ではできない部分の補充と充実が重要である。(国立・理系)</p>
<p>非常勤講師の講義時間数、単位等をフレキシブルにして、多様かつ迅速な対応ができるようにすべきだろう。(国立・学際系)</p>
<p>・研究大学と教育大学を区別すること。・米国のように、ランキングを明確にすること。(私立・文系)</p>
<p>理系、あるいは技術系大学院の拡大充実は意味あることであったが、純文系の大学院の必要性は疑問がある。修了生への社会の需要は少なく、そのなかで修了生の安定した進路を確保することが、大切と思う。(私立・文系)</p>
<p>研究指導分野以外のところとの研究交流の機会を作る。他大学との交流。(国立・理系)</p>
<p>学部教育から運営を独立させる(特に事務レベルの)必要がある。(私立・医療系)</p>
<p>多様な学生に対応した弾力的な博士課程制度を構築することが必要(5年一貫教育や博士課程後期5年制等入り口と出口の柔軟化をはかる)。学生、教官の流初性を促進すること。(国立・学際系)</p>
<p>下記の問題意識を人文系■科学の全教員がもつこと。(国立・文系)</p>
<p>優れた研究者が優れた研究を行っていることを学生に示すこと。そのための環境改善が必要である。(国立・医療系)</p>
<p>各大学大学院間の自由な交流。(私立・医療系)</p>

<p>長びく不況や国公立大学院の定員増等により、本学大学院への進学希望者が減少した。大学院教育の質の向上以前の問題として一定の学力を有する院生の人数的確保が最優先である。(私立・文系)</p>
<p>充実した研究活動を行なっている若年、研究所研究員等の積極的登用。一定水準での学位授与による研究意欲の増進。(私立・文系)</p>
<p>大学院間単位互換制度の促進により、大学院間で相互補充と競走を通して質の向上をはかる。(私立・文系)</p>
<p>現在、本当に優れた学生は将来を考え、博士修了で社会に出てしまう。博士号取得者の社会的地位(給与を含めて)がより高まれば、優れた学生が残ようになる。博士取得者の就職先の多様化も必要である。(私立・医療系)</p>
<p>米国式のPh.D.と日本式の博士号の授与の仕方が違うため、工夫が必要である。たとえば、分野にもよるが、米国ではPh.D.論文を出版するのがほとんど最初の業績なのに対して、日本では博士論文の前に教本の論文を出すことが就職に必須であり、博士論文は一体何を目的とするのか、曖昧である。(私立・学際系)</p>
<p>各大学における教育・研究・運営・資金をめぐる統一的な計画と実施が不可欠と思われる。(私立・文系)</p>
<p>選抜方法を厳しくするにしくはないが、定員充足のため、安易に流れるところがなきにしもあらず。この点の改善が必要。(公立・文系)</p>
<p>就職の窓口を拓げること。(公立・学際系)</p>
<p>日本の社会が大学院の意義を認識し、大学院修了者(学位取得者)を尊重するようになることが根本である。(国立・医療系)</p>
<p>いわゆる「就職活動」で学生が研究・教育に専念できない。また、後期学生も就職不安が大きく、進学をためらう。(私立・理系)</p>
<p>社会(国内、国外共)との連携と研究・人事面での交流。(私立・文系)</p>
<p>社会のニーズの多様化に適した高度専門職業人の養成と研究者養成の目的をそれぞれ特化することによって、教育の質的効率性が高められる。(私立・文系)</p>
<p>大学院を重点化した大学は、学部学生の5%以上は外部の大学院で教育する制度にすべき。(学生の流動性を確保すること)。(国立・理系)</p>
<p>単位認定をより厳しく行い、現在以上に修士論文や博士論文の審査(含発表)を一段と厳格に行う。また、博士課程後期の院生数を一層増大する。(公立・理系)</p>
<p>大学院を修了したことにより、明らかな職業選択上のメリットが生じるような制度上の改革が必要である。(私立・学際系)</p>

系)
大学、大学院、等の教育に対する、社会の側の考えが、変化 する必要がある。(私立・文系)
①課程の重点的整備(多数の大学に分散しない)②課程の特 色の強化(特徴の明確な課程の整備)。(私立・医療系)

2. 教育のあり方・カリキュラム・授業

・英語による教育の導入・MOT (Management of Technology) 教育を行う。(国立・理系)
英語教育をもう少し充実させることが必要。(国立・理系)
修士レベル教育の充実、特に専門に必要な基礎力の充実。(国立・理系)
博士課程前期で基礎学力向上の教育を強化すること。(私立・理系)
自由な専攻学科目の設置。(私立・医療系)
学部と同様に、教育という観点をより強化する必要がある。 (国立・理系)
カリキュラムの整備。(公立・理系)
学部での基礎科目の充実とそれを受けた修士課程での教育 プログラムの確立。(公立・理系)
重点化に伴い大学院学生数が増加したが、従来のようなマン ツーマン方式に依存すれば全体の質は低下するばかりである。 教育・研究の理念に基づき、カリキュラムを整備し、「訓練」 を大学院教育の基本として教育をよりシステムティック に改善すべきである。(国立・学際系)
工学研究科(修士課程)にあつては、英語、数学等の基礎教 育を(特化■より)充実し、専門教育科目は時間の都合上より 減らさざるを得ない。また、就職活動の早期化と採用減に伴い、 研究実験期間が激減しているが、何か打開策 は無いものか苦慮している。(私立・理系)
専門医(専門職業人)養成との整合性を持たせる。(国立・ 医療系)
とくに前期課程の講義を充実させ中広い知識をつける。(私立・ 理系)
独自の発想の育成。(不明・学際系)
教員一方通行型の教育ではなく、SGD(スモールグループ ディスカッション)を主とした講義に切り変える。(私立・ 医療系)
新しい確立分野の科目等の設置が特に重要であると思われ る。(私立・文系)
1. 学生の基礎学力と自主性。2. 流行の研究により、基礎 教育が軽視され、結果として大学院生の教育が十分でなくな っている。(私立・理系)
研究の自由度とカリキュラムの整合性。(国立・医療系)
大学院学生が専門領域の知識を身につけることは当然のこ とであるが、広い視野をもつためにも、専門外と思われる領 域の基礎学力をつける必要性が求められる。そのための特論 科目の整備が重要であると考えている。(私立・医療系)

芸術学研究科の場合は、専門分野が多岐にわたり、理論研究 と創作実践の総合化も目標としている。また、多くの研究・ 創作が開発的性格も有している。従って、それにふさわしい カリキュラムを開発するとともに、指導者を自ら育成するこ とが求められる。(私立・文系)
1.博士前期課程の前半(4月～9月位)において、学部教育 の復習を行い、基礎学力をみっちりとしに付けさせること。 2.それぞれの専攻科目の全体についての概説を行い、早めに 興味のある研究テーマを選択させるか、与えるかすること。 (私立・文系)
教育カリキュラムの充実、指導者からの精神的独立。(私立・ 医療系)
専門職大学院としての法科大学院が設置されることにより、 既存の法学研究科の、少なくとも、博士課程の存在意義は乏 しくなる。大学院教育の質の向上は、法科大学院の枠組みの 中で検討すべきこととなろう。法科大学院のカリキュラムを 充実させることに尽きる。(私立・文系)
大学院教育の質の向上のため、従来通り研究指導に重点を置 くことと同時に、教育の内容(授業の内容)方法にも配慮す ることが必要である。(私立・理系)
1.教育方法・内容の改善として:1)共通授業(講義・演習) を新設する。(1)研究のデザイン(2)文献の読み方(3) データの取り扱い(4)科学論文の書き方(5)医の倫理(6) 英会話教室2.院生連絡会、研究発表会の新設:4月、7月、 10月、翌年1月に開会し、近況報告、情報交換、伝達、研 究論文の発表会、適当な時期に「学位論文に関するデザイン」 の説明会等を行う。3.学内ににおける院生の地位、諸業事の位 置を高める。(私立・医療系)
研究指導体制及びカリキュラムの抜本的改革。(私立・文系)
厳格な成績評価。(国立・理系)
我が国において大学院へ進学する学生諸君は、社会人入学を 除いて、企業や産業界については全く理解していない。従っ て、修士課程の学生にあつては長期休暇中に数週間、博士課 程の学生にあつては、1学期(半年)程度のインターシッ プ(他流試合)を行う必要がある。取り分け、後者については、 「必修化」しなければ、殊に「専門性」に特化した企業側から の評価を向上させることは不可能である。(私立・理系)
最近、大学院博士前期課程を中心に、大学院生の達成度評価 を明確にするための教育システムの見直しを行っている。 (国立・理系)
学外の大学、社会人、留学生など外から、かつ専門の異なる 分野からの進学者が増えつつあるため、大学院の基礎教育を 必要とする。その基礎教育は、院生のレベルにあわせて準備 されることが望ましい。現在行っている「アカデミック・リ テラシー」や「基礎論」がそれにあたる。(私立・学際系)
修士課程では、リカレントコースや社会人コースの設置、博 士(後期)課程では、高いレベルでの研究者養成と、多様化 したニーズにあわせて、かつ目的がはっきりしたカリキュ ラムをくむ必要がある。(公立・文系)
・前期課程は学部と一貫したカリキュラムをつくる。・後期 課程修了者は幅が狭く使いものにならない。創造性が足りない との評価に対して、副専門研修など異分野研修の必修化。 (国立・理系)

<p>本学医学研究科においては、とくに臨床部門でいわゆる高度職業人の養成を旨としている。したがって臨床研究を重視している。(私立・医療系)</p>
<p>小人数教育及び演習科目の導入。(国立・理系)</p>
<p>単位の認定は可能な限り、筆記試験、口頭試問、レポート等の評価が客観的にできる形式で行うこと。又、学位論文は研究成果の国際的流布を考慮して可能な限り、英文論文にすること。研究能力の向上のため、研究の進捗状況に関する学内発表と討論を定期的に行い、学会発表、論文投稿、受理についても評価すること。(私立・医療系)</p>
<p>多様な履歴と目標を持つ学生に対する為には、「フレキシブルなコース制」をもつ教育システムが必要であると考え。(国立・理系)</p>
<p>当該分野の最先端領域を体系的に教育する努力。シラバスの内容を授業評価に沿って点検するシステムの構築。(公立・理系)</p>
<p>少人数教育の演習を軸に、英文であれ、邦文であれ、書かせること(赤ペンをやる必要あり)。(公立・文系)</p>
<p>教育内容が教員個人に任せられているケースが多く、学部との接続や専攻内でのバランスを欠いている。JABEEに相当する様を見直しが求められるよう。(国立・理系)</p>
<p>カリキュラムを含む教育プログラムを常に見直し改善し、院生や社会のニーズに柔軟に対応できる体勢を模索しつづけること。(国立・文系)</p>
<p>海外インターンシップ、海外フィールドワークなど実践的教育機会の充実。(国立・学際系)</p>
<p>大学院教育の目的を明確にし、それに合わせたカリキュラム等を構築すべきである。(私立・文系)</p>
<p>就職状況を考慮すると1年の前期にもっと集中させた方がよい(講義を)学部での教育(専門)が不十分となってきているので、大学院でも専門教育(基本となるべき)を充実させた方がよい。(公立・理系)</p>
<p>社会人、外国人留学生など多様な学生に、きめこまかく対応することが必要であると思います。たとえば留学生に対する日本語教育は、専門教育優生の陰で忘れられています。(私立・文系)</p>
<p>国際的研究者交流、多くの活発な研究を展開する研究者集団、同じような環境の学生、外国人留学生等が同居する研究環境と、必要な基礎学力を習得できる多様な、授業科目の提供環境とスクーリングシステム。(国立・理系)</p>
<p>カリキュラムとしてはテーマを絞った、明確な目的をもったコースの設置。現在のように一教員が教養教育、学部教育、大学院教育の全てをカバーするような形式からもう少し大学院教育に重点的に力をそそげるシステムの構築が必要。(国立・医療系)</p>
<p>大学院教育におけるスクーリングの重視と単位の実質化が必要。学部レベルにおける専門教育が不十分になったことを受けて、博士課程前期のスクーリングの位置付けを見直す必要がある。(国立・理系)</p>
<p>カリキュラムの改善。(国立・文系)</p>

3. 研究指導

<p>学生の自主性を伸ばす、自由で活発な研究の場を作る。教官自らが、活発な研究を、広い場の中で行う。特に若い研究者達を大事にする。(国立・理系)</p>
<p>常識的なことであるが、担当教育自らの研究活動のレベルを向上させることであり、優秀な院生を確保することである。また論文指導を組織的に行うことも必要かと考える。文科系では、どうしても、個別的研究、個別助成になりがちであるが、この点を打開することが必要であろう。(私立・学際系)</p>
<p>国際的雑誌での論文発表を原則とする。(私立・医療系)</p>
<p>①専攻分野とは異なる分野の知識を吸収できる体制作りと異分野の融合②論文はすべて英語で作成し、国際誌に投稿するように指導。(私立・医療系)</p>
<p>学生の指導を単に指導教官にのみ任せるとはならず、組織全体で育てるような体制づくり。(国立・文系)</p>
<p>研究指導体制の充実が必要と思われる。(私立・文系)</p>
<p>国内の学会で博士後期課程の学生が研究発表をしている例は多いが、国際会議等でも発表することをエンカレッジするような方策を考える必要がある。(私立・理系)</p>
<p>学内外における院生の研究発表の機会を増やし、発表内容に対して、厳しいコメントを行う。(私立・文系)</p>
<p>学生との研究の対話に十分に時間を取る必要がある。雑用が多く、学生との対話の時間が減少している。(私立・理系)</p>
<p>指導教授がつねに院生に刺激を与えて、研究の方向を具体的に示すこと。(私立・文系)</p>
<p>異なった視点をもつ複数の指導教授による指導が大切である。また、経営学の分野であれば現実の企業の方と論議する場をつくることも重要である。(私立・文系)</p>
<p>論文作成と共に国際学会等での発表を通じて、その分野の世界的な知のネットワークの構成員であることを意識付ける。(私立・医療系)</p>
<p>我々は、学位論文提出のまえに仮提出という方式をとり、指導教員も補強し、それから本提出というやり方を行っています。それにより論文の水準を高めることをめざしています。(私立・文系)</p>
<p>専攻科内における研究発表会等の機会を多く持たせることで、所属教室以外の研究者からの批判やアドバイスを受けるとともに、他の研究に対する、批判的精神を養うべきである。(私立・医療系)</p>

4. 教員の待遇

<p>教員の負担が大きいため軽減する。他大学教員へあるいは実務家に担当させる学科目を設ける。学部の上にある組織を止め大学院を特化して予算配分を充実していく。(私立・理系)</p>
<p>教員の研究・教育時間の確保。法人化。法科大学院設置、外部評価等で多忙となりすぎている。(国立・文系)</p>
<p>教員の身分は学部所属し、大学院教育は学部との併任のため負担が多過ぎて、大学院教育が軽視される傾向がある。特</p>

に私学では、学部学生数に比較して小人数の学生数だから採算的に不利だ。(私立・文系)
教員の研究レベルの向上。(公立・学際系)
教育・研究にたずさわる時間的余裕がまったく不足している。また競争原理の過剰による人間性の軽視にも疑問を感じる。(国立・理系)
教員がもっと研究・教育に時間とエネルギーを使えるようにする。(国立・医療系)
教員の専門性。(私立・医療系)
教員の大学院教育以外の負担の軽減。(公立・文系)
優秀な学生を迎え入れる以外にない。そのためには我々自身の研究の質を向上させ、学生を引きつけることが重要であると考えている。教員の側から言えば、大学院教育に専念できる環境作りが必須である。今は時間が不足している。(国立・学際系)
①教員の質の向上。②大学院教員の(質と量)充実。(私立・文系)
大学担当教員自身の研究条件の改善が必要である。(私立・文系)
研究時間を十分に確保する見地から、事務スタッフの充実が肝要。学内行政上の仕事量の増加が研究時間にしわ寄せされている分が多いと思われる。(私立・文系)
教員の担当授業数を減らし、各種委員会などの仕事を軽くして、研究・教育に専念できること。(私立・文系)
研究面での教員と院生との交流をもって緊密にするとともに教員、院生全体としての共同研究態勢を組むことができるといいと思う。ほとんどの教員が学部での授業や役職の遂行に多くの時間と労力を費やしている現状では理念に叶った改善が容易でない。(私立・文系)
教官のやる気と質の向上。(国立・理系)
指導教官が研究・教育に没頭できる時間を与える必要がある。(国立・理系)
大学院教員の質の向上。(私立・医療系)
医学部出身者の場合、臨床と研究のかけ持ちが多い。このため研究に従事する時間に制限がある。研究に専念できるよう制度的な改革が必要である。(国立・医療系)
教官の「研究＝教育」という固定観念の打破。(国立・医療系)
教員が学部教育に忙殺され、十分な時間を研究と大学院教育にあてることができない現状に問題があります。これを改善するためには、Student/teacher ratioを現状の3倍程度改善して10:1程度にするべきだと思います。それを実現するためには、私立大学に対しても国立と同程度の国費補助を注入すべきです。欧米先進国では、そうなっていると思います。(私立・理系)
担当授業時間数の軽減と学務担当の免除。(私立・文系)
教官の指導時間、経費の余裕が必要。(国立・文系)
非常勤務講師の拡大を望む。(国立・理系)
先端技術を扱える設備の導入と時代の要求を先取りする研究テーマに取り組む努力を研究に携わる教員が惜しまないことが先づ必要ではないかと考える。(私立・理系)

個別指導の時間を確保するためにも、教員の大学行政事務への関わりを縮減するべきである。(国立・文系)
教官に十分な時間が必要である。(国立・学際系)
教員を「雑務」から開放し、院の教育に専念させる。(私立・文系)

5. 教員の人事・評価制度

(1) 研究業績があり、学生教育能力の高いスタッフ (2) 研究指導が十分できるスタッフ。(私立・学際系)
若い研究者で業績のある者をできるだけ研究指導者にする。(私立・文系)
・専攻の将来計画に見合ったすぐれた教員を確保すること。このため外部から当該分野の第一人者を迎えた人事委員会を組織する。(私立・理系)
教員構成メンバーに博士号未取得者がいるので、それらの教員は博士号を取得するよう、努めるべきである。(公立・文系)
教員の拡充。(私立・文系)
重点化をするのであれば旧帝大以外でも重点的に大学院教育を行っている大学には、教官の増員を行う必要がある。全体的に定員を減して、個々の学生に対して手厚い教育を行う必要がある。(国立・医療系)
研究能力に加えて教育にも情熱をもった教員の採用。(私立・医療系)
大学院専任教授を増員することが望ましい。それもできるだけ博士号の所持者であってほしい。(私立・文系)
大学院教育の仕事を適正に評価して、学部教育の片手間という現状を改めることが必要。(私立・文系)
研究者養成のための大学院教育はこれまで通りでよいと思うが、社会人向け大学院の教育には全く異なった教育メソッドが必要であり、そのために専用に訓練された教育陣が必要と思う。(公立・文系)
質についての教員間の合意と実行。(私立・文系)
大学院専任教官の導入、増員。(国立・医療系)
専任の大学院教授の任用。(私立・文系)
・学生による授業評価・同僚による授業評価・システムとして教育の質を向上させる仕組みをつくる。(国立・理系)
教員の任用について、任期制にする等、定期的な資格審査を実施する。(私立・文系)
専任の大学院教員の充実。(私立・文系)
巾広い教育ができるように教員の増員。外部講師で良いがそのための経済的支援。(国立・学際系)
優秀な教員を多数確保する必要がある。不足の場合は連合もあってよい。(私立・文系)
優れた教員の確保が基本であり、不断の努力が必要である。分野の個性化をはかり、当該分野で際立った評価が得られる状況の創出が重要。教員の研究指導にあたる時間を、保証する体制の構築が必要。(公立・理系)
・教員の評価制度の導入と学生による評価制度の導入。・教

育内容の評価（教員間による評価）の導入。（私立・医療系）

6. 学生の待遇

研究室スペースの増大、研究費の獲得。（不明・医療系）
歯学系大学院であるため、大学院生が病院で患者を見る時間が多く、研究に余り時間が割かれていない。そのため研究時間は少なく、大学院生教育のためのカリキュラムも満足に組めない。（公立・医療系）
TAなどによる大学院生への資金的援助。学会発表や研究科内での研究発表の充実。（国立・文系）
大学院学生の学会発表（国内・国外）への経済的援助をはかり、院生が積極的に学会発表ができるようなシステムと実質的の充実をはかるようにすべきである。（私立・学際系）
学生に希望をもたせること。具体的には、刊行助成、奨学金、留学、就職などが改善されること。（国立・文系）
博士後期課程生の経済的支援。（国立・医療系）
6年前の設置時から建物スペースが不足しているため、この点での改善を必要としている。またフィールドワークを重視していることから、科研費プロジェクトへの院生の取り込みを拡大できることが望ましい。（国立・学際系）
研究に費やす時間を増大させるために、奨学金（無利息）の整備が必要（例：博士後期課程に限り最長在学期間（5年間）貸与を受けられる、等）。（国立・理系）
大学院博士前期課程に学部のみで優秀な学生を進学させることが必要。そのためには十分な給付の奨学金が必要である。現状では優秀な学生は学部卒で就職してしまう。（私立・理系）
大学院生の研究活動に対する経済的支援と研究環境の充実。（国立・学際系）
博士後期課程の学生が十分に研究できるような物理的経済的な環境を整えることがまず求められることである。（私立・文系）
予算の充実。（私立・文系）
欧米と異なり、日本では学部一前期課程一後期課程と連続した教育であるため、経済的基盤を保障するような対策が不可欠である。（私立・医療系）
学生への経済的支援、特に学振特別研究員制度の更なる充実・拡大と奨学金（無償）制度の拡大。（国立・理系）
院生への経済的支援が必要である。（国立・理系）
私大では学費の改善、研究室への配慮。（私立・文系）
重点主義と公平性とは、相反する。大学院学生の奨学金制度の充実。公立と私立の外国人留学生の奨学制度をなくす。（私立・医療系）
大学院生の教育と研究の為の機器の整備、その為の補助金の増額。（私立・医療系）
後期課程に進学する学生には経済的支援が不可欠である。（国立・理系）
研究予算、施設の充実。（国立・理系）
十分な予算があること。（私立・文系）

研究費の増額と学生の学会出席旅費。学会誌投稿費の支援。（国立・理系）

奨学金などの経済的支援策の拡充。（私立・医療系）

1.学生に奨学金（研究費）を支給すること。研究時間の確保。2.他大学との交流（単位互換等）を一層深めること。3.大学の施設（研究スペース）、備品（図書を含む）の充実。（私立・文系）

RA、TAの充実。（私立・学際系）

博士課程前期学生の進学率増加に伴ない、学部ならびに大学院教育の施設面の整備が大幅に立ち遅れ、教育ばかりでなく研究面での環境が悪化した。基盤整備は大学予算の枠を越えることの認識を周知することが必要。（私立・理系）

大学院生への研究費、生活保証の充実につくる。（国立・医療系）

博士後期課程の進学者増を図るため、奨学金制度及び研究環境のより一層の充実をめざしている。（私立・理系）

勉強したい人が自由に勉強できる環境、とくに経済的フォローが不可欠。あとは個人の努力のみ。（私立・文系）

私立大学では院生のためのスペースと予算が不足している。（私立・理系）

・奨学金、RA等の充実によって、経済面の支援を強化。・DCの質の向上が鍵であり、そのためにはDC向けの科研費制度を設け、自由に研究費を獲得し、使えるようにする。ただし、採択率は、卓越は1割、優秀は3割、奨励枠は6割程度とする。（国立・理系）

①経済支援奨学金制度を国が充実させること。②DC、PDの採用人数を増加すること。（私立・文系）

経済的サポート（少なくとも学部卒の初任給と同額かそれ以上の給付）。（私立・理系）

7. 学士課程・修士課程との関係

とくに感じることは、①学部レベルの教育の向上と②学部カリキュラムを大学院カリキュラムとへ連結することです。（私立・文系）
学部学生の時から大学院の目的意義を周知してもらうような対策が必要でしょう。（国立・医療系）
大学院進学以前の基礎教育。（私立・理系）
当大学院教育の質的向上のためには、学部段階での質的向上が先ず考慮されねばならない。（私立・文系）
大学院教育への教育上の連続性が高まるような学部教育の整備を進める必要がある。（私立・学際系）
・学部での基礎教育の充実。（私立・文系）
新入生の基礎的専門知識が不足しており、学部教育の大きな疑問を持つ。（私立・文系）
学部教育の充実の上に大学院教育があることを深く認識する必要があります。（私立・文系）
学部4年間では十分な基礎学力が身につくとは思われない。博士課程2年間と学部4年間を加えた6年間一貫教育で基礎力と応用力を養うカリキュラムを作成すべきであると

思う。(私立・理系)
学部教育と大学院教育を分ける。(私立・文系)
学部教育レベルのところで目的意識をもつこと。(私立・文系)
大学さらには高校以前の教育の充実が重要である。すなわち、小さいときから課題追求の資質が身につくような教育システムを整備する必要がある。(国立・理系)
まず学部レベルの底上げをし、大学院に入学する時点での学生の意識を高めることが必要だと思う。(私立・文系)
学部教育と大学院前期課程教育との連続性のみならず、両者の教育水準の仕分けをよく考える必要がある。Q. 32についてといえるが学部組織と大学院組織の相違が明確になっているところに1つの問題があるように思われる。(私立・学際系)
必要ならば大学院修了までに十分な時間(修士なら3年以上)をかけるようなシステムをつくる必要がある。(私立・理系)
大学内で学部教育に重点がおかれ、大学院をより重視する必要がある。予算配分についても同様のことがいえる。奨学金制度の拡充が必要。(私立・学際系)
大学院担当の教員を持つこと。私学の一つとして、われわれの大学では学部教育と合わせて負担し、負担が過重である。(私立・理系)

8. その他

広報活動を積極的に行い、志願者をふやしていくこと。(私立・文系)
薬学では、薬剤師が不足し給与が高いため、大学院で研究するために進学する人数が、とくに私学(地方)では少ないのが問題。(私立・医療系)
検索中である。(私立・学際系)
問題意識をもった学修意欲のある学生が入ってくる。つまり、他に行きどころがないので、しばらく大学院に身を置くといった学生の排除。(私立・学際系)
専攻の特徴を出すこと。(公立・文系)
現在研究中である。(私立・文系)
設置後2年なので、まだ何とも言えない。(国立・学際系)

9. 全般

研究費の充実、学部における専門教育の充実。(私立・学際系)
研究者(教員)の質向上、数確保、場所(研究室等)の充実。(公立・理系)
教員が連携した教育方法立案と実施。学生のアルバイト軽減策。(国立・理系)
教員の数と質の充実、学生への経済的支援(奨学金・TA・R

A)。(私立・医療系)
指導教授の質・量双方の充実が必要である。カリキュラムに対する検討が日常的に行われる必要がある。設備・施設の充実。(私立・文系)
1. 博士課程学生への十分な奨学金を与える制度的保証が必要である。2. 専門職業人としての博士修了者の高い評価を定着させる努力をすべきである。(国立・理系)
・学部と大学院前期課程の一貫教育の導入。・指導教員の指導を研究指導から教育的指導へのシフト。(国立・理系)
予算の拡充、職員・教員定員の大幅増・奨学金制度の充実、施設・設備の改善。(国立・文系)
1. 大学院修了生の付加価値を高め、大学院の存在意義を明確にすることがまず大切。2. 院生教育の評価(院生評価、第三者評価)と、それに応じた教員の処置改善。(国立・医療系)
入試方法を多様化し、多方面から入学できるようにする。大学院担当教員の日頃の教育を充実させる。(私立・文系)
教員の資質向上、教員数の増員、教育研究設備の充実、研究予算の増額、大学院間の交流促進。(私立・医療系)
教授陣の充実、教育施設の充実、それが教育の質を向上させる王道で、他はない。(私立・文系)
大学院担当教員の質の向上が必須である。このためには教員研究費研究施設をよくするとともに、教員が国内外のシンポジウムに参加できる態勢をとる必要がある。また大学院生のための奨学金をもつと多くの学生に与えることが望ましい。(私立・学際系)
カリキュラムの充実、学生の経済的支援、指導教員の力量。(国立・学際系)
修士課程については学部と修士の連続性、一貫性をより進める必要がある。博士(後期)については旧来の専攻のわく組みに捕らわれない研究指導が重要。(私立・理系)
・教員の質の向上(他の特定機関又は他機関と参加した制度による厳格な審査が必要)・奨学制度と拡充・施設の充実・教員の待遇改善。(私立・文系)
研究室間の交流を活性化。教官を採用する際、研究だけでなく教育にも熱意のある人材を重要視する。(国立・学際系)
1. 指導教員の増員2. 1人当りの実験スペースの増加。3. 学会出張等学会活動の援助の増加。(私立・学際系)
・評価システムの確立・研究施設・設備の拡充・研究費の充実。(私立・医療系)
・学部の成績優秀者の入学を促すこと(H16年より特待生推薦入学制度による入学を可能とした)・専門科目の成績評価を、レポート提出から筆記試験に変える。(私立・文系)
教官の増員、セミナー室、研究室、実験室などのスペースの拡充が必要である。(国立・医療系)
1. 学部教育と大学院教育の担当者の区別が必要である。2. 海外との大学間交流の必要性。(私立・文系)
教員が多忙である現状を改善する。学生の意識を向上させる。(私立・文系)
1. 院生の生活保障(奨学金受給者の増など)、研究時間の確保。2. 学会等への院生の積極的参加。3. 指導教員に授

業その他の任務等、学生指導に十分な対応ができる余裕を与える必要がある。(私立・文系)	・まず優秀な学生を確保すること。・教員も多忙で困難ではあるが、指導教授による徹底的な個人指導を行うこと。・できれば学部ゼミの指導教授が大学院でもそのまま指導教授になり、学部・大学院の一貫教育をおこなうこと。(私立・文系)
学部教育との連続性を高め、少なくとも前期課程までは一貫した教育課程にする必要がある。後期の学生に対しては奨学金や旅費の支給体制を充実し、研究に集中できるようにすることが教育の質を上げるために必要である。又、後期の学生が応募しうる競争的研究資金を拡大してゆく必要がある。(国立・理系)	大学院の拡充と建物、施設、設備の充実を図ること。博士後期課程修了後の就職を保障すること。(国立・理系)
①ケーススタディーの導入等実践的な教育法の開発。②実務家教員を積極的に活用する。③産官員の連携を強化する。(私立・文系)	教員には「時間」を与えてほしい。雑用が多過ぎる。良い学生の確保が大切。(私立・学際系)
論文投稿(特に欧文法)させる。国際学会への発表の機会を与える(資金的援助制度)。他大学院生との交流(合同ゼミ)。(公立・理系)	1. 奨学金制度の充実。経済的支援。特に海外からの留学生に対する。2. 海外の大学院との交流(交換留学) 語学教育の充実。3. 英語による講義を取り入れる。(私立・理系)
・高等学校時代からの全般的な勉学の強化が欠かせない。・論理的な内容の文章の読み書きをもっと強化する。・強い動機と意欲を持った者を大学院に合格させる。(私立・理系)	1) 教員の研究の質の向上。2) 教育・研究環境の改善(建物及び設備の充実)。3) 院生への経済支援(返還を要しない奨学金など)。4) 海外との交流促進。(国立・理系)
教員は、学部教育、診療、マネジメント、その他の雑用が多い。院生は診療、関連病院へ出向しなくてはならない。このような理由で時間的余裕があまりに少ない。(国立・医療系)	質の高い研究が断片的に行われていること。学位取得者を地方的にも報酬的にも優遇すること。(私立・医療系)
指導教員の大学院生への指導時間を増加させる必要がある。そのためは、出来るだけ会議を省略化すること。大学院生に与える研究テーマをもっと工夫する必要がある。大学院に入る以前の学生の基礎的能力をつける必要がある。(国立・理系)	教員の質、特に、教育能力の向上。院生は、専門性だけでなく、幅広い知識・教養の学習が必要。(私立・文系)
前期課程においては、専攻の枠をとり払い、隣接分野を含めた履修が可能なカリキュラムの導入。後期課程においては、他の大学院との交流や全国レベルの学会活動への参加が必要。(私立・文系)	学生定数を減らし、選抜試験を徹底し、合格者には生活を支えるに足る奨学金を供与すべきである(特にD. C)。(国立・医療系)
1) 大学院生の質はバラツキがある。本当に優秀な人に大きな支援をする体制づくりが必要である。2) Science の言葉は英語となっている。学部を通した英語教育の充実が必要である。(私立・医療系)	1、指導教員の研究、教育能力の向上。2、奨学金の充実。(私立・文系)
外国人(私費留学生)を含む学生に対する経済的援助(TA、RA制度の充実)、社会人を含む院生の専門教育と訓練を目的としたカリキュラムを実施するための学際的な教育・研究組織(外国人を含む)の検討が必要と考えられる。(私立・理系)	学部での基本的な教育が重要。教員はもっと「教育」に努力すべき。「教育」をしていると「研究」ができないというのであれば大学教員の資格なし。(私立・文系)
学生の経済的負担の軽減。教員の研究・教育以外の負担の軽減。(私立・文系)	①学部教員が併任するのではなく、大学院教員を学部から独立させる。②大学院棟を独立させて教育、研究に専心させる。③大学院間の交流を活発化させる。④海外交流。(私立・学際系)
1.実験設備の拡充。2.若手教官の研究時間の十分な確保。(国立・理系)	1. 指導教官の質を向上させること。2. 奨学金策の充実。3. 研究施設、設備の整備。(国立・医療系)
院生への経済的支援。教官の更なる質の向上。(国立・理系)	・図書や研究室、資料整理のための院生個人の机など研究環境を整えること。・教官が一人一人の院生と向きあって共に学問する時間的余裕があること。いずれもお粗末である。(国立・学際系)
教官の質、数と研究設備の継続的充実が必要。(国立・医療系)	・優れたスタッフを揃え優れた学生(院生)を集める努力。・学生(院生)の生活面も含めた研究環境、条件の整備。(国立・文系)
教員が研究・教育に力を注ぐことができるような環境作りと院生が研究に専念できるような奨学金制度等を含む環境作り。(私立・文系)	1) 学部教育の向上。2) 博士研究員(ポスドク)の増加。(私立・理系)
カリキュラム充実と、授業内容の改善。学生の口頭・文章表現力の養成。奨学制度の充実化。(私立・理系)	・博士前期課程の教育内容(シラバス)を充実させ、それに基づくテスト、成績評価を厳格に実施すると共に演習、宿題等である程度広範囲の専門的学力を身に付けさせる。・社会、企業が博士後期課程修了者を積極的に受け入れるよう意識改革すると共に、理工系技術者、研究者の待遇を抜本的に改善する。(公立・理系)
大学院基礎医学コースの充実。プロジェクト制。学費、奨学金の検討。(私立・医療系)	学費の軽減、研究室の拡大、教員の増員。(私立・理系)
	1. 研究室、スペース、機器等の整備。2. 入学者の選考を厳密に行う。3. 学位論文のレベルの向上。(国立・医療系)

・学部、大学院一貫教育の確立。特にシラバスの整合性。
教員の大学院教育の重要性についての認識を深める必要性。
(私立・理系)

教員の研究者として支援する態勢を強化すること。そのため
助手制度を整えること。大学院生の研究に専念できる経済支
援を助手・副手制度によってもっと安定させること。(私立・
文系)

教官の数的、質的充実。教育設備、機器の充実。(国立・医
療系)

学位審査のあり方に関する改善方策（研究科長調査・Q32）

1. 外部審査委員

1. 仲間うちの甘い審査でなく、広く他大学・他領域の第一人者も加わったレベルの高い審査とすべし。2. その代り、修士、博士には相応しいメリットも与えるべきである。(国立・医療系)
学内審査ではなく学外審査、場合によっては外国の審査員を加えた新たな審査システムを導入する(私立・医療系)
審査に学外者を加える(できれば海外から)。(国立・学際系)
外国で一部実施されているように審査をすべて外部の教員が実施することも必要ではないかと思う。(私立・理系)
十分な審査委員会体制で審査しているが、審査委員として外部の専門家を採用することを容易にするため、旅費等の手当がされると、更に改善されるものと思う。(国立・理系)
人文系において、理系並みの博士号にする努力がなされているが、限定されたテーマのみで早く学位論文にまとめようとするあまり、学位をとっても大学教員の資質に欠ける場合がある。学位の審査においては、他専攻又は他の大学院との審査委員の相互交流も必要と思われる。(私立・文系)
審査委員会への他大学教官(外国機関を含む)の参加を容易にするシステム(旅費、謝金等の保証)。(国立・理系)
時間をかけて専門性をもって検討する。他大学、外部の委員を入れる。(私立・医療系)
外部評価。(私立・理系)
研究科相互乗り入れによる審査。(国立・医療系)
審査として、巾広くお願いしており、現状では問題ない。(国立・理系)
指導教授や教官を学位審査委員に加えて、専門性の高い博士論文の審査を行えるように改善。博士号の全国的なレベルを高めるために学外から審査委員を招く。(私立・医療系)
学際的論文の場合の審査は、1研究科で行うのは至難の業である。主査を中心に大学内外の専門家による審査が水準向上に寄与すると思う。しかし学内ではまだ縦割りであり、柔軟に対応する工夫が必要である。(私立・学際系)
主査、副査を同一大学院でなく、特に副査は学内の他関連学部や他大学にも求め、審査の公開性、公平性などを拡大する必要がある。(公立・理系)
学外の審査員を加えて評価を厳格に行う。(公立・理系)
私たちの大学院では他大学あるいは研究所から審査委員を加えることで専門分野のレベルを保つ努力をしている。(私立・理系)
国内外を問わず、専門性の類似した審査員を選ぶ。(私立・医療系)
学位審査員(副査)に必ずしも他大学の教員を加える必要はないが、少なくとも公聴会には外部の複数名の聴講者を当該専

攻(指導教授を含む)の責任において参加していただく必要がある。(私立・理系)
積極的に他大学等の委員を入れること。(国立・理系)
審査委員を他大学等から加えること。(国立・理系)
客観的な審査が可能となる様に、複数審査員、近隣他分野の審査員を含む、他大学等の審査が必要である。(国立・理系)
必要に応じ学外審査委員も加えられるよう、会計上の改善が望まれる。(国立・学際系)
主査を学位申請者と密接な関係のない専門家とする。(私立・医療系)
学位審査には、出来るだけ客観性を高める為、学外の審査員による評価を積極的に取り入れるべき。(私立・理系)
学外教員、研究者を含め、該当分野の専門家を加えた審査を行なう。(私立・医療系)
学位審査以前に他の研究者から評価を受ける場を設けることは、学位のレベルを一定水準に保つために有用ではないか。(私立・医療系)
一つの研究科で、学生の専攻している分野の審査員を3名揃えるのはむづかしい。他研究科、他大学院からの審査員を入れるほうがよいと思われる。(私立・文系)
他分野・専攻の教員も加えることが必要である。(私立・文系)
審査員を同一研究科外から採用する。(国立・医療系)
外部からの審査員を積極的に導入すべきと思う。(国立・理系)
修士の場合は、普通の、一般的審査でいいが、博士の場合は審査員は5人が最適である。そのうち2人は外部から。そして審査員の資格も可能な限り、博士号所持者にすること。(私立・文系)
外部機関の研究者の参加の義務化。(私立・文系)
同一分野の教員(他大学、研究所等)の参加を前提とする審査を基本とする仕組みが望ましい。そのための経過の措置も制度化する必要がある。(公立・理系)
最適任者の招聘がむづかしい。(私立・文系)
専門分野以外の審査員を必ず加える。(国立・理系)
1.最も適当な審査員に委嘱できるよう、自大学のみ限定しない審査委員会を作ること。(私立・文系)
学外も含め、広く審査員を招へいする。(私立・学際系)
学位の水準維持のために学外の評価(一定水準を有する機関)を受けることを条件にするのとよいでしょう。(国立・医療系)
必要に応じて学外の審査委員を委嘱しており、特に問題はない。(私立・文系)
学内に本当の専門家が少ない場合には、もっと外部の人を審査委員として依頼すべきである。そのための旅費等は別途準

備されるべきと考える。(国立・理系)
博士に学位審査については客観性を高めるために第三者審査機関設立検討の要がある。(国立・理系)
他大学の審査員を加えること(最低1人)が必要。分野によっては、英文として国外の審査員を加えること。(国立・学際系)
農学分野の博士学位レベルとして当研究科は全国トップであるが、学位審査には外国人も審査員として加えた方がよりレベルがあがる。(国立・理系)

2. 審査の基準・水準

文系と理系の学位論文審査基準が大きくことなるのでその差をなくすこと。(私立・学際系)
文系の学位審査と理系のそれでは現在大きなへだたりがある。新制の学位制度の考え方が文系では通っていない感じがする。共通の理解に近づけるためのイニシアティブを文科者がとることを望む。(私立・学際系)
審査基準の明確化。(私立・文系)
Science の領域では、レベルの高い雑誌での発表が不可欠であり、それを中心に考えた審査にすべきである。(私立・医療系)
伝統的な博士号の概念の修正が必要。審査教員は、研究者・教育者としてのライセンスという意味での審査基準から脱出できていない。完成したものより将来の可能性という基準の導入が必要。(私立・文系)
学位は理系と同様、研究上の一つの通過点と考えできるだけ授与した方がよい(一定の基準に達していれば)大学が高いハードルを設けているとしたら、自らの無能力を大学院生によって助けてもらっているようなものという声もある。(私立・文系)
論文審査からテーシス審査へと変更(平成17年度より)。理由:優秀な論文は書けているが、知識が浅い傾向にあるので最低限必要な専門的知識を審査できるように。(国立・医療系)
・修士学位審査:審査制度特に評価に対してより厳正な評価をできるシステムへの改善。・博士学位審査:現状では特に問題なし。(私立・理系)
主査の責任を明確にし、学位の標準レベルを学会等、公けの学術団体において例示し、大学院間で共有していく制度を作っていくこと。(私立・文系)
「論理性、創造性、実践性」の3基準で評価するので、多様な審査員が必要である。(私立・文系)
他大学や他研究科との交流を広げ、その経験を通して学位基準の改善をはかる。(国立・学際系)
人文・社会学科にあつては、審査基準、および評価法のスタンダードをつくり全国的なコンセンサスをうるよう、全教員を再教育することが必要不可欠。(国立・文系)
なれあいを防ぎ、適正な審査を行うこと。(国立・医療系)
審査基準の適正化(独立した研究推進能力の証明)が必要。

(私立・文系)
無理だと思うが、もう少し、評価のための基準があればと思う。(私立・文系)
その分野に関する広いバックグラウンドを持つかの check。(国立・理系)
審査員の学位に関する考えが全く異なれば、審査自体が成り立たない。研究科として、あるいは専攻として目指す学位の質と量を明確にすることがまず求められる。(私立・学際系)
審査する論文の質の向上を図る(国立・医療系)
国際的な学位基準制度の導入。(不明・学際系)
審査基準に大学間で差があること(例えば「論文数の基準」など)。(私立・医療系)
外に開かれた客観的評価の重要性。(国立・医療系)
2005年度末には、法科大学院で大量の「法務博士」が産み出される。これとの関連で、「法学博士」の質は、むしろ従来以上に厳しく問われることになるのではないかと。おそらく課程博士の趣旨は「法務博士」に吸収されるので、論文博士にふさわしい実績と質が要求されることになる。(私立・文系)
前提となる論文数は2報以内でよいが、その証となる学術論文を投稿する雑誌の水準について、厳しい視点と、研究科内での認知が必要である。(国立・理系)
論文博士の審査がきびしいので、もう少し緩和したい反面、時代の流れを考えると逆行する。ただ産学連携の波を考えれば、悩ましいところです。(公立・理系)
狭い専門分野に束縛されずに、多面的な評価ができるような審査体制が必要であると思います。(私立・文系)
学位論文は学生の発想や創造性が重要であるが学会法などの前提条件(発表論文数)に拘束されるため、論文になりやすいテーマの選定や指導教員の業績主義による強制によって、本人の自由な発想による創造性の質の問題が害されている。(私立・理系)
論文発表数でもって基準とせず、研究科審査を充分に行うべきである。(公立・学際系)
本来、研究者としての一人立ちを保証するものと考えられるので、取得年限にこだわっている現在の文部科学省の方針は間違っている。(国立・理系)
ハードルを低くする必要があります。(公立・文系)
学位授与の審査基準についてコンセンサスが必要。現代的考え方の人と古典的な考え方の人がいると、容易にまとまらないことも考えられる。(私立・文系)
医学博士取得者については、これを多数送り出さねばならない社会的要請があり、学位の質を上げなければならない教育的要請との間に矛盾がある。これからは、質の向上を計るため厳しい評価をすべきだと思う。(国立・医療系)
審査レベルの水準化、例えば学位に〇〇大学取得を記して外部評価の一環とすること。(私立・文系)
研究業績のみならず、人格・人物の審査も必要。(私立・学際系)
・学位論文テーマのみならず、申請者本人が専門分野及びその周辺分野について確かな見識を有することを確認する機会(Faculty Oralなど)を設けること。(私立・

理系)
学位審査のあり方についてのガイドラインが公表されることが望ましい(学会発表・学術論文等の条件)。(私立・文系)
現在 thesis の形で主論文を制作している。これを国際雑誌(査読制度あり)への投稿原稿で掲載された論文での審査とするのが良いかと思う。(不明・医療系)
乙論文の質を向上させること、向上が不可能であれば廃止すること。(公立・医療系)
基礎学力・社会的字術者倫理観についても審査する必要がある。(国立・理系)
学位授与の水準が審査員によって著しく異なるようある程度統一した論文評価基準指標の設定が望まれる。(国立・学際系)
学位論文は本学で現在単著のみを認めているが、学位論文の内容のレベルアップを目的として、単著に加え共著を認めるかどうか、検討中である。(私立・医療系)
学位の基準をどうするのかという点での教員間でのコンセンサスが必要。(国立・理系)
海外(特にアメリカ)と日本の格差の是正。乱発すればそれだけ価値はさがる。(私立・文系)
論文を英文化し、海外からの国際的評価を行う。(私立・理系)
・審査つき学術論文業績の負の再検討。(私立・文系)
学位を取得できるような指導が必要ですが、レベルを安易に下げるべきではないと思います。(私立・文系)
明確なガイドラインを設定する。(私立・文系)
大学院担当教員か、学際的構成があり、学院のとらえ方が異なる。又とくに文科系教員では論文博士と課程博士の区別があいまいな面があり、対応に差があるように見受けられる。統一した評価基準が必要であろう。(私立・学際系)
自立した研究者の資格認定と割り切ることが重要。(私立・理系)
必要論文数が横並びでない和不公平感が生じるが、一方質が問題となる。(私立・医療系)
文系と理系の水準差をなくすべきである。(私立・文系)
学位授与の基準についてのゆれを出来るだけ少なくすることが大切だと思います。(私立・文系)

3. 審査の手続き・形式

・評価システムの確立。・学術国際使徒学内紀要との二重投稿問題の解決。(私立・医療系)
効率的な審査方法の検討が必要である。(学生増による審査時間の増大に対処するため)。(国立・医療系)
審査委員による論文審査が最重視され、成果として結実した論文のみが審査対象とされているが、論文指導経過についても指導教授から「報告書」を提出させるべきである。(私立・文系)
学位をとりやすくするには、反対でないが、院生のレベルに大きな差が出てくる。したがって、学位にも A、B、C の

様にランクをつけるべきである。ただし、後のレベルアップにより、ランクを上げるのを可能にする。(国立・医療系)
・課程博士をだすために、3人以上の教授によって構成される博士論文指導委員会をつくり、1年間十分な論文作成指導を行ったうえで、博士論文の審査に入るという2段階方式を実施する。本学では、すでに実施している。(私立・文系)
「博士号学位について」本大学院に於ては提出が年1回と限られているので、2回にふやすことにより、学位取得者が増える可能性がある。(私立・文系)
・公表を徹底する方法を検討する。(国立・文系)
公聴会の更なる拡大、専門審査委員会への権限委譲。(私立・理系)
博士前期課程は2年であり、高度専門職業人を養成するには適切な学外研修機関(病院等)との連携いともいわれる従来の論文と異なるレビュー兼レポートのしっかりしたものを提出させこれを審査することが必要である。(私立・医療系)
公開でやるべき。(私立・医療系)
博士論文は英語で書くことを努力させるべきである。特に自然科学系は必要である。(私立・医療系)
①学位審査の内容を広く公開する。②学位審査権のある教員の評価を徹底する。(私立・医療系)
論文の受理前に審査ができると良い。(私立・医療系)
芸術研究科では、博士後期課程においても、研究成果をもって博士論文に替えることのできる制度が求められる。(私立・文系)
*審査プロセスの日程を短くして実質研究時間をできるだけ多くする工夫。(国立・理系)
予備審査(主査1名、副査2名;いずれも専攻主科目の教授は就任できない)で合格した後、本審査委員会(22名の専攻主科目の担当教授で構成)で質疑討論の後、投票を行って合否を決定している。特に不都合はないが、本審査委員会における本人の発表および質疑討論への参加を今後の検討課題として考えたいと思っている。(私立・医療系)
デザイン系大学は少人数の教員がそれぞれの専門教育をおこなっている。専門分野は新しい領域が開拓されたものが多く、審査メンバーを選ぶ時の苦労がある。芸術工学会、デザイン学会等の活動を通した連携が求められている。(私立・学際系)
学位審査の具体的プロセスを学生に明示し、計画的に研究指導を行う必要がある。(私立・文系)
審査委側のメリットが見えない。実質的な審査とするためには、何かインセンティブがなければ困難ではないのか?(国立・理系)
現在は二段階で審査が行われ、先ず専門分野の審査員による専門性を重視した審査。次に全教授による口頭質問に基づく審査の後投票を行っている。投票が必要であるかどうかについては検討を要する。(国立・医療系)
論文が研究専門誌に掲載決定されるまでに時間がかかりすぎる。それを補う仕組みが必要。(国立・理系)
逆に質問します。学位論文の著者の一人が学位審査の主査になることについてどう考えられますか。(私立・医療系)

論文博士制度の改革：大学の研究室で最低1年間の研究指導を受けることを義務づける。(国立・医療系)
専門知識のない教員が合否決定の投票権をもつことは、不合理であり、改善したい。(私立・文系)
公開審査制(open defence)の導入を拡充する必要がある。(国立・文系)
公開、もしくは多数者の立ち合いのない参加による審査会の開催。(私立・文系)
できるだけ審査の公開を義務付けること。(私立・文系)
専門でない者が審査に当り、合格点を出しており、専門性をきちんと評価された博士号が存在すべきである。(公立・文系)
・研究科委員会の投票を各研究科の裁量にまかせること。(国立・理系)
学位論文は英語標記にすべき。(国立・医療系)
・審査を公開とすること。(私立・文系)
審査の質を向上させたいが、大学院生が増えているため教官の時間的余裕が益々不足する。(国立・医療系)
教員による集団的でオープンな審査。(私立・文系)
本研究科は、都市に関する学際的な構成となっているので、伝統的専門分野(例えば、社会学、など)による審査等の差異が、同一専攻内で存在し、統一的あり方を模索しているところであるが、なかなか大変ではある。例えば、分野によっては「審査論文」というシステムもないなど。(公立・学際系)
より公平な審査がなされるために、博士論文(主論文)の審査から共同著者を除くよう規則を変更しようとしている。(国立・医療系)

4. 検討中

数的にまだ多くないので改善の必要をとくに感じていないが、やがて改善等を考えなければならぬ時がくるだろう。(私立・文系)
①本学はD1、D2までで完成途中である。②学位論文要綱を検討中である。(私立・文系)
来年3月が初回の為、今のところわかりません。(国立・学際系)
純文系の博士号については、明治以来の権威的なありかたがここ10年で大きく変化し、全体的位置づけがこなるまではかなりの時間が必要と思う。(私立・文系)
博士の学位審査のあり方について検討中。(国立・文系)
大学院の制度的完成を昨年度見たばかりであるため、改善点の検討は今後の課題である。(国立・学際系)
博士後期課程は設置後1年経過したところであり、学位審査のあり方の改善点はまだ述べられない。(私立・理系)
検討中である。(私立・学際系)
設置後2年なので、まだ何とも言えない。(国立・学際系)

5. その他

看護学の分野においては、査読制度のある学術雑誌が少ないことが問題である。(国立・医療系)
・論文博士と課程博士では、それぞれ異なる論文審査手続をとっているため、今の所、改善の必要はないと思われる。(私立・文系)
本学の場合、万全の体制だと信じている。(私立・文系)
大学院教員は国立も私立も精一杯やっている。「改善について」特に必要だとは思わない。(私立・学際系)
審査員の資質の向上。(私立・医療系)
学位を所持するスタッフをまず充実させる必要がある。(公立・文系)
現状で良い。(私立・理系)
理工学系における学位審査では特に改善が必要と思われる点はない。(国立・理系)
とくになし。(国立・文系)
現在の所、おおきな問題は起こっていない。(国立・文系)
特になし。(私立・文系)
すでに実施した。(私立・医療系)
この調査は大学院重点化を果たした代表的な国立大学を対象にしているように思われる。私立大学になじまない項目が多い。(私立・文系)
社会人大学院の定義が大学によって異なりすぎる。(私立・医療系)

6. 全般

1. 他学科、他大学からの副査によるより客観的審査。2. 論文博士の提出条件。3. 社会人入学者に対する指導。(私立・理系)
1)必要に応じて学外審査員の参加。2)単位取得退学した院生の学位審査を一定年限内では課程博士審査基準を準用するなどの改善。(国立・理系)
・公聴会日程を予め設定しておき、原則専攻内の全教員が出席するよう義務づける。(審査委員以外の教員の出席が減少傾向にあるため)・他大学から審査委員を積極的に受入れる。同一専門分野から無作為に委員選定ができる制度(組織)を、例えば学位授与機構等に設ける。(公立・理系)
・助教でも資格を満たす人は、主指導教官にまわるようにするかどうか、要検討です。・学位審査に専門外の審査員を必ず入れるようにするかどうか。
発表論文は国際誌(英語または他外国語)であるべきだが、学位論文はしっかりした日本語の総合報告を作るべき。必ず学外審査員を入れる(予備調査の段階でもよい)。(私立・理系)
・審査に他大学教員を加える。・研究内容を公開すること(他大学からも解るようにする)。(私立・医療系)
改善ではないが、指導教員側も学生側も学位に対する積極的

意識を持つ必要である。(私立・医療系)
①審査制をもつ学術雑誌を多くすること。②各大学院の学生論文の評価制を公平に行うシステムを作ること。③学外者を審査に加えること。(私立・文系)
アメリカの影響を強く受け、「大学院とは何か」が今一度問われているのではないだろうか。この点の議論が不十分であることから、単に業績主義(量的)のみが先行しているのが現状であろう。(私立・文系)
現在のところ、博士申請論文の第1号を審査中であるが、審査委員の選出方法の見直し、審査期間と学位授与の時期の見直しなど、いくつかの点で改善が必要であると思われる。(私立・文系)

大学院教育の問題点や改善してほしい点（大学院生調査・Q37）

1. 大学院制度

<p>大学が丸となって博士後期課程の学生を指導してほしい。OD やポストの対策が全くなされていない。大学院生は金銭的に不安定であり、バイトのために研究時間が足りなくなっている。OD のも年度を区切って奨学金の貸与をしてほしい。（国立・文系・20代）</p>	<p>代) 指導教員の教育と評価の充実(指導方法、生活モラル等) 卒業生の就職における協力。入学前の講座情報の開示。（国立・医療系・20代）</p>
<p>他大学との交流をする場があればよいと思います。（私立・理系・20代）</p>	<p>課程博士の取得の規程というか目安がわかりにくい。（私立・学際系・20代）</p>
<p>理学部の基礎的な研究をしているせいもありますが、職や学振（DC&PD）にあるかどうかは景気にすごい左右されすぎ！！もっと役に立たない学問領域もちゃんと金を使うべきだ！（国立・理系・20代）</p>	<p>学生の授業をみることなどあるが、自分の研究にかける時間がもつほしい。（私立・医療系・20代）</p>
<p>制度、手続きが複雑でわかりにくい。（国立・文系・40代・職業経験あり）</p>	<p>博士課程を設立してもないので、博士号の水準が明確ではない。教授が移動し3回も指導教官が変更してしまいました。その度指導が変わっていくので時間的にロスし、3年の在学中に提出するのは自分の力量不足もあり、あきらめました。又、修士と同じ授業を博士課程の授業としているのでレベルが低く修士のレベルに合わせた内容にならざるをえず、不満でした。（私立・文系・30代・職業経験あり）</p>
<p>努力次第でなんとかなる部分も多いが、進学就職の機会などはどうにもならない要素が強い。不安である。研究の場の確保、拡充に努めてもらいたい。（公立・文系・20代）</p>	<p>博士後期院生として、学部で学生の授業担当できるシステムがあればよいと思います。（国立・文系・20代・留学生）</p>
<p>後期課程設置後、まだ5年ほどしかわかれかしていない。教員職の就職支援については組織的な対応ができておらず、現教員はほとんど学部と院の兼任である。という点からも難しい。逆に研究専門職の増加等を政策として行わないと大学教員の高齢化、人寄せ採用等には対応できないと考える。（国立・文系・20代）</p>	<p>実験だけでなく、多くの情報を用いるなど、多種多様な面からの研究があって良いと思うし、最終的に社会に役立つ研究が大切だと思う。実験偏重の世界には抵抗を感じる。さらに、もっと社会に開かれていけばと望む。（国立・医療系・40代・職業経験あり）</p>
<p>学費が高すぎる。土日の授業をつくってほしい。（国立・理系・30代・職業経験あり）</p>	<p>研究分野により博論を書ける可能性はかなり異なる。同一研究科内で難易の差があり、成果を速急に求めれば「お金にならない」「時間がかかる」分野はどんどん縮小を求められてしまう。根本的な問題だと思う。（国立・文系・20代）</p>
<p>学振のDCとPCの制度はちょっとおかしい。たしかに通っている人には優れた人も多いとは思いますが、結局論文がないときびしい、、、。私のように自分からスタートしたテーマだとなかなかDC1までに論文出すのは難しいし、指導教官はあまり論文出すきもないようだ。博士行くと奨学金で借金ふくれて授業料も払ったあげく（有名研究室を除いて）就職もあまりよくない、なんとかしてください。（国立・医療系・20代）</p>	<p>特に博士課程後期の学生でもうすぐ博士号が取れそうな人（自分も含めて）はいつも将来への不安でいっぱいである。その他にも経済的な問題など指導教官、同僚等に相談できない精神的な問題を多く抱えている。それらを少しでも解消する為のシステムを考案して欲しい。（国立・理系・20代）</p>
<p>教育、研究設備は十分で特に不満はありません。ですが金銭的な面や将来的な面で多くの不安があります。幸い育英会のおかげで生活はできますが、将来この奨学金を返済する（約500万）こと、また卒業後も必ずPDとして採用されるわけではないことを考えると不安を感じえずにはいません。できればTA、RA、DC、PDなどでの採用枠をもっと広げてほしいです。（国立・理系・20代）</p>	<p>文部科学省の「日本芸術振興会の特別研究員」採用の不公平さ。分野による採用の基準や、審査員の先生の所属ゼミ生とそうでない学生との格差や不公平さが目立つ。また採用された学生とそうでない学生との経済的負担や生活の安定さに差が開きすぎる。（国立・文系・20代）</p>
<p>業績というのは、重要だと思いますが、論文数、学会発表数、などがとても強く言われているように感じます。（自分が接している教官のせいかもしれません）法人化されこの先、研究に意味がどのようにしてはかかれていくのか、また、何が大切といえるのか、疑問がでています。（国立・文系・20</p>	<p>個人的な意見に過ぎないが、博士の学位論文の価値が大学において高すぎると思います。確かに博士論文はしっかりとした内容でなくてはならないが、一つの通過点に過ぎないのも事実であると思う。むしろ大学院での研究は在学中の公表論文が目され、博士論文が大きな注目を浴びることはほとんど無いと思われる。こういった現実があるのに博士号取得に4年や5年かけるのは、当たり前のような風潮があるのはあまり良くないと思うので、そういった部分を改善してもらえると有難い。（国立・理系・20代）</p>
	<p>私は留学生ですので日本では研究生半年、修士2年勉強しました。この間で生活のために時間が取られて勉強もろくにで</p>

きませんでした。日本の物価が高く、学費の免除も殆どされなかったです。今考えると自分は何のために日本に来たのか分からなくて退学するまで考えています。もし留学生の為に何か支援があればぜひお願いしたいと思います。(国立・文系・20代・留学生)
事務手続きを簡略化して欲しい。(国立・理系・20代)
教員が研究に集中できる環境が整えば、学生の研究力が改善されるように思う。大学の教員は研究者とはほど遠い環境にあると思われます。研究者が研究に没頭できる環境整備が必要だと考えます。(公立・理系・20代)
専門が違う院生や研究生との交流は、今の状態は少ないです。(国立・医療系・20代・留学生・職業経験あり)
形式主義(論文数が多い)よりも、実質主義(社会的に価値のある研究)を重視すべきであると考えます。(国立・医療系・20代)
授業に問題があるとは思いますが、研究活動をしっかりとされておられる先生方が忙しすぎるのがそもそも問題。授業など中心とする先生と研究を中心とする先生を明確に分けるべき。(国立・理系・20代)
研究論文が一定の水準をみたすようになるまで、学生の経済力のゆるす限り何年間でも在学できるように制度にしてほしい。(国立・文系・20代)
学科としての教員の数が少ない。(私立・理系・20代)
学外からの研究以来や指導依頼がきて、その作業に従事しても一切賃金がない。教官や企業側に「学生＝賃金0の従事者」という考え方をやめてもらいたい。一定の結果が出て、彼らの業績になり、自分にとってプラスになることがない。(自分の研究時間が減るばかりでなく、経済的にも肉体的にもきつい)。(国立・理系・20代)
最近、COEに当たっている研究室の多くが博士後期課程の学生に給料を払っている。これは、非常に良いことでもっと多くの研究室も行うべきであるし、国も支援すべきである。研究テーマに関してはテーマの方向修正を学生にやらせるべきである。教官主義(特に教授)では駄目である。学生が主権をもち、学位を取る事が重要である。(国立・医療系・20代)
研究者の途(ドクターコースに進む人)、高度職業人教育(学部教育の補完)とが修士課程で並立しているのが、大学院教育のレベルを落としているような気がします。(国立・文系・60代)
教える、教えられるという立場がはっきりしていないこと。たいいていの場合、指導教官すら学生の研究内容をフォローできていない。教えてもらうことができないなら、授業料を払う必要はないのでは?雑用係として無償で働かせるのも納得できない。(国立・学際系・20代)

臨床系医学部大学区院の教育は、実際1年目に20時間程度の簡単な講義があるのみで、それまで医局員として就職していた後に突然研究の道に入るので他の学部の大学院生に比べて専門知識も研究能力も低いのではないかと思います。 (CATCH-UPは自力で行うもの)医学部臨床系教室では、教授以下皆診療、教育、研究の3つの仕事それぞれがこなすという多忙極まりない構成になっています。例えば、教授は外来診療もし、手術も執刀し、学生に講義をし、臨床実習教育もし、自らも研究者として大学院生とともにリサーチを行い学会へ出席するという具合です。ですから、それ以下の者、当然大学院生も医局の運営のため外来診療を無償で行うということも発生します。これは今まで医学部で当然、公然として行われてきた習慣のようなものでおかしいと思っている人はいっぱいいるでしょうがどの医局でもよく行われているのではと思います。大学院生としての学生としての生活が保証されるしくみになってほしいものだと思います。それにはまず、教官の具体的任務を決めるべきではないでしょうか。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
DCの採用は短期間で遅く成果を上げることができた者のみで、各人のやる気、資質といった評価があまり重要視されていないように思える。基礎研究の人がよく採用されるような気がする。(国立・医療系・20代)
副指導教官を決めるのは、ちょっとむずかしいですね。大学が決めてくれればありがたいですね。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
地位や利権に固執する教授に多く研究費が流れていること。(国立・学際系・20代)
日本の文化、社会、歴史をもっと教えていただきたいが、研究に集中して時間がとれなくて、交流できなかったと感じます。留学生は研究にしか時間を費やしていない人は多いと思います、大学院教育はもっと「自由な時間と空間」がほしい。(国立・医療系・30代・留学生・職業経験あり)
他校の同じ分野の研究者との交流チャンスをもっとつくってほしい。(国立・文系・20代・留学生・職業経験あり)
学位を取得できても職の無い人の面倒をみてほしい。(私立・理系・30代)
指導教官にひかれてきたが、大学全体として、専門分野への指導をうけられる機会が乏しい。(公立・文系・20代)
教授会議あるいはしらない会議がきわめて多い国が日本の大学と考える。その会議のせいで、授業とか、ゼミがキャンセルされるときが多いです。それが、日本大学院教育の問題点と考えます。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
就職に対するサポートがほしい。企業にエントリーしても博士は募集していないと言われたり、年齢にひっかかりたりで就職先がない。自分の専門知識を将来に活かせる場を見出せないのが現状だ。博士号取得ができるかも曖昧なので本腰をいれられない。(公立・理系・20代)
社会人の入学機会の拡大。身分の保証がなく、生活に不安。企業の理解度が低く、バックアップが得られない。大学により修了基準がバラバラ。(国立・理系・40代・職業経験あり)
修士、博士後期課程を通して育英会の奨学金の「貸与」を受けると修了時には600万円以上の借金をかかえたまま就職することとなり、これは学部卒で就職した学生と比べると、

<p>非常に大きな重荷となることは明白であると思います。更に、学位を取るまで在学すると、就職が難しくなるばかりでなく、身分を保障された職に就きにくくなる現状では、研究分野で優秀な学生（人材）が確保できないのではないかと思う。（私立・理系・20代）</p>	<p>私は会社員時代、アメリカのベンチャーとある製品の共同開発を経験しました。表向きの制度とは別に産学協同によるアメリカの強さを痛感しました。そのひとつは大学院等を通じたポータレスのグローバルエンジニアの育成です。ひるがえって、日本の大企業を中心とした終身雇用体形ではアメリカの方式をとり入れるのは困難かと思われます。海外エンジニアと対等に活動するためのリフレッシュを行うためにはほとんどの場合退社が前提となります。この場合、経済的リスクが多大です。産学協同の為の箱造りも大切ですが、もっと大切な人造りに人が動きやすい方法の配慮をお願いいたします。（国立・理系・50代・職業経験あり）</p>
<p>他研究室との交流が少ない。博士課程に進学希望の学生と、学士、修士で就職を考える学生で、研究に対する温度差があること。（私立・理系・20代）</p>	<p>できること、できないことを明示してほしい。できないことをできるかのように外部の人たちに錯覚させるのは良くない。（国立・文系・40代・職業経験あり）</p>
<p>「大学院教育」とは少しずれるのですが、医学系研究科（基礎医学系）に進む医学部卒業生が少なく、教育、研究の中で医学部卒業生のニーズ背景が理解されにくいのが現状です。これはなんとかしてほしいです。（国立・医療系・20代）</p>	<p>図書館の蔵書充実。コンピューター利用環境の充実（統計分析ソフトなど）。院生室の充実。国立大学授業料低減（高い）国家は学問の自由を保障せよ。独立行政法化大反対。研究者をバカにするな。教育は百年の計。大学教育にもっと予算を。国家は研究環境を整備しろ。金を出せ。（国立・文系・40代・職業経験あり）</p>
<p>TAの時間が修了課程中に比べて多く、研究希望の学生と多くもてない。来年はTAからはずしてもらおうつもりである。昔よりも学生の能力は向上しているように思うが、いざ実践となると対応できない場合が多い。画一的な教育の「ひずみ」が表れているのだろうかと感じる。（私立・理系・20代・職業経験あり）</p>	<p>留学制度を設けてほしい（留学するための補助金を負担してほしい）（公立・医療系・20代）</p>
<p>学生、教員共にモチベーションが低い。東大を頂点とした、偏差値シンδροームが定着し、特にお客に言う二流校以下は、何かを生みだそうという努力は感じられない。（二流校も同じかもしれないが）学力のない、海外留学生の学位取得のターゲットと大学経営の利害が一致した状況といえる。教授以下の研究者になるシステムを変えて、風としを良くしないと、単なる名誉目的に組織になってしまう。（私立・学際系・30代・職業経験あり）</p>	<p>後輩の指導は重要な事と認識し、行っているが教育に指導が無く、院生に対する比重が重く、自分自身の研究に大変支障をきたしており悩んでいる。研究、教育の区分を明確に研究室の能力に応じた人数を確保をお願いしたい。（私立・学際系・30代・職業経験あり）</p>
<p>RAの仕事が多すぎて週に3日程度しか連続した時間（十分に研究を取り組む時間）が取れない、JABEE対応プログラムは厳しすぎると思う。（私立・理系・20代）</p>	<p>安定した収入とある程度確立した就職先があれば大学院に積極的に入学しようとする。また事務、研究室の運営等雑務を減らせるシステムを作るべきである。（国立・理系・20代）</p>
<p>英語のスキルもろもろについての向上について。留学又は、外国での研究について。複数の博士の取得とそのことによる可能性についてもっと役で立てるモデル？、機会などがあればいいのでは？（国立・理系・20代）</p>	<p>私は卒業後に大学の教員を希望しているのですが、募集が少なく特に文系、文学系の教育が軽視されていることを感じます。上級生の人達も博士を終えて就職できる人はわずかです。努力して研究してもそれが報われないのでは意欲を失います。博士まで進んでしまった今別の職業に転向することも困難です。実用やお金儲けの為の学問がかりでなく芸術を研究する重要性にも目を向けて欲しいです。（国立・文系・20代）</p>
<p>地方の大学にはあまり情報が入ってこない。例えば、学振のPDなどの受け入れ先などが、コネでもない限り情報が回ってこない。もっと学校側での情報交換を活発にしたいと思っています。（国立・学際系・20代）</p>	<p>あらゆる補助金が国立大学偏重であること。理系学問への補助が多すぎる。文系学問への予算配分を希望する。私立院生への援助（経済面で）を併せて希望する。（私立・文系・20代）</p>
<p>研究をはじめた年はずでに40代半ばであった。そこで、いつも差別を感じるの、研究助成金、奨学金に年齢制限があることである。負けずに頑張ろうとする意欲にかかわる。性別はもちろんもこと年齢においても高い壁を壊していただきたい。同じ土俵に立つことを希望します。（国立・学際系・50代・職業経験あり）</p>	<p>大学院重点化による定員増員の結果、大学院入試が簡単なことで院生の全体的なレベルが下がったと思われる点が問題。また、定員増員の結果就職の口が少なくなっている点が問題。（国立・理系・20代）</p>
<p>研究活動の成果が上がらなくても学部生の指導が可能な後期課程院生、研究員は多い。TAや非常勤講師としてあるいは大学教育員としてこうした人が働ける場が増えることを期待する。こうした見解は各種委員会や研究活動に忙しい先生方の負担を減らすことにもなると思う。（国立・文系・20代）</p>	

<p>私はかなり遅い年齢で院生になりましたが、学振や奨学金などの申請に際し年齢や配偶者の有無がカベとなって不利でした。家族構成や年齢などで機会の制約を受けるのは残念です。また、博士論文の基準や教員との共同研究の機会などが、学校や教員によって異なっていることを実感しています。院生も一人の研究者として研究助成などの機会にアクセスしやすいような環境が望ましいと思います。博士論文も「出す、出さない」が指導教員によってあまりにも違うように思われます。(公立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>社会人DCなので仕事の方をどうしても優先させてしまう為、論文を書く時間、調査研究に必要な時間が少なく、又大学のゼミにも仕事で参加できない場合があるので精神的なプレッシャーが大きいです。社会人DCで学費は自払いですので経済的な面で苦しい部分があります。(国立・理系・20代)</p>
<p>教授の退官後のサポート体制を改善して欲しい。大学院の教育における指導教官の資質(指導にあたって厳格な資格が必要であると思う。業績に限らず人間的にも)を問うチェック体制及びアンケート審査。そうした審査を経たしかるべき人が指導を行うような体制作りをぜひともお願いしたい。そうすることで自分のような泣きを見る学生を少しでも減らして欲しい。(国立・理系・20代)</p>	<p>今の日本の教育システム自体に疑問を抱いています。入学するのは難しいのに卒業は簡単なものだというシステムを改善していかなければ、日本の大学の学生のレベルは低下していくばかりです。もっと意欲ある学生とのディスカッションを行っていきたいものです。卒業後は自分の可能性を求めて海外に行くつもりです。(私立・理系・20代)</p>
<p>博士課程4年間の内約1年間は研究ができず、無報酬で大学院での医療に従事しなければならぬシステムになっている。もっと早い時期から研究に関わっていける態勢にしてみたい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	<p>曖昧な博士号取得条件の改善及びそれに伴う博士号取得者への社会全体の対応の改善。博士号乱発の改善。(国立・理系・20代)</p>
<p>地方に存在する大学の為、都心部の大学と自分のレベルの比較、交流をするのが困難である。したがって、自分自身の位置、大学のレベルをはっきりと認識できない。(私立・学際系・20代)</p>	<p>ある程度は卒業後の進路を確保して欲しい。私大は国立大の天下り先になっており、老人の雇用はあっても若者にチャンスは無い。(私立・理系・20代)</p>
<p>学振はPDのみでよい(国立・理系・20代)</p>	<p>当然のことなのですが、大学院は専門家となるべく研究を行う教育機関です。でも私の研究していることと、一般の人々との間にある大きな隔たりは一体何なのだろうと考えてしまうことがあります。専門の研究が社会においてどのような位置のあるのか、どのような影響があるのか、専門性が深まるにつれ大きな問題となっている気がします。(私立・文系・20代)</p>
<p>研究計画書の論理審査に時間がかかりすぎ。指導教官のポストが少なすぎる。(国立・医療系・30代)</p>	<p>将来が不安定で精神的に苦しんでる人が多いように思う。努力したからといって成果が出るわけでもなく、博士号を取ること是一种我慢した事、苦勞した事忍耐力のある人に対する報酬であるように思う。(国立・医療系・20代)</p>
<p>博士論文提出に必要な条件が曖昧であること。学生のみならず、教員の側にも条件が把握されていないように思われる。(私立・文系・20代)</p>	<p>硬直的な組織、人事システムの変革。(私立・学際系・20代)</p>
<p>医学分野での大学院制度は未熟であり、存在意義も薄い。指導カリキュラム充実。大学院生の到達目標の設定。大学院卒業者の優遇処置。(私立・医療系・20代・職業経験あり)</p>	<p>教育についてはありませんが大学院生は博士号をもし取れたとしても職が無いという現状にはとても厳しく感じます。研究を続けたくても続けられないと思うと残念です。(私立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>医師が大学院生となった際、大学をいながら社会保険は存在しない。もちろん大学での勤務、週に2~3日働いても。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	<p>今私の分野は助手になるのが非常に困難である。助手の公募の際にできるだけ年齢制限をなくしてほしい。そして仮に年を重ねても良い成果を挙げている者はたとえ研究生や非常勤講師でも登用するようにしてほしい。又助手のポストは極めて少ないが講師や助教授のポストが余っていたりすることもある。臨機応変に物を買う者がいるがあれを改善する方法がないだろうか。そういうお金を節約して最有用な事に使えるはずである。アメリカのように助教授以上にバーマネットを与えるというのでもいいと思う。論文を書かなくなる助手がいるからである。(国立・理系・20代)</p>
<p>社会人でも博士号が取得し易い配慮がほしい。(国立・理系・20代・職業経験あり)</p>	<p>若いときに高い収入を得られ、かつ安定した地位が確保されなければ優秀な人材が、大学に残らないと思う。(私立・文系・20代)</p>
<p>日本学術振興会の特別研究員の採用試験に不公平な判定がある疑いを改善してほしい。(国立・理系・20代)</p>	<p>大学院での講義の充実には学部においての基礎的学力や知識の充足が重要なことだと思います。したがって大学院への進学に関して高いハードルと厳正な審査が必要だと思います。(国立・理系・20代)</p>
<p>学振の採用基準がよくわかりません。私には他大学(東大、京大など)の大学院所属する友人が数人いるのですが、業績がゼロでも学振に採用されているケースをよく耳にします。また、他大学の修士課程を卒業してから、東大の博士課程に進学した生徒がすぐに学振に採用されたことも耳にしました。採用基準をもう少し透明にしてほしいです。(公立・医療系・20代)</p>	
<p>日本の大学の先生には秘書が必要です。(公立・理系・20代)</p>	

<p>DC後期に進学するにあたり、最大のネックは経済的な問題と修了後の職の問題の2点であると考え。その点において企業や団体からの派遣は、ある意味理想型であり、今後このような制度はもっと拡充すべきである。しかしながら大学（あるいは大学院）の側の受け入れ体制は正直言っておそまつである。特に事務手続き面の柔軟性を求めたい。上記の問題は一例であるが、今後大学院側と職場（企業や団体）との連携を見直さないと無職の博士があふれることとなり研究レベルとモラルのていかを招くのではないかと危惧している。（国立・理系・30代・職業経験あり）</p>	<p>数は毎年増えているが、奨学金あるいは授業料免除とかが事実上増えていない。その上奨学金の受給、授業料の免除の許可における判断基準が不透明であるため努力してももらえない時は本当にがっかりする。今の大学は研究の場所としてはとても好きだが、授業料の免除もあまりよくおられない奨学金もそれ程もらえない（今年はまだ無い）為今後からは本当に能力のある学生だけを受け入れ、入学できた留学生には十分な支援をして欲しい。PS生活難に追い込まれておりまして色々失礼しました。申し訳ありません。（国立・文系・20代・留学生）</p>
<p>博士課程は希望すれば全入の状態である。あらゆる面においてレベル低下が見られる。さらに進学者全員がほぼ学位を得ている。博士の学位存在の意義が薄れつつある。このままでは大学院進学の意味がなくなってしまふ。若い時期の貴重な時間とお金を費やすだけの価値のあるものとは言えなくなっている（国立・理系・20代）</p>	<p>魅力的な授業がないので他大学との単位互換制を認めて欲しい。海外の国費での短期留学制度（3～6ヶ月）があると研究・調査にとっても役立つのだが。（国立・文系・30代・職業経験あり）</p>
<p>特にありませんが、学生自体の学力レベルの向上と国全体として大学院教育（高等教育）に力をいれ、人的、財政的な補助をするべきだと思います。（国立・医療系・30代・職業経験あり）</p>	<p>本来は自分の行動力で解決すべきことだと思うが大学門外の大小、様々な研究会、ゼミ等を知ったり参加したりする機会が具体的に提供されるとありがたいと思う。</p>
<p>博士課程前期、修了課程もある程度の取得の前提条件をさだめるべき。例えば、国際的な学会誌を1報とか。（私立・医療系・20代）</p>	<p>就職の斡旋。（国立・理系・20代）</p>
<p>大学院生が研究者として資質を磨き一研究者として博士号を取得することに関して、選択し所属した研究室の違いが大きく影響しすぎている感じがある。全体的なレベルアップが求められていると考えます。（国立・理系・20代）</p>	<p>外国の人と研究について話す機会が欲しいです。あとは大学間の交流する機会が無料で多くあればいいと思います。（国立・理系・20代）</p>
<p>教育については特に問題点は見当たりませんが、ただ今日、文系においては学位取得者の専門職への就職が極めて困難になっていることに大きな不安を覚えます。学位取得から就職までの間、大きな負担なく、実績を積むための研究活動をおこなえるような期間、身分が制度として保証されることを希望します。（公立・文系・20代）</p>	<p>博士号取得の基準を見直して欲しい。（国立・理系・20代）</p>
<p>科研申請等、大学院生の特別枠のようなものがあれば他大学院生と類似テーマの総合的研究など、持論研究を進展させることができると思う。（国立・文系・20代）</p>	<p>研究室全体で1つの分野について研究活動を行っており、いつでも議論、相談ができる反面、学会全体の中で自分たちのポジション、他にどのような主張があるのかが判らず、井の中の蛙の様に感じている期間が長かった。MC2の中頃に学会発表として、研究の全体が見えてくる感じです。（国立・理系・20代）</p>
<p>他大学との交流の機会が学会等の参加時に限られており情報交換の場がないのは大きな問題点だと思う。効率よく研究を進める為には、無駄な研究をしないことと、小さな大学ほど重要なことのように思う。（公立・理系・20代）</p>	<p>社会人DRを取得する場合、多くは会社からの授業料支出により、いわば「ヒモ付」の状態が多く見受けられます。が、マスター出身者の場合、自分自身でスキルアップしたいと考える人が多いので、自己資金でDR COURSEに通えるようなシステムを作って欲しいと考えます。来る「欧米型社会」を考えた場合、社会人入学してDRになるとすれば「定年まで同じ社会」は？ゆえに授業料も自己負担、となるのではないのでしょうか。（私立・理系・40代・職業経験あり）</p>
<p>医学系大学院の実状としては病棟業務を行いながらの研究となるので非常にスケジュールが立てにくく生活も多忙に極める。病院と大学のシステムのうまいバランスが望まれる。（国立・医療系・20代・職業経験あり）</p>	<p>外部のいろいろな分野の研究者の人のセミナーを増やしてほしい。電子ジャーナルを充実してほしい。（私立・医療系・20代・職業経験あり）</p>
<p>留学生として日本で勉強することが難しいですから、医学院、大学院生として毎日研究したり、アルバイトをする時間が少ないです。奨学金をもらえず、生活も困難です。自己で貯金なし。（国立・医療系・30代・留学生）</p>	<p>学会発表や論文、特許申請などをとても奨励しているのだが、その割には学会費や交通費の一部を学生に負担させたり、事務における特許等の書類の処理がとても遅く、こちらの研究活動に支障が出たりする。学生がゆとりをもって十分な研究をするために、このような学生が苦に感じる要素を排除してほしい。（国立・理系・20代）</p>
<p>後期課程終了後の就職の世話をしたい。（国立・理系・20代）</p>	<p>小規模な私立の大学なので、同じ研究分野の学生がいないため、教官以外に相談する相手がいない、日中は4年生の世話をすることに追われ、自分の研究ができない。（私立・理系・20代）</p>
<p>日本の大学院への入試は比較的やさしく、入学する留学生の</p>	<p>博士号の水準があいまいだなと感じます。特に社会人口が増えてきているので余計にそう感じます（社会人口を否定するわけではありません）（理系・30代・職業経験あり）</p>

研究では自分の専門分野だけでは研究ができません。私は化学を専攻としてきて、今は物理を主に勉強しています。分析では化学を、原理では物理を使うといった感じです。他の専攻の人たちとの結びつきを深くするために、学科としての枠組みを開放しなければならぬと思います。そのため最低でも学校単位での交流会などが必要だと思います。(国立・理系・20代・職業経験あり)	業経験あり) 法学教官の数が少ない。大学院全体として目指す方向性が無い。(国立・文系・20代)
医学系大学院は大学院大学であっても教育研究といった大学院の機能をはたしていない。(他大学はわかりません。少なくとも当大学では)つまり教育されることはほとんどなく、指導もない、研究にあてる時間もない。そのかわり授業料は徴収されるのでサギ行為に近い、博士号は出やすいが(出すぎと考えると) (国立・医療系・30代・職業経験あり)	属している講座によってすべてが決まる感じがある。自分自身のことについてもそうなのだが、他人と比較した際に努力ではどうしようもない事が多い。所属講座以外にももっと学生を守る機関が近くに欲しい。同級生が減ってくるので精神的に追い込まれる事が、大学院後期課程になって増えたと思う。
大学院教育の政府のポリシーがわからない。子供の数が減り(教員になるのもむずかしい)大学院生の定員を増やし、なのに研究職のポストはどんどん減っている。国立大なのに、学費はどんどん高くなる。どういうことですか? (国立・理系・20代)	人文系の領域で、かつ国際水準を満たす必要がある場合日本で日本語で書く意味は全くありません。ですので(それ自体問題を含んでいるにせよ)もっと外国語で発信することを前提とすべきでしょう。(私立・文系・30代)
他の研究室、他大学への出向等、自由に行える環境が欲しい(国立・理系・20代)	大学院に重点を置き、博士を多く出すということであるが博士号を取得しても就職先が殆どないという現実を何とかして欲しい。大きな矛盾だと感じる。(国立・学際系・20代)
成果の出にくい人、文系(特に思想、哲学など)に対する切り捨ての傾向が年々強くなってきているような気がしますが、長い目で見てそういった分野にも援助をして欲しい(特にCOEなど)(私立・文系・20代・職業経験あり)	カリキュラムや制度の内容・変更その他研究、教育に関する情報を院生に対し、もっとオープンにして欲しい。(国立・文系・20代)
現大学院教育についてあまりありませんがただ、大学院終了後の大学等の教員としての就職口をもっと広げて欲しい。(私立・文系・20代・留学生)	博士後期課程の将来の進路についての不安を解消してくれるような支援システムの充実。(他の大学にもいえること)(国立・理系・20代)
大学院生が多いのが気になる。でも複雑。自分の研究室に院生が多いが議論も活発であり好ましい。しかし、PDから先のことを考えると・・・大学研究者としてやっていくことができるのはごく少数なので競争が激しい。いたずらに院生の数を増やすのも疑問に思うときがある。(国立・理系・20代)	社会人として入学したので大学のシステムにとまどうことがあります。例えば事務の非効率性や、健康診断などの学生対象のものが社会人のことをまったく考えていないと思われる場合などです。更に秋学期入学のためカリキュラム(春入学中心の構成になっている)が不便利です。研究については指導授業も、他の教授の方々についても非常に満足しています。(私立・文系・40代・職業経験あり)
ヒモつきの予算はいらない。自分たちで使い道を決定させるべき。講座制を止めるべき。(国立・学際系・30代)	大学院生増加に伴う研究レベル、教育レベルの低下。大学院生の研究の独立性の保持(国立・理系・20代)
博士号所得の基準(規定)が、各大学院により格差が大きすぎるように思います。(公立・理系・20代)	私が進学できて、博士号を取れるまでの過程を思うと自分の指導教授による影響が一番大きいと思っています。自分があこがれている先生のもとで進学するのは自然な流れですが、博士が特定先生の所からしか出ないように見えます。(私立・理系・30代・留学生)
課程博士取得の為のプロセスがしっかり明文化されておらずどのように取得していけば良いのかわからない。(私立・文系・20代)	大学の学生優先、学業優先という意識が低いこと(私立・文系・20代)
社会人特別選抜制度を無くしてしまえとの論をばく先生もいるようだが、企業と大学の連携を深めるのに非常に役立っている。むしろもっと拡充せよと申し上げたい。研究に一生をささげる研究者ならば社会人など邪魔以外何者でもないだろうがこれらの人だけで世の中が動いているわけじゃない。	博士論文を提出する際に、具体的に求められているレベルを明確にして頂き可能であればそのレベルに到達するためのプログラムが何かあればと思います。(私立・文系・20代)
留学生に対して別冊の英訳卒業証書ではなく、正規の英文卒業証書を発行して欲しい。留学生たちは卒業した後帰国して仕事を探すが日本語のみで書いた証書では困った学生は多くいると思います。(私立・学際系・30代・留学生)	国立大学が法人化することが決定し基礎研究ができなくなるのではないかと不安があります。(国立・理系・20代)
就職が厳しい。あったとしてもPD等の一時的な就業が殆ど。博士を含めた学生への心の問題への対応が皆無。教官の常識的な感覚がやや乏しいと思われる。(国立・理系・20代・職業経験あり)	DC、PDの利用数が少ない(私立・医療系・20代)
	もっと企業など連携して実用的な研究をし、利益を生み出す必要がある。(人件費以上の利益)大学院生に賃金が払えるようになれば、大学の人材不足は解消し、現在の悪循環は立ち切れる。(国立・理系・20代)
	論文の本数を重視する評価方法ではなく、論文のレベルを客観的に評価できるシステムが大切。例)レベル×本数=評定点数(学位審査)(私立・理系・20代・職業経験あり)

名大環境学研は、文、理、工を統合した研究科ではあるが、まだ各々の分野に閉塞感がある。文理協同の道はまだ遠いと感じてしまう今日のごころである。(国立・理系・30代・職業経験あり)
付属病院での臨床業務と研究の分離(国立・医療系・30代・職業経験あり)
就職の件、特に大学教員への道が狭まっていることに問題あり。今後ある程度の枠を確保していくことが必要と考える。(私立・文系・20代)
博士後期課程入学時、もしくは、博士課程の募集時でも、明確にこのような手順でこれを達成しなければならぬと説明すべきだと思います。目的のないまま院の残る人が多すぎます。私自身は修士と全くテーマが違うので、時間が効かるのは覚悟していますが、ひきずられそうで少し恐いです。(国立・文系・20代・職業経験あり)
論文の数やポイントではなく、質をもっと検討してほしい。(国立・理系・20代)
文系大学院は、修了後、あるいは満期退学後の進路に不安要素が多い。(私立・文系・20代)
就職の開口を広げて欲しいです。社会的に。(私立・文系・20代)
日本の博士課程修了者は一般に企業等では評価されず活躍の場が少ない。もっと企業との交流を通して社会のニーズを感じれる場があっても良いと思う。必ずしも基礎ではなく応用研究に力を入れる。社会のニーズを知った上で(問題意識を持った上で)研究に打ち込めば、更に社会(企業)から希望される人材が育つと思う。(国立・理系・20代)
教官の人数が少なすぎる。そのために学部研究生への指導が不十分である。(国立・理系・20代)
制度がころころ変わるの将来の見通しが不透明となって余計な不安感を高めるので好ましくない。またロースクール化やビジネススクール化など、大学本来の役割であるはずのリベラルアーツ軽視の風潮が深刻だと思う。社会の効用に大学が走るの自殺行為だと思う。(国立・文系・20代)
博士課程に所属する大学教員の数を全体的に増やして欲しい。(国立・文系・20代)
T、A非常勤講師等、教育的な立場を経験する機会が全くないので困る。(公立・文系・20代)
いいアイデアのある研究室にはお金がたくさん回るようになれば良いと思う。(国立・理系・20代)
博士号取得の為に研究業績は不可欠であるが、極めて優秀な人でなければ研究生(指導教官)が研究をバックアップする体制ができてないと、業績を出すのは困難であると思う。したがって研究も学生指導も優れた教官とそうでない教官の研究室では、すべての面で差があると感じる。(国立・理系・20代)
社会人で再入学する人達も増える中、学振の応募年齢の上限を廃止する等、研究環境の再検討をして欲しいと思う。(国立・文系・30代・職業経験あり)
大学事務の対応が社会人に対して配慮が全くない。非常に冷たい。(国立・文系・40代・職業経験あり)
国立からの天下り教員がいる為若手にポストが無い。文科省

は大学院の数だけ増やし、その後の就職先等を考えていない。学会内の無給の仕事を減らして欲しい。奨学金の貸与ではなく給付にして欲しい。学位を取得しても定職につけない人がたくさんいる。学位の価値が無い。(私立・文系・20代)
お金がある所にしか集まらずチャンスが少ない。(公立・理系・20代)
国の方針として応用研究も大切だが、基礎研究にも力を入れて欲しい。研究費が少ないので自作するものが多く時間がかかる。(公立・理系・20代)
研究テーマに直接関連する教員の他大学とのネットワーク。(公立・文系・50代・職業経験あり)
国立大学の独立行政法人化、統合が進み博士号取得後のポストが激減していることを鑑みて、本人の為に博士後期課程には「まれに見る鬼才」とも言うべき人物以外は進学させないようにする必要があります。私の研究室には博士号を取得しても就職できずにフリーターになってしまった先輩がいます。私自身、自分の研究能力に限界を感じながら、フリーターになる寸前の状況で研究を行っています。また、これは聞いた話ですが、〇〇大学の博士後期課程の理論系の大学院生がソニーの入社試験を受けたところ、面接で「28歳の君を採用してソニーにとってどのような利益があるのか?一体今何ができるのか?年を考えると即戦力になるのだろうか?学部卒の人と比べて5年分の技術はあるのか?」と罵倒されて落とされたそうです。博士後期課程への安易な進学を防ぐ為にもこういう現実も知らせて、才能の無い人は門前払いにした方が本人の為になると思います。(国立・理系・20代)
教育面については特にならないが大学院重点化で膨れ上がった大量の院生の終了後の受け皿の確保について、教員を含めて大学全体が院生の疑問や不安に答えられるようにした方が良いと思う。(国立・文系・30代)
私の所属する研究科は国際文化研究科と銘付たれていますが、国際文化という領域、概念に対する研究、議論の環境が皆無である。既成の専門領域の単なる集分に墮している感があります。研究家の立場、可能性、展望に関する学問的関心がゼロです。(国立・文系・20代・職業経験あり)
他大学の院生や研究者との交流が足りない。(私立・理系・20代・留学生)
I HOPE THE DEPARTMENTS COULD COMMUNICATE WITH EACH OTHER MORE OFTEN. SO WE CAN EXCHANGE THE OPINION ABOUT SCIENCE AND SHARE THE EXPERIENCES AND SKILLS IN THE LAB.(私立・医療系・20代・留学生・職業経験あり)
大学院教育もそうだが日本の教育を教えて欲しい。私は国の金で教育を受けたことが無い。国立と私立では責任の重さが違うと思う。国立大のように恵まれた環境で勉強することが出来なかったが決して能力で負けたとは思わない。(私立・理系・20代)
他大学や民間企業と共同研究する機会がもっとあればいい。人的交流が増えたらいい。(国立・理系・20代・留学生)

<p>生涯学習と大学院は峻別するべき。社会人入学の見直し。(私立・学際系・20代)</p>	<p>思う。(30代)</p>
<p>博士課程後期の進学の際、ほとんどが教授推薦書が必要である。この制度を廃止すべきである。学問の自由が保障されない。少なくとも大学推薦書に代えるべきである。(国立・理系・20代)</p>	<p>指導教員を評価するシステムが無いこと。友人の例ですが、十分な指導を受けられないので他の先生に指導をお受けたいと申し出たが断られた。保健官に相談して、研究科長から指導教員にメールを出したところすぐに受け入れられた。同じことを言っても学生だったら聞かない。教員などを学生が評価することが現状ではできない。(国立・理系・20代)</p>
<p>他大学の教授や学生との交流やセミナーなどが足りない。論文投稿のサポートがあると良いと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>日本学術振興会については採用年齢をあげてほしい。34歳以下に区切られると実力に関係なく採用されない。図書館職員のレベルを海外基準(院卒以上)まで高め資料の充実を義務づけてほしい。(国立・文系・30代・職業経験あり)</p>
<p>大学や研究室の水準のばらつき(同じ学位取得者でもレベルが全然違うこと)を改善したほうが良いと思います。特に修士はよほどの事が無い限り年限中に取得できるという点を改善した方が良いと思います。(国立・学際系・20代)</p>	<p>より実社会の現場に近い場所、教育を行っていかねばならないと思う。博士課程取得の論文(現在の規程)以外の評価軸を立てなければならぬと思う。論文以外での活動も評価の対象になるようにしてほしい。(私立・文系・20代)</p>
<p>もっと学生に対して情報をオープンにすべき(私立・医療系・20代)</p>	<p>修士論文の書式を改善してほしいと思ったことがあります。在学している大学では、B5サイズで穴をあけてヒモで結ぶというなんとも旧式な製本をしなければならぬのです。また、修了後の進路について、大学院側にとどのよう協力をお願いしたいのかまいにわからないところがあります。(私立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>私が在学している大学は、教官の指導面、コンピュータ等の設備等、非常に充実していると思います。ただ、国際言語文化研究科という割りに海外の大学との姉妹提携や交換留学という機会(個人的でなく学校間の)は少ないと思います。(国立・文系・20代)</p>	<p>最近、大学院の新設や組織改変が目立つが、専門を追求するにあたって、自身の研究テーマは非常に大切であると思うので、外部から明確に分かるよう専門についてもう少し細かい情報を提供してほしい。(国立・文系・30代・職業経験あり)</p>
<p>指導教員の人数が不足している。(国立・医療系・20代)</p>	<p>就職活動について。私は現在就職活動してお行っておりませんが、周りの大学院生の就職活動を見ていると研究活動に支障をきたすほど長いっているケースすらあります。もっと短期に就職活動が終われる体制になればと思います。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>あまりにも将来の展望が見えなさすぎる。就職の機会も殆ど無いのが現状であり、研究を進めるにあたって不安要素が多い点を何とかして欲しい。(私立・文系・20代)</p>	<p>論文の評価基準が曖昧である点(私立・文系・20代)</p>
<p>就職が無いのに大学院生を増やしても意味が無い。研究者の育成に力を入れるのならその後のことももう少し考えて欲しい。(私立・理系・20代)</p>	<p>大学院博士後期課程を修了し、学位を取得しても、年齢等で給料面等でかなり妥協をして就職しなければならぬので窓口をもっと広げてほしいと思います。今は、このような時代なので仕方ないとは思いますが、博士フリーターのような存在になりそうです。契約期間が決められている、プロジェクトのようなとても将来を不安にさせるような職が多いと思います。もっとしっかりとした安定したものとなってほしいです。(私立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>将来の雇用不安を緩和して欲しい。学生扱い(世の中を知らないというレッテル)をする社会的認識の低さを改善して欲しい。就職をしていった同世代の方々のように家庭を築いていけるような環境整備が欲しかった。大学院教育を受けている側の精神的重圧はこのあたりにあるように思う。(国立・文系・20代)</p>	<p>実践的研究を行う場合、その対象となる場、機会が容易にもてるようなシステム。(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>日本の場合博士号を取っても3割は職に就けていない。アメリカと大違い。日本はおかしい。日本は科学技術大国なのに科学技術をいかに削減に扱わず。大学院生を増やして大学、大学院に支給する研究、教育費を削減する国の方針はわけわからない。銀行に公的資金を投入するのはやめて、研究開発に投入すべし。(国立・理系・20代)</p>	<p>博士号を得るまでの年(4~5)を延長してほしい。奨学金や授業料免除の枠を広げてほしい。(国立・医療系・20代)</p>
<p>社会人コースの入学にあたり、在职場の確認、書類の添付は修学のネックとなっています。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	<p>私立大学の問題点は、教授陣が言わば(国立大を退官)であり、全く協調性や共同討議の意欲なく(場所も無い)往々にして派閥作りにのみ走ることである。従って、院生達も唯、受講に時間に集中するのみで、お互い論議を通して研鑽し合おうとする意欲が希薄である。「共同討議の場」を早急に確立し「研究者」としての共通意識、協同精神を急ぎ醸成する努力が切望される。(私立・文系・60代・職業経験あり)</p>
<p>大学全体において問題視していた事。学生は偏差値を基準にして入学している。大学院生は(特に修士)就職を目的としている。教授は雑務に追われ開発、実験よりも授業に頭を悩ませる。学生と教授両者の目指しているものが共有できるようにならない。</p>	
<p>論文博士の学位を廃止し、コースに入って教育を受けるべき。博士の学位を私大では乱発するようだが、もっと敷居を高くして難しくするべき。力が無いのにコネや政治的なことだけで学位を取得するようなシステムは駄目だと思う。大学院教育を考えるのなら、院生の底上げをすることが先決だと</p>	

<p>企業等と共同研究を行っているが、実際に研究を担当している学生への評価が非常に低く、正当と思われる対価が受けられない点は、モチベーションを低下させ、問題だと思われます。また独立法人化は学校が単なる企業の研究所となる様な気がなりません。(国立・理系・20代)</p>	<p>医学部の場合臨床系の院に入ると、ほとんどがその教室での実験等になり、他の分野の授業等はありませんし、他の先生との交流はほとんどありません。改善されるとよいです。日常業務が多く実際に研究できるのは今のところ週2日程度のためやはり、不十分になりやすいようです。(国立・医療系・30代)</p>
<p>人文学系の博士課程後期では、標準修了年数(3年)内に博士号を取得することが非常に困難である一方で、それ以上の期間在学する者への経済的援助が少なすぎるように思う。上記の点は早急に改善されるべきである。(国立・理系・20代)</p>	<p>他大学と合併し、一つの教室の構成員の数をふやすべきである。(常に人手不足である)(国立・医療系・20代)</p>
<p>大学院教育よりもむしろPostDr.のパスが我国においては全く充実していないと思う。限られた可能性のうち、さらに年齢制限(日本学術振興会の特別研究員は34才)を課すなど、本人の資質、努力にかかわらず、応募の機会さえ与えられないことも多い。せめて、Dr.取得後3年以内をPostDr.のトレーニングの期間とするなどの(外国人に対してはこのルールが適用されている場合が多い)改革を望む。(国立・文系・30代)</p>	<p>学内以外にも他大学の院生や研究者との交流が容易に行える環境があれば更に研究の発展につながると思われます。(私立・医療系・20代)</p>
<p>①学位の(博士)授与には公平を期してほしい。現在の大学院においては教授の一存で全てが決まってしまう。例えばある程度点数で評価したり、他の研究室の教授にも評価してもらおうとか。(現在もあるが、形だけに思われる。やはりそのために他教授が評価できるように)は点数制をつくるべきだと思う(あくまである程度)。(論文や学会への寄与で点数をつけ、基準をこえれば学位をもらえるようにする。)②大学院の授業をもっと専門分野に役立つようなものを増やすべきだ。点数制にすれば①学位授与のラインが明確になる(本人にも他人にも)→ただし全て点数で割り切れるはずもないのであまいさは残るだろうがかなりましになると思う。②公平を期すことができる。(国立・理系・20代)</p>	<p>・研究する幅を広げたいけれども、自分の力ではどうにもならないことがある。教授の意向は絶対で、共同研究などを行わない。他大学との交流がもっとあれば、研究の発展につながると思うが・・・・大学自体が、学部中心で、国家試験合格に力を入れすぎている感がある。研究領域へ力をそそいでないと思える。(施設が充実していない。)(公立・医療系・20代)</p>
<p>院生の権利の範囲を明確にしてほしい。(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>就職のための博士号取得に目的化してしまっていると思う。学位は重要だが、乱発するのはどうかと思う。自身の努力不足が原因ではあるが、この先のことを考えるとたまに不安になることがある。(私立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>当大学では、院生を無料で研修医と同等の労働をあたりまえとしている。院生とはいっても、各医局の一員であると考えられており、実質の研究は半年～1年しかないのが実情であり、残念である。(公立・医療系・20代)</p>	<p>就職が確保されていないのがつらい。ドクターをでてプーなのはみじめです。(国立・文系・20代)</p>
<p>課程博士の枠を広げてほしい。博士課程在学中に、博士号の受領をもっと出来る様改善してほしい。(私立・文系・60代・職業経験あり)</p>	<p>学生とはいえ、ある程度の成果が求められている。D課程であるにもかかわらず、待遇が悪いように感じることもある。特に、理系は拘束時間が長い、生活費を借金である奨学金のみに頼らなければならないというのはどうかと思う。本当に日本は科学技術大国を目指しているのだろうか。末端の学生にとって夢が持てないのであれば、理科離れはさらに進むのでは。(国立・学際系・20代)</p>
<p>研究室と企業とのつながりをもっと強化し、実務と研究の一体化を図っていくべきだと思う。(私立・理系・20代)</p>	<p>博士取得要件の明確性。(私立・学際系・20代・職業経験あり)</p>
<p>博士号のハードルを高くすること。博士号の条件を明確にすること。(国立・理系・20代)</p>	<p>現在の絶望的な就職状況で、これ以上院生を増やすのは好ましくない。大学の財政状況を改善するために入学者数を増やしていくのは憤りすら感じる。理系はともかく人文系の博士課程修了者のほとんどが定職に就いていないことを国はどう考えているのか。(私立・文系・20代)</p>
<p>研究というのは、もともと個人的なもので、そのため、指導教員の個人的な裁量によるものが大きいかもしれないが、これからは、博士論文完成までに至る各段階において、ある程度のシステム化(テーマ選定から、計画書・中間報告等、ひとりの指導教員によらず、学校全体でサポートするようなシステム)が図られるべきだと思う。(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>日本学術振興会の特別研究員の採用枠を増やすなど、大学院生が独力で生活し、勉学できる体制を整えてほしい。就職(アカデミック)先を完備し、将来への不安なく進学できるようにしてほしい。(国立・理系・20代)</p>
<p>助手やP.D.の数を増やして、自分自身の研究や研究生活について、数多くの若手研究者とのディスカッションの場を提供して欲しい。(私立・理系・20代)</p>	<p>社会人学生のため変則的な回答となりました。企業人が大学と連携して、一步先に進むことが本当に重要で大事な時代になってきました。(公立・理系・50代・職業経験あり)</p>
	<p>ルーチンの臨床の仕事が実際には多く、研究する時間などほとんどないのが現状。研究時間や期間を義務付けるなどなんとかならないものか。(公立・医療系・20代・職業経験あり)</p>
	<p>医学部大学院は必ず基礎配属にしてほしい。(公立・医療系・30代)</p>

自分所属の院生としての生活は学年によって大学病院で病棟に全ての時間を過ごさざるを得ない状況がまる一年続き、全く研究ができなかった。現在、それを学年の変更によりずらすことが可能になってきているが、下の学年からなので在学中の者は救われない。在学者の立場でも平等な形での今後の研究期間の確保を希望する。(国立・医療系・20代)
現在の大学院教育の問題点は苦勞をして博士号を取得しても、日本の多くの企業では高い評価が得られない。これが日本の博士後期課程は魅力がないということにつながっていると思われまふ。(国立・理系・20代)
大学院の位置づけの向上。今の大学院の位置づけは大学からかなり軽んじられているようなので・・・。(私立・文系・30代・職業経験あり)

2. カリキュラム・授業

英会話、論文執筆のカリキュラムの導入。(国立・理系・20代)
授業の内容があまりにもお粗末である。教授間に派閥がある。教授が忙しすぎる。(国立・学際系・20代)
本学における教育カリキュラム(授業)は非常に熱心なものがあります。だが、この熱心な授業のために、大学院生にとってもとめられる研究活動につきやせる時間が少なくなっています。私は、2つの大学の修士課程を修了する機会をもちえたのですが、今までの大学院の姿(研究メイン)がよいのではないかと考えています。(国立・学際系・30代)
大学の授業と研究しなければならない内容とが、あまりにもひろがりすぎていて、研究を行おうとしても、そのベースがないから一から勉強しなければならない。だから、研究をする上での掛け橋となる授業を増やしてほしい。(国立・理系・20代)
もっと英語力をつける教育が必要だと思う。(国立・理系・20代)
自分の専門分野における基礎学習が社会の中でどのように生かされ応用されているのかを教えてくれる学部生のための授業の充実。(国立・理系・20代)
本研究科の性質上仕方ない部分はあるものの、大学院の授業に興味があるのかと思う時がある。(国立・理系・20代)
倫理教育が無い。各自何かしらの倫理は持ち合わせているが、ごくまれに人の話し方、対応ができない人が見受けられる。そういった人と話した場合とんでもない考え方をしている人が大多数であった。倫理教育、コミュニケーション講座があれば良いと感じている。(国立・理系・20代)
カリキュラムの整備。外向け(学外の人)に受けの良いことをやろうとしているが中身が全くついていない。極論を言えば、嘘をついて人を集めている節がある。(私立・理系・20代)
基礎学力(理論や学説)を養成するための授業とそれを踏まえて応用していく授業など大学院全体のカリキュラムを授業相互が連携しているように構成してほしい。(国立・文系・

30代)
教員の趣味的な内容の授業はやめて欲しい。(国立・理系・20代)
研究に直接関係のある授業を増やしてほしい。現状はそのような授業が全くない。(国立・理系・20代)
大学によって取得単位数がかなり異なっている。東邦は少ないと思うし、筑波は多すぎると思う。程よい授業数であることが望ましい。(私立・理系・20代)
社会人から入学した場合、論文作成のために援緒したい講義がある。その場合自由に援緒させてほしい。(私立・医療系・60代・職業経験あり)
修士段階での単位取得が厳しく、自分の研究が出来ない状況にあるのは問題、結果、M2年+1年でD進学というのが慣例化している。修士も単位取得義務を無くすべきであると思う。(国立・文系・20代)
英語で行う基礎的な科学等の授業テクニカルタームだけではなく、動詞や形容詞などが、論文を書く上ですぐに思いつかないのは問題がある。最初から英語で勉強すればその心配がない。(私立・理系・30代・職業経験あり)
授業をとっているのに1度も授業しない先生がいる。大学院以上になるとそのようなことは多い。授業科目によっては真剣に受けたいたいと思っているのに残念です。(国立・理系・20代)
学生の基礎知識が足りない。講義の内容はつまらない。(私立・文系・20代・留学生)
各講座は具体的に何の研究をどんな目的でやっているのかを学生(在学中)に知らせるべきだと思う。研究に必要と思われる語学、統計、研究手法等を教えてほしい。(私立・医療系・20代)
他大学院の授業参加、各研究所等への見学の見学の充実。(私立・文系・60代・職業経験あり)
集中講義のような形で、系統的に専門知識を教育する場が必要だと思います。(国立・医療系・20代・職業経験あり)
同じ分野を研究している他大学の学生との交流、意見交換の機会がもっと増えればいいと思います。そういうカリキュラムがあれば利用したい。(国立・理系・20代)
メンタルケアの拡充(国立・理系・20代)
研究によって、社会人への貢献が必要とされていますが実際、学生として過ごしてきているので、どのようなことをすれば社会への還元につながるのか具体的にわかりません。ですから、企業等の社会的機関と交流を持てる機会があればいいと思います。(国立・医療系・20代)
専門性と一般に通用する知識のつながりが少ない。民間企業まで働くのに必要なスキルも習得できるようにしたい。(国立・理系・20代・職業経験あり)
自分もそうだが英語の読み、書き、聞くことはそこそこ出来ても話すことが出来ない院生は多いと思う。(国立・理系・20代)
大学院終了時社会から求められる能力を有しているかどうか不安である。(私立・理系・30代・職業経験あり)
少なくとも自分の研究室で大学院教育を受けた覚えはない。

せめて教育、指導を受けたい。(国立・理系・20代)	大学院教育としては、各大学のレベルがあるのと同様に私の大学では平均以上の授業が必ずしもおこなわれているわけではありませんが、私は、それを補う意味を含めて学会への参加を重視しています。年間国内4~5.国外1~2(国立・理系・20代)
自由に研究が出来る環境ではありませんが、英語などの語学や会話などについて実践的な授業を設けて欲しい。特に留学生のいない環境ではなかなか英会話が上達しないので。大学の中ではなかなか外の世界に触れる機会が少ないので参加費用など負担してもらいたい。自分の研究へ活かせるような環境を作って欲しい。(私立・理系・20代)	規模が小さく地方の大学なので他大学の研究や環境を知る機会が少ない、その為学部4年生の研究者としての育成に不安がある。(公立・学際系・20代)
英語の能力をつけるカリキュラが欲しい。半ば強制的に。(国立・医療系・20代)	意外と同じ学科、同じ専攻の他の研究室との交流、情報交換が無い。よりスムーズな状況になれば良いと思う。(国立・理系・20代)
大学院に対して施される授業といったものは、本大学の場合皆無と言っても差し支えない。更に臨床講座である為診療等にも従事しなければならぬ為時間をやや削られているといってもよい。そして主任教授は与えるテーマを全く有していないにも関わらず、やみくもに大学院生を獲得する為何もすることが無くただ診療のみを行うだけで1~2年の時を過ごしてしまう。主任教授は大学院生を受け入れる以上、きちんとしたテーマを用意して迎えるべきであると思う。(私立・医療系・20代)	英語教育は大切であり、論文の書き方(英語)は実際指導教官がいなければ出来ないと思っています。研究には英語はつきものであり、英語教育のあり方を見直す必要があると思います。(国立・医療系・30代)
就職活動支援の充実。(国立・文系・20代)	博士前期1年時及び後期1年時における授業は単位取得が目的であり、あまり意味がないように思う。このまま同じような授業を続けるなら廃止して各人の研究や研究室のゼミなどに時間を使った方がよいと思う。外国人の教員を増やし英語を身近な存在にしたい。(国立・理系・20代)
研究テーマにあまり関連のない授業を必須とするよりは実験、研究の時間を増やすべきだと思います。(国立・医療系・30代・職業経験あり)	授業内容の一層の拡充が必要であると思われる。また院生(特に研究者を目指す)を受け入れる際には卒業後のケアをもう少し拡大し研究者養成の為の授業をきちんと確保すべきである。(私立・文系・20代)
作文(和・英)やプレゼンの指導をして欲しい。(私立・理系・20代)	合同ゼミなどによる大学内の教授に積極的に指導を行って欲しい。(私立・文系・20代)
語学教育の拡充。外国人講師を招いてのセミナーの充実を求めます。(国立・医療系・20代)	私が今受けている大学院は立ち上がったばかりですから全てはまだ模索中です。だからもっと合理的なカリキュラムを作って欲しいです。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
博士前後課程の講義が多すぎる。(国立・理系・20代)	本当に必要だと思われる授業が行われていない。(私立・理系・20代)
見学旅行、研究に関する研究活動が少ない。(国立・理系・20代・留学生・職業経験あり)	大学院前期の授業の内容が偏っている(うちの大学だけかもしれないが)例えば週8個授業があったら、6個くらいはプラズマ、量子などの粒子レベルの話で、動力システムを専門とする学生としては当時しんどかった。(国立・理系・20代)
日本人の学生に疑問する能力をつけて欲しい。(公立・文系・30代・留学生・職業経験あり)	開講科目が少なく選択の余地が無い。(私立・文系・20代)
中、高教育(システム)の延長のようである。(私立・文系・50代・職業経験あり)	自由に研究をやらせてもらっているのが非常に良い点だと思う。研究者相互の交流、情報交換の機会が増すことを望む。(国立・文系・20代)
研究科内の専攻について、社会学や人類学専攻の教室を増設してほしい。(国立・文系・20代)	施設面よりも授業の面で内容の拡充を図って欲しい。(国立・理系・20代)
就職を希望する職種で役に立つ講義を選択したい。現在、博士前期では、ほとんどの講義を受講しなければ単位が足りないため、 unnecessary 講義が多い。(国立・理系・20代)	もっと他の大学や企業などとの交流が活発に行われればと思います。あまりに閉鎖的なので自分の研究がどのような意味があるのか分からない。(私立・医療系・30代・留学生・職業経験あり)
英会話を習得する時間がなく、又それに必要な経済的支援が受けられれば良いと思います。さらに、自分で本当に明らかにしたいことは何かを見つけるためにもっと専門家に意見を聞く機会があれば良いと思います。(国立・理系・20代)	博士課程にまで必修の講義が必要なのだろうか?(国立・理系・20代)
大学内で、学部、学科の枠を越えた、共同研や授業がもっと盛んになったほしい。(私立・理系・20代)	他研究室との交流の場。意見交換等を設立して欲しい。(国立・理系・20代)
修士の間に勉強する時間がほしかった。毎日実験に追われていて、授業にもまともに出ることができなかった。(国立・医療系・20代)	自分が入学して半年も経たないので、ゼミの発表はまだほと

<p>んど担当していませんが、周りの学生（博士・修士）はゼミの準備であまりにも忙しくて自分の研究に専念できない状況が目立ちます。そこでゼミに出席し先生から研究方法の指導を受けながら、自分で研究できる時間を作って欲しいです。（私立・文系・20代・留学生・職業経験あり）</p> <p>大学院の教育は研究だけではなくて学生さんを合格的な社会人に育てる事も大事。（私立・理系・20代・留学生）</p> <p>大学院として殆ど機能していない。臨床業務が多く、研究に集中できない。（私立・医療系・20代・職業経験あり）</p> <p>専門分野の授業をもっと増やして欲しい。（国立・理系・20代）</p> <p>外国語教育（留学、国外学会発表等）の機会を充実してほしい。（国立・理系・30代・職業経験あり）</p> <p>現在、学習や研究条件に中国と比べるとすごく恵まれています。大学院生向けの教育プログラムの内容をもっと増やしてくれたらと思っています。（国立・医療系・30代・留学生・職業経験あり）</p> <p>遠隔地（東京）にいますので、なかなか指導教官と会えないことが気になります。（社会人コースのため）（国立・理系・50代・職業経験あり）</p> <p>中国では、大学院後期でも専門の授業があります。それがとても重要だと思います。日本の大学は、研究支援枠組みがうまくできていますが、基礎教育、教養の面ではもっと充実する必要があると思います。（国立・理系・30代・留学生・職業経験あり）</p> <p>調査手法（質的、量的含めた）の基本の習得は必要だと思う。大学院教育では、あまりできないように思う。（国立・文系・20代）</p> <p>授業は、自分の研究に無関係なものが多く重要ではなかった。（国立・医療系・30代・職業経験あり）</p> <p>英語の授業をしてほしい（英論文執筆のためのテクニカルなもの、英語でのプレゼンテーション）一般教養を身につける授業をしてほしい。（国立・学際系・20代）</p> <p>講義の単位数が多すぎて負担なのでもっと研究に充てる時間を増やす為にも減らすべきだと考えます。（国立・理系・20代）</p> <p>研究活動の合間に、英語を学習する時間的ゆとり、それを支援する体制がほしい（国立・理系・20代）</p> <p>文科系の「専門化」には、疑問があります。授業も技術的なものばかりじゃなくて、もっと知的なものがほしいと思っています。それくらいです。（国立・文系・20代）</p> <p>英語教育にかける時間が少ないと考えています。一般的な英語（あるいは英文）を用いた授業ではなく、より専門性に特化した英語教育も併せて行うべきではないかと思います。（私立・理系・20代）</p> <p>個人的な意見ですが（各大学院、各研究生によりますが）可能な限り個性を伸ばす教育を望みます。（現在在籍している研究生はそのような考えから選びました）（国立・医療系・20代）</p> <p>他大学や民間企業の研究者との接点、交流。（私立・理系・20代・職業経験あり）</p> <p>専門に関する講義をもっと充実して欲しい。（私立・理系・</p>	<p>20代）</p> <p>英語力が向上するようなカリキュラムにして欲しかった。（私立・医療系・20代）</p> <p>確かに一般的な教養を身につけたり様々な分野の研究について知ることはとても大切なことだと思うが、専門性を高めたいと考えて大学院に進学した者にとっては、他の分野の授業を受講することは苦痛だと思う。（私立・医療系・20代）</p> <p>海外からの留学生の話や聞くと、基礎をしっかりと学ぶ期間がありそれが嬉しいものだと聞いている。日本においても突然研究するのではなく、その様なコースワークが重要だと思う。（私立・文系・20代）</p> <p>博士課程後期に入ると全く講義が無くなる。先端的な研究ばかり行うのではなく、哲学や自分が専攻している分野以外の知識を教授していただける機会をつくって頂きたい。海外の大学との交換留学の制度を拡充して頂きたい。（もちろん経済的な支援が十分であることが前提です）講義では座学ばかりでなく、かなり実践的な内容も取り入れて頂きたい。（私立・理系・20代）</p> <p>英語の授業が全くないことに不満がある。英会話、論文作成、プレゼンテーションなどの授業をNATIVEの講師でやって欲しい。（国立・理系・20代）</p> <p>特に博士前期での授業が多い。またその内容も自分の研究に合わないものが多かった。（公立・理系・20代）</p> <p>指導教官との1対1の指導がたまにあるだけでゼミもないという現状をなんとかしてほしい（国立・文系・20代・職業経験あり）</p> <p>学部と院との交流がないのが問題。修士時代は単位を取るために院の授業に出たが必要なもの少なかった。むしろ学部の一部の授業の方が役立つ。院と学部で授業を分ける必要はない。これからの時代、学部、院のかべをなくし、もっと効率よく学べる環境が必要である。（私立・文系・20代）</p> <p>FRIENDLY DISCUSSION WITH SUPERVISOR IS VERY IMPORTANT TO GET GOOD RESULT. COURSE WORK IS ALSO NECESSARY TO MAKE THE BACKGROUND STRONG.（私立・理系・20代・留学生）</p> <p>助教授、助手が研究室にいないので、ゼミをする機会が少なく修士課程の学生への教育が不十分となる場合がある。（私立・理系・20代）</p> <p>修士課程において、入試及び教育が大変不十分であった。主にデータを産出する為の大学院であった。今後は個人のレベル向上の為にも教育と基礎を充実させた上で、大学院へ入学させ、学部で補うことができなかった内容を教育する必要があると思う。（国立・理系・30代・職業経験あり）</p> <p>授業の内容やおもしろさをもっと増やして欲しいです。（国立・学際系・30代・留学生・職業経験あり）</p> <p>大学院に授業は必要ないと思います。出席しないと悪い気はしましたが、充実したり自分自身で論文を読んだりする方がずっとためになりました。（私立・理系・20代）</p> <p>基礎科目のフォローを十分にして頂きたい。臨床系の研究は基礎に立ち返ることが多いから改めてそう思いました。（私立・医療系・30代）</p> <p>英語力をより高められるようなプログラムがあれば非常に</p>
---	--

<p>嬉しい。(私立・文系・20代)</p> <p>大学院での授業が学部での授業とあまり変化がない。学部での授業を基礎部分からもっと体系的に編成すべきではないか。(国立・理系・20代)</p>	<p>文系・20代)</p>
<p>学部1年の基礎教育と大学院(修士)1年の授業はあまり役に立たないと思う。専門の研究をする上で専門以外の知識が必要になることは確かにあるが、それは必要だというモチベーションの高まった状態でないと身につかず、学部1年や修士1年の時は結局受身になってしまい、単位をとるだけの勉強になってしまう。(私立・理系・20代)</p>	<p>研究に打ち込む雰囲気はよいと思うが、運動不足になりがちである。これは個人で対処するものかもしれないが、半強制的に運動する機会をつくってもよいと思う。(公立・理系・20代)</p>
<p>研究者あるいは大学院修了者の社会的立場について語り合う場が必要ではないかと思っている。不相应に高いイメージを抱かれるのも良くないし、大衆化あるいはモトリアムのイメージでとらえられてしまうのも良くない。起業や特許取得のような派手なことを語るばかりでなく、社会あるいは特定の組織や集団における研究者や研究を知る大学院修了者としての自覚を深められるような機会があるといいと個人的に思っている。このアンケートのような実態調査がその一助となることを期待します。(国立・学際系・20代)</p>	<p>大学院教育だけを改善する方向ではなく、学部時代より受身の形式での授業料と能動的な研究というものの違いを理解させるようなヒントを与えて欲しいと思う。研究というもののイメージが早くから出来上がることは難しいが、それが全くないまま、大学院に入学してしまい、研究活動が苦痛となるようでは意味がない。研究が社会にどのように役立っているかを示す授業などモチベーションを上げるような工夫で、能力ある人材に火を付けるような仕組みがあると、単なる修士論文を残す時間でなくなると共に、博士にもなる希望が見えると思う。(国立・理系・20代)</p>
<p>社会人教育、それも高齢者教育の必要性。教員→生徒の一方通行の教育ではなく、生徒→生徒の共感を呼び起こす為の媒体役としての教員参画の教育体制の樹立。(公立・学際系・60代・職業経験あり)</p>	<p>英会話教育の充実、学部時に充実しているものであれば、大学院ではそれほど必要ではないと思うが。(国立・理系・20代)</p>
<p>専門で使うツール(例えばプログラム言語の仕組みや実験道具の紹介など)を説明してもらえる機会がほしい。いちいち自分で専門以外のクールを勉強するのが面倒くさい。(国立・理系・30代)</p>	<p>大学院に教育があるのか?必要なのは本人の意識なので特に授業は必要なし、できれば教員との定期的な話し合いがあればいいとは思いますが。専門についての英会話教育とかならあと助かる。(国立・理系・20代)</p>
<p>大学院後期課程において、全員でそろって受講する講義が必須単位となっているが他分野の内容まで時間を拘束されるのでもう少し柔軟なカリキュラムにして欲しい。外国との交流にもっと重点をおいて欲しい。(私立・医療系・20代・職業経験あり)</p>	<p>英語の授業がもっとあればと思います。(国立・理系・30代・留学生)</p>
<p>論文執筆に不可欠な知識の中でも、比較的一般的な(統計に関する。英語を話す)授業をもっと充実。実践、開講させて欲しい。独学では学習の効率が非常に悪いと思います。(国立・理系・30代)</p>	<p>授業内容を充実して欲しい。(国立・理系・20代)</p> <p>授業が形骸化している。(国立・医療系・20代・職業経験あり)</p>
<p>カリキュラムは一応存在するが、実際所属した講座によって研究、臨床への参加は様々で、全く制度化されていない。ある程度の統一性は必要に思う。(公立・医療系・20代)</p>	<p>問題だと思っているわけではないが、大学院で教育は行われていない。(私立・理系・20代)</p>
<p>博士前期に講義に関して感じたこととして、教授の研究成果の紹介ばかりで実際に自分の研究生活に役立ったというものは何もなく。研究における物の考え方、実際に得られたデータの解析(特に統計学的処理など)を指導しておいた方が後の研究者育成にはいいのではないかと感じます。(私立・医療系・20代)</p>	<p>博士後期課程では授業がないのですが、学会において英語で話したり英語で論文を書いたり語学力が必要なので外国語の授業を開講してはどうかと思う。(公立・理系・20代)</p>
<p>自分の専門分野に関する講義が少なすぎる。やはり他大学の講義などを受けれる単位互換のようなものがあればいいと感じています。(私立・医療系・20代)</p>	<p>大学院講義を充実させて欲しい。つまり自分自身が今までやってきた研究内容の紹介をしている講義が多い。(国立・医療系・20代)</p>
<p>地方の私立大学から国立に進学したが、入学後要求されている専門知識の水準が私立で習得した水準よりはるかに高かった。その為、知識の不足を補う必要が生じたが公的にフォローする制度がなかったため、指導教員のこねで社会人修士学生向けのプログラムに参加させてもらっている。(国立・</p>	<p>もう少し授業の選択を増やして欲しい。(国立・文系・20代)</p>
	<p>シラバスの内容があまりに形式的である。博士後期課程は自分で研究を進めていくので、授業が少ないことは理解できるが実際の授業内容とかけ離れておりシラバスが意味を成していない。(国立・理系・20代・職業経験あり)</p>
	<p>大学院博士前期課程での授業がほとんど役に立たないと思う。また時間が取られるので、実験を行うのが遅くなるのもっと充実した授業を行うか、もしくは授業を行わない。少なくするなどして欲しい。(国立・理系・20代)</p>
	<p>大学院の学生はマスターも含めて時間的、金銭的に余裕のある人が殆どいません。その割にバイトができるようにまとまった時間が取れるようカリキュラムや授業が編成されておらず、少々窮屈に感じることがあります。(私立・学際系・20代)</p>

とにかく現在の院生は文章の書き方（論理的考）学会説などへの投稿（意欲）に欠けてると思う。このような基礎的教育を行う必要がある。それに関連して社会人と学生を授業内容等授業時間割を分けて欲しい。博士号の取得は安易にして欲しくない。しかし課程博士と学術博士の2つの種類があるのはわかりにくい。必ずしも取得後に第三者が判断できないのだから。ロースクールを終了して博士号というのもよくわからない。博士号に対する一貫性がないと感じる。（私立・文系・20代・職業経験あり）	り） 博士後期課程においても授業数が必要以上に多く、論文作成に十分な時間を取ることがやや困難に感じられる。（国立・学際系・20代）
専攻の先生の専門が多様であり大学院の授業では様々なテーマを学べたが、自分の専門や興味ある分野の授業が非常に少なかった。また学生が主体的に参加できる（授業で討論したり、発表する）授業がもう少しあってもよいと思う。（国立・理系・20代）	大学院というより学部で学習すべきことかもしれませんがプログラミングの講義がもっと必要だと思います。研究ではプログラミング能力が必要ですが、実際授業以外に独学したもの以外は満足にプログラムを組めず卒業論文、修士論文のために初歩的なことから学ぶ人が多いようです。（国立・理系・20代）
もっと講義を教育的要素の強いものにして欲しい。（国立・理系・20代）	日本語はあまりよく解からないので、英語で講義や研究を受けることが望まれる。（国立・理系・30代・留学生・職業経験あり）
現在在籍している専攻は多様な学科を総合したものであるが、その為に大学院の講義に専門性が弱いものが少ないのが不十分である。（国立・理系・20代）	博士課程に進学する学生が少なく、大学院全体として博士課程の学生を育てるカリキュラムが無い。また単科大学である為他学部との交流が少なく、より広い知識の交流やディスカッションが行われていない。（私立・医療系・20代）
新設間もない研究科では、制度的に整っておらず院生は研究科の方向性や運営に明るくない事から非常に不安を持ちます。特に学際的な教育を目指す新設大学院では、教育のコンセプト自体不明確で研究テーマの選択や、論文執筆において専門性を要求される為、何の為に学際的視野を持つように指導されたのか納得ができないという意見を多く聞きます。まずは専門的分野を身に付けてから、学際的な視野を持った大学院教育にステップアップするような体制、制度を整えるよう切に望みます。（私立・学際系・20代）	外部から実社会で活躍している方のお話を聞く機会が増えると思う。（国立・理系・20代）
もっと頻繁に研究で活躍している研究者を招いて講演及びディスカッションの場を設けて欲しい。（国立・医療系・20代）	博士の学生は研究室にこもりがちで外の世界（他分野は特に）が見づらいので、博士の集まりみたいなのが大学単位であると良いと思います。（国立・理系・20代）
博士後期課程を基本的に3年で終わるという前提の下でのプログラムにして欲しい。場合によっては5～6年かかるが、長くいる意味はないと思う。（国立・理系・20代）	学内での研究会等を増やして欲しい。（私立・理系・20代）
カリキュラムをしっかりしてほしい。（私立・医療系・20代）	修士に入学して以来、授業等が修士1年次にしかなく、しかも、それらの授業も自分の研究に対し、あまり直接的に関係のあるものが少なかった。ほとんどの時間を自分の実験に費やし、指導教官も学生の出す研究成果しか見ようとしなのが、現状である。もっと一人一人の学生の能力を総合的に開発するための教育を切望します。今までは、企業で成果をだすために仕事をしているのと同じだと思います。（国立・理系・20代）
大学院の授業の内容と質を充実させてほしい。英語で書くこと、話すこと、プレゼン能力を高める教育を充実させてほしい。（私立・理系・20代）	数学や物理学等は自然から観察したものを体系化されているものとみなすことができると思います。学部での授業でこういった自然現象を紹介しながら数学や物理学を教えたほうが、学生がより理解できると思います。そして、教官がより丁寧に教えてほしいです。（国立・理系・20代・留学生）
専攻科目について系統立った、専門家による講義が無い。臨時開催講義のみ（国立・医療系・30代）	アメリカをまねろとはいわないがもっと授業があっても良いと思う。（国立・理系・20代）
語学教育の充実（国立・理系・20代）	博士前期課程では、取得単位が多いため、修士論文作成のための文献購読時間が限られてしまうこと→修士論文の質が低い結果を招く。大学院の授業は少人数のため、雑談になりやすいこと。高度な専門知識を得る機会（時間）が無駄になる。（私立・文系・20代・留学生）
安全教育をして欲しい。（国立・理系・20代）	学部から直接に院に進んだ学生には研究を自力でマネージメントすることがむずかしい学生も少ない。かといって大学院レベルでは授業での指導も多いとはいえない。院生としての総合力を養うため、たとえばイギリスのTAUGHT COURSEのようなものがあればと考える。（国立・文系・30代・職業経験あり）
院生は学部生に比べて受けるプレッシャーの度合いがかなりきつい。MIなどは特にそのギャップにとまどうし、それ以外の学年でも精神的に深刻な状況はいつでも陥いる可能性がある。カウンセリング等へのアクセスを整備する必要がある。（国立・文系・20代）	主に社会人のための修士認定制度があるのは良いが、入学後のフォローがほしい。修士生活を経験してことで（知識とはべつに）身につくものが欠けているため、入学後のスタートが遅れてしまった気がする。これは社会人入学者全般に言え
カリキュラム、シラバス等の内容が充実していない。研究を行うための基礎的な講義、研究計画書等の書類の書き方、提出方法などのガイダンスがなく放任状態。水準もわからないのでどの程度の論文を要求されているのか理解できない。指導体制を整えて欲しい。（私立・学際系・50代・職業経験あり）	

ることかもしれないが。(国立・学際系・40代・職業経験あり)
アカデミックさと実用性がほど良くバランスされた授業が少ない。役立て方、応用の仕方(研究として、実用性として)がわかりにくい。(私立・理系・20代)
文章をかく特訓や文献の効率的な整理の仕方など実際的なことを知る機会があればいいと思います。(私立・文系・20代・職業経験あり)
最新の知識や研究の働きをもっと院の教育システムに取り入れてほしい。(国立・理系・20代・留学生・職業経験あり)
博士後期課程のカリキュラムを整備してほしい。たとえば、時間割を配布するならば、きちんと時間割通りに授業を開講する。時間割通りでないならばその旨を記入してほしい。(国立・学際系・20代)
授業内容の充実、指導教官と議論の機会を増やす事。(国立・理系・20代)
・現在の研究環境は満足しているが、学際的研究科においては自分の専門領域と異なる授業が多く、他研究科の院生に比べると専門性という点で若干不利なことがあり、これからの学部研究科のカリキュラムのくみ方はこれから改善して欲しい点である。・日本の博士課程の院生はとくに文系では放任されているが、アメリカのように基礎理論などを体系的に教えることも必要と思われる。(私立・学際系・20代)
個人の発想を大切に作る風土が育ってほしい。(国立・医療系・20代)
講義が2年に1回(隔年)でしかひらかれないものがあるので、毎年開かれるようにしてほしい。(国立・理系・20代)

3. 研究指導のあり方・内容

論理的思考を表現する方法(論文の書き方)の指導、授業をして頂きたい。(国立・理系・20代)
私の考えとしては、4年生は研究に必要な基礎的知識及び基本的な実験操作を学び、修士課程から本格的な研究に入れたいかと思う。現在私の研究室ではあまりに実験のみに偏っている感がある。実験しなければ結果が出ないというのはわかるのだが。(国立・医療系・20代)
指導教員との相談が無い為、特に教育を受けていない点。(国立・理系・20代)
研究方法の指導が少ない。学外との交流が少ない。(国立・学際系・20代・留学生)
テーマが自由に選ばませんでした。自分の専門分野(整形外科)とはあまり関連のないテーマで研究しています。将来に生かせる可能性が低いです。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
指導教員との研究について相談にのってもらう時間を増やしてほしい。(私立・理系・20代)
シンポジウムなどの参加の機会が少ない。研究についてしっかり相談するチャンスが少ない。(国立・医療系・20代)
D論文の指導方針、方法等を確立して欲しいと思いま

す。(国立・文系・20代)
論文投稿早く論文をしっかりと添削してもらえるような人がほしい。論文を書く上で英文チェッカー代、国際学会での補助等が研究費としてもらえるようなシステムにしてほしい。(私立・理系・20代)
博論、研究指導を改善する必要がある。教員と研究領域が異なっても理解しようとする姿勢が求められる。(国立・文系・20代)
指導教員との相談の時間が殆ど無い。公私共に相談ができずストレスが溜まるだけ。気分転換の時間が全く無い。(私立・医療系・20代)
指導教官が院生に対し責任ある指導をして頂きたい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
外部の専門家への相談(国立・医療系・30代・職業経験あり)
それぞれの大学院におけるスケールビジョンを明確に提示した上で院生に対する指導も行っていほしい。(公立・文系・20代)
近頃、大学(学部)で授業に対する評価が行われているが、大学院においても指導教授の研究指導にたいする評価が行われるようにしてほしいと願っています。(修士の学生との話し合いで、論文を読む環境が作られていないことがわかりました。修士論文を提出した学生の中には、論文を読んでいる人もいるとのこと)文献を正しく読む力、書く力は、指導教授がどのような指導を行うかにもかかってくるのではないかと思います。他大学から入学して感じたことは他大学との研究交流が皆無であること。(私立・文系・20代)
博士後期課程在学の学生ほとんどは学位取得を目指していると考えてます。そのためにも指導教授は、学位を学生に取得させるべく熱意と情熱をお持ちの先生が必要かと考えてます。どうしても御高齢の先生の場合難しい部分があるので(特に最近の動きにキャッチアップしてゆく点)ないかと思われま。私は国税庁を退官後、会計学に興味をもち今話題の「税効果会計」について研究しておりますが世界の研究のレベルは日進月歩で半世紀前の考え方は通用しなくなっております。但し、現在の指導教授は「教師」という面からは抜群によくとても感謝いたしており大好きな先生であります。(尊敬いたします)(私立・文系・50代・職業経験あり)
論文を書くために、指導教官と話し合う時間が取れない。取りづらいうほど、教官が忙しくて困っている。制度上ある程度の時間、教官を占有できるようにしてほしい(国立・文系・20代)
主ゼミでの所属人数が多く(10人以上)マスター生が多いので、自分の研究についての指導教官が指導できない状態にある。大学院の拡充化に歯止めが効かれば良いのと思う。(公立・文系・20代)
D論の予備審等で担当指導教官が自分の学生に色々質問している光景をよく目にしますが、普段の指導が出来ていない証拠で改善して欲しいと思う。(国立・理系・40代・職業経験あり)
空きポストを作らないこと。抽象的な研究指導をしないことを希望します。(国立・文系・20代)

学位取得までの流れの確立と指導教官がそれを把握していること。研究しない教官がいる。他研究室や他大学教官からの指導を受けられる体制。(国立・学際系・20代)
指導教員との個人授業が少しでも多くなれるように。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
指導教官が論文を見てくださる時間がない(国立・理系・20代)
指導教員からの指導を受けたいです。(私立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
経済的に苦しい状況で研究活動以外の時間は働きたいのだが、無駄に研究室で時間を過ごさなければならぬことが多い(研究後の小宴会や雑談など)為、研究以外の時間の使い方について本人の裁量で自由にさせて欲しい。とにかく論文を出せ、インパクトファクターを稼げと言われるが論文の書き方、研究成果のまとめ方など具体的な指導があまり無い為、各自よくわからないまま何となく論文をまとめる様なのもう少し指導があったらと思う。(私立・医療系・20代)
ほぼ確実に学位が取れるテーマを与えて欲しい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
論文博士でないのだから、より良い具体的な指導があるべきと思う。(国立・学際系・30代・職業経験あり)
大学院生は今以上に研究の為の時間を持てるようにすべきである。また、指導教員は研究のデザインingの段階から十分な指導をすべきであると考えている。(私立・医療系・20代)
・指導教官が多忙で、なかなか効率よくアドバイスを受けられない、と感じることがあります。・(今の学校では問題ありませんが)一部の教官は最低限の基礎、概論さえもおろそかにし、自分の得意分野に関する文献講読だけで(しかも読解のみで解説なし)で済ます傾向があるのでは?研究者ではあるが教育者ではない、という態度をとられているようで、教官としてあまり意味がないと思います。(国立・文系・20代)

4. 教員・研究室・学生

私の通っている学校では、自由さがありますが、それが研究の際には、不満として残ることはありません。しかし、研究室や部屋での付き合いが「自由さ」によってエスカレートし、勉強の妨げになることもあります。(国立・理系・20代)
教官の人間性が学生の研究に反映されてしまう。(国立・理系・20代)
論文を書くという意欲が低すぎる。経済学系の研究科としては十分な研究環境を与えられているのだから、それに甘んじないで欲しい。(公立・文系・20代)
「論文を書け」と毎度のように言われるのが苦痛。確かに尻をたたくのは必要だが、顔を合わせる度に言うのはやめてほしい。自分のペースでやらせてほしい。(国立・理系・20代)
助教授が批判しかしてくれないのが不満です。(国立・医療系・20代)

博士課程後期の学生があまりに少ないので、大学院に於ける研究主体の活動という印象が少ない。学内にとどまらず、学会等に積極的に参加するように学生の意識が改善されたら良いと思います。(私立・理系・20代)
修士から博士課程にほとんど何のハードルもなく進学してくる学生が多く、博士になる、プロフェッショナルになるという自覚があまりにも足りない。特に同じ大学で進学するような学生に対しては「本当にこの仕事につきたいのか?」ということを十分に考えてから、進学してほしい。なんとなく適当に年を重ねるようなアホな学生に博士号を与えてほしくない。(国立・医療系・20代)
他の環境を経験した事がないので、限定的な範囲での見解ですが、大方は自分自身の問題であると考えている。(私立・文系・20代)
大学院に入学もしくは進学する際に学生の資質(特に研究に対する姿勢、考え方、目標など)をちゃんとチェックする体制を作るべき。あまりにも研究をしない院生が多すぎ。このような院生に足を引っ張られている院生がたくさんいる。これによってグループ全体の雰囲気、モチベーションが盛り下がっているのは否めない。(国立・理系・20代)
大学院生を指導できる器量が無い教員、あるいは研究内容を理解できない教員がいつまでも大学に居座っているのでは発展はないと考える。院生は指摘もできない教員の実績をあげるために存在しているのではない。(公立・理系・20代)
Dが少ない。(私立・理系・20代)
TA等の仕事が多い。(国立・文系・20代)
当大学院においては、全体的に教員の数が少ない。従って、論文作成等において相談する機会が限られます。結論としては、教員の数を増やす等の改善を行っていただきたいと思っています。(私立・文系・20代)
大学院にはやる気のある人だけきてほしい。目的意識も無くただだらとる学生もかなりいるので、大学院の実態は平均では出てこないというのはそういうことです。受け手のほうに問題がある点で、うまくかみ合っていない面もますます増えるように思います。(国立・理系・20代)
教室の雑用が多すぎる(週に6時間以上)拘束時間が多いこと(9時~17時)その為実験を行うと毎日終電になり帰宅が午前2時になる。(国立・医療系・20代)
各種会議に無駄が多すぎ、研究時間が十分に取れない。解らないことを教えてもらうような雰囲気でない。大学院が研究機関であると共に教育機関であることに教員は留意して欲しい。経済支援を充実させて欲しい。(国立・文系・30代・職業経験あり)
社会人大学生との共生。利己的大学院生の増加。海外学会への参加者減少。(私立・文系・20代)
他大学との交流が少ないように感じます。(国立・医療系・30代・職業経験あり)

<p>授業の充実（受ける意味がほぼ皆無）自分で出来るような内容の授業ばかり。刺激が無い。教官がほとんど筑波出身の為、教官陣のヒエラルキーが固定化、硬直化しており非常に閉塞感がある。風通しが最悪。若い教官が自由に発言できる雰囲気がない。5ヶ年一貫の修士論文がほぼ「フリーパス」状態。ろくに審読、評価もしないくせに「投稿しろ」とか言いやがる。簡単に言ってくれるぜベイバー！！教官が自分が教育者であるという自覚が低すぎる。（国立・理系・20代）</p>	<p>当大学では自由な学風という概念の下、大学院教育に関わる教員の教育スキルが低いという印象を受けました。全国の大学でも同様だと思いますが大学院教育、研究期間であるのだから教員の教育レベルを上げる必要があると思います。研究費等は地方大学より恵まれています。私は研究者だという教員ばかりで困ります。（国立・学際系・30代・職業経験あり）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>研究室内の人間関係など、研究以外のこの気を使わなければならないこと。教員同士のコミュニケーションが少ないこと。（教授の指示と助手の指示が正反対であったりして研究活動がなかなか進まないなど）（国立・医療系・20代）</p>
<p>大学院教育において指導教員のための雑用が多くて、しかも全く研念と関係ない仕事が頼まれ、実際に博士課程研究に集中できない状況にある。したがって、指導教員の仕事による負担を軽減すると同時にさらなる指導への強化が望ましい。これは、留学期間が限られている留学にとって特に重要だと思う。（国立・文系・40代・留学生・職業経験あり）</p>	<p>系統的な授業が少しあって欲しい。院生の数を医局の勢力争いに使うのはおかしい。（国立・医療系・20代・職業経験あり）</p>
<p>大学院教育において指導教員のための雑用が多くて、しかも全く研念と関係ない仕事が頼まれ、実際に博士課程研究に集中できない状況にある。したがって、指導教員の仕事による負担を軽減すると同時にさらなる指導への強化が望ましい。これは、留学期間が限られている留学にとって特に重要だと思う。（国立・文系・40代・留学生・職業経験あり）</p>	<p>研究室の教授、助手は非常に研究熱心で夜遅くまで学生が書いた論文のチェック、学会や申請書類の作成、実験の補助を手がけ頭が下がる思いである。しかし、昨年から研究室に来た助教は昼間に寝てばかり、また学生の面倒も殆ど見ない。研究室の事務的作業を教授、助手が行っているのに殆どしない。（パソコンがまともに使えない、かつ学が意識も無い）等で学生達全員が呆れてる状態で、自分が所属している研究室での唯一の欠点である。独立法人化役はこの様な教官が平気で存在するような事無いようにして欲しいと思いますし、逆にこの様な状態では独力化もやむを得ないと思います。（国立・理系・20代）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>副指導官の役割、選定方法などの検討（国立・文系・30代・留学生・職業経験あり）</p>
<p>大学院教育において指導教員のための雑用が多くて、しかも全く研念と関係ない仕事が頼まれ、実際に博士課程研究に集中できない状況にある。したがって、指導教員の仕事による負担を軽減すると同時にさらなる指導への強化が望ましい。これは、留学期間が限られている留学にとって特に重要だと思う。（国立・文系・40代・留学生・職業経験あり）</p>	<p>医局の中が統一した見解を持ち最先端の医療技術を目指す。（私立・医療系・20代・職業経験あり）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>アカデミックハラスメント、セクシャルハラスメントの対応。大学教員の資質、モラル。現実に人間的、精神的におかしいと思われる教員が存在している（公立・理系・20代）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>大学院大学である割には、人格、研究能力に問題のある教官がいる。そのような教官の下に所属することになったら、悲惨としか言いようがない。本研究科は、博士論文執筆許可を出すハードルとして、海外の査読付き学術雑誌への掲載を義務づけているが、教官でそのレベルにあるものは、半数くらいしかいない。その一方で紀要3本で教授へ昇進する教官がおり、ダブルスタンダードが甚だしい。大学院大学は、教官をパーマネントで採用すべきではない。（国立・文系・20代）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>研究機関なのか教育機関なのか大学か大学院の役割ほどのようなものであるべきなのでしょうか？社会性のない研究者も多く見られます。教育という観点を失っていないだろうか。（国立・理系・20代・職業経験あり）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>計算機、ネットワーク管理などの雑用が一部の学生にのしかかっているのは可哀想だと思います。専任のスタッフをあてがってコンピューターにまつわる負担を軽減してもらいたいです。（国立・理系・20代）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	<p>現在の大学院教育には改善点はありません。修士の学校ではセクハラを受けそれが原因で退学しています。そういった環境面の整備の方が重要です。教官の資質をもっと問うてほしいのと、学校事務の人材、やり方にとっても不満があり、時に研究のさまたげになります。（国立・理系・30代）</p>
<p>大学院で教えていらっしゃる教員のレベルアップが非常に重要だと思う。大学院を出た事も、博士学位もお持ちでない教員は大学院に専任すべきでないと思う。（私立・文系・30代・留学生）</p>	

<p>教授を頂点とした組織であるのは分かるが、あまりに教授の権力が強すぎる。実力のある先生が教授の下請け実験に時間をとられているため、教室が不活性化している。(国立・医療系・20代)</p>	<p>理系、特に実験系分野全般に関して(研究室による差はあるかもしれないが)午前前から夜遅くまで作業をして、深夜や朝に帰るといった生活をする人が多く社会人等「実社会」の人間との生活や思考がずれている。またその生活が当然でそうあるべきとの風潮がみられる。(国立・理系・20代)</p>
<p>大学病院での労働はアルバイトとは違い無償であるのに労働内容、時間がキツイ。研究をする体力や時間が足りなくなる。改善してほしい。(私立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	<p>アカデミック、ハラスメントに類似している事件をたびたび耳にする。心が痛みます。(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>生徒に対する扱いが個人別で違いすぎる(国立・理系・20代)</p>	<p>装置、備品等の管理は学生のみに行わせないで研究に集中しやすい環境を望む。技官等適性に欠ける者は配置や職種の変更が必要であり、流動性がより求められる。(国立・理系・30代・職業経験あり)</p>
<p>社会人大学院(病院勤務者のための)を重視するあまり、ほか一般の大学院生の講義も全て土、日に予定されています。結果として休みはありません。またその土日の講義も脈絡なく単発のもので講師も横の連絡なく行っているため出席だけが重要という空虚なもので形式上のものである。講義をするならばしっかりとシステムでたものをすべきだし講師陣からして意義が乏しいと考えるならば廃止した方が良く、まさに形だけの大学院制度で臨床系の院生は月に20日以上アルバイトに出る要員として医局につながれたレンタル的存在です。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	<p>大学の研究室の人的、物的充実を図って欲しい。外部の研究室と比較してかなり貧弱です。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>大学院生は積極的に外部の院生と交流を深めるべきであります。例えば研究会への参加などあります。外国語文献を読まない(読もうとしない)院生がまま見受けられます。これは、大学院側に求めるべきことではありませんが、研究能力を高める為にもチャレンジ精神を向上させることが院生には求められ(本来、そういったものは持っているはずですが)その手助けを大学の教員は全員で取り組むことです。教員が怠けては院生も誤解しかめませんから(私立・学際系・20代)</p>	<p>指導教官の指導力に不満を感じている。(国立・医療系・40代・職業経験あり)</p>
<p>大学院入学後、授業がない。先生が忙しすぎて十分な教育を受けられないばかりか、先生の仕事の手伝いや雑用が多くて、自分の時間を確保するのも大変。金を払って勉強に行っているのだからもっと勉強できる環境がほしい。まわりの学生のレベルが落ちていて学生の面倒まで見なければならぬ。(国立・理系・20代)</p>	<p>しばしば指摘されていることであるが、一般世間、民間との意識、感覚のズレを感じることもある。教職員の側へ言えば、学生へのサービスの意識、又特に教員に関しては、自らを研究者としてのみ考え、教員であることを忘れてしまうような発言もあると聞く。同じことが学生にもあてはまり、自らの持つ知識を世のために生かす、という視点を持つ者は多くないと考える。今後、必ず改善すべき問題であると信じる。(国立・文系・20代)</p>
<p>指導教員(助手)が学生を指導する気が全く無いのが問題である。(国立・理系・20代)</p>	<p>指導教官が個人の好みで学生を振り分け、一部に対して指導を全くしない。(国立・文系)</p>
<p>研究室での4年生の配属方法に問題があり、共に研究する仲間としてふさわしくない学生が入ってくる。大学院生の枠が狭く有能な人材が他大学の大学院に流出してしまっていること。教育云々の前にハコとしての研究室運営がしっかりなされて欲しい。(私立・理系・20代)</p>	<p>雑用が多すぎるのは精神衛生上よくない(国立・理系・20代)</p>
<p>博士論文は学会全体で指導する体制がなければ完成させるのは難しい。指導教授にやる気は無いし、自分の研究領域からもかけ離れている。大学のポストが公募にならない限り、私のように指導教授が教育にも研究にも熱意を完全に失っている場合は就職できず、どうにもならない閉塞状態に陥ってしまう。(私立・文系・30代)</p>	<p>指導教員の数が少なすぎる。助教や講師の枠を増やして1研究室に少なくとも2人いて欲しい。現在私の研究室は教授しかいない。(私立・理系・20代)</p>
<p>教育を受けているのか無給、無休の労働をしているのか疑問を抱く瞬間が多々ある。ある程度の時間的ゆとりも必要かと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>教育の数が少ないため自分の研究に対して指導をしてもらうことが少ない(時間的な問題ではなく、同じような専門の教員が少ない為、より深い指導が受けられない)(国立・文系・20代)</p>
<p>教育を受けているのか無給、無休の労働をしているのか疑問を抱く瞬間が多々ある。ある程度の時間的ゆとりも必要かと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>大学教員(科学系)半数は一般社会ではとても生きていけない精神的に問題のある人物です。その様な人物が「教育」を行うことができますか?学生が充実した生活を送れないのは、そういうとこに問題があるからだと思います。(国立・理系・20代)</p>
<p>教育を受けているのか無給、無休の労働をしているのか疑問を抱く瞬間が多々ある。ある程度の時間的ゆとりも必要かと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>所属する研究室によって指導教員の質に差がありすぎる。博士後期課程の1、2年には、年に1回自分の研究テーマと関係した論文を読み整理して発表する機会があるが、その準備にかなりの時間を取られる。能力の向上に役立たない訳ではないがもう少し負担を減らして欲しい。(私立・医療系・20代)</p>
<p>教育を受けているのか無給、無休の労働をしているのか疑問を抱く瞬間が多々ある。ある程度の時間的ゆとりも必要かと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>明確な指導体系がなく、研究しづらい上にこなさなければいけないバイト(当直・日勤)が多く、雑用係のような気持ちです。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>教育を受けているのか無給、無休の労働をしているのか疑問を抱く瞬間が多々ある。ある程度の時間的ゆとりも必要かと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>教員等の視野の狭さ。人間の小ささ。社会経験のなさを改善してほしい。(私立・医療系・20代)</p>

学生本人の努力は必要であるが、教員が楽をする傾向にあり失望感を抱いている。(私立・理系・30代・職業経験あり)	最近の院生は入学後にテーマを設定する学生が多いように思える。またこの不況の中景気回復の時期を見込んでその場しのぎで院への入学を希望する学生も増えているため、学生一人一人または全体の研究の専門性が希薄になっているように思える。(私立・理系・20代)
授業料を支払い、大学院に通学している学生であり、研究者であるので有給の助手以上の講室内の雑用や、学生教育をする必要はないと考えるが、現実的にはただの使役夫であるのでその点が問題であると考えます。講室内の研究が行ったことのある研究手法しか大学院生は用いてはならず、新しい研究を行うと「出すぎている。そこまでやらなくていい。」と中断させられます。また専士号が取得できれば良いのだろうという考え、研究したいという気持ちを理解してもらえず雑用におわれています。(私立・医療系・30代)	より高度な専門能力を得る場として大学院を考えると、大学院生自身のモチベーションが低下しているように思う。単なる資格として大学院修士、博士を考えている学生が少なくない。そういった院生が自分たち自身に誰も負けたいと思える技術を身に付けることの方が大学院に必要であると思う。(私立・理系・20代)
学校サイド(含む指導員)の大学院生に対する考え方。特に大学院生は無給の助手であるといった考え方。それにより研究を指導するとゆうことの欠落。博士号はその指導員がやっていることを発表させることでとらせようという考えがあるように思うので。(私立・医療系・20代・職業経験あり)	休みが無いこと。(国立・理系・30代・留学生)
教員の質の向上。レベルに差がありすぎる。明確な指針と職業(就職先)の安定は大学院生の意欲を向上させると思えます。(私立・文系・30代)	実験や論文執筆を行うにあたり、学生は大小様々な疑問点、問題点に直面するが、その解決を学生まかせにしていることが多いように思われる。当然このような問題点に対して試行錯誤しながら解決していくことは博士号取得のために必要不可欠な作業であり、また学生が教官に相談すればのってくれるが大学院教育の中に、教官から学生に対してこれらの問題点に対処するためのヒントになるような知識、技術の教育をもう少し盛り込んでもらえたらと思う。(国立・学際系・30代・職業経験あり)
研究以外あるいは指導教官自分の仕事をさせること。(国立・理系・30代・留学生・職業経験あり)	徒弟制度的な色合いが強い。つまり学位の取り易さはついた教官やその学生の個人的な資質に大きく依存し、システムとして効率よくアカデミーを学ぶ体制になっていない。徒弟制も悪くないがバランスが問題である。将来に関する情報が不足している。具体的にどのようなハードルを越えればよいかははっきりしない為に数年後のセルフイメージが描きにくい。ひいては研究の非効率につながっている印象がある。以上はあくまで一般論ですが、日本の学術研究のより一層の飛躍、リソースの有効活用に少しでも役立てて頂ければ幸甚です。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
何よりも雑用が多すぎる。本当、自らが学ぶため、大学院に入ったが本来ならやとわれている教員が行うべき雑用の多くが、大学院生へとむけられたいるため研究自体が進まない。又、学費をおさめていながら助手と同等以上の出費と労働を自分の研究以外のために行い、研究が進まないなら留年も考えなければならぬのは非常に腹立だしい。大学院生の学ぶ権利を守ってもらいたいと思う。(私立・医療系・20代)	論文を書いているときは、研究室行事や授業を休みたい。論文を書いている最中に研究室の新生の為の入門講座をさせられると冬休みがつぶれてしまうのでやめて欲しい。(国立・文系・20代)
大学院生の意見を聞いて欲しい。特に自分の研究内容に関する提案や戦略を聞き入れチャレンジさせて欲しい。与えられ、指示されたことだけやるのが大学院生という環境や雰囲気は、非常にモチベーションが下がる。卒業後、一人の研究者としてやっていけるようなアドバイスも欲しい。(私立・医療系・20代)	指導教員の能力向上。(私立・理系・20代)
留学生が多いと大学院教育のレベルが下がるという問題点があると思います。(私立・文系・40代・職業経験あり)	おそらく天才にとっては拘束されないのが非常に良い環境だろうが、大多数の一般の人にとっては道を選んだり研究するには、あまりに情報(例えば指導など)が少なすぎると思う。(国立・理系・20代)
指導者が自分の業績しか考えず、大学院生を人として扱わず実験マシンとしか使わないという話を聞いたことがある。大学は教育の場であるということ認識してもらいたい。(私立・医療系・20代)	大学は教育機関なので優秀な研究者だけではなく、教育者も必要であると思う。この点が今の大学では不足していると思われる。(国立・医療系・20代)
大学院の学生という立場があまりにも人それぞれであるので、統一されていないことが不満に思えるときがある。大学院教育は本当に研究や知識を吸収できる場なのか疑問がある。院生と教育的指導者ももっと距離をおいた環境も必要かもしれない(研究以外でも)監視役(その学校以外の人)の必要性を感じる。(私立・理系・20代)	指導教員の数が少ない。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
日本の大学院は教育機関なのか研究機関なのか不明確である。教育機関であるならば、教官の教育能力に疑問を感じる。なぜ日本の大学の教官は教職を受ける必要がないのか?(国立・理系・20代)	他の院生との連絡網がないので、研究に幅が出ない。(私立・学際系・40代・職業経験あり)
	自分の研究に費やす時間が欲しい。(国立・医療系・30代)
	社会人、留学生との学力差。大学院の授業レベルが社会人や留学生の増加に伴い低下してきている。学校側は学生ひとりひとりに対し責任を持って欲しい。(新入学生の面倒を在校生が見るというのはおかしい)入学させた責任は学校にあるはず。TA等のアルバイト先の提供がもっと増えると良い。

現在の条件は非常に悪い(我が校のみかもしれないが、自分の学部とは関係のない学部のTAをさせている)(私立・文系・20代・職業経験あり)	一般的に現在の大学院教育は「教育」というよりは徒弟制度に近く、積極的な教育を軽視する教官が多いような気がします。単にアシスタント的に使われて研究のモチベーションが下がっている学生が研究科を問わず多数見られるのが現状です。学生の側にも問題はありますが、教育する立場の人のもう少し責任感を持って欲しいと思っています。(国立・学際系・20代)
指導教官の態度。研究ばかりやっていて教育をしてもらえない。研究を結局自分一人の力でやらざるをえない。(国立・理系・20代)	教える気が無いのに必修単位を無駄に増やすな(修士)全く指導できない分野を研究テーマに与えるな。研究費も無いのに新しい研究に手をつけるな。(国立・理系・30代)
雑務を行う事も大事であることは理解できるが、もう少し軽減し研究に時間を割くようにしたい。(私立・理系・20代)	社会人が増えてきて困る(講義のとき電話や居眠りレジメすら作ってこない等々)それと先生方も注意すらしてくれない。社会人(税理士等の資格目的の人)と研究者を目指す人(学生)を分けて欲しい。(私立・文系・20代)
人が多すぎ。やる気の無い人は来ないで(入学しないで)欲しい。そのくせ学位は欲しいと言う。紀要の水準が低い。きちんと審査して欲しい。何でも通すようでは投稿しようという気がなくなる。(国立・文系・20代)	博士号を取得していない教官による博士論文審査。教官によるハラスメント及び研究妨害、脅迫。研究能力のない教官の継続雇用。人格的に異常と考えられる教官の査問を誠実に行ってほしい。(国立・文系・20代)
研究室の雑用に学生を従事させるのは頻繁でなければ良いが現在は少し多くて困る。(国立・理系・20代)	研究用品を購入する際、手続きが非常に不便。もう少し広い研究室だったらいい。態度の非常に悪い学生の排除。(私立・理系・20代・職業経験あり)
社会人に対する配慮が国公立大学院では私立のそれにくらべて不足している。ハード面もソフト面も。(公立・文系・40代)	研究活動時間が決められている(病院の症例管理などでしかたない部分は大きい)ので自分のペースでできない。文献を読みたいといったことなら家でやりたいが必ず出でなければならぬのが難点。(私立・理系・20代)
教員の方々に対して私達の側から評価するような機会があればいいと思います。教授の方々に対する評価ももちろんですが、助手や助教等より指導に直接あたることが多い教官に対しての評価が無いというのはそのクラスの人々の質のばらつきを生むと思います。(国立・理系・20代)	能力が低くやる気の無い人と同じ研究室だからといってゼミをやらされる。また、エコひいきによって女子学生の一部が能力が低すぎるにもかかわらず甘やかされる(修士論文は教員が書いた、でも主席あつかい)大学から食事の支給がましい(せめて米だけでも)(私立・理系・20代)
博士後期課程ではいわゆる「授業」のようなものが無い。各自に責任を持って自己学習してもらおうわけだが、研究活動との兼ね合いもありなかなか時間が取れない(時間を作る努力をしていない)(国立・理系・20代)	研究日としては週一回しか確保されておらず、研究に集中できる期間がない。(研究と関係ない仕事が多い)(国立・医療系・20代・職業経験あり)
助手等のポスト削減によって院生の日頃の雑用が増えていること。留学生のサポートが同僚院生にまかされていることなど教育そのものの周辺のこと。(国立・文系・20代)	「指導をする」技術を教授が持っていない。独自行法人化を目前にして、院生は「人手」ではない。教育というサービスを認識してほしい。(国立・学際系・30代・職業経験あり)
指導教授が大学内に不在のことが多いためスムーズに研究が進まないことが多い。(私立・医療系・20代)	大学教員のレベルを上げてほしい。学位がないのに教員として働くのはおかしい。(私立・理系・20代)
私の大学院ではゼミがありません。近代文学を専攻していますが大学院の教員に近代文学の先生が1人もらず、論文の指導を学部時代の先生にお願いしている状態です。学生に大学院への進学を勧めるのであれば、責任をもって教員、授業内容を充実させてもらいたいです。(私立・学際系・20代)	研究は、教育されることができるものではないので、教育する場というより、自由に活動、研究できる場が必要ではないかと考えます。(国立・医療系・20代・職業経験あり)
医学部博士課程に入学しても、臨床の仕事もしなくてはならず、研究に時間が十分費やせない。(私立・医療系・20代)	・自分の所属している講座で、できもしない実験テーマを与えられるため、他大学、他講座にお世話になることが多い。その時必要な材料はどの講座費で購入してもらえるのかわからないので非常に苦勞が多い。院生が教授にお金はどこから出るのかなど聞くことができない。(国立・医療系・20代)
実際には学部生及び後輩の学生(院生)への実験手法を教えたり、研究の補佐するのに多くの時間を取られてしまい自分の研究活動に集中できない時間が多いことが問題である。研究室所属の学部生への指導もTAとしての制度を適用して欲しい。(私立・理系・20代)	私は中国で大学卒業してから日本に留学したので日本の留学環境があまりにも相当きびしいです。でもなかにも、責任を持ってない研究室がある。(公立・理系・30代・留学生・職業経験あり)
自分の研究と指導教官の専攻領域とはそれほど関連していないということでもとても悩んでいます。(公立・文系・30代・留学生・職業経験あり)	
教官が事務的な雑用や会議に追われ、教育研究活動に十分な時間が取れないことは問題である。スタッフの雑用等にもっと自由度を与えて欲しい。(国立・理系・20代)	

教授と、テーマが異なる為、入学に際し妨害をうけた。指導教官は、助教授だが主査や入試の決定は教授なので教授にさからって入学するのは、大変だった。公の場ではなく教授室に何度もよび出し出頭を控えるよう干渉されつづけた（無視したが・・・）明らかなアカデミックハラスメントが公然とある。（国立・理系・20代）

5. 資金的・経済的問題

授業料が増額しさらに免除対象も厳しくなったことはかううじて理解できますが、月額20万ももらえる学振研究員がいとも簡単に授業料を免除にできるのはおかしいお思います。独立世帯とはいえ両親にアクシデントがないかぎり援助もあれば、授業料も学振から余裕で支払えるはず。どうぞご理解ください。とにかく博士課程からの編入は経済的に大変だと思います。（国立・理系・20代）

授業料高い、免除制度などあるが、いずれも親の収入を考慮するナンセンスのため無意味。しかも自営業を営む家庭に過度に有利なのはおかしい！20代半ばを過ぎた者の自律支援を望む。指導、就職などあらゆる面で不透明すぎる。タテ型権成主義社会を守るためとはいえ教員の対応は不誠実である。学振の採用など公平な基礎に基づいているように見えない。縁故主義のはびこる日本の大学院の根本的改革が望まれる。（国立・文系・20代）

奨学金や授業料免除の枠が少なくなっているため、多くの学生は、アルバイトに追われ、研究時間が少なくなっている。また、精神的に余裕が無く、情緒不安定になる人が多い。心理カウンセラーの設置や進学するほど授業料の免除の機会を与えてほしい。（国立・文系・20代）

社会からの協力は得にくい現状があり、授業料のみ支援してもらっていますが後でハンデになると思われる。（国立・理系・40代・職業経験あり）

給与の奨学金の充実。（国立・理系・20代・職業経験あり）

学振のDCやPDの枠の拡充は必須であると考えます。大学生においても日本の学生は親族からの資金援助がなければ修学を続けるのは困難ですが欧米では何らかの奨学金が多くあり、親族からの資金援助は受けなくとも学業を続けていくことが容易でありそのことから日本の大学教育の改革は義務であると考えます。（国立・医療系・20代）

もう少し経済的な負担（授業料など）を減らしてほしいと思っています。（国立・理系・20代）

研究費（調査等にかかる費用）を援助してほしい。（国立・文系・50代・職業経験あり）

大学院の授業の充実、実験設備の充実、学会参加への経済的支援が少なすぎる。共同研究の充実。（私立・学際系・20代）

私は外国人として日本の大学院で研究している。研究を進めるために、奨学金が私に対してとても重要なものです。ただ私は現在まで（博士入学後から）奨学金を1回ももらわなかった。私は生活を支えるためにアルバイトをしなければな

らない。これは私の勉強に悪い影響があると思う。できれば奨学金は博士課程に在学中の院生に送って下さい。（私立・文系・20代・留学生）

TAやRA等を充実させ、金銭的な負担を軽減してほしい。（国立・理系・20代）

経済面での支援の強化（授業料免除の枠拡大、TA報酬の引き上げ）。（国立・医療系・20代）

全ては本人の努力にかかっていると思います。ただ奨学金は重要で、なければ後期には残れません。フルタイムの学生（ドクター）はやはり学内の仕事をしているので、学内奨学金を与える機会がその他の人（社会人入学者）と同じなのは、平等ではないと思えます。特に改善してほしい点（ハード）としては特にありません。むしろ感謝しています。（私立・文系・20代・職業経験あり）

外国人への奨学金は月20万円もあり、かつ安い留学生開館に住めるのに日本人学生に対するサポートが少なすぎる。育英会も結局は借金だし、働いている同世代と比較しての金銭的なマイナス面が大きすぎる。（その割に就職が難しいし収入も見合わない）先が不安。研究者の受け入れ体制が課題か。研究空間の情報交換や交流も必要かも。（国立・理系・20代）

国際学会へ参加する為の旅費や参加費を出してください。（国立・理系・20代）

オーバードクターに対する経済的援助。例えば授業料の免除または半減、奨学金の充実を行って欲しい。（国立・理系・20代）

授業料を低く設定してほしい。（国立・文系・20代）

経済的な支援がもっとうけられやすいとありがたい。授業料免除等。（国立・医療系・20代・職業経験あり）

留学生の奨学金は充実しているが、国内博士課程後期に学生に対する奨学金制度が充実しているとはいえない。（国立・理系・20代）

経済的にきつい。自主的に研究を進めることができるように大学院生にも競争的資金を調達できるような機会を増やしてほしい。えらい先生の下について先生の望む研究をしなければ満足できる研究ができない。（国立・理系・20代）

博士後期課程まで進学すると、年齢もそこそこになるのですが、仕事をする時間も無く、授業料などを工面するのが非常に困難です。もう少し授業料など（3年間で150万円ぐらい）が安くなると幸いです。（私立・医療系・20代）

研究室が狭くなったので広くしてほしい。書籍費の補助がなくなったので再開してほしい。（国立・文系・20代）

国はもっと学生に金銭的な援助をするべきだと思います。それと、研究環境の拡充。キャンパスが移動するのですが、新しいところには、食べる場所、日用品を買うところ及び、郵便局、銀行などが全くありません。キャンパスそれのみがあるだけです。（国立・理系・20代）

後期課程において授業というものが一切存在しないのに、授業料と称して年数十万円も納付させられるのは納得いかない。むしろ学生への経済的支援を拡充すべきである。このままだと理学系博士後期へ進学する学生は今後数年間で激減し非常に質が劣悪になるのではと危惧している。（国立・理系・20代）

基礎的研究への援助(予算)が少ない。地方大学から学会参加のための交通費援助がほしい。(国立・理系・20代)	私学の大学院であるが、後期課程の学生も学部生も同じ授業料である。大学院生にとって金銭面の負担については大きな問題なので、金銭面でもう少し研究に専念できるような環境が望ましい。(私立・理系・20代・職業経験あり)
金銭的援助の不足。例えばRA制度の拡充等。TAの収入では全く不十分。授業料免除の拡大、実験系研究室の床面積を増やす。(国立・理系・20代)	両親からの援助をもらっていないが、自宅通学である為どんなに説明しても授業料免除が出来ない。一度でも病気をしたらこの道をあきらめるしかないのかなという不安は常にある。(国立・理系・30代)
授業料がやはり高いと思います。博士後期課程では、所定の単位を取得し授業がないのに授業料が学部と同じは、やはりおかしいと思います。またレポートの宿題の内容も社会に出てから全く意味が無いレポート課題が多いと思います。(私立・理系・20代・職業経験あり)	授業料が高いと思います。免除のシステムも不透明で分かりにくいです。(経理上のシステムになります) (国立・理系・20代)
テーマや授業についての不満はありませんが、TAなど勉強しながら研究もでき、金銭的な不安を軽減されるような職を増やしてほしいと思います。TAをすることで負担が増えることは気になりませんが、やはり自分の力で稼げるのだという保障があったほうがいいです。(国立・理系・20代)	奨学金は借金でありあまり使いたくないが、足りないので少しずつ使用している。とにかくお金がない。良い研究の為には重要な要因であり、マズローの欲求階層説でいえば生活が満たされてないのに研究などできない。収入を得る為途中で就職するつもりであるが、今度は時間が無くなりそう。つらい。大学からの援助が欲しい。後、外国に行かない。外国語習得プログラムを充実して欲しい。(国立・文系・20代)
学校で研究をするために可能な資金の援助をうけるのが難しい。遊んでいるわけではないのに、生活が苦しい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)	休学時にも学費の半分を負担すること。(私立・理系・30代・職業経験あり)
学会参加の際の交通費が嵩むので、経済的援助をしてほしい。(私立・文系・20代)	研究活動において他の研究者と議論するというは大変重要なことだと考えるのだが、学会等に参加するたびに私費で5万円程度の出費が必要で、食費を切り詰めなければならぬ。そういったことに交通費だけでも援助して頂ければ有難いと思う。経済的な理由で発表や論文投稿を断念するのでは本末転倒だと自戒を込めて思う。(国立・理系・20代)
生活をするためにアルバイトにて(民間病院への)代務医としての仕事をしているが、時間をとられているために、まとまった研究時間が連日ととりにくい。学費が高すぎる。(私立・医療系・30代・職業経験あり)	経済的支援が足りないと思う。後、博士号取得後の進路についても十分な協力が欲しい。(国立・理系・20代)
学外で生活費をかせげなければならぬ状況を改善してほしい。(国立・文系・30代)	授業料免除の基準を低くしてほしい。枠は学部とは別出にしてほしい。「払えるけど…」ではなく「払えない」から申請なのに、2期連続不許可になりそう。R、Aに採用されたのにそれは、前2期分を払うために借りたお金を返すことになりそう。お金の無い者に学ぶ権利は無いと言われていて憤りを感じる。あまつさえ授業料は年々増えていく現状。(国立・理系・20代)
経済的不安が精神衛生的に大きなダメージになっている。非常勤講師の仕事で週10コマも入れて何とか生活を維持しているがこれまでの4年間では自殺まで考えるくらいひどかった。給付金(平均的な院生でも対象となるような)の奨学金制度を強く希望する。(国立・文系・20代)	博士課程となれば、国際学会に出席することもあります。学生は学術振興会のDCでない限り参加費や渡航費に対して一切の補助がなく負担が大きいです。国内外を問わず、学会発表に対する何らかの補助を行う制度があってもよいと思います。(国立・理系・30代・職業経験あり)
博士課程に進学して金銭的な面では問題がなくなったが、修了後の育英会への返済義務が大金となるのが問題である。返済義務を軽減してもらいたい。(国立・理系・30代・職業経験あり)	私は、ふだんは東京に住み近隣の女子大で職を持っています。生活は夫の収入でしています。遠方の大学へ月に何回か通いますので、その為の交通費、宿泊費等がかかります。全く異なる環境だと思います。(国立・医療系・40代・職業経験あり)
授業料が高額すぎる。無駄に授業をとる必要があるので改善を頼む。(国立・理系・20代・職業経験あり)	奨学金を借してくれない。(私立・医療系・20代)
授業料が高すぎるので安くしてほしい。(公立・理系・30代・職業経験あり)	研究助成や奨学金における専攻内での審査に対する感覚。(社会調査に関する経済的感覚の不足や立場の違った研究への不利) (私立・文系・20代)
奨学金の情報をもっと提供してもらえたらと願う。海外留学など。(私立・文系・30代・職業経験あり)	学費の面で両親に負担をかけてしまっているのが軽くなったら良いと思う。(私立・理系・20代)
学費がかなり高いと思う。学部の教育制度に比べ質、量は落ちていると思うが、学費は多少高くなっているのは矛盾していると思われる。(私立・理系・20代・職業経験あり)	私費の留学生たちは基本的な生活ができる奨学金をもらえ
博士論文の執筆のためにもある程度、論文に集中できる環境がほしいが、現状では全く正反対である。経済的余裕もなく、アルバイトをしてでは、なかなか難しい。改善するのは大変だが大学側も何らかの対処法を行ってほしいと考える。(国立・文系・30代)	
授業を受けていないのに授業料が取られること。企業と同じ研究をしているにも無給(正確には授業料を払っている)ということ。(国立・理系・20代)	

<p>ることを心からお願いします。(理系・40代・留学生・職業経験あり)</p>	<p>20代)</p>
<p>研究活動に給与を全ての大学院生に支給して欲しい。(国立・理系・20代)</p>	<p>外国の大学院のように、経済的なサポートがほしいです。高校ぐらいから日本育英会の奨学金や、地方公共団体からの奨学金を貸与していると貸与額(利子等を含めると1000万を超えます)はとて大きくくなって卒業後の負担ものすごく大きいです。就職先があるのかと考えると、精神的、経済的な負担が大きくなって学業に打ち込みめなくなることまででくと思う。(国立・理系・20代)</p>
<p>育英会の奨学金などは都市部と地方部での生活費の格差を考慮したものにして欲しい。一律なのは絶対おかしいと思う。(築20年の1Kアパートが家賃7万円というのは地方ではありえない)(国立・理系・20代・職業経験あり)</p>	<p>奨学金制度をもっと充実してほしい。院生にももっと研究費を充実してほしい。(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>
<p>留学生の生活支援と留学生の学業への正確評価。卒業後の生活支援。(国立・理系・30代・留学生)</p>	<p>他の留学生より業績があるにもかかわらず、留学生奨学金をいただけない理由をよく理解できません。文部省は台湾を中国にいれているが、私は中国人として文部省国費留学生への申請ができないことを理解できない。日本人と留学生と共同に競争する奨学体制の創設。(公立・文系・30代・留学生・職業経験あり)</p>
<p>国立大で学科によらず授業料一律というのは不公平極まりない。TAは教官がレポート採点等の雑用を学生に押し付けているだけ。給料も安すぎるし、米国のように経歴として認められるわけでもない。(国立・理系・20代)</p>	<p>経済的な援助がうけられないのはおかしいと考えます。これでは、博士課程卒業した時点で学部から、育英会の奨学金ももらっていた人では、借金が850万にもなってしまいます。現状では親が裕福な子供しか、しんがくするなというのでしょうか?現在の自分にとってどうにもならない一番の問題はお金の問題です。(公立・理系・20代)</p>
<p>研究設備(専門机やパソコン)の拡充よりも、小額でも良いから給付奨学金が多くの院生に与えられるようにして欲しい。学部の語学、小セミナーなどを担当する機会を院生に与えて欲しい。こうした機会には収入だけでなく、院生にとって研究分野の教授法の体験となり、将来の大学等での教育・研究への期待や自負という形で研究活動にプラスになると思う。(私立・文系・20代)</p>	<p>研究のための費用が十分に使えるようになればうれしいです。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>研究助成金や奨学金など経済面への援助を増加して欲しい。(私立・文系・40代・留学生・職業経験あり)</p>	<p>複数の学会に所属していると年会費や学会参加費等がわりと圧迫するのでこれを援助していただけるようなものがあると助かります。(国立・理系・20代)</p>
<p>進学することでの経済的問題が不安。学位取得後の進路の不安(就職など)(私立・理系・20代)</p>	<p>国内外問わず学会参加費は十分補助してほしい。私はDCだからいいけど、他の学生は貧乏でつらいと思う。今後の独立行政法人化で、基礎分野の予算が削られるというようなことがおこらないよう祈ってます。(国立・理系・20代)</p>
<p>学会に7講義入っているので4月は水道代が払えなくなったこと。学会費もつらい。学振払う前はホントつらかった。バイトしまくって・「頑張って業績出すほど金もなし」(国立・文系・20代)</p>	<p>授業料が高すぎる。(国立・理系・20代)</p>
<p>現状には満足しているが、将来も同等の待遇が受けられるか不安(授業料・奨学金)(国立・学際系・20代)</p>	<p>学会発表(特に海外での)に関して経済的支援があれば良いと思います。(公立・理系・20代・職業経験あり)</p>
<p>できるかぎりの金銭的援助を国にして欲しい。(国立・理系・20代)</p>	<p>経済的支援。(公立・理系・30代)</p>
<p>現日本育英会の奨学金が標準年限のみであり、博士号取得、場合によっては課程修了まで頂くことができないことがある。修士までとは事情が異なるので再考してほしい。(私立・文系・20代)</p>	<p>公立大学では留学生に対して授業料の金額を減免することを希望しております。また入学金は北九州市外に住んでる人が多くなり市内の居住者と区別しているから留学生にとって少し不平です。日本においても海外においても学会に参加する為、発表者の研究補助費、旅行費などを考えてもらったらいいと思っています。(公立・文系・留学生・職業経験あり)</p>
<p>ドクターに入っている3年間は奨学金がもらえませんが、オーバーしてしまうと収入がなくなる他、学会等での活動が増え、経済的にも困難になります。就職も厳しいので、オーバーする人も増えていると思いますので、何らかの収入源があると有難いように思います。研究に専念しようとすれば、普通のアルバイトなどで時間を使うのはとてももったいないです。さらに、書籍代やコピー代がかなり重んでしまう現実もあります。(私立・文系・20代)</p>	<p>概して満足しておりますが出来ることならTAや非常勤(高校)の話を増やして欲しいと思います。(私立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>奨学金を平等にくばってほしい。その原則を公表してほしい。もらっているもらっていない人の基準が分からない。自分の研究のために、奨学金をもらいたいがそれに関するメリットを全く受けていない。だから、自分の研究の状況がくるしくなっている。(国立・文系・30代・留学生)</p>	<p>奨学金の採用人数の拡大を希望します。(国立・理系・20代)</p>
<p>ポストドクター一時の資金的な問題を何とかしてもらえそううれしい。ポストドクター時に研究に専念できる環境作りも、大学院教育に含まれると思っています。(国立・文系・</p>	<p>大学院生と同期の医員とでDUTYがあまり変わらない点。同じDUTYをしていても医員は給料がもらえるが院生はもうどこか授業料を払っている点)(国立・医療系・30代)</p>
	<p>経済面での負担が辛すぎる。(洋書など高いため)(国立・文系・20代)</p>

研究助成金を頂ける機会を増やして頂きたい。(私立・理系・20代・職業経験あり)	博士後期課程に進学しやすい環境をつくるべきだと思う。奨学金の受給だけではいずれ返還しなければならず、やはり進学はしづらいと思う。成績業績に見合っただけの給与システムを充実させればいいと思う。(国立・医療系・20代)
日本育英会の奨学金は2年目以降申込みが1種1枠がなく、できないと言われた。(国立・医療系・30代・職業経験あり)	教育ではないが博士号取得する方法と言うか道があいまいだと思う。それは論文博士や修士を出た後派遣社員として例えば理研で働き出したらそのポストから頑張ったら博士を取らせてあげるとか、社会人枠で博士課程に入ったりなど、つまり同じこと同じようなことをしていてもお金がもらえる、もらえないという大きな差が出て、普通に後期課程に進学しているのが馬鹿らしく感じたことが多くある。いくら自分が好きで決めた道とは言え、30近くまで無給に近いのは非常に痛い。それは精神的にも辛いものがある。先々への就職への不安も大きい。金銭の問題は大きいと思う。博士後期課程に在籍するモチベーション、責任感を持たせるためにも経済的に支援が(親とかではなく給料として)あったらどれほど良いかと思う。(公立・理系・20代)
現在TAをしております。院生だけではなく、研究生もTAをしますがTAの給料とは別に交通費が出されるのは研究生のみで院生には出ません。Q36を見てもわかるように収入面が圧倒的に少ないので出来ることならば院生、研究生の隔てなく交通費を出して欲しいと思っています。(大学院教育に不満はありませんが、経済面について記入させて頂きました)(私立・文系・20代)	経済的に非常に苦しい大学院に通えなくなってもおかしくない状態である。その為アルバイトなどが必要となり十分に研究ができない。日本においては実際には手を動かして研究しているのは大学院生が中心であるがそのほとんどは、日本育英会から借金をして頑張っている。しかしながら将来的な見通しもたえず、数百万円の借金を抱えて卒業していかなければならず非常に辛い状態であると思う。もっと大学院生に対する扱いを良くするべきだと思う。(公立・学際系・20代)
大学院に進学する人間は、学部より勉強するために進学するのだから教育(主に授業か指導教員の態度)はさほど重要ではなく、様々な学会や研究会に参加し幅広い知識を得る機会が、その援助(経済的にも時間的にも)与えるべきだと思う。(私立・理系・20代)	学会の金額(参加費等)を学生料金にしてほしい。一般と同じでは厳しい。(国立・理系・20代)
学会への参加費(旅費、登録費)が公費でまかなわれるようにしてほしい。(国立・理系・20代)	地方大学院生にも研究内容による(現地調査活動が多い研究)については研究補助費の拡大を願います。私の場合はPC・DCになりたくても年齢のことから申し込みできませんので、研究するのに「トツ」が「カベ」になるというのは考えるべきだと思います。(私立・文系・40代・留学生・職業経験あり)
財政面でのバックアップが不足している。(公立・文系・20代)	授業料の引き下げ。(公立・文系・20代)
生活苦が原因で、大学院進学をあきらめている優秀な学生がたくさんいます。もう少し奨学金制度を改善した方が良いと思います。(国立・医療系・20代)	経済的な援助が必要であるともう。それなりの年齢になるので、親からの援助を受けることに対し、疑問を感じて進学をあきらめざるを得ない状況の人もたくさんいると思う。(国立・理系・20代)
授業料を免除してほしい(国立・理系・20代)	奨学金と学費免除の面についてはもっとととのっている環境が必要です。東京で生活することはかなりお金がかかるものです。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
学費の設定の妥当性。奨学金の一層の充実(私立・文系・20代)	博士課程の学生に対しての金銭的援助(授業料の免除や返還不要の奨学金など)を充実させて欲しい。(国立・理系・20代)
学費が高すぎる。後期課程は授業がないのに、何故、学部や前期課程と同じ授業料なのか疑問が残る(私立・文系・20代)	給料が欲しい。(国立・理系・20代)
修士課程、博士課程の学費が高い。学費に見合った教育、研究環境が提供されているか疑問(私立・理系・20代)	費用面の負担が著しく大きい。文科系の大学院生への研究助成金の制度拡充と選定過程の透明性確保を早急の検討する必要があるだろう。助成対象が科学技術分野に偏りすぎている。(国立・文系・20代)
奨学金制度の充実(経済的にかなりきびしい)学会など機会を増やすこと。海外留学支援など。(公立・理系・20代)	独立生計を立てている人に対して、学費が高いと思います。学費と生活費を捻出するために研究する時間が減ってしまうのはあまり好ましくない事だと思います。(国立・理系・
授業料が高すぎる(国立・理系・30代・職業経験あり)	
決定的に重要なのは、経済的な問題である。博士課程後期の3年間で、博論を書いて就職していった人が自分のまわりでは、ほとんどいないにもかかわらず、留年すると一切の経済的な支援が受けられなくなるのは、研究に著しい支障をきたす。(公立・文系・30代・職業経験あり)	
歯学部大学院生はある程度家庭が裕福だないとやっていけない所が多いと思う。(国立・医療系・20代)	
研究を専念するために、生活の援助や奨学金など改善して欲しいと思う。(国立・理系・30代・留学生・職業経験あり)	
外国留学生に対する奨学金の拡大。(国立・理系・30代・留学生・職業経験あり)	
奨学金として生活ができるような金額(15万円)をもらいたい。(私立・文系・30代・留学生・職業経験あり)	
教育システムに関して現状が良いと思います。ただODになり育英会奨学金も止まり、日々の生活が非常に苦しいので、奨学金やTAの制度を充実させて欲しいと思っています。(国立・文系・20代)	
奨学金制度。進路。(公立・理系・20代)	

20代)
授業料が高い、学生の力で修学できるレベルにしてほしい。 (親の援助なしで) 国に借金をして(奨学金) 国に支払い(授業料等) をするような馬鹿げたことはしたくない。(国立・理系・20代)
研究を行う事はもちろん自分のためにというのが主であるが、ある意味においては、国や学校のためであるので学費をもっと少なくしてほしい。(私立・学際系・20代)
授業料免除の条件が日本人にはかなり厳しい。(国立・学際系・20代・職業経験あり)
国内、海外を問わず学会発表時に補助金を出して頂けると助かります。(交通費、学会参加費) (私立・文系・30代・職業経験あり)
私は、私費留学生として、博士号の取得のために研究についてよくがんばりましたが、奨学金をもらう機会が前年よりどんどん難しくなった。毎日、研究室に研究と勉強のうちに、いつも私は来年生活費どこから?勉強続ける?奨学金も大丈夫?授業料も免除されます?いろいろなお金、生活費について心配します。もし、生活費保障があれば、今大体に、2番目研究テーマも半分ぐらい終わらぬと思います。(国立・医療系・20代・留学生・職業経験あり)
せめて経済的な面では改善して欲しい。(私立・理系・20代)
博士課程の学生にとって研究に励むことが一番重要であるが、経済的支援が日本学術振興会や民間からの奨学金に頼るしかないのは、研究と生活を両立する上で非常に困難である。日本育英会は奨学金ではなくローンとなる為支援方法を見直した方が良いと思います。(国立・理系・20代)
卒業後の職の有無は不安があるため、少なくとも在学中の経済面にアシスタントがあると嬉しい。(国立・理系・20代・職業経験あり)
金銭的に厳しい。(国立・医療系・20代)
経済的援助がもっと充実すれば良いと思う。(国立・理系・20代)
学会等へ参加する際の旅費の補助の充実。(国立・理系・20代)
まわりの院生(特にD)の多くが自分と同じように不安定な経済基盤を理由として、アルバイトに時間の多くを割かざるを得ない状態なので、奨学金制度をもっと充実してもらえたらどんなに良いかと思う。(私立・文系・20代)
研究費用を援助して欲しいです。(私立・学際系・20代・職業経験あり)
年々授業料が値上げされることに疑問を感じます。今後、国立大の独立法人化により更に状況は混迷度を増すかと容易に推測されますが、教育を受けること、学ぶことは権利の行使ですから値上げによってその機会が制限されるのは納得がいきません。又私学との料金の差を埋めるといった値上げの名目にも憤りを覚えます。(国立・文系・20代)
もうちょっと研究費が欲しいことと、大学院の授業料が高い。(私立・理系・30代・留学生)

勉強する為には学費を必要としますが、生活費、学費を稼ぐ為には時間が足りず研究するのに物理的な時間が絶対的に不足しています。中高年齢への奨学金はどこも出してくれません。文学系など中高年齢になって初めて理解でき、深く研究を進め後進の者に受け継ぐことのできる分野もあります。中高年齢への奨学金もその論文次第で認めて頂きたいです。(私立・文系・60代・職業経験あり)
最近毎年のように授業料が上がっているが、このままでは研究に集中できなくなるのではないかと不安に思っている。(国立・理系・20代)
奨学金などの経済的支援が十分ではなく、アルバイトに時間を費やす院生が自分の周りには大勢います。(公立・学際系・20代)
教育自体に問題もそれほど感じてはいないが収入が少ない者への経済的な面での配慮が国や大学から為されてもいいのではないだろうかと感じる。(私立・文系・20代)
大学側の不備により、日本育英会の奨学金が得られなかった(現在、秋の申請を行う予定である) (私立・理系・20代)
学費の免除がうけやすくなれば助かります。(国立・学際系・40代)
十分な奨学金を得ることは、非常に重要だと思います。(国立・理系・30代・留学生)
金銭的な援助の少なさ。研究室の雑務が増える割りに無報酬なのはつらい。(国立・理系・20代)
学費をもう少し安くして欲しい。(国立・理系・20代・職業経験あり)
私立大学に在籍しておりますが、授業料等が高額であるので下げて欲しいと思います。理由としては学内在学生数が少ない為人的交流の機会及び議論の機会が少ないと感じるからです。(私立・理系・20代)
TA や RA といった研究活動に従事しつつ行えるアルバイトの拡充。(国立・文系・20代)
私は社会人博士課程の者である。大学へ義務的に行かなくてはいけない時間が少なくて助かっている。その反面、こんなに高い授業料を払うのは馬鹿らしい。指導教官の指導もほとんど無い。投稿原稿をチェックしてもらおう程度。(国立・理系・30代・職業経験あり)
TA は単なる雑用係になっていることが多いと思う。(私立・文系・20代)
奨学金の充実。又は学費の見直し。(私立・文系・30代・職業経験あり)
授業料が高く(大学の)奨学金の要件が非常に厳しい(学部生と同一の基準が適用される) (私立・文系・20代)
とにかく経済的な援助が必要だと思う。奨学金を含めて研究員制度の充実などバックアップをもっと考えて欲しい。(国立・文系・20代)
私自身が受けている教育については、質、環境共に改善を要望する点はありません。しかし、それは民間団体より奨学金を返還義務なしで受けることができた点や、所属する専攻を含む研究グループが我々博士課程の学生をRAとして積極的支援に恵まれたからこそです。広く知られ利用されている育英会からの奨学金だけでは学費を含め生活を維持するには

不十分です。更に貸与であるゆえに、とりわけ以前に貸与を受けている場合、借入れの額の増大が負担となります。親からの支援もそう受けられるものではありません。日本における博士課程の学生に対する経済的支援はまだ不十分だと感じております。より一層の拡充がなされれば、「研究したいのにできない」という学生を減らすことができるのではないのでしょうか。そのような「やる気ある」学生を確保することこそ質の高い研究につながるものと思います。(国立・理系・20代)
学生が所属する研究室、教官によってかなり差別的待遇の中にありながら学費が同じであることはあまり喜ばしいとは思えない。(国立・学際系・30代・職業経験あり)
授業料を下げて欲しい。(国立・理系・20代)
留学生のため安心して勉強できるように授業料を免除させて欲しいです。免除をさせてもらわないと生活は厳しい状況になります。(国立・理系・30代・留学生・職業経験あり)
奨学金があまりないことをなんとかしていただきたい。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
国立大であるにもかかわらず、学費が高すぎる。(国立・理系・30代・職業経験あり)
収入の不安が大きく、自らのことばかりをいっていることができない。研究チームによっては無給のスタッフ扱ひされることが大きい。自ら研究を考える時間もない。私の関わっている研究チームでも助教の勝手な行動が多くほとんどの時間がとれない。(私立・理系・20代)
米国並みの奨学金制度の充実と給付金制度の原則を。(私立・文系・20代)
国立大有位。特に資金面(国家等からの支出分)(私立・文系・20代)
大学院生は1個人として経済的に弱い側面があるので十分な援助を受けられる機会のさらなる拡充を望みます。(私立・理系・20代)
学会活動に関する旅費(交通費・宿泊費)をもっと支給してほしいと思う(現在年間5万円まで)。(私立・理系・20代)
経済的な心配がなく研究に専念できる環境(育英会の支給期間後は特二)が整えられればと思います。(私立・学際系・20代)
現在、学会発表における交通費補助の支給は、3年間に一度しか得られない為、研究活動に対する補助をもっと増やしてほしい。(国立・理系・20代)
大学という枠を超えて、得られる研究助成金がほとんどない。博士課程の学生の行動範囲をせばめているように思えてならない。(私立・理系・20代)
人文科学系の研究は、研究費予算申請が通りにくいという現状がある様に思います。特に私学に所属している者にとっては、学費が高額なのにもかかわらず、機器などの設備が不十分な上、基礎学習のための本も購入できない、など、研究をすすめるには環境が悪条件です。私大出身者にも広く研究費が取得できる様になって欲しいとは、思っています。(私立・文系・30代・職業経験あり)

6. 施設・設備等の研究環境

学校のほうがもっと専門の本を買ってほしいです。(国立・学際系・20代・留学生)
海外のデータベースが無料で自由に使用可能なること。(国立・学際系・20代)
研究環境の改善。研究内容上、有機溶媒を使用していますが、その排気設備が不十分で身体への暴露が避けられない状況にある。年に2度健康診断があるが、それ以前に施設に拡充を行ってほしい。また、いまだにアカデミック、ハラスメントが存在する。教員の採用は実績もさることながら、人格的な面を問うべきだと感じる。(国立・医療系・20代)
数学科図書館が24時間利用できるとうれしい。(私立・理系・20代)
研究環境の改善。研究会やサブゼミを行うスペースが少ない。コピー機を利用できる時間や台数が少ない。図書館が狭い。(国立・文系・20代)
研究環境の充実。図書館の開館時間の延長。(私立・文系・20代)
設備が文系と理系でちがいがりすぎる。文系にはパソコンも机も無い。同じ学費を納めているのに納得できない。(国立・文系・20代)
国書、文献を充実してほしい。(国立・理系・20代)
各大学の図書館の相互利用をもっと行えるよう、改善していただきたいと思う。必要な情報を入手するのに手間や時間がかかり不便さを感じる。(国立・理系・20代)
コピーぐらいは無制限にしてほしい。(国立・文系・20代)
図書館の文献の充実。自由に利用できる自分専用の研究部屋(PC、本棚など)。(公立・文系・30代・職業経験あり)
危険物の管理、使用などについての安全性を徹底的に高めてほしい。学生の机が実験室内にあるのも、健康上断じて良くない。私が文系就職を希望することにしたのは健康への懸念からのことです。(国立・理系・20代)
研究を行う部屋の設備(机、いす、クーラー等)科研費などの研究費から支払えるようにしてもらいたい。理由は、部屋の環境があまりに劣悪だと、研究がはかどらない為。(国立・理系・20代)
各研究室に1台ずつネットができるパソコンがあるといい。(国立・文系・20代)
私大の場合、基本的に資金不足のためよくない。国立大時代のほうが研究に対して熱心であった(能力の差?)。(私立・医療系・20代・職業経験あり)☆
院生室の机が足りない点(国立・文系・20代)
図書室の利用を夜間にも出来るようにしてほしい。(国立・理系・20代)
専用の机などが欲しい。(私立・医療系・30代)
学校により、実験環境が大きく違う点(公立・理系・20代)
海外の論文をもう少し充実してもらいたい。インターネット経由での海外論文専門ホームページへのアクセスを充実してもらいたい(契約してほしい)(私立・理系・20代)

現在、研究環境は非常によい。ただまわりに食事のとれるところや娯楽施設が少ないので息抜きが大変である。(国立・理系・20代)
専用のパソコンが欲しいです。他校の紀要や論文の取り寄せに対する図書館のすばい対応が欲しいです。(私立・文系・20代・留学生)
空調の完備。学食の充実。(公立・理系・20代)
図書館の本の蔵冊数が少ない。(私立・理系・20代)
大学の組織上大学院が重視されつつあるがそれは形式上の整備を伴うにすぎず実際に院生が研究する環境を得る為のインライフまでは整備されていない。今後、院生が増加した場合に充実した研究環境を得られるか不安である。(公立・文系・20代)
実験スペースがもう少し広いと効率よく実験できると思う。(国立・理系・20代)
環境整備(個人の机までLANを引く、冷房の設置)(私立・文系・20代)
実験室が無い。(国立・文系・40代・職業経験あり)
図書館の文献資料をさらに充実させてほしい。(国立・文系・20代)
学内の寮へ優先的に(学部生よりも)入れるシステムを作してほしい。(国立・理系・20代・職業経験あり)
研究機材の充実、ならびに図書館の完備(私立・理系・20代・職業経験あり)
24時間キャンパスにしてほしい(私立・文系・20代・職業経験あり)
研究スペースを充実させてほしい。今は、個人の机、パソコンがないため困っている。学部間でこれほどの差があるのはなぜか疑問。専門知識を大学で身につけていくためにはある程度の環境が必要だと思う。(国立・文系・20代)
施設の拡充。建物(大学院棟の分立)(私立・文系・20代)
過去の雑誌の収集を図書館にしてほしい。欠号や数年間の空白期間があることが多いので。コピーでも可。(国立・文系・20代)
論文検索の拡充をしてほしい。ダウンロードできない論文が多々ある。(私立・医療系・20代)
専門机やパソコンの拡充を望みます。(国立・文系・30代・職業経験あり)
学生が散歩したり、憩う場が欲しい。緑が少ない。(国立・医療系・40代・職業経験あり)
地方の大学である為資料収集のおける困難が首都圏の大学よりも大きい。だから図書館(学内)の資料の充実度を高めて欲しい。(私立・文系・20代)
博士課程院生用の部屋、デスク、図書を置くスペースなど居場所を作りたい。(私立・文系・30代・職業経験あり)
さらなる資料の充実を望みます。学部の頃と比べると他大学の図書館や資料を利用しやすくなりました。ただ、雑誌が特に手元にない場合多々あり、文献複写では時間が足りないことがあります。学内で他研究生との交流がほとんどないことに問題を感じます。(国立・文系・20代)

普段の研究場所(大学学生の研究スペース)は研究室ごとに仕切りが少ない、オープンスペースとなっています。簡単にいうと当キャンパスのパクリなのですが、とりたててメリットはないです。(私立・学際系・20代)
住居問題について一層充実してほしい。特に都会内の学校、研究機関がこの問題が目立つ。学寮の不足、食堂の時間制限及び食堂自体の数など、学生との一番関係のある日常生活部分の充実度はまだまだ改善する余地がある。(国立・医療系・30代・留学生・職業経験あり)
図書が少ない(私立・文系・30代・職業経験あり)
やや特殊なかもしれないが、日本の獣医学教育現場はとても貧しい(経済的、人的)国は欧米にひけをとらない規模で研究教育できる態勢をととのえる義務があると思う。(国立・学際系・20代)
研究スペース、環境整備を徹底してほしい。(例えば、専用機の配置など)(国立・学際系・20代)
研究施設をお設けて欲しい(個人が使えるパソコン)(私立・文系・30代・留学生)
研究関連、書籍があまりない(国立・文系・40代・留学生)
共同の机やパソコン等がかなり備えてはいるが、個人用のパソコンがあればもっといいだろうと思う。(私立・文系・30代・留学生)
私自身は政治学系の学生だが法学研究課に所属している。一応政治学の専攻課程もあるのだが特に授業及び図書館の本が法律系に偏っていて、政治学系は少なく困る時がある。教育とは関係ないかもしれないが、校舎がだいぶ古くなっており、地震といったこれから起こり得るであろう災害の対策が不十分だと感じられる。「予算がない」言われれば何も言えないがせめて耐震基準を満たす建物にして欲しい。私の周囲では地震が入った壁のヒビや壊れたドアを見て、次に大きな地震が来たら俺たちは死ねてることか?と皆苦笑している。どこの大学もそうなのだろうか?(国立・文系・30代)
研究できる環境を整えて欲しい。文献が図書館になくとりよせると多く費用がかかる。私物を置くスペースがない。何もかも自費。それでは研究どころではない。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
研究する上で機材、備品等の環境面をもう少し充実していないとやりたい事があってもできないことが多く、現時点であるもののできるテーマに限られてしまう。(国立・医療系・20代)
図書館に専門分野の書籍が少ない。(私立・理系・20代)
設備の不足(国立・文系・20代)
図書館を充実させてほしい。蔵書が少なすぎる。(国立・文系・20代)
校舎の24時間開放(私立・文系・30代)
専用のデスクが欲しい。図書館に専門書が少なく文献検索しにくい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
中国の「中卒理誌」という雑誌を図書館においてほしい。(国立・医療系・30代・留学生)
図書館の充実や利便性。研究室等の設備。卒業後の進路や就職に対する世話。(私立・文系・30代・職業経験あり)
コンピューターの充実や図書館の24時間開放を実現して

欲しい。(国立・文系・20代)
図書館資料の充実、相互利用の際の負担の軽減。研究室の開室時間の拡大。(国立・文系・20代)
施設、資料等の利用に制約が多すぎて研究の妨げになっている。(国立・文系・20代)
「大学院教育について」というよりは「教育環境」についてですが、自分専用の机やパソコンなどが無く、しかも大人数(100人以上)の院生達が一つの院生室を利用している為に、院生室では研究に集中することができないので少なくとも各講座別の院生室が設けられるように改善して頂ければと存じます。(国立・文系・30代・留学生)
より、ゆとり、スペースのある研究室を確保して頂けると有難いです。(国立・文系・20代)
大学院重点化によって大学院生が増えるのはいいのだが、それに対して設備がいまいち揃ってない気がする。(国立・医療系・20代)
コンピュータ類、例えば自分専用のパソコンや印刷機など。(私立・文系・40代・留学生・職業経験あり)
今後大学院に在籍したいと考えている学生が増加すると思われるが、大学院自体の設備が小さくより多くの人材が育つ為のもより大きな設備が必要になってきていると思う。(私立・理系・20代)
研究室のスペースを増やして欲しい。特に文系のスペースはあまりにも狭すぎる。(国立・文系・20代)
研究環境が不十分。設備等の不足。研究机が無いなど。また各学部図書館も月～金5時までで開室時間が短い。(国立・文系・20代)
研究、実験を行う為の専用の広いスペースが無いところ。関係する規則や規定を調べるのが難しい。どういふものがあるか、またその内容をすぐ閲覧できるようにして欲しい。(私立・理系・20代)
研究室のスペースが足りない。(国立・理系・20代)
修士と同じ部屋もよいのですが、パソコン使えなかったりするので博士用の机やパソコンがあったらいいですね。学費(学会費やコピー費など)の援助もあったらよいと思います。(国立・文系・20代)
現在共用の机を使用していますが、できれば個人専用の机と研究室があればと思います。ただし、研究室は4、5程度の共同で良いと思います。(私立・文系・40代・職業経験あり)
プロジェクトエリアの共有スペースをきれいにしてほしい。他のゼミの学生の私物が多くて使いづらい、見栄えも悪い。(私立・学際系・20代・職業経験あり)
各研究室間の機械の共同使用の面で不便を感じたことある。(国立・理系・30代・留学生・職業経験あり)
院生をふやしすぎ。卒業後、たとえ学位をもっているも受け皿はあるのか、非常に疑問である。また、院生室が人数に比べて非常に少ない。パソコンも自分で用意しなくてはならない。など、環境が不十分。(国立・文系・20代)
社会人選抜の学生ですので、文献検索に苦労しています。インターネット等で、文献検索をさらに拡大していただきたいと思っています。(国立・文系・40代・職業経験あり)

大学における大学院教育について、改善してほしいことは、学内に研究室(個人用)をもうけてくれたらと思います。*その他、細かいことについては自分で解決している。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)

7. その他

私は学部での研究室選択において、主流ではない研究室に行きました。そのため学部で受けた講義のほとんどは自分の研究に役立っているとはいえません。もちろんそのような研究分野の研究室に行った私が悪いです。学際的であることを売りにする研究料であっても学部時の教育はまずスペシャリスト養成を目指して絞って考えたほうがいいのかもしれない。(国立・学際系・20代)
社会人入学したのですが、時間が無い。(国立・理系・30代・職業経験あり)
とにかく時間が欲しい(研究する為の)。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
博士課程のカリキュラムに充実性。(私立・文系・20代・職業経験あり)
このアンケートの目的を教えてください。できれば結果と考察も。(国立・理系・20代)
大学名、研究科、専攻などこのアンケートは、個人を十分に特定できる内容について回答を求めている上、収入まで聞いている。このような調査に前端的に解答することは非常に抵抗を覚える。少し頭を使って質問、調査項目を練り直すべき。(国立・文系・20代)
このようなアンケート調査の結果がいかんか実際に反映されるのかわからないのでそのプロセスを明確にしていきたいと思います。(国立・文系・20代)
今のシステムで問題ないと思われます。(私立・理系・20代)
まったくヒドイ。(公立・文系・20代・職業経験あり)
能力ではなく研究者の印として努力や工夫を重んじる教育をして頂いている。(国立・理系・20代)
研究室に外国の方がいれば、論文などの英文文においてネイティブの視点で助言が与えられる。大学院は教育される場なのでしょうか?研究活動の場であると考えられるように今まで育てられましたが、大学院に教育を見出そうとすると、問題は山のようにあると思います。しかし私個人としては、現状で満足しています。(国立・理系・20代)
満足しています。(国立・理系・20代)
特にありません。奨学金(学費免除)などよくして頂いております。(私立・文系・20代)
医学部の大学院は他学部と若干異なる点があると思います。うまく質問にお答えできていないかもしれませんがお許し下さい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
満足。(国立・医療系・20代)

社会人入学ですので回答を考えるのに苦しみました。不明な点が多く記入できませんでした。すみません。(国立・理系・30代・職業経験あり)
今はとくにないけれど、相談に来てくれるなら心強いです。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
臨床心理学の分野を専攻しているため、研究と実践が密接に関わっているが、両方を伸ばしていくことは大変でどちらに重点をおけまいのかわからなくなってしまう。(私立・文系・20代)
博士後期課程3年(私立・文系・20代)
この質問用紙は社会人学生向けではないと思います。私は、学部卒業以来今もずっと働いていますのでちょっと理解できない質問がありました。(私立・文系・40代・職業経験あり)
特にございません。現状に大変満足しています。(国立・文系・30代・職業経験あり)
入学したばかりなので、詳しくわかりません。でも、学会の参加の機会がもっとあればよいと思います。(国立・理系・30代・留学生・職業経験あり)
現在、大変満足しています。(私立・理系・20代・職業経験あり)
この質問は医学部出身の者にとっては全体的的に得ない質問と思います。統計からははずす方がよいかもしれません。(医療系・20代・職業経験あり)
どのようなフィードバックがあるかもわからないし、とてもうさんくさい調査だと思います。学校通じてやったら回収率は上がるでしょうけどどういう意図でプライバシーを侵害するような項目ばかり尋ねるのでしょうか?そのところどうにかしてもらわないと回答する気は損ないです。(国立・文系・20代)
特にありません。自身の努力が第一だと思います。(国立・理系・20代)
充実している(私立・理系・20代)
現在の在学学校における大学院教育については特に問題点はありません。(私立・文系・50代・職業経験あり)
実際の指導教員と少し離れているところ(連携大学制度)。今の周りの状況は実力というよりも大学の名が有利であったり、女性であることが有利であってりするところ(職の採用など)自分に実力がないのでしかたないのですが、もしある人がこの状況におかれたら耐えられないでしょう。(私立・理系・20代)
社会人として入学させて頂きました。10年前では、考えられない状況です。社会人として再教育出来る場があるのは好ましいことですので。大学と企業との関係、社会との関わり方も含めて、時代に見合っていると考えています。姫工大は、比較的適応していると思われ、このような大学が増えれば良いと考えます。(公立・理系・30代・職業経験あり)
私の場合、現在十分な環境を与えていただいております、特に問題等はありません。(私立・理系・30代・職業経験あり)

8. 全般

指導教官からの指導は実質皆無で、こちらから尋ねても十分な回答はない。研究に必要な設備や資材がもっと充実すべきだと思うし、また指導教官の資質も問われるべきだと思う。また、学費の捻出を支援する制度(奨学金、学費免除)が、もっと手厚く広いものになってほしい。(国立・医療系・30代・職業経験あり)
教員の質が悪すぎる。文献もろくにそろっていない。授業料がどんどんたかくなっているのにそれに見合う奨学金が用意されていない。奨学金給付、貸与の基準が不明確、ぎりぎりのところでがんばっている者には支給されず、明らかに必要の無い人のところに入っている。露骨なアカデミックハラスメント。最も弱い立場にある学生は黙ってたえるしかない。(国立・文系・20代)
居住空間を充実したものにしてほしい。ポスト7の数を増やしてほしい。大学院生への経済的支援をもっと拡張してほしい。研究費の拡充をしてもらいたい。(国立・文系・20代)
大学院の授業の充実。実験設備の充実。学会参加への経済的支援が少なすぎる。共同研究の充実。(私立・理系・20代)
授業料はどう考えても高すぎる。大学の図書館は極めて不便。大学間の情報交換、図書の貸し出し等改善の余地あり。(国立・文系・20代)
基礎的訓練の充実(研究者としての基本的能力の養成)研究費の支援(奨学金等の拡充)研究環境の改善(院生の研究スペースの拡充、利用時間の拡大)。(私立・文系・20代)
各研究室にある実験器具を使用する制限を緩和して欲しい。(研究室同士の交流および器具の公共《共有》化)。指導教授との相談の場がもっと欲しい。(公立・理系・20代)
実験台が狭い。学内外との交流の機会をもっと増やしたい。大学院の授業で何かを伝えようとする意識のある先生が少ない。声小さい。板書きが読みづらいなど。やる気を出して欲しい。(国立・理系・20代)
院生が毎年増加しているにも関わらず、共同研究室の確保(机、パソコンなど)が遅れてる。数学専攻とは言っても、解析と計算数学に偏っており統計、代数専門の指導教員が少ない。(私立・理系・20代)
研究を行うに際して、共通して必要な基礎的な知識、語学、論文作成、統計、哲学等について、体系的な教官を確立してほしい。学会は参加実績に見合った費用援助をしてほしい。研究室自体にも、指導する学生数に応じた資金援助をすべきだと思う。(国立・医療系・20代)
読みたい論文などがみじかに無いことがあり、すぐにアクセスできない。研究に集中できるように、もっと金銭的な支援があると良いと感じる。奨学金の募集期間を1年中行ってほしい。(公立・文系・20代)
学外との交流の機会。学内セミナーの開催。後期課程者への講義。地域的規模の小研究会への参加に関する交通費援助を増やしてほしいです。(私立・理系・20代)
大学院レベルの授業を増やしてほしい。英語、論文作成、学会発表の方法等、実用スキルの教育を充実してほしい。学振をもっとふやしてほしい(全然足りない)。授業料免除をも

<p>っと行ってほしい。(国立・学際系・20代)</p>	<p>授業料があまりにも高すぎる。授業料免除の申請用紙に親の収入を記入する欄があるのもナンセンスです。被害者妄想的な書き方になりますが、ほとんど全ての大学院生は、日本のメチャクチャな英語教育の被害者です。上の文とは別の問題ですが、英語は科学論文を読み書きするための言語としては、(日本語よりましですが)とても不適當です。改善できませんか？(国立・理系・20代)</p>
<p>講義形式の授業はほとんどおこなわれないのが現状であるが、これはそれほど大きな問題ではない。私の属する研究室では、助手、助教授がないため先輩の学生が後輩の学生の実験的な指導をしている。これは、博士課程の学生には負担。学内で共用できる装置があつてほしい。文献や論文検索をもっと幅広くできるようにしてほしい。あと日本学術振興会の基準をもっと明確にし、なぜ不採用なのかできる限り教えてほしい。(国立・理系・20代)</p>	<p>院生を人とも思わない施設の工事の騒音を何とかしてほしい。旅費等の補助を大学側からしっかりとしてほしい。(国立・理系・20代)</p>
<p>研究室における一人あたりの専用スペースが狭い。修士課程での授業が専門性にかたよりすぎている。(私立・理系・20代)</p>	<p>給与奨学金の充実。教育スタッフの充実。雑用の低減。電子ジャーナルに充実。雑用に対する給与(TA, RA)の充実。(国立・理系・20代)</p>
<p>地域性の問題なのですが、以下の点について改善してほしいです。学会発表の旅費を給付してほしい。他大学との交流が少ない。既婚者で子持ちの人には、学費を免除してほしい。(国立・理系・20代)</p>	<p>大学院生における研究に対する意識の向上。食堂での営業時間。(私立・医療系・20代)</p>
<p>社会人入学の立場であるが、現在の大学は非常に配慮してもらっている。働きながらの勉強は楽ではないが、なんとか続けていけそうである。また、社会人学生と一般学生と一緒に議論することは、相方にメリットがあると思われる。(国立・理系・40代・職業経験あり)</p>	<p>教官が多忙であること。院生数の増加に見合った施設の整備がされていないこと。(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>教員の資質。努力、上げた成果に見合った報酬が無い。たいした成果も無く大学院を卒業するケースもありモチベーションが下がる。研究スタイルが古い、時代の変化が読み取れず、高度化、スピード化についていけない。(私立・理系・20代)</p>	<p>研究室が狭く十分な研究スペースが確保できない。人格、能力的に問題あると思われる教官が全く淘汰されない。人材評価のシステムが全く整備されておらずただ閉鎖的。教育者が少なく反面教師が多い。(国立・理系・20代)</p>
<p>専用の自習スペースが無く荷物や辞書を置く場所もない。パソコンが古すぎて(しかも1台のみ)まるでつかいものにならない。研究室の雑務負担(事務処理、TA、書籍管理、連絡、幹事など)が多く、授業以外の時間はほとんどそれに占められて自分の研究ができない。これを避けるために家に籠って研究することになるが、これではなんのために実験から何百万も借金をして大学院に入ったのか分からなくなる。各自の研究に専念できる環境を整えてほしい。助手が廃止され、その雑務負担が大学院生にかかってくるのはおかしいと思う。しかし大学院生という身分でなければ研究はできないので、在学延長を覚悟してそれに甘んじている現状である。(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>	<p>授業料が高すぎる。やる気の無い教員が大半を占めている。修士の講義単位が多すぎて研究する時間が足りない。(私立・理系・20代)</p>
<p>シンボジュウムが少ない。図書館の辞書も借りるようにしてほしい。卒業論文の指導を強めてほしい。学部間の講義の聴講は自由であつてほしい。(私立・文系・30代・留学生・職業経験あり)</p>	<p>情報提供。研究環境の整備(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>
<p>卒後のメリットが少ない(卒後、大学に残ろうと思ってもポストがない、あつたとしても給料がほとんどでない(研修医など)指導教官の資質や性格、考え方によって差がありすぎる。(国立・医療系・20代)</p>	<p>学業面については特に何もありませんが、生活面でもサポートできる制度(奨学金、TAなど)を充実してほしいと思います。あと、うちの大学ではD論文作成において「大学紀要」が業種にカウントされません。業績評価の基準の改善を望みます。(公立・理系・20代)</p>
<p>エアコンを自由に使わせてほしい。教室のDUTYをへらしてほしい。バイトをへらして自分(金銭的に)安定させてほしい。(国立・医療系・30代)</p>	<p>大学に宿泊して研究が行えない点。大学教授が忙しすぎる点。(私立・文系・20代)</p>
	<p>大学院生は、研究室内で何かと肩身の狭い思いを強いられていることが多い。入ったばかりの大学院生に「研究費どこからとってこい」というのはおかしくないですか？社会人入学が認められているのは、いい傾向だと思う。しかし、社会人に合わせて講義を土日に集中されては、土日にしかバイトのできない正規大学院生は経済的に苦しいです。院生には、授業料や入学免除制度も不透明でいいかげんな気がします。寮も無いし。院生に対する経済援助体制、悪すぎます。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
	<p>非常に改善してほしい点が多すぎて書ききれません。(国立・医療系・20代・職業経験あり)</p>
	<p>学費が高い。職業を見つけるシステムを作してほしい(私立・文系・20代)</p>
	<p>学生の支援制度の拡充(金銭的なもの)海外及び国内大学、研究機関との交流機会の少なさ。(私立・学際系・20代)</p>
	<p>私には、先輩も同級生も博士課程にはいません。だからどうゆうふうにかこれからしていったらいいかわかりません。また、朝早く帰りが遅いため自宅生であるにもかかわらず、食費にお金がかかり経済面でも心配しています。(私立・理</p>

系・20代)	奨学金の充実化について改善して欲しいと思う。修士時代の
大学院に4年間在中するために学費を含めて1000万かけているからやめるにやめれない。学位をとるため必要な論文を出すためにボスにさからえない。(国立・医療系・20代)	一種育英会の給付金が少ない。また能力を正しく評価するシステムが少ない。つまり、日本の場合はよく仕事をする院生ほど雑用がまわってくることが多い。本来は仕事で結果を出せば出すほどよりよい待遇を受けられるべきではないかと思う為。→アメリカのTA制度。(私立・医療系・20代)
インターネット接続をしてほしい。指導教官以外の先生方のお人柄がほとんどわかりません。これは案外こわいことです。(特にセクハラやアカハラの相談員をしていたので)私の場合は特殊な事例ですが今後はこのようなタイプの人間も増えてくると思います。よくご指導ください。(国立・文系・50代・職業経験あり)	図書館における文献数。この問題に関してはこの大学の問題だけでなく日本国内のすべての大学にあてはまる。ジャーナルへ出版や版權に関して海外に依頼してる限り大学図書館は高額な購入費用を払いつづければならない。学生、教官、専門職員との有機的な人間関係。「研究は全人格的なものである」→つまりたこつぽこもるのではなく日常生活をも大切にすることという事。日本の国力を低下させない為にも全人教育は非常に大切である。(国立・学際系・30代・職業経験あり)
大学院生が増えつつあることで授業料免除や研究室などの使用が難しくなってきました。今は研究環境としては満足しているのでこれを継続して欲しい。自分の専攻が問題解決型アプローチをとっていることもありディスプリンの形式に少し苦勞しています。授業の内容がもう少し最低1つのディスプリンを獲得できるよう組めればよかったです。(国立・文系・20代)	「総合情報学」という新たな学問だけに、従来の学問とどう異なるのかが未だ不明確である。ただ現在で問題になっていることを関心を持って研究できることは、他大学の院生からうらやましがられることもある。しかしそれは単なる調査であって研究なのかという自問自答はある。一方で文理総合という側面があるので、文系、理系の先生方同士の仲の悪さや権力争い、予算の決め方、使い方で協調が無くこれが院生の耳にまで入るので研究意欲の低下が見受けられる。(私立・学際系・20代)
奨学金採用数が全体として少ない点。就職情報及びガイダンス等のサービスが学部を出ると全く無くなってしまった点。(私立・文系・20代)	学部教育での専門性の重視。図書、共用スペースの充実。遠隔地を考慮したカリキュラム、書類提出期限、学内行事。Q、12、19は自分に全く関係ないと思われた。質問には答えませんでした。(国立・理系・20代)
国内・外留学期間があること(本大学の場合1年)奨学金の充実。(私立・医療系・30代)	INFRASCTURE BACILITIES AT THE LABORETORY SHOREID BE DEREIOPED TO INTERNATIO NAI STANDARD STUDENTS SHRU LD 8ET MORE ENPOUSE BY VIS ITING OTHER UNIVERSITIED I N THE COUNTRY (国立・理系・30代・留学生)
修士課程における履修単位の多さ。(修論への研究時間が不足になりがち)精神的ケア(バイトとゼミと研究でオーバーワークになり現在精神科受診中)学費が国立なのに文系は私立より高い(国立・文系・20代)	文科系だから仕方ないと思いますが、たくさんの方は曖昧だと思います。研究費はなぜもらえないのか、どのようにすればもらえるのか、自分の研究にはどのような問題点があると思われるのか全くわかりません。それから留学生はやはりどうしても日本人学生のように上手に論文を書けないところがあるので、日本人と同じ条件(博士号取得)を満たさなければいけないと言われたら納得できません。TAなどは留学生だからまわってこないのに。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)
アメリカの大学院で見たのですが、院生の共用のパソコン室のような集まれる場所が欲しい。各研究室でこもりがちになるから。問題点としては入学定員確保の為に学力レベルが低い学生も大学院に入れてしまうことがあると思う。少なくとも就職できないから大学院という学生は入れるべきではない。(国立・理系・20代)	ここの大学のみかもしれないが、授業を受けるための時間が多大すぎると思う。博士課程後期で学ぶこと(授業より)が研究にどれほど役立つか疑問を残す。また、このようなアンケートの結果というものをもっと広く公開してほしい。調べただけ調べ後は非公開というのは、アンケートを行った人たちへの侮辱を感じる。(国立・学際系・20代)
干渉が少ない点はあるが、博士■補資格(論文提出)の取得の為専門外の論文複数が要求され題目によっては外国語習得から始めざるを得ない点。負担が大きすぎる。資格取得前は学費年額が120万円ほどで経済的理由で退学する者が多い。そのわりに博論の審査基準には一貫性がなく審査能力に不安を感じる。(私立・文系・40代・職業経験あり)	
知識重視(講義)形式でなく研究法や論文作成の指導をしてもらいたい。調査に関してのネットワーク作り(コネ)を協力して欲しい。研究費が多額の為に個人研究であるということを理解してもらいたい。日本学術研究員の採用が国立の偏重している。博士論文についての基準(統一)を作ってもらいたい。(私立・文系・20代・職業経験あり)	
研究室の換気が悪くて気分が悪い。露骨に院生を見下した態度、言動をとるPDがいる。(中国人)日中友好のため譲って最善をつくしているがあまり長く続いて欲しくない。研究費を少しでもいいから(月5万でも)自由に使えるのが欲しい。(薬品購入等)ちょっとしたアイデアをいちいち相談して批判的考察を受けるのはたまらない。(国立・医療系・30代・職業経験あり)	

<p>研究室の備品購入、管理など任されているので、助手ポストを増やし、自分の研究に専念できる環境が必要。実験を行う部屋が無く困っている。授業料を払っている以上、状況を改善して頂きたい。(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>	<p>スタッフが少ないので指導者が少ない。今は収入が少ない(親と同居中)ので経済的にやや不安定。(国立・医療系・20代・職業経験あり)</p>
<p>研究棟の耐震性。独立行政法人化による学費の値上げ、サービスの低下。学生定員の削減。(国立・文系・30代)</p>	<p>コンピューターなどが教室に不足している為、皆自分で出費し得なければならず、大学院生にとってはかなり高価である。また、機材などが年々数少なくなり数年前まで自分の大学で行えた分析など、他大学や研究所へ行かなければならない。臨床課である為、診療と研究の時間配分が困難な場合がある。海外への留学や発表の機会が諸事情あってなかなか難しい。(費用の問題等)(私立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>教育環境、指導体制、カリキュラムの改善。特にカリキュラムに関して、国際文化という新領域を開拓しているという感じが無い。(国立・学際系・20代)</p>	<p>PH・Dを取っても就職先がない。学部と異なり就職支援のシステムが無い。経済的に苦しい。むしろ留学の方が経済的にも生活においても支援が充実しているくらいだ。自分の意志よりも教室の意思が著しく優先され入学後に実際には自分したい研究が出来ないことに気づくのが現状。学生の能力より出身学部の影響力の方が強い。(国立・医療系・20代)</p>
<p>現在、修士課程が30単位取得の上で、論文作成と時間的にかなり厳しい。だが、学生の自覚が主たる原因ではあろうが学部の延長という感がぬぐえない。そのことが博士課程にも影響を与えているのではないかと、目的意識が低い。研究はあくまでも個人であるが、個人だけでは達成できないことを自覚すべきだし、実社会に対応できるような教育を個々、団体共に考える時期ではなからうか。(私立・文系・40代・職業経験あり)</p>	<p>単科大学の為研究に必要な他学部の情報が得にくいこと。同じ校内でも交流が限定されること。医局体質(教授に権限が集中)(私立・医療系・20代)</p>
<p>経済的支援が少ない。授業料免除や奨学金。学制課、教務、研究科などの対応がよいかわげん。合格発表が普通郵便、不合格通知ない。遠くに住んでいると大変不便。連絡を指示でしかない。研究室、コンピュータ室など不十分(少ない)。図書館の蔵書(数はあるがテーマのものが少ない)論文指導委員会など、個人的に親しくなくてもお願いするのが大変。別の方法にしたい。(国立・文系・20代・職業経験あり)</p>	<p>指導教官の研究補助の仕事や、研究室の雑務が多すぎ、自分の研究や基礎的な勉強に費やせる時間がほとんど取れない。英語教育や研究法を学ぶ機会が少なすぎる。(国立・学際系・20代)</p>
<p>とにかく、机、パソコンいつでも勉強できる環境がほしい。また、奨学金のシステムがあまりにおかしいと思います。配偶者が働き子供が小さい、自分は定職もない単身者よりも経済的に上と考えられるのが理不尽でたまりません。(私立・文系・20代・職業経験あり)</p>	<p>書籍、資料の共有率が低すぎる。教授が忙しすぎて密にコミュニケーションしにくい。(国立・文系・20代)</p>
<p>他大学との単位互換性や情報交換がよりたかまれば、さらによいと思う。コピーカードの配布や学生一人あたりの研究助成金に同じ国立大のなかでも相当なバラつきがある点は不満である。(国立・文系・30代)</p>	<p>留学生が多いため、授業の質が落ちている。本大学における資料や文献の所蔵が少ないため、研究に若干の支障を来たしている。また、大学改革の影響によって研究費が削減され、ますます図書の実績が見込めない模様である。(公立・文系・20代)</p>
<p>理学部、生物学科では博士課程を卒業するのは3年では事実上不可能である。従ってオーバードクターの時期の経済支援をお願いしたいと思います。事実、オーバードクターでアルバイトにせいで、実験がおろそかになってしまうこともあります。学振の採用基準が非常に不透明。セカンドにたまたま名前がのった人(実験のお手伝い程度)や先輩から受け継いだテーマをやっている人は有利だと思う。DCIで学振をもらえるのはそのような人だけであるように思われる。むしろ成績で判断してもらった方が公平だし、大学生がもっと勉強するようになるのでは?と思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>指導教官以外の教授からの指導も気楽に受けたい。学会、研究会への参加チャンスを増やしてほしい。大学の教務にかかわる仕事への参加チャンスを増やして欲しい。(私立・文系・30代・留学生)</p>
<p>環境改善(研究室の充実、机やパソコンがそれぞれに専用のものがあること)。院生への教育方針の確立。(国立・理系・20代)</p>	<p>社会人を中心とする博士課程の意味、修了(単位取得)あるいは学位取得者への評価はどうなるのか、(通常の大学からまっすぐ研究者になったものと評価のちがひ)例えば、大学の公募があった場合、同例に評価してもらえるものかどうか。社会人からみると(当方の政策研究として)現状の政策形成、諸情報について知識不足、認識不足のスタッフもいて、授業の満足度が低いものがある。(国立・学際系・40代・職業経験あり)</p>
<p>大学院に給付の奨学金制度がない。図書館に本を注文しても来るまで時間がかかる。博士後期課程には授業が無い(卒業に単位が要らない)のに学費が高い。研究部屋が無い(個人の)。指導教員の雑用が非常に多い(TA以外にも)(私立・文系・20代)</p>	<p>大学から分配される研究費が交通費として認められないため、研究用の機材のための移動費が自己負担となり大変だった。また、研究室内の機械が人間関係により使用できないことがあった。英語論文の書き方についての講義をもうけてもらったらより論文投稿へのしきいが低くなったように思う。(私立・医療系・20代)</p>

<p>国際学会の旅費等において、院生に対する補助がないので補助してもらいたい。大学部における英語教育が重要であるにもかかわらず、カリキュラムでも対策がなく、自分で学習するしかない。しかし、周りには指導教員等、日本人スタッフしかないため、正しいスキルが身につくのか疑問。文部科学省は外国人スタッフを雇う予算を削いてほしい。(私立・文系・20代)</p>	<p>育英会奨学金の返済免除措置が欲しい。多額の借金を抱えてると思うと気が重い。より確実に就職先を見つけれられるような(採用されやすくなる為の)カリキュラム。(国立・学際系・30代・職業経験あり)</p>
<p>査読済の投稿雑誌への論文(海外)をもつことが私の専門分野での学者としての就職への最低条件であるが査読に数年(2-3年)待つ状況である。博士号取得後の経済的支援のシステムが(PDなどあることはあるが)十分ではない。学生一学者への道のりを悪くしているように思います。(国立・文系・20代)</p>	<p>他大学間学内での学生同志のコミュニケーションが少なく刺激が得られにくいこと。院生室、図書館が話し声でうるさく使いづらいこと。(国立・文系・30代・職業経験あり)</p>
<p>学会活動等の経済的支援の充実していない点。図書館の貸出数と期間の見直し(国立・理系・20代)</p>	<p>産学連携の研究活動に博士後期課程の学生を積極的に担当させる。授業料の値下げ。(国立・理系・40代・職業経験あり)</p>
<p>本大学授業料の廃止、助手人数の拡充(私立・理系・20代・職業経験あり)</p>	<p>学内での研究の連携がないこと研究内容を十分に理解して議論できる人が少ないこと。公開講座等が忙しく研究に集中できない期間があること(約3ヶ月間年)(国立・理系・20代)</p>
<p>研究設備、環境が十分でない。例えば実験スペース、ドラフト(排気設備)、情報収集源等。また大学院生には外部(企業等)と接する機械を多く設けることが必要だと思う。(国立・理系・20代・職業経験あり)</p>	<p>雑務をおしつけられる。経済的援助が不十分。学振採用の基準があいまい。(私立・医療系・20代)</p>
<p>奨学金が幅広く自由に使えるようなシステムを導入して欲しいと思う。また、指導教員と定期的に会って話せる機会をカリキュラムの上で充実させて欲しいと思う。(私立・文系・20代)</p>	<p>日本人(特に、博士後期の人)が受けれる奨学金の種類を増やして欲しい。他の大学院との研究交流を行って欲しい。(私立・文系・30代)</p>
<p>経済的な支援、研究室の計算機やネットワークの管理の代行。(国立・理系・20代)</p>	<p>奨学金の推薦をもっと透明性をみせてほしいです。学会参加の機会を提供して欲しいです。(公立・文系・20代・留学生・職業経験あり)</p>
<p>指導教員が学部生のゼミ生を取りすぎて院生の指導がおろそかになっている。博士論文の執筆までの諸手続きが同じ専攻内でも指導教員によって異なり、シラバスに書いてある例もあてにならざルールがなくストレスが溜まる。留学生や大学教員には基準が甘く、指導も優先されていてずるいと思う。最低基準でも博士を出そう(質より量)みたいな風潮が教員の間にある。(国立・文系・30代)</p>	<p>事務に提出しなければならぬ書類が多すぎる。4月はそれで、1ヶ月終わってしまう。半年ごとの研究発表も、わりあてがあれが進むと思われているように思えて仕方がない。進まない時期に発表しろと言われても前回と同じものを出すしかなくなる。留年だと学費の免除ができないのはつらい。(国立・文系・20代)</p>
<p>博士論文に対する学位授与の基準が非常にあいまい。教授側の社会人学生に対する研究と実務の橋渡しの能力が不足しているように思う。(公立・文系・職業経験あり)</p>	<p>語学教育の充実。奨学金制度の充実が特に望まれる。(私立・文系・20代)</p>
<p>①独立した研究棟・・・学部の校舎に間借りしているような状態である。②TR・RAなどの実施・・・現時点では有名無実である。③修士課程での厳しい指導・・・質の低い修士生が多いことで大学院全体の緊張感が維持できない。④学会等の広報・・・学術的な案内や情報提供は大学機能の一つと考えられる。本質的に研究というのは自分独りでやるものだから設備は二次的問題ではあるが大学のあり方そのものを研究重視に切り替えていくには「ハコのもの」も改善を要すると感じる。※我が校は元々寮制だった為に今でもその名残で研究よりも日常生活の指導に偏重している。しかしその指導も殆どなされなくなって、学生の素行も劣悪傾向が強まっている。故に全体として研究するのに適当な環境であるとは言えない。(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>返還業務のない奨学金制度を設けて、修了後には、ある一定期間の講師、助手等としての契約を確約することや社会科学系での学位取得が現在難しいが、取得しやすくする。(私立・文系・40代・職業経験あり)</p>
<p>実務家教授より許記実務の指導を受けたい。教員への機会を広げて欲しい。(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>主指導者、副指導教員を選ぶ際の条件の見直し。経済面に関して(育英会等、使えないこと+公立教諭のため)。職業があるため。土曜日教員の授業を入れて欲しい。(国立・文系・40代・職業経験あり)</p>
	<p>図書館利用時間、学費の負担軽減、パソコン等のレンタル(私立・医療系・20代)</p>
	<p>実務家との交流が不十分。研究スペース、パソコンの利用など、研究環境に改善の余地がある。奨学金の充実是非とも必要。(私立・文系・20代)</p>
	<p>大学院教育をもっと体系立ったものにして欲しい。博士号取得の条件についてももっと厳しいものにして欲しい。指導教育の授業についても、課程年度内で授業内容をもっと組織的化し、もっと体系的な授業展開を行ってほしい。年度年度でまちまちである。演習の項目においてはもっと学生主体にしてほしい。あまりに指導教員の独壇場になってしまっている。授業が、考える場を提供していない。指導教員がもっと文化省の定める学位授与規定に沿った形で修士号や博士号の認定を行ってほしい。認定が甘くはないか、厳し</p>

<p>すぎはしないかのチェックを行って欲しい。(私立・文系・20代)</p>	<p>就職先などについて指導、相談できる場が欲しい。卒論生と同じスペースしか使えないのは問題がある。一休みする為に十分なスペースの部屋が欲しい。(個人のものではなく)他大学との交流が積極的にできるシステムがあると良い。RAがもっと有意義なものだと良い。(国立・理系・20代)</p>
<p>課程博士を取得するための条件が明確になっていないので、明らかにしてほしい。学会参加への経済的支援。(私立・理系・20代)</p>	<p>修士課程への進学条件が甘いこと。もっと厳しくすべき。大学院での教養科目が多すぎる。もっと専門分野の授業を増やすべき。(国立・理系・20代)</p>
<p>大学院卒業後の進路を研究者もしくは社会での専門家として選択した場合、社会での専門家を養成する視点も今後必要になると思います。今現在の私が在籍している研究室はそのような視点を大事にされています。ただその場合学部授業の要求レベルと大学院での要求レベルが異なるので、大学院入学前に自習を行う必要があります。学部授業や学部ゼミでの授業に将来専門家として生きる為の研究態度、研究手法などもう少し概略でもよいのでそうした授業を行って欲しいと思います。大学での設備は申し分ないのですが、それを十二分に使いこなす機会があればと思います。(もちろん本人の意欲が大切だとは思っていますが)(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>図書館を充実させて欲しい。(オンラインで読める文献を増やして欲しい)大学院大学となり、出席しなければならない授業が増えたが自分の研究とは無関係の内容で全く意味が無い。(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>最近、独法化が進んでいるので、知的財産とか特許関連の授業があってもいいのではと思う。それは学部でも同じ事が言えると思う。どうしようもないけれど、研究室内、及び研究室間によって経済的に差がある。やっているテーマによっても研究室内で比重が違っていたり同じ操作をするのでも経済性の問題で時間がかかったりする場合がある。これらによって学生のモチベーションが変わっていくと思うので、そのへんを教員はうまく指導したり、お金を稼ぐ努力をすべきだと思う。(国立・理系・20代)</p>	<p>国際文化学というのはまだ新しい学問なので、先生の中でもまだ本当の国際文化学の専門家はいない。もっと積極的に取り組むことが望まれる。学会参加に対する補助が無いのでかなり厳しい。(私立・学際系・30代・留学生・職業経験あり)</p>
<p>経済的な面、論文のための研究に終始している点。面白いテーマほど論文になりにくい為テーマが面白くなり博士の魅力がない。修士の方がやりがいがあった。(国立・理系・20代)</p>	<p>授業数を増やすことより研究の時間を多く与えて欲しい。また今回奨学金を取ることが非常に厳しい条件であった。後期課程の採用枠はしっかりと確保して欲しい。(国立・理系・20代)</p>
<p>芸術文化学研究科なので専門の授業以外の科目の履修が義務付けられており、フィールドワークへ行くことができない。言語の授業やそれに関連する講義が少ない。指導教員が病気で入院しており博論の相談ができない。1人しかいないので他の学生との交流がない。学会へ行くのに遠距離なのでお金がかかる。(公立・文系・50代・職業経験あり)</p>	<p>終了後の就職先の確保。大学院で学んだことが活かせる職業について情報提供。自分の研究テーマが指導教授の専門外だった場合そのテーマに合った外部の教員を非常勤講師として招き授業を受ける機会を作る。(私立・文系・30代)</p>
<p>学部と大学院とで要求される知識レベルの差があるにも関わらず、大学院での教育は講師の専門のみに偏っているので、体系的な知識が身につかない。院生に雑用が多すぎる。教員以外のスタッフがいてもいいのでは。(公立・医療系・20代)</p>	<p>博士課程終了後の就職について考える何かが必要。学士や修士とは異なる為情報が入りやすい環境作りなど。研究にお金がかかるといった内容の教育が全くない。院についてはもっと学生に厳しく接するべきだと考える。最近なぜ大学院にきたのか考え自分で答えられない学生がいる。(国立・理系・20代・職業経験あり)</p>
<p>特に春の奨学金等の申請書類提出の期限が非常に短く(指導教員と相談の上決定したいと思うが)申請が出来ない。他の知り合いの院生で指導教員にほとんど指導を受けず、成績評価は良いという人がいる。このように教員によって様々ばらつきがあるというのは避けたいほうがよいのではないかと。(私立・学際系・20代)</p>	<p>博士前期の1年間のコースワークは充実しているが、2年生向けの講義が不十分。海外の大学では研究者を5年一貫で育てる為に前期(修士)2年目の授業が充実していると聞く。また、博士後期になるとほとんど実際の指導が行われず、ほぼほったらかしになるケースがかなり多い。博士後期の教育機会の充実は必須である。また、研究科分野によって学会参加の費用が支給されたり、されなかったりの不公平があるのも問題。(国立・文系・20代)</p>
<p>他大学等の交流や海外学術交流をもっと積極的に行っていただきたい。図書館の図書を充実して欲しい。(私立・理系・30代・職業経験あり)</p>	<p>授業料が高い。就職が困難。ODが多い。(私立・学際系・30代・職業経験あり)</p>
	<p>国内外学会への発表、参加の為に経済的支援向上やよりよい環境(実験スペース等)での研究活動が行えるような大学からの配慮が必要であると考える。(私立・医療系・20代)</p>
	<p>大学院は研究のみすれば良いという姿勢があり臨床教育が受けづらい、又生活を自立させるのが難しいので、学生実習について教育をすれば、お金がもらえるようなシステムがあるとよい。(私立・医療系・20代)</p>
	<p>研究科の人数に対して、研究室に設備が不十分である。(広さ、机、コンピュータ等)一人の先生が指導しなければならない院生の数が多い。大学の教員をもう少し増やしてもいいのではないかと。(国立・文系・20代)</p>

<p>大小を問わず研究発表の機会が少ない。院生間の討論の機会が少なく発表の技法を磨くことができない。必要な研究書を私費ではなく、大学の研究費で揃えていただきたい。図書館、研究室の利用時間を延長し院生が随時利用できる体制にしていきたいと思います。(私立・文系・30代)</p>	<p>博士課程後期については、博士論文執筆要件を満たしているか審査する時期が早すぎると感じている。(要件となっているジャーナル誌の査読結果が出るまで、一般に半年程度要するため)博士課程前期については、全体で2年間しかないのので取得しなければならぬ単位数が多すぎ、本来メインとなるべき研究があまり出来ないと感じたので、卒業要件の単位数をもっと減らして欲しいと思いました。(国立・理系・20代)</p>
<p>授業の内容を学生が評価し、それを公開することによって授業の質の向上、及びより高い緊張感が生まれると考える。また、博士学生の本当の研究能力をより公平に厳しく評価し実力に対しても研究助成等の支給などを設けるといった「実力主義」を徹底して欲しい。(国立・理系・20代)</p>	<p>日本育英会の奨学金が希望者全員にもらえるようにして欲しい。社会人にも門戸を開いたことによるレベルの低下およびカリキュラム、授業内容、開講時間等の一方的変更。(私立・文系・30代)</p>
<p>もう少し奨学金や何らかの収入があればと思う。講習や色々な手続きに時間がかかり過ぎる。院内の交流を増やす。(国立・理系・20代)</p>	<p>自分の研究の運営費を一切指導教員が管理してしまっている為、研究費の運用がよくわからない点。逆に言えば不自由なく研究ができて喜ばしい事だが、今の自分の大学院教育についての問題点は、■■位のその方が振り返ってみると、中等高等学校の教育が最も問題があったように思われる。学校あるいは教員によるのであろうが、実際の教育とはかなり離れた学ばせ習わせるというような場でしかなかった気がする。せめて学習していることがいつれどのような形で生かされるのかという点を気づかせるべきではないだろうか。(私立・理系・20代・職業経験あり)</p>
<p>大学院の指導の時間帯が17時からと遅いので時間帯が変更できれば助かる。(でも人数が1人なので悪くは言えない)その為、まとめた物を郵送してみてもらっている。それも月に2、3回だから学費が無駄かな。専門知識の指導は他大学の先生に見てもらっているので、今の大学は籍があるだけです。教官も専門外です。(私立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	<p>優秀な教員の確保は必要。図書館などに情報、資料の十分な確保。経済的支援(国立・理系・20代・留学生・職業経験あり)</p>
<p>学会参加費や論文の別刷代、研究材料の採集費など支援してくれると非常に助かるのですが、ここ何年(何十年)も研究も、論文発表もしているような先生方がいるのは何とかならないかな。こっちまでモチベーションが下がるので。(国立・理系・20代)</p>	<p>学会誌に投稿する論文をもっと増やせるように、論文の受理や審査を少し易しくしてほしい。大学院生の授業料をもっと安くしていかねばならないと思います。特に博士後期課程の学生の授業料は必要ないのではないかと思います。(国立・理系・20代)</p>
<p>図書館の書籍を充実させて頂きたいと思います。授業料が高い。矛盾した要求かもしれませんが。(私立・文系・30代・職業経験あり)</p>	<p>図書館の開館時間が短い。小学校現職教員であるため、土日や夏休みに利用したいが、閉館していたり、5時に閉まったりしている。休日にこそ夜遅くまで開館してほしい。従って十分に図書館を利用できていない。博士課程にも教員の派遣制度や研究休暇制度を広げてほしい。研究のために辞職しなければならなくなる。そうすると再就職も不可能。生活苦。研究が教育現場で生かせないということになる。ジェンダー研究、女性学研究、ポスト、予算配分、女性研究者比率を高める。(国立・文系・40代・職業経験あり)</p>
<p>大学の施設を24時間利用できるようにして欲しい。研究者志望の者の入学人数を制限して欲しい。(私立・文系・20代)</p>	<p>大学によって博士号のとれるレベルが違うように思われる。また、奨学金に関してですが、オーバードクターには機会をあげないようにし、できるだけ早く書いて学校を出るように雰囲気を作ってほしいです。奨学金がもらえると思う人が多く急いで書いていた印象です。(国立・文系・30代・留学生・職業経験あり)</p>
<p>経済的に大学院は十分でないと思う。もう少し金銭面に余裕があれば生活に追われず、研究に励むことができると思う。後、研究成果をどのように社会に役立てるかなどの先を見た教育の必要性がある気がします。(国立・理系・20代)</p>	<p>卒後研修義務化により医学部大学院へはより進学しにくくなると思われる。研修医不足による大学院生の臨床DUTY増加。経済的不安定性→アルバイト(国立・医療系・30代・職業経験あり)</p>
<p>欧米並みの奨学金制度の整備。実力勝負になっていない。経済的理由で企業に流れる人が多い。自然科学と社会人とで博士認定に格差がある。その是正。指導教官を2名にして欲しい。国立(旧帝大)のような研究科、院の重点化を希望する。コースワーク制を確立して欲しい。(公立・文系・20代)</p>	<p>個別のスペース(机・いす)を与えられているものの、やはりもう少し広いスペースの研究環境が与えられるのが望ましい。また、大学の紀要にもう少し院生の論文が載るチャンスをしていただきたい。(国立・文系・20代)</p>
<p>教育について自己満足で授業をしている先生がいると思う。もっと学生を見るべきだと思う。実験環境について、4年目になるが改善されない。もっと学生の安全を考えた実験環境にして欲しい。(国立・理系・20代)</p>	
<p>専用の机が無い。共用の机には鍵もなく、本など貴重品が置けない。講座費などでまかなわれるべきものを自分で買わなければならない(白衣、コピー、文具、専門書等)研究に理解ある先生が少ない。インターネットにつながらずプリントさえ出来ない。学会で発表しても交通費が出ない→国際学会に行きづらい。お金が無いとできないアルバイトを増やすと研究が進まないというジレンマに苦しんでいる。(国立・医療系・20代)</p>	

<p>研究スペースの獲得が非常に困難であること。科研費などの管理を大学でやってもらいたい。入試の合格基準が甘いように思える。(私立・理系・20代)</p>	<p>研究者育成のための施設、指導力に不足を感じる。(私立・文系・20代)</p>
<p>ひとつの専攻(分野)等、常に複数の指導者がいた方がよい。授業は生活費をかせぎつつ学問にのぞむ者に対して、ぜひとも夕方(16:00~)にすべき(~20:00くらいまで)。指導教授の研究業績についてもつねに学外からも評価させるべきである。(内部のみからの評価はあまりに好意的であることが少なくない)。学生(研究生)の意見を聞き入れる場を学内とは別にも設けるべき。(私立・文系・20代)</p>	<p>・特別研究員数の増加(奨学金)。・他専攻の研究施設の利用の推進。(国立・文系・20代)</p>
<p>学生だから仕方がないかもしれませんが、お金を借りては出たくない一方で将来に背負うものが大きくなる一方です。もう少し負担を減らす方向にもってほしい。教授との関係ひとつでいろんなものが決まってしまう、授業料を納めて勉学に励んでいる側としてはいろんな機会を均等に与えてほしい。(公立・理系・20代)</p>	<p>・余裕のあるデスクスペースとパソコン(IT利用可)の貸与をして欲しい。現在の状況は家畜の飼育場と同等である。→教授の価値観が全ての研究の方向性となっている。・国立大学の割には授業料が高すぎる。・教員が個人の資質と可能性を把握しようとしない。・教授からの指導が日和見的であり、一貫性がない。→専攻分野に所属している教授が専攻カリキュラムを無視して自分の好きな分野しか指導しない。(国立・文系・30代・職業経験あり)</p>
<p>副指導教官がいないので困ることがある。制度としてつくてほしい。学会参加などの金銭的援助がほしい。(国立・文系・20代)</p>	
<p>・金銭面(外国並にサポートしてもらえたら、日本人の博士課程進学者が増えるはず)・就職面(もっと透明性のある体制であれば、在学中にあれこれ悩むことが少なくなると思います)(国立・理系・30代・職業経験あり)</p>	
<p>・図書館閉館時間の延長(特に休日、長期休暇時期)・論文の英語チェックをしてくれる先生がいらない。(学内のネイティブ・スピーカーの先生は、学部生の指導にかなりの時間を費しているため、院生からは頼みにくい様子。)・学部カリキュラムの改革や、学外向け行事の増加により、専門外の事務で、指導教授の助手的雑務のための時間が増え、文献講読のための時間が以前に比べてとりにくくなった。(私立・文系・20代)</p>	
<p>パソコンを利用しにくい(院全体で6台程度)。図書館設備。博士課程向けの授業が実質的にほとんどない。北大では単位不安。指導も少なく(教官による)、ほぼ部屋(机)使用、図書館利用、パソコン利用のみなのに学部・修士と同じ授業料なのは不平等。研究者を目指すのは、精神的にも経済的にも非常に苛酷であると思われます。(国立・文系・20代)</p>	
<p>講義内容が乏しい割に取得しなければならない単位数が多い。本来、研究のために使われるべき時間が、研究課題と関係ない授業や病院の雑用(無給)に費やされていても、教授が意に介さない、基礎研究を充実させようという意欲が感じられない。(私立・医療系・30代・職業経験あり)</p>	
<p>・文系の院生の(特にドクター修了者)の終了後の就職先が少なくないように思う。・短期間でも学究のみに専念できる環境(特に経済面→奨学金の充実など)を整えてほしい。(国立・文系・20代)</p>	
<p>教授・助教授と助手との間が色々な意味で離れており、人間関係のもつれなどに心がさかされ、研究に集中できない。助手を採用するに当たり、6年もDrをやっていた人間がなると若い人たちの意見がいえなくなってしまう。もう少し、外から人間を入れて新しい風を起こす必要が考えられる。ヨーロッパやアメリカなど、英語を話す研究者を入れて、日常的に英語を話す機会を与えて欲しい。(国立・理系・20代)</p>	

2. 回答結果集計表

大学院生調査集計結果（専門分野別クロス表）

Q1. 年齢

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
20代	62.0%	79.9%	57.6%	57.8%	68.6%	1,815
30代	28.4%	14.8%	38.3%	30.4%	24.7%	653
40代	5.5%	3.4%	3.1%	8.1%	4.2%	112
50代以上	4.1%	1.9%	1.0%	3.7%	2.4%	64
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

Q2. 性別

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
男	59.9%	84.4%	71.6%	54.7%	73.0%	1,932
女	40.1%	15.6%	28.4%	45.3%	27.0%	715
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,647

Q3. 家族の状況

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
配偶者なし	76.7%	81.3%	66.9%	80.4%	76.7%	2,029
配偶者あり	23.3%	18.7%	33.1%	19.6%	23.3%	615
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

Q4. 国籍

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
日本国籍	83.0%	88.6%	91.5%	88.2%	87.7%	2,317
外国籍	17.0%	11.4%	8.5%	11.8%	12.3%	324
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,641

Q5. 外国籍の方にうかがいます。日本での滞在期間をご記入ください。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
3年未満	8.9%	19.0%	28.8%	19.0%	16.7%	54
3～5年	28.2%	50.0%	48.1%	38.1%	40.6%	131
5年以上	62.9%	31.0%	23.1%	42.9%	42.7%	138
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	323

Q6. あなたの現在の在籍大学・研究科と学年、専攻分野をご記入下さい。

大学の設置者

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
国立	47.1%	68.3%	59.7%	51.5%	59.5%	1,576
公立	8.2%	7.0%	3.9%	6.1%	6.6%	175
私立	44.7%	24.7%	36.4%	42.3%	33.9%	898
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,649

学年

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
D 1	35.1%	34.6%	22.3%	42.9%	32.5%	841
D 2	26.3%	32.3%	27.9%	23.7%	29.2%	755
D 3以上	38.6%	33.1%	49.8%	33.3%	38.3%	992
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,588

08. 博士課程後期へ進学しようと決めたのは、おおよそ、いつ頃ですか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
高校卒業以前	4.7%	8.4%	5.1%	5.0%	6.4%	170
大学入学の頃	8.4%	6.6%	6.6%	4.4%	7.0%	185
大学卒業の頃	23.4%	16.4%	33.2%	22.5%	22.5%	594
博士課程前期在学中	49.9%	51.9%	20.6%	47.5%	44.0%	1,162
大学(院)卒業後社会に出てから	13.5%	16.7%	34.4%	20.6%	20.0%	528
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,639

09. 博士課程後期に進むにあたって、特にあなたに影響を与えた人は誰ですか。(3つまで重複回答可)

(各カテゴリーの回答者数に対する比率)	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
高校時代の先生	2.2%	3.3%	1.0%	2.5%	2.4%	64
学部時代の先生	28.9%	14.6%	16.1%	23.9%	19.5%	518
博士課程前期の指導教員	57.2%	51.7%	22.0%	47.9%	46.4%	1,232
博士課程後期の指導教員予定者	8.6%	8.4%	15.1%	15.3%	10.4%	275
大学の同級生	6.3%	9.5%	14.2%	7.4%	9.6%	254
大学の upper 級生・院生	20.3%	21.5%	29.3%	19.6%	22.7%	604
配偶者	4.0%	2.8%	4.4%	3.1%	3.5%	93
両親	15.8%	18.1%	18.0%	16.6%	17.3%	459
その他	8.1%	10.5%	12.5%	14.7%	10.5%	279
特に誰もいない	12.6%	13.1%	13.9%	13.5%	13.2%	350

010. 博士課程前期を修了するにあたり、博士課程後期進学以外に、就職を真剣に考えましたか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	29.9%	49.4%	54.1%	45.2%	44.7%	1,140
いいえ	70.1%	50.6%	45.9%	54.8%	55.3%	1,410
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,550

011. 上の質問で「1. はい」と答えた方にうかがいます。他に考えた職業はどのような職業ですか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
会社員	36.5%	70.7%	22.3%	29.7%	48.7%	523
公務員	12.7%	10.4%	5.5%	10.9%	9.6%	103
学校教員	21.3%	3.9%	2.1%	7.8%	6.8%	73
教育研究職	15.7%	9.1%	13.1%	28.1%	12.6%	135
その他	13.7%	6.0%	57.0%	23.4%	22.3%	239
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	1,073

012. 博士課程後期への進学に際して、以下の事柄はどの程度重要でしたか。

1. 大学で専門をさらに深めたかったから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	80.4%	73.4%	60.9%	75.3%	72.7%	1,914
少し重要	15.8%	20.4%	30.4%	19.1%	21.3%	560
どちらともいえない	1.8%	3.9%	6.0%	3.1%	3.7%	98
それほど重要でない	1.2%	1.8%	1.9%	2.5%	1.7%	45
全く重要でない	0.7%	0.5%	0.9%	0.0%	0.6%	16
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,633

2. 将来、専門家として活躍するため

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	68.0%	63.1%	50.5%	65.4%	61.9%	1,630
少し重要	20.9%	24.2%	27.5%	21.0%	23.8%	627
どちらともいえない	6.9%	8.6%	15.0%	7.4%	9.5%	250
それほど重要でない	3.0%	2.9%	4.9%	4.3%	3.5%	92
全く重要でない	1.1%	1.1%	2.0%	1.9%	1.4%	36
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

3. 研究する機会を得るため

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	73.0%	63.4%	60.1%	71.0%	65.8%	1,731
少し重要	21.5%	26.8%	27.4%	22.8%	25.2%	663
どちらともいえない	3.2%	8.1%	8.2%	4.9%	6.5%	172
それほど重要でない	1.8%	1.6%	3.2%	0.6%	2.0%	53
全く重要でない	0.6%	0.2%	1.0%	0.6%	0.5%	13
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

4. より良い就職の機会を得るため

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	21.4%	13.4%	14.4%	22.8%	16.4%	430
少し重要	23.2%	20.9%	26.9%	24.1%	23.0%	604
どちらともいえない	28.5%	29.6%	25.2%	22.2%	28.0%	734
それほど重要でない	15.4%	20.7%	20.0%	18.5%	19.0%	498
全く重要でない	11.6%	15.3%	13.5%	12.3%	13.7%	360
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,626

5. 博士号を取得しなかったから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	42.0%	41.3%	43.6%	46.3%	42.4%	1,115
少し重要	29.5%	30.5%	34.4%	27.2%	30.8%	811
どちらともいえない	13.3%	15.5%	10.3%	12.3%	13.5%	356
それほど重要でない	10.8%	7.9%	8.0%	10.5%	8.8%	232
全く重要でない	4.5%	4.7%	3.8%	3.7%	4.4%	115
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,629

6. 指導教員の勧めがあったから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	16.0%	15.1%	13.1%	15.5%	14.9%	389
少し重要	25.7%	23.0%	28.7%	29.8%	25.5%	667
どちらともいえない	29.7%	25.6%	25.9%	26.1%	26.9%	702
それほど重要でない	11.7%	15.2%	13.4%	13.7%	13.7%	359
全く重要でない	16.9%	21.0%	18.9%	14.9%	19.0%	497
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,614

7. 家族からの支援があったから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	29.4%	25.1%	20.2%	28.8%	25.4%	662
少し重要	26.4%	27.0%	25.7%	26.9%	26.6%	693
どちらともいえない	19.2%	21.1%	19.9%	16.9%	20.1%	524
それほど重要でない	9.1%	10.6%	15.1%	11.3%	11.3%	294
全く重要でない	15.9%	16.2%	19.2%	16.3%	16.7%	437
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,610

8. 職場からの派遣があったから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	1.4%	3.8%	5.5%	2.1%	3.4%	83
少し重要	2.6%	3.3%	6.4%	2.7%	3.8%	92
どちらともいえない	15.3%	21.5%	22.5%	22.6%	20.2%	488
それほど重要でない	5.4%	7.3%	10.7%	5.5%	7.5%	180
全く重要でない	75.3%	64.0%	54.8%	67.1%	65.1%	1,572
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,415

9. 日本育英会の奨学金がもらえるから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	16.7%	15.2%	7.3%	13.5%	13.7%	351
少し重要	16.4%	15.0%	8.4%	9.7%	13.5%	346
どちらともいえない	14.2%	18.3%	16.4%	16.1%	16.6%	425
それほど重要でない	11.9%	12.4%	9.9%	12.3%	11.7%	300
全く重要でない	40.8%	39.1%	57.9%	48.4%	44.3%	1,133
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,555

10. その他国内の奨学金がもらえるから

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	5.3%	5.5%	3.9%	3.9%	5.0%	124
少し重要	7.7%	7.3%	5.5%	7.7%	7.0%	175
どちらともいえない	23.4%	25.1%	19.2%	23.9%	23.3%	582
それほど重要でない	12.8%	11.3%	9.2%	11.0%	11.2%	280
全く重要でない	50.9%	50.8%	62.3%	53.5%	53.6%	1,340
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,501

11. 日本留学の奨学金がもらえるから(留学生)

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	17.7%	10.1%	6.8%	6.5%	10.9%	116
少し重要	6.6%	9.0%	3.8%	9.1%	6.9%	74
どちらともいえない	12.9%	17.7%	11.9%	18.2%	15.0%	160
それほど重要でない	7.7%	6.8%	7.2%	3.9%	6.9%	74
全く重要でない	55.0%	56.4%	70.3%	62.3%	60.3%	643
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	1,067

Q13. あなたはこの4月から現在まで、以下のような活動にどの程度の時間を使っていますか。

1. 博士論文のテーマに関する調査や実験

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	46.9%	78.1%	71.0%	54.0%	66.5%	1,753
少しの時間	31.4%	15.8%	19.6%	30.7%	21.9%	576
あまり使っていない	14.8%	4.8%	6.1%	12.9%	8.3%	219
全く使っていない	6.8%	1.3%	3.2%	2.5%	3.3%	87
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

2. 博士論文のテーマに関する文献講読

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	58.1%	49.1%	49.7%	47.5%	51.6%	1,364
少しの時間	30.8%	40.5%	37.1%	42.6%	37.1%	981
あまり使っていない	9.0%	9.7%	11.1%	9.9%	9.9%	261
全く使っていない	2.1%	0.7%	2.2%	0.0%	1.4%	36
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,642

3. 博士論文のテーマ以外の研究活動 (含むR.A.)

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	21.1%	11.9%	15.4%	23.1%	15.9%	414
少しの時間	47.4%	41.0%	39.9%	45.6%	42.7%	1,110
あまり使っていない	20.8%	32.4%	30.2%	20.0%	28.0%	728
全く使っていない	10.7%	14.6%	14.5%	11.3%	13.3%	346
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,598

4. 博士論文の執筆

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	21.8%	14.9%	17.6%	15.5%	17.4%	457
少しの時間	19.6%	18.4%	23.6%	23.0%	20.2%	529
あまり使っていない	22.7%	25.8%	22.7%	24.8%	24.2%	635
全く使っていない	35.9%	40.9%	36.1%	36.6%	38.2%	1,003
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,624

5. 学会誌等の論文執筆

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	31.7%	32.4%	12.3%	28.2%	27.4%	722
少しの時間	32.5%	35.7%	31.5%	38.7%	34.1%	899
あまり使っていない	15.6%	14.7%	24.1%	16.0%	17.1%	450
全く使っていない	20.3%	17.2%	32.1%	17.2%	21.4%	564
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

6. 学会発表の準備

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	26.1%	23.9%	19.0%	28.4%	23.7%	624
少しの時間	29.2%	45.8%	45.4%	36.4%	40.7%	1,072
あまり使っていない	15.9%	17.1%	16.8%	19.8%	16.9%	444
全く使っていない	28.8%	13.2%	18.7%	15.4%	18.8%	495
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

7. 大学での教育活動(T.A.など)

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	13.1%	6.8%	9.5%	17.8%	9.8%	257
少しの時間	35.6%	37.2%	33.3%	33.1%	35.6%	932
あまり使っていない	17.3%	23.1%	26.5%	20.9%	22.2%	580
全く使っていない	33.9%	32.9%	30.8%	28.2%	32.4%	848
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,617

8. 授業への出席

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	30.7%	3.0%	5.5%	16.0%	12.0%	315
少しの時間	45.0%	18.7%	28.7%	29.4%	28.8%	760
あまり使っていない	17.0%	30.5%	30.4%	27.6%	26.6%	701
全く使っていない	7.2%	47.8%	35.4%	27.0%	32.6%	859
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

9. 外国語の学習

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	17.2%	6.1%	6.0%	10.4%	9.3%	245
少しの時間	35.5%	34.8%	32.2%	35.6%	34.4%	904
あまり使っていない	25.2%	36.6%	32.4%	34.4%	32.4%	852
全く使っていない	22.0%	22.4%	29.5%	19.6%	23.8%	625
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,626

10. アルバイト

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	13.7%	2.9%	11.3%	6.9%	8.0%	209
少しの時間	29.7%	11.9%	41.5%	17.5%	23.7%	623
あまり使っていない	20.4%	15.2%	15.0%	21.3%	17.0%	445
全く使っていない	36.2%	70.1%	32.1%	54.4%	51.3%	1,347
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,624

11. 大学等での非常勤講師

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	8.5%	1.1%	2.8%	5.6%	3.8%	98
少しの時間	9.6%	5.1%	6.7%	11.7%	7.1%	184
あまり使っていない	4.5%	5.0%	9.8%	6.2%	6.0%	157
全く使っていない	77.3%	88.9%	80.7%	76.5%	83.1%	2,165
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,604

12. 研究室内の院生・学生との研究会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	9.4%	13.8%	6.5%	10.6%	10.8%	282
少しの時間	40.2%	52.1%	45.9%	40.4%	46.8%	1,227
あまり使っていない	22.1%	20.4%	27.7%	28.0%	23.0%	602
全く使っていない	28.3%	13.7%	19.9%	21.1%	19.5%	512
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,623

13. 学内の院生・学生との研究会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	5.5%	3.1%	2.2%	2.5%	3.5%	92
少しの時間	32.0%	18.0%	20.6%	25.9%	23.0%	602
あまり使っていない	25.4%	29.2%	34.6%	32.7%	29.5%	773
全く使っていない	37.1%	49.7%	42.6%	38.9%	44.0%	1,152
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,619

14. 他大学と院生や研究者との研究会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
かなりの時間	7.0%	3.0%	2.2%	4.3%	4.0%	105
少しの時間	34.0%	17.5%	15.7%	26.1%	22.2%	580
あまり使っていない	21.6%	29.1%	28.7%	24.8%	26.7%	699
全く使っていない	37.4%	50.3%	53.4%	44.7%	47.1%	1,234
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,618

014. あなたは以下のような学会活動をどの程度経験していますか。

1. 国際的な学会での口頭発表

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
2回以上経験がある	3.4%	18.3%	5.2%	12.4%	11.0%	285
1回だけ経験がある	6.4%	20.3%	13.4%	14.3%	14.6%	381
未経験	90.2%	61.3%	81.4%	73.3%	74.4%	1,935
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,601

2. 国内の学会での口頭発表

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
2回以上経験がある	27.2%	72.2%	53.8%	56.5%	54.9%	1,442
1回だけ経験がある	18.5%	14.8%	19.1%	21.1%	17.1%	449
未経験	54.2%	13.0%	27.1%	22.4%	28.0%	734
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

3. 地域的な学会での口頭発表

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
2回以上経験がある	19.5%	34.5%	43.4%	32.5%	32.4%	835
1回だけ経験がある	19.5%	16.1%	17.4%	14.4%	17.3%	445
未経験	60.9%	49.3%	39.1%	53.1%	50.3%	1,297
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,577

1. 国際的な学会誌への論文

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
第一著者として掲載された経験がある	2.4%	31.4%	19.6%	10.9%	19.7%	504
2番目以下の著者として掲載経験がある	2.3%	17.8%	24.0%	12.8%	14.6%	374
未経験	95.3%	50.8%	56.3%	76.3%	65.7%	1,682
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,560

2. 全国的な学会誌への論文

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
第一著者として掲載された経験がある	20.1%	30.4%	24.0%	28.9%	26.1%	672
2番目以下の著者として掲載経験がある	7.1%	13.8%	20.0%	11.9%	13.2%	340
未経験	72.8%	55.8%	55.9%	59.1%	60.7%	1,561
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,573

3. 地域的な学会誌への論文

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
第一著者として掲載された経験がある	12.3%	14.0%	15.2%	15.8%	13.9%	358
2番目以下の著者として掲載経験がある	5.8%	8.2%	13.1%	10.8%	8.8%	225
未経験	81.9%	77.9%	71.7%	73.4%	77.3%	1,985
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,568

4. 大学等の紀要への論文

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
第一著者として掲載された経験がある	35.1%	18.2%	10.0%	20.9%	21.2%	547
2番目以下の著者として掲載経験がある	13.6%	8.7%	10.5%	10.8%	10.6%	273
未経験	51.3%	73.1%	79.5%	68.4%	68.3%	1,766
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,586

015. 現在の博士課程後期での研究活動に、以下の事項はどの程度役に立っていますか。

1. 学部時代の教養教育・一般教育

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	16.2%	16.3%	15.6%	19.6%	16.3%	429
少し役に立っている	45.0%	41.3%	43.9%	46.6%	43.3%	1,137
あまり役に立っていない	29.0%	30.0%	30.0%	25.8%	29.4%	773
全く役に立っていない	9.8%	12.5%	10.5%	8.0%	11.0%	289
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,628

2. 学部時代の専門教育

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	37.4%	36.0%	28.8%	33.3%	34.6%	911
少し役に立っている	43.1%	47.1%	54.3%	46.9%	47.6%	1,255
あまり役に立っていない	14.1%	13.6%	13.0%	16.7%	13.7%	362
全く役に立っていない	5.4%	3.4%	3.9%	3.1%	4.0%	106
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,634

3. 学部時代の卒業研究

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	31.7%	47.6%	24.7%	32.7%	37.6%	954
少し役に立っている	34.5%	30.7%	30.3%	33.3%	31.9%	808
あまり役に立っていない	22.0%	15.3%	24.5%	23.5%	19.4%	493
全く役に立っていない	11.8%	6.5%	20.5%	10.5%	11.0%	280
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,535

4. 修士時代の授業

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	51.0%	26.2%	13.9%	35.5%	32.0%	777
少し役に立っている	37.4%	43.2%	37.6%	37.5%	40.1%	974
あまり役に立っていない	9.5%	23.6%	27.6%	21.7%	20.0%	487
全く役に立っていない	2.1%	6.9%	20.9%	5.3%	7.9%	192
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,430

5. 修士論文のための研究

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	76.2%	79.3%	45.5%	74.2%	72.2%	1,744
少し役に立っている	19.1%	14.6%	20.9%	19.2%	17.4%	419
あまり役に立っていない	3.5%	4.4%	16.8%	3.3%	6.2%	149
全く役に立っていない	1.3%	1.6%	16.8%	3.3%	4.2%	102
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,414

6. 大学時代の課外活動

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	11.6%	10.1%	10.0%	9.3%	10.4%	271
少し役に立っている	23.9%	23.5%	25.7%	26.1%	24.3%	630
あまり役に立っていない	33.4%	35.0%	32.0%	31.1%	33.6%	872
全く役に立っていない	31.0%	31.4%	32.2%	33.5%	31.7%	822
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,595

7. 大学時代の英語の学習

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	18.7%	16.1%	12.4%	18.5%	16.1%	421
少し役に立っている	31.3%	30.0%	34.7%	33.3%	31.6%	826
あまり役に立っていない	27.5%	34.8%	33.5%	29.0%	32.2%	842
全く役に立っていない	22.5%	19.1%	19.3%	19.1%	20.1%	526
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,615

8. 高校までの英語の学習

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	21.6%	20.9%	21.1%	19.8%	21.0%	549
少し役に立っている	37.8%	42.0%	47.4%	42.0%	42.0%	1,095
あまり役に立っていない	23.6%	26.9%	23.4%	20.4%	24.9%	651
全く役に立っていない	17.0%	10.2%	8.1%	17.9%	12.1%	315
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,610

9. 高校までの学習

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	10.6%	18.4%	11.7%	13.0%	14.4%	377
少し役に立っている	41.6%	48.7%	42.5%	49.4%	45.4%	1,186
あまり役に立っていない	33.4%	24.4%	35.1%	25.3%	29.3%	766
全く役に立っていない	14.4%	8.5%	10.7%	12.3%	10.8%	283
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,612

10. 大学への受験勉強

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	9.3%	11.5%	8.6%	8.7%	10.1%	262
少し役に立っている	35.3%	35.3%	34.8%	38.5%	35.3%	921
あまり役に立っていない	34.7%	34.8%	34.3%	29.2%	34.3%	895
全く役に立っていない	20.7%	18.4%	22.4%	23.6%	20.3%	528
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,606

11. 大学院への受験勉強

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても役に立っている	18.5%	17.7%	9.0%	14.8%	15.8%	410
少し役に立っている	43.9%	40.4%	28.8%	42.6%	38.9%	1,006
あまり役に立っていない	25.4%	27.0%	32.6%	26.5%	27.8%	720
全く役に立っていない	12.1%	14.9%	29.5%	16.0%	17.5%	452
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,588

016. 博士課程後期に入学後、博士号の取得までにおおよそ何年間必要だと思われますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
3年	22.7%	63.5%	41.2%	45.4%	46.2%	1,217
4－5年	55.4%	34.6%	57.4%	50.3%	46.3%	1,219
6年以上	22.0%	1.9%	1.4%	4.3%	7.5%	197
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,633

017. あなたは、博士課程後期在学中に課程博士を取得する見込みはどの程度あると思いますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分に可能である	9.9%	29.1%	37.8%	16.0%	25.0%	661
努力すれば可能である	59.9%	62.0%	57.8%	67.9%	60.9%	1,610
難しい	30.1%	8.9%	4.4%	16.0%	14.1%	374
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,645

018. あなたのまわりの大学院生は博士課程後期在学中での博士号の取得をどの程度目標にしていますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
ほとんど全員が博士号取得を目指している	39.8%	63.3%	80.6%	64.0%	60.8%	1,593
取得を目指している者がいる	44.5%	24.3%	13.6%	28.0%	27.7%	726
取得を目指している者は少ない	15.7%	12.3%	5.8%	8.1%	11.5%	302
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,621

019. 修業年限内での博士号の取得が困難だとすれば、どのような条件がどの程度影響していると思われますか。

1. 論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	59.2%	69.4%	68.4%	64.6%	66.1%	1,690
少し重要	27.2%	21.1%	21.8%	25.3%	23.2%	593
どちらともいえない	8.1%	5.3%	6.4%	4.4%	6.2%	159
それほど重要でない	3.9%	2.5%	2.3%	3.8%	2.9%	74
全く重要でない	1.6%	1.7%	1.1%	1.9%	1.5%	39
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,555

2. 学位論文が長いと執筆に時間がかかること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	27.6%	13.8%	18.4%	21.7%	19.1%	490
少し重要	32.9%	31.7%	32.1%	28.0%	31.8%	814
どちらともいえない	22.0%	31.0%	28.6%	28.0%	27.9%	715
それほど重要でない	13.9%	16.8%	16.8%	12.7%	15.7%	403
全く重要でない	3.6%	6.7%	4.1%	9.6%	5.4%	139
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,561

3. 学位論文の要求水準が高すぎること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	22.1%	10.4%	13.1%	19.6%	14.8%	379
少し重要	27.7%	25.7%	27.8%	22.2%	26.4%	675
どちらともいえない	33.0%	41.4%	41.0%	39.2%	38.9%	995
それほど重要でない	13.9%	16.0%	13.8%	12.0%	14.7%	375
全く重要でない	3.3%	6.6%	4.3%	7.0%	5.2%	133
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,557

4. 論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	28.5%	25.6%	17.5%	31.6%	25.0%	639
少し重要	32.5%	34.6%	33.9%	32.9%	33.7%	863
どちらともいえない	22.1%	25.2%	32.8%	22.2%	25.9%	663
それほど重要でない	12.5%	10.0%	11.2%	7.0%	10.7%	274
全く重要でない	4.4%	4.7%	4.6%	6.3%	4.7%	120
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,559

5. 博士号の水準が曖昧なこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	17.8%	10.1%	10.3%	17.1%	12.6%	322
少し重要	26.0%	20.5%	22.0%	22.2%	22.4%	571
どちらともいえない	35.7%	44.0%	46.7%	43.0%	42.3%	1,076
それほど重要でない	13.7%	15.5%	14.6%	11.4%	14.6%	372
全く重要でない	6.8%	9.9%	6.5%	6.3%	8.1%	205
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,546

6. 自分自身のテーマ設定が曖昧なこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	22.6%	18.0%	20.5%	26.6%	20.3%	518
少し重要	32.9%	26.3%	27.6%	23.4%	28.2%	718
どちらともいえない	18.7%	27.5%	30.2%	25.3%	25.5%	650
それほど重要でない	13.5%	13.6%	13.1%	13.9%	13.5%	344
全く重要でない	12.4%	14.6%	8.6%	10.8%	12.4%	316
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,546

7. 学部時代の基礎的学習が不十分であること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	17.4%	17.0%	12.2%	12.7%	15.9%	406
少し重要	27.1%	28.9%	28.1%	29.7%	28.3%	722
どちらともいえない	23.5%	24.6%	30.6%	24.7%	25.6%	653
それほど重要でない	17.0%	17.6%	17.6%	19.6%	17.5%	447
全く重要でない	15.1%	11.8%	11.5%	13.3%	12.7%	324
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,552

8. 修士論文のテーマと一貫していないこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	14.4%	15.6%	9.4%	15.1%	14.0%	344
少し重要	22.6%	24.4%	22.6%	28.9%	23.8%	586
どちらともいえない	20.0%	21.9%	36.6%	24.3%	24.4%	600
それほど重要でない	20.6%	18.8%	15.4%	13.2%	18.3%	449
全く重要でない	22.4%	19.2%	16.0%	18.4%	19.5%	479
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,458

9. 博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	21.2%	27.1%	23.3%	20.3%	24.2%	613
少し重要	19.7%	20.2%	23.9%	19.6%	20.9%	528
どちらともいえない	24.1%	21.6%	26.2%	30.4%	23.9%	604
それほど重要でない	15.7%	12.0%	13.6%	16.5%	13.6%	345
全く重要でない	19.3%	19.1%	12.9%	13.3%	17.4%	440
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,530

10. 自分自身の力量が不十分であること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	35.0%	34.3%	29.5%	34.8%	33.6%	857
少し重要	34.3%	34.8%	36.3%	35.5%	35.0%	893
どちらともいえない	19.6%	19.7%	22.8%	20.6%	20.3%	519
それほど重要でない	6.3%	6.0%	7.1%	5.8%	6.3%	161
全く重要でない	4.8%	5.2%	4.3%	3.2%	4.7%	121
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,551

11. 家族を抱えていること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	5.9%	6.5%	8.0%	6.6%	6.7%	166
少し重要	14.8%	12.7%	17.7%	14.5%	14.4%	360
どちらともいえない	23.5%	27.9%	30.9%	30.3%	27.7%	690
それほど重要でない	12.6%	10.4%	13.9%	9.9%	11.7%	292
全く重要でない	43.3%	42.5%	29.4%	38.8%	39.5%	986
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,494

12. アルバイトをしなければならないこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	19.6%	8.4%	16.5%	15.6%	13.7%	347
少し重要	24.8%	16.6%	25.4%	14.9%	20.7%	524
どちらともいえない	19.9%	22.8%	24.2%	26.6%	22.5%	570
それほど重要でない	14.4%	13.3%	13.8%	16.2%	13.9%	351
全く重要でない	21.2%	39.0%	20.1%	26.6%	29.1%	736
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,528

13. 企業等で本業の仕事を抱えていること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	10.3%	11.4%	13.2%	21.9%	12.2%	293
少し重要	10.9%	12.5%	14.1%	12.6%	12.4%	300
どちらともいえない	23.5%	23.8%	31.4%	19.9%	25.1%	606
それほど重要でない	5.5%	7.2%	9.6%	6.6%	7.2%	174
全く重要でない	49.7%	45.1%	31.7%	39.1%	43.1%	1,038
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,411

Q20. あなたの学位論文に関して質問します。

(1) 論文のテーマは決定していますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	79.8%	87.2%	83.8%	87.1%	84.3%	2,235
いいえ	20.2%	12.8%	16.2%	12.9%	15.7%	415
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,650

(2) 上の質問で「決定している」と答えた方にお尋ねします。実際にどのようにして選びましたか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自分自身で選んだ	53.9%	21.3%	13.2%	33.3%	28.7%	636
指導教員と相談して選んだ	43.7%	67.1%	56.5%	57.4%	58.0%	1,287
指導教員が実際に選んだ	1.8%	8.7%	24.2%	6.4%	10.3%	228
副指導教員や助手と相談して選んだ	0.2%	2.7%	4.9%	2.8%	2.5%	56
先輩の院生と相談して選んだ	0.5%	0.2%	1.2%	0.0%	0.5%	11
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,218

(3) 学位論文に関する研究は、事実上、いつ始めましたか

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
学部時代の卒業論文	12.7%	21.2%	4.0%	17.0%	14.9%	360
博士前期入学後	46.4%	37.9%	30.9%	41.5%	39.0%	942
博士後期入学後	38.2%	35.6%	61.4%	38.1%	42.0%	1,016
就職後	2.6%	5.3%	3.6%	3.4%	4.1%	100
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,418

021. あなたの研究テーマは、指導教員の研究テーマとどのような関係がありますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自分の研究テーマは、指導教員を中心とする共同研究の一部である	6.2%	31.9%	34.4%	23.6%	24.8%	654
自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域の一部である	57.3%	54.1%	50.9%	51.6%	54.0%	1,421
自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである	36.4%	14.0%	14.8%	24.8%	21.2%	557
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

022. あなたの論文指導教員は博士論文に関して、どのくらい密接にあなたに指導しますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
とても十分である	38.6%	48.5%	47.3%	37.4%	44.8%	1,175
少なめだが十分である	45.0%	38.6%	37.3%	43.6%	40.4%	1,061
十分ではない	16.4%	12.9%	15.3%	19.0%	14.8%	389
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

023. あなたは指導教員と博士論文の研究内容についてどの程度の頻度で相談しますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
週1回以上	10.2%	24.5%	29.2%	16.0%	21.1%	556
週1回程度	19.3%	26.5%	27.7%	20.4%	24.4%	643
月に1、2回程度	37.0%	35.1%	28.2%	37.0%	34.1%	899
年に数回程度	25.0%	9.6%	9.3%	22.2%	14.6%	385
ほとんどない	8.6%	4.2%	5.7%	4.3%	5.8%	152
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

024. あなたは、課程博士を取得するために、どのような前提条件を満たさなければならないか、研究科や専攻の規則や規定をどの程度知っていますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
よく知っている	24.6%	21.2%	14.6%	23.9%	20.8%	549
おおよそ知っている	57.2%	62.9%	53.9%	58.9%	59.0%	1,557
あまり詳しく知らない	18.2%	16.0%	31.5%	17.2%	20.2%	533
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,639

025. 課程博士取得のために必要な前提条件を満たすことは、どの程度難しいと思われますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
難しい	27.8%	25.2%	14.5%	29.4%	23.8%	621
やや難しい	56.7%	58.6%	61.8%	58.8%	58.8%	1,531
比較的容易である	15.5%	16.2%	23.7%	11.9%	17.4%	453
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,605

Q26. あなたは、あなた自身の以下のような能力をどのように評価されますか。

1. 外国語(例えば英語)を読むこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	36.8%	34.9%	27.4%	31.9%	33.5%	888
どちらともいえない	41.5%	40.9%	44.7%	36.8%	41.7%	1,103
不十分	21.7%	24.1%	27.9%	31.3%	24.8%	657
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,648

2. 外国語(例えば英語)を書くこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	12.7%	11.7%	7.7%	11.0%	11.0%	291
どちらともいえない	35.4%	34.0%	31.5%	28.8%	33.5%	887
不十分	51.9%	54.3%	60.9%	60.1%	55.5%	1,468
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,646

3. 外国語(例えば英語)を話すこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	14.6%	9.1%	5.1%	9.9%	9.8%	258
どちらともいえない	29.6%	23.3%	23.7%	19.8%	24.8%	657
不十分	55.8%	67.6%	71.2%	70.4%	65.4%	1,729
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

4. 作文能力(日本語)

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	40.8%	27.9%	24.4%	38.9%	31.3%	827
どちらともいえない	46.1%	53.0%	53.1%	50.0%	50.9%	1,347
不十分	13.1%	19.1%	22.4%	11.1%	17.8%	470
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

5. 専門分野の知識

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	23.1%	22.0%	13.2%	19.6%	20.2%	534
どちらともいえない	55.8%	54.9%	59.8%	61.3%	56.6%	1,498
不十分	21.1%	23.0%	27.0%	19.0%	23.2%	613
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,645

6. 教養的知識

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	24.9%	23.7%	16.0%	21.1%	22.1%	582
どちらともいえない	57.9%	60.1%	65.0%	62.1%	60.7%	1,601
不十分	17.2%	16.3%	19.0%	16.8%	17.2%	454
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,637

7. 思考力

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	33.8%	33.9%	21.3%	29.2%	30.7%	810
どちらともいえない	54.2%	55.6%	63.4%	57.1%	57.0%	1,502
不十分	12.1%	10.6%	15.3%	13.7%	12.3%	324
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

8. 博士課程後期学生としての全体的資質

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
十分	24.0%	20.4%	16.8%	13.9%	20.2%	529
どちらともいえない	60.8%	63.4%	69.2%	70.3%	64.4%	1,686
不十分	15.1%	16.2%	14.0%	15.8%	15.4%	404
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,619

027. あなたはティーチング・アシスタント（T.A.）の経験がありますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
現在担当している	33.4%	37.2%	29.8%	29.6%	34.1%	901
担当したことがある	28.3%	39.6%	25.4%	35.8%	33.1%	875
担当したことはない	38.3%	23.2%	44.8%	34.6%	32.8%	867
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,643

028. (担当したことのある人にうかがいます) T.A.の経験は、どのように役に立ちましたか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自分の研究活動の発展に役に立った。	10.9%	4.2%	6.7%	9.2%	6.6%	111
基礎的な知識を整理するのに役に立った	27.8%	43.9%	35.8%	31.6%	37.7%	637
大学教育の方法を学ぶのに役に立った	43.7%	32.0%	29.4%	35.7%	34.5%	583
たいして役に立たなかった	17.6%	19.9%	28.1%	23.5%	21.2%	358
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	1,689

029. あなたはリサーチ・アシスタント（R.A.）の経験がありますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
現在担当している	8.0%	27.0%	18.1%	12.7%	18.9%	496
担当したことがある	12.3%	10.7%	8.2%	14.6%	10.8%	283
担当したことはない	79.7%	62.3%	73.7%	72.8%	70.3%	1,846
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

030. (担当したことのある人に聞きます) R.A.の経験は、どのように役に立ちましたか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自分の研究活動の発展に役に立った	38.6%	41.0%	35.4%	48.8%	39.9%	284
基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った	22.8%	23.0%	24.3%	17.1%	22.9%	163
研究の方法を学ぶのに役に立った	22.0%	18.5%	19.4%	17.1%	19.2%	137
たいして役に立たなかった	16.5%	17.5%	20.8%	17.1%	18.0%	128
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	712

031. 大学院での研究生活を充実したものにするためには、以下の事項はどの程度重要ですか。

1. 大学院のカリキュラム

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	43.5%	27.2%	25.0%	38.9%	31.9%	839
少し重要	33.2%	33.3%	28.7%	32.1%	32.1%	844
どちらともいえない	10.4%	19.0%	20.7%	16.0%	16.9%	444
それほど重要でない	9.5%	14.6%	17.1%	8.0%	13.3%	350
全く重要でない	3.3%	5.9%	8.5%	4.9%	5.7%	150
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,627

2. 授業の内容

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	53.2%	30.2%	23.2%	41.1%	35.7%	939
少し重要	28.9%	30.7%	27.5%	29.4%	29.4%	774
どちらともいえない	9.8%	18.5%	20.8%	14.1%	16.4%	431
それほど重要でない	5.7%	13.7%	19.8%	9.8%	12.6%	332
全く重要でない	2.4%	6.8%	8.8%	5.5%	5.9%	156
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

3. 指導教員の研究指導の内容

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	69.1%	71.2%	73.1%	79.8%	71.6%	1,890
少し重要	21.9%	22.6%	19.3%	17.2%	21.3%	563
どちらともいえない	4.9%	3.9%	5.8%	3.1%	4.5%	119
それほど重要でない	3.5%	1.5%	1.0%	0.0%	1.8%	48
全く重要でない	0.7%	0.9%	0.7%	0.0%	0.7%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,639

4. 指導教員と自分の研究テーマの関連性

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	40.4%	49.7%	58.9%	55.2%	49.6%	1,307
少し重要	34.3%	32.2%	27.6%	34.4%	31.8%	839
どちらともいえない	13.9%	12.3%	9.7%	7.4%	11.9%	313
それほど重要でない	7.6%	4.3%	3.4%	2.5%	4.9%	129
全く重要でない	3.8%	1.6%	0.3%	0.6%	1.8%	48
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

5. 指導教員と相談する機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	67.3%	71.5%	72.0%	74.8%	70.7%	1,866
少し重要	24.5%	23.4%	21.9%	22.1%	23.2%	613
どちらともいえない	5.5%	4.2%	4.8%	2.5%	4.7%	123
それほど重要でない	1.5%	0.5%	1.2%	0.6%	0.9%	25
全く重要でない	1.1%	0.4%	0.2%	0.0%	0.5%	14
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,641

6. 学会参加への経済的支援

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	49.8%	57.0%	46.8%	55.2%	52.6%	1,388
少し重要	29.6%	29.2%	30.8%	29.4%	29.7%	784
どちらともいえない	13.5%	8.2%	14.1%	8.6%	11.0%	290
それほど重要でない	5.6%	3.9%	6.3%	4.3%	4.9%	130
全く重要でない	1.5%	1.7%	1.9%	2.5%	1.7%	46
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,638

7. 学会で発表する機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	57.7%	68.8%	52.3%	66.9%	62.0%	1,636
少し重要	31.0%	25.3%	33.6%	28.2%	28.9%	764
どちらともいえない	8.5%	4.4%	11.2%	4.3%	7.0%	185
それほど重要でない	2.2%	1.2%	2.6%	0.0%	1.7%	45
全く重要でない	0.6%	0.3%	0.3%	0.6%	0.4%	10
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,640

8. 論文を執筆する機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	73.1%	78.1%	64.7%	82.1%	74.0%	1,951
少し重要	22.7%	18.2%	28.3%	14.2%	21.5%	566
どちらともいえない	3.7%	3.0%	6.1%	3.1%	3.9%	103
それほど重要でない	0.4%	0.5%	0.7%	0.6%	0.5%	14
全く重要でない	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%	0.1%	3
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,637

9. 教育助手(T. A.)の経験

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	11.7%	10.0%	8.1%	12.3%	10.2%	267
少し重要	27.8%	24.2%	19.6%	23.9%	24.2%	634
どちらともいえない	35.9%	34.0%	41.1%	42.9%	36.6%	962
それほど重要でない	17.5%	19.3%	18.9%	13.5%	18.3%	481
全く重要でない	7.1%	12.5%	12.4%	7.4%	10.7%	281
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

10. 研究助手(R. A.)の経験

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	11.9%	11.4%	9.5%	11.2%	11.1%	288
少し重要	24.4%	21.4%	21.6%	25.5%	22.6%	586
どちらともいえない	42.8%	41.3%	41.1%	47.8%	42.1%	1,092
それほど重要でない	13.2%	14.4%	16.6%	8.7%	14.2%	368
全く重要でない	7.7%	11.5%	11.2%	6.8%	10.1%	262
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,596

11. 十分な奨学金を得ること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	63.1%	52.7%	33.9%	49.7%	51.2%	1,347
少し重要	19.2%	25.8%	23.8%	22.1%	23.3%	613
どちらともいえない	10.8%	12.6%	25.5%	20.2%	15.5%	408
それほど重要でない	3.6%	4.4%	7.5%	4.9%	4.9%	129
全く重要でない	3.3%	4.5%	9.2%	3.1%	5.1%	135
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

12. 海外奨学金や留学の機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	40.2%	31.9%	29.4%	34.6%	33.8%	885
少し重要	29.1%	30.7%	30.9%	37.7%	30.8%	807
どちらともいえない	20.0%	26.4%	27.3%	18.5%	24.4%	639
それほど重要でない	5.9%	6.6%	5.4%	5.6%	6.1%	160
全く重要でない	4.8%	4.3%	7.1%	3.7%	5.0%	131
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,622

13. 外国語修得の機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	48.1%	50.8%	44.6%	51.2%	48.7%	1,283
少し重要	28.9%	33.3%	36.2%	32.7%	32.7%	861
どちらともいえない	16.5%	12.0%	13.6%	13.0%	13.6%	358
それほど重要でない	3.9%	2.7%	3.6%	3.1%	3.2%	85
全く重要でない	2.6%	1.3%	2.1%	0.0%	1.7%	46
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,633

14. 図書館の充実度

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	81.0%	56.9%	62.4%	68.5%	65.5%	1,727
少し重要	14.6%	27.0%	26.2%	21.6%	23.0%	607
どちらともいえない	3.2%	11.0%	7.7%	7.4%	7.9%	209
それほど重要でない	1.0%	3.4%	2.4%	1.2%	2.4%	63
全く重要でない	0.3%	1.6%	1.2%	1.2%	1.1%	30
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

15. コンピュータの利用

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	65.8%	70.2%	70.1%	75.5%	69.4%	1,828
少し重要	25.3%	20.5%	23.8%	20.2%	22.5%	592
どちらともいえない	6.8%	6.8%	5.0%	3.1%	6.1%	162
それほど重要でない	1.7%	1.4%	0.7%	1.2%	1.3%	34
全く重要でない	0.4%	1.1%	0.5%	0.0%	0.7%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

16. 専用机や居室スペースの拡充

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	56.3%	48.5%	49.1%	54.6%	51.3%	1,351
少し重要	25.1%	31.2%	30.5%	25.8%	29.0%	763
どちらともいえない	12.7%	14.8%	13.5%	16.6%	14.0%	370
それほど重要でない	3.9%	3.9%	5.3%	2.5%	4.1%	108
全く重要でない	2.0%	1.5%	1.5%	0.6%	1.6%	42
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,634

17. 他大学の院生や研究者との交流

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	43.3%	40.5%	38.2%	42.9%	40.9%	1,079
少し重要	36.4%	38.0%	37.2%	42.3%	37.7%	993
どちらともいえない	15.0%	16.2%	18.5%	11.0%	16.0%	423
それほど重要でない	4.6%	3.6%	5.3%	1.8%	4.1%	109
全く重要でない	0.7%	1.6%	0.9%	1.8%	1.2%	32
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

18. 学内での研究会への参加

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	32.4%	27.4%	27.0%	29.4%	28.8%	754
少し重要	37.1%	33.4%	36.8%	39.4%	35.5%	930
どちらともいえない	22.3%	28.3%	26.7%	25.0%	26.2%	686
それほど重要でない	6.7%	7.5%	7.7%	3.8%	7.1%	186
全く重要でない	1.5%	3.4%	1.7%	2.5%	2.4%	64
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,620

Q32. 以下のものは、大学や研究室にありますか。

1. 机

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自分専用のものがある	56.4%	92.3%	85.9%	76.1%	80.0%	2,110
共用のものがある	39.4%	6.1%	11.2%	18.4%	17.1%	452
ない	4.3%	1.6%	2.9%	5.5%	2.9%	76
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,638

2. パソコン

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自分専用のものがある	25.0%	76.6%	65.5%	53.1%	58.4%	1,534
共用のものがある	67.5%	20.6%	30.2%	41.4%	37.1%	974
ない	7.5%	2.8%	4.3%	5.6%	4.6%	120
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,628

Q33. あなたは現在、日本学術振興会の特別研究員（DC）を受けていますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	1.5%	7.4%	2.9%	0.6%	4.4%	115
いいえ	98.5%	92.6%	97.1%	99.4%	95.6%	2,525
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,640

Q34. 日本学術振興会の特別研究員（DCとPD）についてうかがいます。

(1)大学院生にとって、全体として、DCへの採用の可能性についてどうお考えですか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
努力すれば採用されると思う	33.5%	42.1%	33.5%	35.4%	37.6%	771
採用される見込みはあまりないと思う	66.5%	57.9%	66.5%	64.6%	62.4%	1,282
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,053

(2)大学院生にとって、全体として、PDへの採用の可能性についてどうお考えですか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
努力すれば採用されると思う	35.7%	45.5%	35.1%	39.7%	40.3%	823
採用される見込みはあまりないと思う	64.3%	54.5%	64.9%	60.3%	59.7%	1,217
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,040

Q35. あなたは博士課程を修了後、どのような進路を希望していますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
大学等の教員	81.5%	39.2%	23.7%	53.3%	48.3%	1,162
高校以下の学校の教員	1.6%	1.7%	0.5%	0.7%	1.4%	33
公務員	2.1%	7.6%	2.5%	5.3%	4.8%	115
会社員	0.4%	4.3%	1.4%	3.9%	2.6%	62
民間企業等の研究者	3.0%	27.1%	12.0%	9.9%	15.8%	380
民間企業・病院等の技術者・専門家	1.8%	7.1%	37.0%	7.2%	12.5%	300
その他	4.2%	7.3%	17.4%	13.2%	9.1%	219
特になし	5.4%	5.7%	5.4%	6.6%	5.6%	135
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,406

Q36. 大学院生活の経済的側面についてうかがいます。

差し支えなければ、下の欄に、あなたの1ヶ月の平均収入・支出額をご記入下さい。

収入（単位：千円）

回答結果の平均値	専門分野				全体
	文系	理系	医療系	学際系	
親からの援助	71.0	71.6	100.2	61.2	76.1
アルバイト	65.4	50.9	321.0	58.5	133.2
定職	302.2	323.1	310.3	259.8	308.8
日本育英会の奨学金	117.6	117.5	114.9	120.3	117.2
日本学術振興会の奨学金(給与)	151.5	181.8	145.0	130.0	171.4
民間団体からの奨学金	86.6	78.4	108.9	57.5	85.8
文部省奨学金/奨励金(留学生)	125.2	139.7	144.7	120.4	134.5
その他	121.5	72.4	83.4	63.4	85.5
合計	198.7	191.6	335.6	201.2	225.1

支出（単位：千円）

回答結果の平均値	専門分野				全体
	文系	理系	医療系	学際系	
授業料・納付金	67.7	58.0	94.1	62.4	69.2
修学費	23.6	15.0	26.4	27.4	21.1
交通費・通信費	16.7	14.6	26.5	15.1	17.7
食費	34.0	35.3	59.0	33.2	40.0
住居・光熱費	56.9	51.2	78.8	52.8	59.1
保健・衛生費	11.1	11.2	17.5	9.3	12.6
娯楽・嗜好費	17.0	17.6	34.7	18.6	21.4
その他日常費	22.1	22.1	33.9	16.3	24.4
合計	181.2	164.0	252.1	177.6	187.6

大学院生調査集計結果（学年別クロス表）

Q1. 年齢

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
20代	78.3%	71.0%	58.9%	68.6%	1,815
30代	15.4%	22.3%	34.0%	24.7%	653
40代	3.6%	4.1%	4.9%	4.2%	112
50代以上	2.7%	2.5%	2.2%	2.4%	64
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

Q2. 性別

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
男	71.4%	74.7%	73.1%	73.0%	1,932
女	28.6%	25.3%	26.9%	27.0%	715
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,647

Q3. 家族の状況

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
配偶者なし	82.8%	76.9%	71.7%	76.7%	2,029
配偶者あり	17.2%	23.1%	28.3%	23.3%	615
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

Q4. 国籍

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
日本国籍	89.6%	88.4%	85.7%	87.7%	2,317
外国籍	10.4%	11.6%	14.3%	12.3%	324
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,641

Q5. 外国籍の方にうかがいます。日本での滞在期間をご記入ください。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
3年未満	20.5%	26.5%	7.0%	16.7%	54
3～5年	50.0%	39.8%	37.3%	40.6%	131
5年以上	29.5%	33.7%	55.6%	42.7%	138
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	323

Q6. あなたの現在の在籍大学・研究科と学年、専攻分野をご記入下さい。

大学の設置者

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
国立	57.9%	60.8%	60.6%	59.5%	1,576
公立	7.1%	8.0%	5.0%	6.6%	175
私立	35.0%	31.2%	34.4%	33.9%	898
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,649

専攻分野

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
文系	30.1%	25.1%	28.0%	27.5%	729
理系	46.7%	48.7%	37.9%	44.0%	1,166
医療系	15.2%	21.2%	28.8%	22.3%	590
学際系	8.0%	4.9%	5.2%	6.2%	163
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,648

Q8. 博士課程後期へ進学しようと決めたのは、おおよそ、いつ頃ですか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
高校卒業以前	7.0%	5.5%	6.8%	6.4%	170
大学入学の頃	5.6%	6.9%	7.5%	7.0%	185
大学卒業の頃	20.2%	20.6%	25.6%	22.5%	594
博士課程前期在学中	49.7%	48.3%	37.1%	44.0%	1,162
大学(院)卒業後社会に出てから	17.4%	18.6%	23.0%	20.0%	528
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,639

Q9. 博士課程後期に進むにあたって、特にあなたに影響を与えた人は誰ですか。(3つまで重複回答可)

(各カテゴリーの回答者数に対する比率)	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
高校時代の先生	1.9%	2.1%	2.8%	2.4%	64
学部時代の先生	20.3%	18.9%	18.6%	19.5%	518
博士課程前期の指導教員	54.6%	47.2%	40.3%	46.4%	1,232
博士課程後期の指導教員予定者	8.6%	9.0%	12.9%	10.4%	275
大学の同級生	9.5%	8.5%	10.3%	9.6%	254
大学の upper 級生・院生	24.5%	20.9%	23.1%	22.7%	604
配偶者	2.3%	4.4%	3.8%	3.5%	93
両親	18.1%	18.1%	16.2%	17.3%	459
その他	11.5%	11.0%	9.5%	10.5%	279
特に誰もいない	12.1%	14.0%	13.1%	13.2%	350

Q10. 博士課程前期を修了するにあたり、博士課程後期進学以外に、就職を真剣に考えましたか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
はい	48.1%	44.2%	41.4%	44.7%	1,140
いいえ	51.9%	55.8%	58.6%	55.3%	1,410
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,550

Q11. 上の質問で「1.はい」と答えた方にうかがいます。他に考えた職業はどのような職業ですか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
会社員	53.7%	55.4%	39.0%	48.7%	523
公務員	9.8%	11.2%	7.8%	9.6%	103
学校教員	8.2%	5.0%	7.0%	6.8%	73
教育研究職	10.9%	11.6%	14.5%	12.6%	135
その他	17.4%	16.8%	31.7%	22.3%	239
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	1,073

Q12. 博士課程後期への進学に際して、以下の事柄はどの程度重要でしたか。

1. 大学で専門をさらに深めたかったから

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	76.7%	71.7%	70.0%	72.7%	1,914
少し重要	18.2%	22.5%	23.0%	21.3%	560
どちらともいえない	3.3%	3.7%	4.0%	3.7%	98
それほど重要でない	1.1%	1.6%	2.4%	1.7%	45
全く重要でない	0.7%	0.4%	0.6%	0.6%	16
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,633

2. 将来、専門家として活躍するため

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	65.2%	60.3%	61.0%	61.9%	1,630
少し重要	23.1%	24.4%	23.3%	23.8%	627
どちらともいえない	7.5%	9.6%	10.6%	9.5%	250
それほど重要でない	2.7%	4.7%	3.5%	3.5%	92
全く重要でない	1.4%	1.1%	1.6%	1.4%	36
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

3. 研究する機会を得るため

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	67.4%	65.1%	65.0%	65.8%	1,731
少し重要	24.6%	25.7%	25.1%	25.2%	663
どちらともいえない	5.6%	7.0%	7.1%	6.5%	172
それほど重要でない	1.9%	2.0%	2.1%	2.0%	53
全く重要でない	0.5%	0.3%	0.6%	0.5%	13
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

4. より良い就職の機会を得るため

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	17.9%	14.6%	16.3%	16.4%	430
少し重要	23.2%	20.5%	24.5%	23.0%	604
どちらともいえない	28.5%	28.8%	27.0%	28.0%	734
それほど重要でない	17.2%	22.7%	17.6%	19.0%	498
全く重要でない	13.2%	13.4%	14.6%	13.7%	360
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,626

5. 博士号を取得したかったら

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	41.6%	41.9%	43.9%	42.4%	1,115
少し重要	31.1%	31.2%	30.3%	30.8%	811
どちらともいえない	14.3%	14.2%	11.8%	13.5%	356
それほど重要でない	8.2%	9.2%	9.1%	8.8%	232
全く重要でない	4.7%	3.5%	5.0%	4.4%	115
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,629

6. 指導教員の勧めがあったから

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	17.2%	13.5%	13.8%	14.9%	389
少し重要	27.0%	23.4%	25.6%	25.5%	667
どちらともいえない	24.7%	28.5%	27.7%	26.9%	702
それほど重要でない	13.0%	14.6%	13.8%	13.7%	359
全く重要でない	18.1%	20.0%	19.0%	19.0%	497
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,614

7. 家族からの支援があったから

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	26.0%	27.0%	23.7%	25.4%	662
少し重要	28.5%	29.2%	22.7%	26.6%	693
どちらともいえない	19.9%	18.3%	21.6%	20.1%	524
それほど重要でない	10.0%	10.5%	12.7%	11.3%	294
全く重要でない	15.6%	15.0%	19.3%	16.7%	437
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,610

8. 職場からの派遣があったから

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	2.8%	3.4%	4.2%	3.4%	83
少し重要	3.3%	3.2%	4.2%	3.8%	92
どちらともいえない	19.6%	22.2%	19.1%	20.2%	488
それほど重要でない	6.3%	7.2%	8.5%	7.5%	180
全く重要でない	68.0%	64.0%	64.1%	65.1%	1,572
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,415

9. 日本育英会の奨学金がもらえるから

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	15.0%	14.0%	12.7%	13.7%	351
少し重要	13.1%	14.6%	13.0%	13.5%	346
どちらともいえない	16.9%	16.6%	16.0%	16.6%	425
それほど重要でない	11.5%	11.8%	12.1%	11.7%	300
全く重要でない	43.4%	43.1%	46.1%	44.3%	1,133
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,555

10. その他国内の奨学金がもらえるから

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	6.7%	3.5%	4.7%	5.0%	124
少し重要	8.4%	6.9%	5.5%	7.0%	175
どちらともいえない	25.4%	22.9%	21.2%	23.3%	582
それほど重要でない	10.0%	12.7%	11.2%	11.2%	280
全く重要でない	49.4%	54.0%	57.4%	53.6%	1,340
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,501

11. 日本留学の奨学金がもらえるから(留学生)

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	12.1%	10.3%	10.8%	10.9%	116
少し重要	7.2%	6.5%	6.7%	6.9%	74
どちらともいえない	17.4%	13.4%	13.6%	15.0%	160
それほど重要でない	4.9%	7.2%	8.8%	6.9%	74
全く重要でない	58.4%	62.7%	60.1%	60.3%	643
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	1,067

013. あなたはこの4月から現在まで、以下のような活動にどの程度の時間を使っていますか。

1. 博士論文のテーマに関する調査や実験

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	56.9%	70.3%	72.0%	66.5%	1,753
少しの時間	26.7%	19.5%	19.2%	21.9%	576
あまり使っていない	12.3%	7.0%	6.2%	8.3%	219
全く使っていない	4.2%	3.2%	2.5%	3.3%	87
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

2. 博士論文のテーマに関する文献精読

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	44.8%	51.0%	57.6%	51.6%	1,364
少しの時間	41.4%	38.6%	32.7%	37.1%	981
あまり使っていない	12.0%	9.3%	8.6%	9.9%	261
全く使っていない	1.8%	1.1%	1.1%	1.4%	36
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,642

3. 博士論文のテーマ以外の研究活動 (含むR.A.)

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	18.5%	15.8%	13.5%	15.9%	414
少しの時間	42.0%	42.0%	43.9%	42.7%	1,110
あまり使っていない	27.7%	29.1%	27.9%	28.0%	728
全く使っていない	11.8%	13.2%	14.7%	13.3%	346
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,598

4. 博士論文の執筆

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	5.3%	11.3%	31.7%	17.4%	457
少しの時間	10.6%	21.5%	26.9%	20.2%	529
あまり使っていない	24.4%	28.7%	21.0%	24.2%	635
全く使っていない	59.8%	38.5%	20.4%	38.2%	1,003
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,624

5. 学会誌等の論文執筆

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	19.3%	27.3%	35.0%	27.4%	722
少しの時間	31.2%	37.0%	33.9%	34.1%	899
あまり使っていない	19.2%	17.2%	15.3%	17.1%	450
全く使っていない	30.4%	18.5%	15.7%	21.4%	564
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

6. 学会発表の準備

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	20.5%	21.8%	27.9%	23.7%	624
少しの時間	36.5%	45.7%	40.0%	40.7%	1,072
あまり使っていない	16.7%	18.3%	15.7%	16.9%	444
全く使っていない	26.3%	14.3%	16.4%	18.8%	495
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

7. 大学での教育活動(T.A.など)

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	11.4%	9.8%	8.5%	9.8%	257
少しの時間	35.3%	38.0%	34.7%	35.6%	932
あまり使っていない	18.2%	21.6%	25.7%	22.2%	580
全く使っていない	35.1%	30.6%	31.1%	32.4%	848
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,617

8. 授業への出席

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	17.2%	10.4%	8.5%	12.0%	315
少しの時間	32.2%	28.7%	25.5%	28.8%	760
あまり使っていない	21.6%	29.6%	28.5%	26.6%	701
全く使っていない	29.0%	31.2%	37.6%	32.6%	859
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

9. 外国語の学習

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	12.5%	9.4%	6.6%	9.3%	245
少しの時間	37.0%	34.8%	32.1%	34.4%	904
あまり使っていない	29.2%	35.0%	33.2%	32.4%	852
全く使っていない	21.3%	20.8%	28.1%	23.8%	625
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,626

10. アルバイト

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	7.7%	7.5%	8.5%	8.0%	209
少しの時間	21.8%	23.8%	25.5%	23.7%	623
あまり使っていない	16.9%	18.6%	15.5%	17.0%	445
全く使っていない	53.6%	50.1%	50.5%	51.3%	1,347
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,624

11. 大学等での非常勤講師

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	2.2%	3.4%	5.3%	3.8%	98
少しの時間	5.9%	7.3%	7.8%	7.1%	184
あまり使っていない	4.7%	6.2%	6.5%	6.0%	157
全く使っていない	87.2%	83.1%	80.4%	83.1%	2,165
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,604

12. 研究室内の院生・学生との研究会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	13.3%	11.7%	7.8%	10.8%	282
少しの時間	48.6%	47.4%	44.8%	46.8%	1,227
あまり使っていない	19.2%	22.0%	26.7%	23.0%	602
全く使っていない	18.9%	18.8%	20.7%	19.5%	512
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,623

13. 学内の院生・学生との研究会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	4.6%	3.8%	2.5%	3.5%	92
少しの時間	23.8%	21.7%	23.3%	23.0%	602
あまり使っていない	24.8%	30.6%	32.4%	29.5%	773
全く使っていない	46.8%	44.0%	41.9%	44.0%	1,152
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,619

14. 他大学と院生や研究者との研究会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
かなりの時間	4.4%	3.4%	4.4%	4.0%	105
少しの時間	21.9%	20.9%	23.3%	22.2%	580
あまり使っていない	24.8%	27.0%	27.7%	26.7%	699
全く使っていない	48.9%	48.8%	44.5%	47.1%	1,234
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,618

014. あなたは以下のような学会活動をどの程度経験していますか。

1. 国際的な学会での口頭発表

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
2回以上経験がある	6.5%	10.6%	15.0%	11.0%	285
1回だけ経験がある	12.8%	12.8%	17.4%	14.6%	381
未経験	80.7%	76.7%	67.6%	74.4%	1,935
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,601

2. 国内の学会での口頭発表

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
2回以上経験がある	44.5%	54.8%	64.3%	54.9%	1,442
1回だけ経験がある	18.6%	17.6%	15.1%	17.1%	449
未経験	36.9%	27.6%	20.6%	28.0%	734
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

3. 地域的な学会での口頭発表

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
2回以上経験がある	22.4%	29.9%	42.9%	32.4%	835
1回だけ経験がある	17.1%	16.4%	18.0%	17.3%	445
未経験	60.5%	53.7%	39.1%	50.3%	1,297
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,577

1. 国際的な学会誌への論文

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
第一著者として掲載された経験がある	10.9%	21.0%	26.1%	19.7%	504
2 番目以下の著者として掲載経験がある	14.2%	14.7%	15.1%	14.6%	374
未経験	74.8%	64.3%	58.9%	65.7%	1,682
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,560

2. 全国的な学会誌への論文

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
第一著者として掲載された経験がある	17.5%	25.3%	34.5%	26.1%	672
2 番目以下の著者として掲載経験がある	11.5%	12.6%	15.0%	13.2%	340
未経験	71.0%	62.2%	50.6%	60.7%	1,561
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,573

3. 地域的な学会誌への論文

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
第一著者として掲載された経験がある	9.9%	11.8%	18.9%	13.9%	358
2 番目以下の著者として掲載経験がある	7.0%	7.8%	10.9%	8.8%	225
未経験	83.0%	80.4%	70.3%	77.3%	1,985
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,568

4. 大学等の紀要への論文

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
第一著者として掲載された経験がある	15.1%	19.4%	28.0%	21.2%	547
2 番目以下の著者として掲載経験がある	8.2%	12.6%	11.0%	10.6%	273
未経験	76.7%	68.1%	61.0%	68.3%	1,766
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,586

015. 現在の博士課程後期での研究活動に、以下の事項はどの程度役に立っていますか。

1. 学部時代の教養教育・一般教育

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	13.8%	15.8%	18.6%	16.3%	429
少し役に立っている	43.7%	43.0%	42.7%	43.3%	1,137
あまり役に立っていない	31.0%	29.7%	28.2%	29.4%	773
全く役に立っていない	11.5%	11.5%	10.5%	11.0%	289
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,628

2. 学部時代の専門教育

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	34.6%	33.9%	35.3%	34.6%	911
少し役に立っている	45.6%	49.0%	48.1%	47.6%	1,255
あまり役に立っていない	15.5%	13.7%	12.4%	13.7%	362
全く役に立っていない	4.3%	3.5%	4.3%	4.0%	106
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,634

3. 学部時代の卒業研究

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	41.4%	39.2%	33.5%	37.6%	954
少し役に立っている	31.4%	31.8%	32.2%	31.9%	808
あまり役に立っていない	17.5%	19.3%	21.1%	19.4%	493
全く役に立っていない	9.8%	9.6%	13.2%	11.0%	280
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,535

4. 修士時代の授業

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	31.9%	32.7%	31.8%	32.0%	777
少し役に立っている	42.3%	38.1%	39.3%	40.1%	974
あまり役に立っていない	18.7%	21.0%	20.3%	20.0%	487
全く役に立っていない	7.1%	8.3%	8.6%	7.9%	192
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,430

5. 修士論文のための研究

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	79.4%	74.5%	64.7%	72.2%	1,744
少し役に立っている	13.3%	16.7%	21.1%	17.4%	419
あまり役に立っていない	4.8%	5.3%	7.9%	6.2%	149
全く役に立っていない	2.5%	3.4%	6.4%	4.2%	102
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,414

6. 大学時代の課外活動

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	12.1%	7.9%	11.0%	10.4%	271
少し役に立っている	26.2%	22.1%	23.9%	24.3%	630
あまり役に立っていない	31.7%	36.6%	33.1%	33.6%	872
全く役に立っていない	30.0%	33.4%	32.0%	31.7%	822
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,595

7. 大学時代の英語の学習

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	18.4%	13.5%	15.9%	16.1%	421
少し役に立っている	32.4%	30.7%	31.8%	31.6%	826
あまり役に立っていない	31.2%	35.6%	30.9%	32.2%	842
全く役に立っていない	18.0%	20.2%	21.4%	20.1%	526
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,615

8. 高校までの英語の学習

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	23.0%	19.5%	20.4%	21.0%	549
少し役に立っている	40.7%	41.5%	43.4%	42.0%	1,095
あまり役に立っていない	25.5%	26.4%	23.6%	24.9%	651
全く役に立っていない	10.9%	12.6%	12.6%	12.1%	315
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,610

9. 高校までの学習

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	14.9%	13.7%	14.3%	14.4%	377
少し役に立っている	44.6%	44.2%	47.3%	45.4%	1,186
あまり役に立っていない	30.5%	31.0%	27.3%	29.3%	766
全く役に立っていない	10.0%	11.1%	11.2%	10.8%	283
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,612

10. 大学への受験勉強

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	9.3%	10.1%	10.8%	10.1%	262
少し役に立っている	34.1%	35.5%	36.2%	35.3%	921
あまり役に立っていない	36.9%	33.2%	33.0%	34.3%	895
全く役に立っていない	19.7%	21.1%	20.0%	20.3%	528
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,606

11. 大学院への受験勉強

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても役に立っている	16.1%	15.1%	16.7%	15.8%	410
少し役に立っている	41.6%	40.8%	34.9%	38.9%	1,006
あまり役に立っていない	25.8%	28.0%	29.4%	27.8%	720
全く役に立っていない	16.6%	16.2%	19.0%	17.5%	452
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,588

016. 博士課程後期に入学後、博士号の取得までにおおよそ何年間必要だと思われますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
3年	56.9%	48.5%	35.2%	46.2%	1,217
4～5年	36.4%	45.3%	55.4%	46.3%	1,219
6年以上	6.7%	6.1%	9.4%	7.5%	197
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,633

017. あなたは、博士課程後期在学中に課程博士を取得する見込みはどの程度あると思いますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分に可能である	21.2%	22.6%	30.2%	25.0%	661
努力すれば可能である	65.9%	64.8%	53.1%	60.9%	1,610
難しい	12.9%	12.6%	16.7%	14.1%	374
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,645

018. あなたのまわりの大学院生は博士課程後期在学中での博士号の取得をどの程度目標にしていますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
ほとんど全員が博士号取得を目指している	59.4%	59.0%	63.0%	60.8%	1,593
取得を目指している者がいる	28.9%	28.6%	25.9%	27.7%	726
取得を目指している者は少ない	11.7%	12.4%	11.1%	11.5%	302
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,621

019. 修業年限内での博士号の取得が困難だとすれば、どのような条件がどの程度影響していると思われますか。

1. 論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	64.0%	68.6%	66.7%	66.1%	1,690
少し重要	25.2%	21.5%	22.1%	23.2%	593
どちらともいえない	6.3%	6.3%	6.2%	6.2%	159
それほど重要でない	2.9%	2.1%	3.5%	2.9%	74
全く重要でない	1.6%	1.5%	1.5%	1.5%	39
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,555

2. 学位論文が長いため執筆に時間がかかること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	16.0%	20.4%	20.7%	19.1%	490
少し重要	33.0%	30.5%	31.2%	31.8%	814
どちらともいえない	30.6%	29.3%	25.0%	27.9%	715
それほど重要でない	14.5%	14.4%	17.7%	15.7%	403
全く重要でない	5.9%	5.3%	5.3%	5.4%	139
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,561

3. 学位論文の要求水準が高すぎること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	14.0%	14.1%	15.8%	14.8%	379
少し重要	26.3%	28.1%	25.6%	26.4%	675
どちらともいえない	40.0%	39.6%	37.6%	38.9%	995
それほど重要でない	14.2%	13.3%	15.6%	14.7%	375
全く重要でない	5.5%	4.8%	5.5%	5.2%	133
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,557

4. 論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	23.5%	23.5%	27.2%	25.0%	639
少し重要	36.0%	35.8%	29.9%	33.7%	863
どちらともいえない	26.2%	24.6%	26.8%	25.9%	663
それほど重要でない	9.9%	11.2%	11.1%	10.7%	274
全く重要でない	4.3%	4.9%	4.9%	4.7%	120
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,559

5. 博士号の水準が曖昧なこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	11.3%	12.4%	13.7%	12.6%	322
少し重要	20.2%	23.2%	23.5%	22.4%	571
どちらともいえない	45.3%	41.9%	40.3%	42.3%	1,076
それほど重要でない	14.4%	15.1%	14.4%	14.6%	372
全く重要でない	8.8%	7.4%	8.2%	8.1%	205
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,546

6. 自分自身のテーマ設定が曖昧なこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	20.8%	20.5%	20.0%	20.3%	518
少し重要	28.0%	30.6%	26.1%	28.2%	718
どちらともいえない	25.2%	24.1%	27.4%	25.5%	650
それほど重要でない	13.9%	13.1%	13.3%	13.5%	344
全く重要でない	12.2%	11.7%	13.1%	12.4%	316
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,546

7. 学部時代の基礎的学習が不十分であること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	17.4%	15.4%	14.3%	15.9%	406
少し重要	29.2%	29.1%	25.8%	28.3%	722
どちらともいえない	23.5%	26.6%	27.4%	25.6%	653
それほど重要でない	17.1%	16.9%	18.9%	17.5%	447
全く重要でない	12.8%	12.0%	13.5%	12.7%	324
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,552

8. 修士論文のテーマと一貫していないこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	11.8%	14.9%	14.9%	14.0%	344
少し重要	22.6%	26.6%	23.2%	23.8%	586
どちらともいえない	24.4%	22.8%	25.8%	24.4%	600
それほど重要でない	19.7%	17.8%	17.6%	18.3%	449
全く重要でない	21.6%	17.9%	18.5%	19.5%	479
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,458

9. 博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	24.4%	22.5%	25.9%	24.2%	613
少し重要	18.3%	21.1%	23.1%	20.9%	528
どちらともいえない	23.8%	23.3%	23.6%	23.9%	604
それほど重要でない	13.8%	15.8%	11.9%	13.6%	345
全く重要でない	19.7%	17.3%	15.5%	17.4%	440
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,530

10. 自分自身の力量が不十分であること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	35.1%	34.0%	31.9%	33.6%	857
少し重要	34.4%	34.7%	36.1%	35.0%	893
どちらともいえない	20.0%	20.6%	20.2%	20.3%	519
それほど重要でない	5.8%	6.5%	6.7%	6.3%	161
全く重要でない	4.8%	4.3%	5.0%	4.7%	121
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,551

11. 家族を抱えていること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	6.4%	5.6%	7.4%	6.7%	166
少し重要	13.1%	14.1%	15.8%	14.4%	360
どちらともいえない	24.9%	27.9%	29.8%	27.7%	690
それほど重要でない	13.0%	10.8%	11.6%	11.7%	292
全く重要でない	42.6%	41.5%	35.5%	39.5%	986
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,494

12. アルバイトをしなければならないこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	13.4%	12.2%	15.4%	13.7%	347
少し重要	19.2%	20.2%	22.6%	20.7%	524
どちらともいえない	20.6%	22.7%	23.7%	22.5%	570
それほど重要でない	16.7%	12.9%	12.7%	13.9%	351
全く重要でない	30.1%	32.0%	25.6%	29.1%	736
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,528

13. 企業等で本業の仕事を抱えていること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	11.1%	12.8%	12.7%	12.2%	293
少し重要	12.2%	10.6%	13.7%	12.4%	300
どちらともいえない	23.0%	24.2%	27.5%	25.1%	606
それほど重要でない	7.7%	7.3%	6.7%	7.2%	174
全く重要でない	45.9%	45.2%	39.3%	43.1%	1,038
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,411

020. あなたの学位論文に関して質問します。

(1) 論文のテーマは決定していますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
はい	75.1%	84.1%	92.8%	84.3%	2,235
いいえ	24.9%	15.9%	7.2%	15.7%	415
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,650

(2) 上の質問で「決定している」と答えた方にお尋ねし聞きます。実際にどのようにして選びましたか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
自分自身で選んだ	28.3%	27.5%	30.0%	28.7%	636
指導教員と相談して選んだ	62.1%	58.1%	55.3%	58.0%	1,287
指導教員が実際に選んだ	6.7%	10.4%	12.2%	10.3%	228
副指導教員や助手と相談して選んだ	2.4%	3.0%	2.3%	2.5%	56
先輩の院生と相談して選んだ	0.5%	0.9%	0.2%	0.5%	11
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,218

(3) 学位論文に関する研究は、事実上、いつ始めましたか

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
学部時代の卒業論文	19.7%	15.4%	10.6%	14.9%	360
博士前期入学後	44.9%	39.1%	34.7%	39.0%	942
博士後期入学後	30.5%	41.7%	51.2%	42.0%	1,016
就職後	4.9%	3.9%	3.5%	4.1%	100
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,418

Q21. あなたの研究テーマは、指導教員の研究テーマとどのような関係がありますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
自分の研究テーマは、指導教員を中心とする共同研究の一部である	25.9%	25.3%	23.5%	24.8%	654
自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域の一部である	55.3%	54.8%	52.8%	54.0%	1,421
自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである	18.8%	19.9%	23.8%	21.2%	557
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

Q22. あなたの論文指導教員は博士論文に関して、どのくらい密接にあなたに指導しますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
とても十分である	48.4%	42.3%	43.6%	44.8%	1,175
少なめだが十分である	39.3%	43.1%	39.5%	40.4%	1,061
十分ではない	12.4%	14.6%	16.9%	14.8%	389
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

Q23. あなたは指導教員と博士論文の研究内容についてどの程度の頻度で相談しますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
週1回以上	21.2%	19.9%	21.7%	21.1%	556
週1回程度	26.1%	25.7%	21.3%	24.4%	643
月に1、2回程度	35.5%	34.5%	33.1%	34.1%	899
年に数回程度	11.9%	14.6%	17.4%	14.6%	385
ほとんどない	5.3%	5.3%	6.5%	5.8%	152
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

Q24. あなたは、課程博士を取得するために、どのような前提条件を満たさなければならないか、研究科や専攻の規則や規定まどの程

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
よく知っている	18.5%	20.9%	22.5%	20.8%	549
おおよそ知っている	59.1%	58.7%	60.2%	59.0%	1,557
あまり詳しく知らない	22.3%	20.4%	17.4%	20.2%	533
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,639

Q25. 課程博士取得のために必要な前提条件を満たすことは、どの程度難しいと思われますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
難しい	27.2%	23.1%	20.8%	23.8%	621
やや難しい	57.7%	59.0%	59.9%	58.8%	1,531
比較的容易である	15.1%	17.9%	19.3%	17.4%	453
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,605

026. あなたは、あなた自身の以下のような能力をどのように評価されますか。

1. 外国語(例えば英語)を読むこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	30.8%	33.6%	36.7%	33.5%	888
どちらともいえない	43.1%	40.6%	40.7%	41.7%	1,103
不十分	26.1%	25.9%	22.6%	24.8%	657
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,648

2. 外国語(例えば英語)を書くこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	9.6%	10.5%	12.9%	11.0%	291
どちらともいえない	30.2%	32.1%	37.0%	33.5%	887
不十分	60.2%	57.4%	50.1%	55.5%	1,468
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,646

3. 外国語(例えば英語)を話すこと

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	8.6%	9.0%	11.4%	9.8%	258
どちらともいえない	23.5%	21.8%	27.6%	24.8%	657
不十分	67.9%	69.2%	60.9%	65.4%	1,729
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

4. 作文能力(日本語)

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	30.5%	29.9%	34.0%	31.3%	827
どちらともいえない	50.5%	51.9%	50.0%	50.9%	1,347
不十分	19.0%	18.2%	16.0%	17.8%	470
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,644

5. 専門分野の知識

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	15.6%	19.4%	25.1%	20.2%	534
どちらともいえない	55.5%	56.0%	57.6%	56.6%	1,498
不十分	28.8%	24.6%	17.3%	23.2%	613
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,645

6. 教養的知識

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	21.3%	21.5%	23.5%	22.1%	582
どちらともいえない	59.5%	59.8%	61.9%	60.7%	1,601
不十分	19.2%	18.6%	14.6%	17.2%	454
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,637

7. 思考力

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	28.6%	31.5%	32.6%	30.7%	810
どちらともいえない	57.0%	57.3%	56.4%	57.0%	1,502
不十分	14.3%	11.2%	11.0%	12.3%	324
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

8. 博士課程後期学生としての全体的資質

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
十分	18.0%	19.3%	22.8%	20.2%	529
どちらともいえない	64.9%	64.7%	64.0%	64.4%	1,686
不十分	17.0%	16.0%	13.2%	15.4%	404
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,619

027. あなたはティーチング・アシスタント（T.A.）の経験がありますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
現在担当している	35.2%	36.6%	31.6%	34.1%	901
担当したことがある	31.5%	33.8%	34.1%	33.1%	875
担当したことはない	33.4%	29.6%	34.3%	32.8%	867
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,643

028. （担当したことのある人にうかがいます）T.A.の経験は、どのように役に立ちましたか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
自分の研究活動の発展に役に立った。	6.3%	5.9%	6.8%	6.6%	111
基礎的な知識を整理するのに役に立った	41.6%	40.4%	31.9%	37.7%	637
大学教育の方法を学ぶのに役に立った	35.0%	32.7%	36.6%	34.5%	583
たいして役に立たなかった	17.1%	21.1%	24.6%	21.2%	358
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	1,689

029. あなたはリサーチ・アシスタント（R.A.）の経験がありますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
現在担当している	18.9%	21.6%	17.2%	18.9%	496
担当したことがある	6.1%	11.1%	14.8%	10.8%	283
担当したことはない	75.0%	67.3%	68.0%	70.3%	1,846
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

030. （担当したことのある人に聞きます）R.A.の経験は、どのように役に立ちましたか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
自分の研究活動の発展に役に立った	38.1%	39.1%	40.1%	39.9%	284
基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った	29.8%	20.0%	20.7%	22.9%	163
研究の方法を学ぶのに役に立った	17.7%	19.1%	21.1%	19.2%	137
たいして役に立たなかった	14.4%	21.8%	18.0%	18.0%	128
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	712

031. 大学院での研究生活を充実したものにするためには、以下の事項はどの程度重要ですか。

1. 大学院のカリキュラム

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	32.1%	28.4%	33.6%	31.9%	839
少し重要	31.9%	32.8%	31.9%	32.1%	844
どちらともいえない	18.0%	18.5%	14.9%	16.9%	444
それほど重要でない	12.1%	14.6%	14.0%	13.3%	350
全く重要でない	5.9%	5.8%	5.7%	5.7%	150
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,627

2. 授業の内容

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	35.7%	32.8%	37.3%	35.7%	939
少し重要	30.1%	29.0%	29.3%	29.4%	774
どちらともいえない	17.4%	18.6%	13.6%	16.4%	431
それほど重要でない	10.2%	13.9%	14.0%	12.6%	332
全く重要でない	6.6%	5.7%	5.8%	5.9%	156
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

3. 指導教員の研究指導の内容

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	71.6%	72.3%	70.8%	71.6%	1,890
少し重要	22.3%	20.7%	21.0%	21.3%	563
どちらともいえない	4.1%	3.7%	5.7%	4.5%	119
それほど重要でない	1.6%	2.5%	1.6%	1.8%	48
全く重要でない	0.5%	0.7%	0.9%	0.7%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,639

4. 指導教員と自分の研究テーマの関連性

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	47.2%	48.1%	51.7%	49.6%	1,307
少し重要	34.1%	32.6%	29.8%	31.8%	839
どちらともいえない	12.7%	11.9%	11.4%	11.9%	313
それほど重要でない	4.6%	5.6%	4.9%	4.9%	129
全く重要でない	1.4%	1.9%	2.2%	1.8%	48
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

5. 指導教員と相談する機会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	72.1%	71.0%	68.6%	70.7%	1,866
少し重要	23.0%	22.7%	24.2%	23.2%	613
どちらともいえない	3.7%	5.3%	5.0%	4.7%	123
それほど重要でない	0.7%	0.4%	1.6%	0.9%	25
全く重要でない	0.5%	0.5%	0.6%	0.5%	14
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,641

6. 学会参加への経済的支援

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	55.2%	51.3%	52.0%	52.6%	1,388
少し重要	29.4%	31.1%	28.4%	29.7%	784
どちらともいえない	9.3%	11.8%	12.1%	11.0%	290
それほど重要でない	4.6%	4.9%	5.1%	4.9%	130
全く重要でない	1.6%	0.8%	2.5%	1.7%	46
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,638

7. 学会で発表する機会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	64.0%	62.8%	60.3%	62.0%	1,636
少し重要	29.3%	28.0%	28.8%	28.9%	764
どちらともいえない	5.1%	7.7%	7.8%	7.0%	185
それほど重要でない	1.4%	1.5%	2.2%	1.7%	45
全く重要でない	0.1%	0.0%	0.8%	0.4%	10
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,640

8. 論文を執筆する機会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	73.8%	73.5%	75.0%	74.0%	1,951
少し重要	22.8%	21.6%	20.0%	21.5%	566
どちらともいえない	3.1%	4.3%	4.1%	3.9%	103
それほど重要でない	0.4%	0.7%	0.6%	0.5%	14
全く重要でない	0.0%	0.0%	0.3%	0.1%	3
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,637

9. 教育助手(T. A.)の経験

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	10.5%	9.5%	10.2%	10.2%	267
少し重要	24.6%	24.5%	23.3%	24.2%	634
どちらともいえない	38.0%	34.5%	37.3%	36.6%	962
それほど重要でない	17.6%	20.3%	17.7%	18.3%	481
全く重要でない	9.3%	11.2%	11.5%	10.7%	281
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,625

10. 研究助手(R. A.)の経験

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	12.5%	10.1%	10.3%	11.1%	288
少し重要	23.9%	21.0%	22.1%	22.6%	586
どちらともいえない	43.1%	41.9%	41.9%	42.1%	1,092
それほど重要でない	12.8%	16.4%	13.9%	14.2%	368
全く重要でない	7.7%	10.6%	11.7%	10.1%	262
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,596

11. 十分な奨学金を得ること

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	52.3%	49.1%	52.3%	51.2%	1,347
少し重要	24.5%	24.1%	21.6%	23.3%	613
どちらともいえない	14.8%	15.7%	15.4%	15.5%	408
それほど重要でない	4.8%	5.6%	4.4%	4.9%	129
全く重要でない	3.5%	5.5%	6.2%	5.1%	135
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,632

12. 海外奨学金や留学の機会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	35.7%	32.1%	33.6%	33.8%	885
少し重要	31.9%	30.7%	29.9%	30.8%	807
どちらともいえない	22.9%	26.0%	24.4%	24.4%	639
それほど重要でない	5.5%	6.0%	6.6%	6.1%	160
全く重要でない	4.0%	5.2%	5.5%	5.0%	131
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,622

13. 外国語修得の機会

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	53.8%	48.9%	44.8%	48.7%	1,283
少し重要	31.6%	31.4%	34.6%	32.7%	861
どちらともいえない	10.8%	14.0%	15.3%	13.6%	358
それほど重要でない	2.5%	4.3%	3.1%	3.2%	85
全く重要でない	1.2%	1.5%	2.1%	1.7%	46
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,633

14. 図書館の充実度

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	64.0%	65.3%	66.9%	65.5%	1,727
少し重要	24.1%	23.7%	21.6%	23.0%	607
どちらともいえない	8.3%	7.7%	7.9%	7.9%	209
それほど重要でない	2.4%	2.5%	2.1%	2.4%	63
全く重要でない	1.2%	0.8%	1.4%	1.1%	30
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

15. コンピュータの利用

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	68.1%	70.9%	69.1%	69.4%	1,828
少し重要	24.6%	21.1%	22.0%	22.5%	592
どちらともいえない	5.6%	5.9%	6.6%	6.1%	162
それほど重要でない	1.2%	1.2%	1.5%	1.3%	34
全く重要でない	0.5%	0.9%	0.8%	0.7%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,635

16. 専用機や居室スペースの拡充

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	48.4%	52.2%	53.1%	51.3%	1,351
少し重要	32.5%	25.6%	28.7%	29.0%	763
どちらともいえない	13.9%	15.9%	12.5%	14.0%	370
それほど重要でない	3.6%	4.9%	3.9%	4.1%	108
全く重要でない	1.6%	1.3%	1.8%	1.6%	42
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,634

17. 他大学の院生や研究者との交流

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	43.2%	41.0%	39.5%	40.9%	1,079
少し重要	37.4%	37.9%	37.7%	37.7%	993
どちらともいえない	14.7%	15.4%	17.0%	16.0%	423
それほど重要でない	3.8%	4.4%	4.3%	4.1%	109
全く重要でない	0.8%	1.2%	1.5%	1.2%	32
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,636

18. 学内での研究会への参加

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
非常に重要	32.4%	27.7%	26.8%	28.8%	754
少し重要	34.4%	34.8%	37.1%	35.5%	930
どちらともいえない	24.7%	28.3%	25.5%	26.2%	686
それほど重要でない	6.0%	7.1%	8.1%	7.1%	186
全く重要でない	2.4%	2.1%	2.6%	2.4%	64
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,620

Q32. 以下のものは、大学や研究室にありますか。

1. 机

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
自分専用のものがある	77.9%	83.6%	78.6%	80.0%	2,110
共用のものがある	18.9%	14.0%	18.2%	17.1%	452
ない	3.1%	2.4%	3.1%	2.9%	76
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,638

2. パソコン

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
自分専用のものがある	55.6%	61.3%	58.5%	58.4%	1,534
共用のものがある	38.7%	34.8%	37.3%	37.1%	974
ない	5.7%	3.9%	4.3%	4.6%	120
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,628

033. あなたは現在、日本学術振興会の特別研究員（D C）を受けていますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
はい	3.5%	3.9%	5.6%	4.4%	115
いいえ	96.5%	96.1%	94.4%	95.6%	2,525
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,640

034. 日本学術振興会の特別研究員（D CとP D）についてうかがいます。

(1)大学院生にとって、全体として、D Cへの採用の可能性についてどうお考えですか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
努力すれば採用されると思う	43.7%	36.3%	33.1%	37.6%	771
採用される見込みはあまりないと思う	56.3%	63.7%	66.9%	62.4%	1,282
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,053

(2)大学院生にとって、全体として、P Dへの採用の可能性についてどうお考えですか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
努力すれば採用されると思う	42.6%	41.6%	37.3%	40.3%	823
採用される見込みはあまりないと思う	57.4%	58.4%	62.7%	59.7%	1,217
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,040

035. あなたは博士課程を修了後、どのような進路を希望していますか。

	学年			全体	回答数 (全体)
	D 1	D 2	D 3以上		
大学等の教員	51.5%	46.7%	48.1%	48.3%	1,162
高校以下の学校の教員	1.7%	1.2%	1.3%	1.4%	33
公務員	4.3%	6.4%	3.6%	4.8%	115
会社員	2.8%	2.3%	2.3%	2.6%	62
民間企業等の研究者	17.2%	20.8%	11.1%	15.8%	380
民間企業・病院等の技術者・専門家	9.4%	10.5%	16.1%	12.5%	300
その他	8.0%	6.5%	11.6%	9.1%	219
特になし	5.1%	5.7%	5.9%	5.6%	135
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	2,406

036. 大学院生活の経済的側面についてうかがいます。

差し支えなければ、下の欄に、あなたの1ヶ月の平均収入・支出額をご記入下さい。

収入 (単位：千円)

回答結果の平均値	学年			全体
	D 1	D 2	D 3以上	
親からの援助	79.6	70.6	77.0	76.1
アルバイト	145.0	92.2	156.7	133.2
定職	329.0	322.8	279.3	308.8
日本育英会の奨学金	118.0	118.4	115.6	117.2
日本学術振興会の奨学金(給与)	179.7	167.5	161.4	171.4
民間団体からの奨学金	107.1	74.9	82.0	85.8
文部省奨学金/奨励金(留学生)	122.5	143.6	132.6	134.5
その他	70.2	102.8	81.2	85.5
合計	213.9	209.8	246.7	225.1

支出 (単位：千円)

回答結果の平均値	学年			全体
	D 1	D 2	D 3以上	
授業料・納付金	71.2	66.4	70.9	69.2
修学費	22.6	21.7	19.9	21.1
交通費・通信費	18.6	17.6	17.5	17.7
食費	40.2	37.5	41.9	40.0
住居・光熱費	61.4	55.2	59.8	59.1
保健・衛生費	13.2	12.1	12.3	12.6
娯楽・嗜好費	20.4	18.5	24.2	21.4
その他日常費	21.9	24.9	26.3	24.4
合計	183.5	175.9	199.9	187.6

大学院教育に関する研究科長調査集計結果(専門分野別クロス表)

Q3. 貴研究科および直属の学部の本年度の学生数をご記入下さい。対応する課程がない場合は空欄のままで結構です。

回答結果の平均値		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
博士課程後期学生		43.4人	125.8人	118.0人	77.0人	87.4人
	うち社会人学生	8.0人	22.5人	21.6人	17.4人	16.6人
	うち留学生	7.6人	28.0人	11.5人	14.3人	15.5人
博士課程前期学生		86.6人	408.9人	79.3人	144.9人	196.4人
	うち社会人学生	21.1人	5.8人	6.6人	16.3人	13.6人
	うち留学生	13.6人	17.1人	1.6人	11.3人	12.9人
学部学生		2244.9人	2494.5人	733.9人	1495.1人	1903.9人
	うち社会人学生	15.5人	9.6人	1.4人	2.5人	8.8人
	うち留学生	34.3人	23.4人	1.2人	19.7人	22.1人

Q4. 貴研究科で、平成14年度1年間に授与した修士と博士の学位数をご記入下さい。

回答結果の平均値		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
修士号		35.8	186.4	31.5	63.1	85.8
	うち社会人学生	11.0	1.5	2.9	6.8	6.3
	うち留学生	5.6	7.8	0.5	5.6	5.7
博士号		5.4	35.9	32.4	10.9	21.2
	うち社会人学生	2.1	6.9	4.6	2.8	4.4
	うち留学生	1.4	7.3	2.7	1.9	3.8
うち課程博士(甲)		4.6	29.1	21.6	10.2	17.0
	うち社会人学生	1.3	5.0	1.7	2.2	2.9
	うち留学生	1.6	7.2	2.8	2.1	3.9
うち論文博士(乙)		2.4	8.9	13.0	3.3	7.4
	うち社会人学生	1.2	3.6	5.1	1.3	3.0
	うち留学生	0.1	0.7	0.3	0.2	0.4

Q5. 貴研究科の入試の種類と実施回数についてうかがいます。

1年に何回入試がありますか

回答結果の平均値		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
博士課程前期		2.2回	2.4回	2.1回	2.1回	2.2回
博士課程後期		1.3回	2.0回	1.9回	1.6回	1.7回

社会人特別選抜はありますか：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
ある	75.7%	69.3%	50.9%	72.0%	69.8%	282
ない	24.3%	30.7%	49.1%	28.0%	30.2%	122
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	404

社会人特別選抜はありますか：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
ある	35.3%	73.2%	41.9%	54.9%	50.6%	229
ない	64.7%	26.8%	58.1%	45.1%	49.4%	224
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	453

留学生特別選抜はありますか：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
ある	64.8%	75.8%	44.6%	57.1%	64.7%	258
ない	35.2%	24.2%	55.4%	42.9%	35.3%	141
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	399

留学生特別選抜はありますか：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
ある	46.1%	65.2%	40.0%	39.2%	50.1%	224
ない	53.9%	34.8%	60.0%	60.8%	49.9%	223
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

06. 博士課程前期の入試（一般選抜、日本人）における外国語についてうかがいます。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
すべての専攻（特別選抜を除く）で2カ国語を課している	6.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%	10
2カ国語を課している専攻と1カ国語を課している専攻がある	13.9%	0.0%	0.0%	2.1%	6.0%	24
すべての専攻で1カ国語を課している	59.6%	93.7%	100.0%	83.0%	79.4%	320
専攻によって、語学を課しているところと課していないところがある	20.5%	6.3%	0.0%	14.9%	12.2%	49
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	403

（上の質問で、外国語を課している場合、お答えください）

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
すべての専攻で、辞書持ち込みを許可している	46.0%	13.6%	57.1%	40.5%	37.0%	138
専攻によって、辞書持ち込みを許可しているところがある	22.0%	23.7%	1.6%	23.8%	19.3%	72
すべての専攻で、辞書持ち込みを許可している専攻で、辞書持込を許可していない	32.0%	62.7%	41.3%	35.7%	43.7%	163
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	373

07. 博士課程後期の入試（一般選抜、日本人）における外国語についてうかがいます。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
自研究科博士課程前期からの進学者、他大学院からの入学者を問わず全員に課している	66.9%	46.6%	68.8%	53.1%	59.8%	268
博士課程前期からの進学者は免除し、他大学院からの入学者のみに課している	12.2%	15.8%	17.2%	12.2%	14.3%	64
特に課していない	10.5%	25.6%	12.9%	30.6%	17.6%	79
専攻によって異なる	10.5%	12.0%	1.1%	4.1%	8.3%	37
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	448

（上の質問で、外国語を課している場合、お答えください）

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
すべての専攻で、2カ国語を課している	21.6%	0.0%	3.8%	0.0%	9.8%	33
2カ国語を課している専攻と1カ国語を課している専攻がある	18.7%	2.3%	0.0%	0.0%	8.3%	28
すべての専攻で1カ国語を課している	59.7%	97.7%	96.3%	100.0%	82.0%	277
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	338

Q8. 貴研究科の入試の状況についてうかがいます。お手数ですが、平成14年度の入試について、以下の各欄に対応する人数をご記入下さい。

回答結果の平均値	専門分野				全体
	文系	理系	医療系	学際系	
博士課程前期					
受験者数	87.2人	290.3人	57.1人	120.9人	152.2人
うち自大学出身	30.8人	208.2人	39.4人	49.7人	91.1人
うち他大学出身	54.5人	68.0人	18.7人	66.9人	55.2人
合格者数	42.3人	218.0人	45.6人	76.5人	103.5人
うち自大学出身	20.1人	181.2人	35.1人	39.4人	77.4人
うち他大学出身	22.1人	35.0人	11.0人	34.3人	26.3人
入学者数	37.6人	205.8人	41.4人	65.9人	95.2人
うち自大学出身	19.0人	167.5人	31.3人	35.0人	70.4人
うち他大学出身	19.3人	30.0人	10.2人	28.0人	22.5人
博士課程後期					
受験者数	18.5人	37.4人	33.0人	27.8人	28.2人
博士課程前期から進学（医学研究科等では自大学出身）	11.8人	24.1人	20.2人	15.6人	17.9人
他大学院・研究科から入学（医学研究科では他大学出身）	6.9人	13.7人	15.9人	8.7人	11.1人
合格者数	12.0人	34.8人	31.0人	24.1人	24.3人
博士課程前期から進学（医学研究科等では自大学出身）	9.1人	22.9人	19.8人	14.2人	16.4人
他大学院・研究科から入学（医学研究科では他大学出身）	3.4人	12.3人	14.7人	6.3人	8.9人
入学者数	11.8人	34.7人	30.1人	23.0人	23.8人
博士課程前期から進学（医学研究科等では自大学出身）	9.1人	22.8人	19.5人	13.2人	16.2人
他大学院・研究科から入学（医学研究科では他大学出身）	3.2人	12.5人	14.3人	6.0人	8.7人

09. 貴研究科の博士課程前期・後期の卒業生の就職状況をどのように評価されていますか。

現在：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
おおよそ順調	25.3%	61.4%	74.5%	29.3%	44.2%	165
ふつう	47.5%	30.7%	19.1%	51.2%	38.6%	144
あまりよくない	27.2%	7.9%	6.4%	19.5%	17.2%	64
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	373

現在：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
おおよそ順調	18.4%	36.7%	75.0%	22.6%	36.7%	145
ふつう	40.8%	48.4%	22.6%	51.6%	40.3%	159
あまりよくない	40.8%	14.8%	2.4%	25.8%	23.0%	91
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	395

10年前と比べて：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
良くなった	10.4%	7.0%	14.3%	4.2%	9.1%	28
変わらない	67.2%	61.4%	60.0%	58.3%	63.5%	195
悪くなった	22.4%	31.6%	25.7%	37.5%	27.4%	84
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	307

10年前と比べて：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
良くなった	6.8%	7.6%	3.8%	4.5%	6.2%	21
変わらない	63.6%	76.2%	89.7%	77.3%	74.5%	251
悪くなった	29.5%	16.2%	6.4%	18.2%	19.3%	65
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	337

Q10. 下記に卒業生の主な就職先を5つ挙げています。博士課程前期・後期それぞれの平成14年度の卒業生について人数をご記入ください。もし該当するデータがない場合は、おおよその%でお書きください。

(人数を記入いただいた場合は%は空欄のままです)

回答結果の平均値	専門分野				全体
	文系	理系	医療系	学際系	
博士課程前期					
大学等の教員	1.4人	0.7人	2.8人	2.2人	1.5人
高校以下の学校の教員	3.5人	2.5人	0.1人	2.6人	2.8人
公務員	2.6人	6.9人	2.9人	5.2人	4.8人
会社員	6.3人	28.2人	4.2人	5.9人	14.0人
民間企業等の研究者	1.0人	30.7人	11.7人	9.2人	17.4人
民間企業・病院等の技術者・専門家	4.4人	89.7人	13.5人	13.8人	39.0人
その他	8.6人	14.7人	6.3人	8.8人	10.3人
無業者	5.8人	7.9人	3.3人	9.0人	6.6人
博士課程後期					
大学等の教員	3.1人	5.2人	4.9人	3.4人	4.3人
高校以下の学校の教員	1.0人	0.8人	0.0人	1.1人	0.8人
公務員	0.6人	2.3人	5.2人	0.7人	2.4人
会社員	0.5人	2.4人	0.3人	0.2人	1.5人
民間企業等の研究者	1.2人	9.0人	3.7人	9.1人	6.4人
民間企業・病院等の技術者・専門家	0.7人	5.4人	11.7人	1.6人	6.9人
その他	3.5人	8.9人	7.3人	4.1人	6.6人
無業者	2.9人	3.4人	1.7人	2.2人	2.8人

011. 貴研究科が果たしている主な役割は何だとお考えですか。番号に○をつけて下さい。

1. 大学教員の養成：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	27.1%	8.5%	31.3%	17.5%	20.3%	71
そう思わない	72.9%	91.5%	68.8%	82.5%	79.7%	279
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	350

1. 大学教員の養成：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	83.6%	69.2%	73.0%	68.2%	75.4%	319
そう思わない	16.4%	30.8%	27.0%	31.8%	24.6%	104
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	423

2. 研究者の養成：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	49.0%	49.2%	68.6%	52.5%	52.1%	185
そう思わない	51.0%	50.8%	31.4%	47.5%	47.9%	170
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	355

2. 研究者の養成：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	97.1%	97.7%	96.8%	91.3%	96.6%	428
そう思わない	2.9%	2.3%	3.2%	8.7%	3.4%	15
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	443

3. 専門職業人の養成：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	90.1%	90.5%	95.9%	97.8%	91.9%	352
そう思わない	9.9%	9.5%	4.1%	2.2%	8.1%	31
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	383

3. 専門職業人の養成：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	53.9%	74.4%	74.7%	51.2%	64.6%	266
そう思わない	46.1%	25.6%	25.3%	48.8%	35.4%	146
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	412

4. 基礎研究の場：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	80.7%	74.8%	80.9%	73.2%	77.9%	275
そう思わない	19.3%	25.2%	19.1%	26.8%	22.1%	78
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	353

4. 基礎研究の場：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	58.8%	83.3%	91.9%	73.8%	75.2%	303
そう思わない	41.2%	16.7%	8.1%	26.2%	24.8%	100
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	403

5. 応用研究の場：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	54.2%	72.9%	61.7%	58.1%	61.8%	217
そう思わない	45.8%	27.1%	38.3%	41.9%	38.2%	134
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	351

5. 応用研究の場：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	69.2%	81.0%	90.8%	71.1%	77.5%	314
そう思わない	30.8%	19.0%	9.2%	28.9%	22.5%	91
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	405

012. 貴研究科にとって、次の1から4に挙げた事項について、どちらが重要だと思いますか。

博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
訓練	11.4%	5.9%	13.7%	8.3%	9.5%	35
同等	40.9%	58.5%	60.8%	54.2%	51.0%	187
教育	47.7%	35.6%	25.5%	37.5%	39.5%	145
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	367

博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
訓練	12.8%	18.5%	22.6%	18.8%	17.2%	71
同等	37.8%	54.8%	41.7%	37.5%	43.6%	180
教育	49.4%	26.6%	35.7%	43.8%	39.2%	162
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	413

博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
技能の修得	27.0%	17.5%	32.0%	30.4%	24.9%	91
同等	42.6%	60.8%	52.0%	52.2%	51.0%	186
創造性の開発	30.4%	21.7%	16.0%	17.4%	24.1%	88
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	365

博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
技能の修得	4.5%	0.0%	3.5%	2.0%	2.6%	11
同等	21.2%	22.2%	34.1%	18.4%	23.7%	99
創造性の開発	74.4%	77.8%	62.4%	79.6%	73.6%	307
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	417

博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
専門を深める	35.5%	20.8%	25.5%	18.8%	27.5%	103
同等	44.5%	63.3%	49.0%	50.0%	51.7%	194
幅を広げる	20.0%	15.8%	25.5%	31.3%	20.8%	78
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	375

博士課程後期	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
専門を深める	73.8%	65.4%	67.0%	64.0%	68.8%	296
同等	21.3%	26.8%	28.4%	28.0%	25.1%	108
幅を広げる	4.9%	7.9%	4.5%	8.0%	6.0%	26
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	430

博士課程前期	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
専門職業人養成	41.6%	47.9%	35.3%	46.9%	43.7%	162
同等	53.0%	48.8%	56.9%	49.0%	51.5%	191
研究者の養成	5.4%	3.3%	7.8%	4.1%	4.9%	18
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	371

博士課程後期	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
専門職業人養成	7.4%	4.0%	1.1%	7.8%	5.1%	22
同等	19.0%	42.1%	38.2%	21.6%	30.1%	129
研究者の養成	73.6%	54.0%	60.7%	70.6%	64.8%	278
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	429

Q13. 貴研究科に修士論文を書かないで修士号を取得するコースがありますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
ある	21.8%	2.2%	3.8%	19.6%	12.4%	54
ない	78.2%	97.8%	96.2%	80.4%	87.6%	383
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	437

Q14. 貴研究科の博士課程後期のカリキュラムを、他の大学と比べてどのように評価されますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
優れていると思う	26.0%	18.0%	18.9%	22.4%	21.7%	98
ほぼ同等だと思う	65.3%	79.7%	76.8%	73.5%	72.9%	329
やや劣っていると思う	8.7%	2.3%	4.2%	4.1%	5.3%	24
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	451

Q15. あなたの分野で授与される博士号の水準は、大学間でどの程度異なっていますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
どの大学もおおよそ同等だと思う	29.9%	34.3%	34.4%	36.7%	32.8%	148
大学間でやや異なっていると思う	49.4%	53.0%	51.6%	49.0%	51.0%	230
大学間でかなり異なっていると思う	20.7%	12.7%	14.0%	14.3%	16.2%	73
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	451

Q16. 貴研究科で授与される博士号の水準を、他大学の同分野で授与されるものと比べてどのように評価されますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
優れていると思う	26.6%	28.8%	26.6%	16.7%	26.3%	115
ほぼ同等だと思う	68.6%	68.9%	70.2%	81.0%	70.3%	308
やや劣っていると思う	4.7%	2.3%	3.2%	2.4%	3.4%	15
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	438

Q17.日本の博士号の水準を次の5カ国の博士号と比べて、あなたはどのように評価されますか。

アメリカ

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
日本が高い	29.0%	18.2%	4.4%	16.3%	19.5%	86
同等	30.2%	53.0%	28.6%	38.8%	37.6%	166
日本が低い	14.8%	15.2%	42.9%	22.4%	21.5%	95
不明	26.0%	13.6%	24.2%	22.4%	21.5%	95
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	442

イギリス

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
日本が高い	10.1%	10.0%	7.6%	4.1%	9.1%	40
同等	33.7%	50.0%	22.8%	32.7%	36.1%	159
日本が低い	18.3%	11.5%	25.0%	22.4%	18.1%	80
不明	37.9%	28.5%	44.6%	40.8%	36.7%	162
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	441

ドイツ

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
日本が高い	7.8%	4.6%	6.6%	4.2%	6.2%	27
同等	27.1%	52.3%	24.2%	29.2%	34.4%	150
日本が低い	16.3%	7.7%	24.2%	22.9%	16.1%	70
不明	48.8%	35.4%	45.1%	43.8%	43.3%	189
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	436

フランス

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
日本が高い	7.2%	6.2%	5.5%	4.2%	6.2%	27
同等	23.5%	40.8%	20.9%	31.3%	29.1%	127
日本が低い	12.7%	6.2%	17.6%	16.7%	12.2%	53
不明	56.6%	46.9%	56.0%	47.9%	52.5%	229
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	436

中国

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
日本が高い	30.7%	50.8%	44.6%	34.7%	40.0%	176
同等	6.6%	6.8%	3.3%	2.0%	5.7%	25
日本が低い	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
不明	62.0%	42.4%	52.2%	63.3%	54.1%	238
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	440

Q18.最近、あなたが主査あるいは指導教員として学位授与に直接関わった典型的な課程博士論文1つを念頭において、次の質問にお答え下さい。

論文の言語

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
英語（又は他の外国語）	13.9%	46.1%	48.3%	38.9%	34.6%	135
日本語	86.1%	53.9%	51.7%	61.1%	65.4%	255
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	390

論文の長さ（400字原稿用紙換算で）

回答結果の平均値	専門分野				全体
	文系	理系	医療系	学際系	
	535.1枚	293.5枚	94.1枚	457.9枚	354.2枚

取得者の国籍		専門分野				全体	回答数 (全体)
		文系	理系	医療系	学際系		
日本国籍		70.3%	86.5%	94.4%	82.9%	82.3%	320
外国籍		29.7%	13.5%	5.6%	17.1%	17.7%	69
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	389

取得者の年齢（博士号取得時）		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
回答結果の平均値		35.2歳	29.6歳	29.9歳	32.4歳	31.8歳

博士課程入学後		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
回答結果の平均値		5.6年	3.3年	3.6年	3.6年	4.2年

学部卒業後		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
回答結果の平均値		11.1年	6.7年	6.6年	8.9年	8.3年

そのテーマを実質的に研究して		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
回答結果の平均値		6.7年	5.3年	4.1年	6.2年	5.6年

その博士論文は、		専門分野				全体	回答数 (全体)
		文系	理系	医療系	学際系		
既存の学術論文を編集したもの		8.7%	10.9%	17.6%	20.0%	12.4%	44
既存の学術論文をもとに新たに書き下ろしたもの		91.3%	89.1%	82.4%	80.0%	87.6%	311
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	355

Q19. 全体として、課程博士を取得するまでに、博士課程後期に入学後、何年かかりますか。

回答結果の平均値		専門分野				全体
		文系	理系	医療系	学際系	
早くて		3.7年	2.4年	3.1年	2.6年	3.0年
遅くて		7.2年	5.2年	5.5年	5.5年	6.0年
平均		5.2年	3.4年	3.8年	3.6年	4.2年

Q20. 博士課程(後期)に入学した学生で、課程博士を取得する者はおおよそ何%いますか。

		専門分野				全体	回答数 (全体)
		文系	理系	医療系	学際系		
10%未満		31.4%	0.0%	0.0%	7.7%	12.6%	53
10～25%程度		28.9%	1.5%	0.0%	7.7%	12.1%	51
25～50%程度		22.0%	4.6%	0.0%	17.9%	11.4%	48
50～75%程度		10.1%	36.2%	10.6%	30.8%	20.1%	85
75%以上		7.5%	57.7%	89.4%	35.9%	43.8%	185
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	422

Q21. 課程博士を標準修業年限（通常3年、医歯系・獣医系では4年）内に輩出することは、どの程度可能であるとお考えですか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
十分可能である	9.8%	42.5%	60.4%	20.0%	31.3%	142
なんとか可能である	41.0%	56.0%	35.4%	60.0%	46.3%	210
困難である	49.1%	1.5%	4.2%	20.0%	22.5%	102
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	454

Q22. 貴研究科では、課程博士の論文を提出する以前に、おおよそどのような前提条件が公式・非公式に課されていますか。

1,2について特に要件がない場合は、「特になし」を丸で囲んで下さい。なお、専攻によって異なる場合、ご所属の専攻についてご回答下さい。

1. 学会発表についての要件

	専門分野				全体
	文系	理系	医歯系	学際系	
国内全国学会での口頭発表（回答結果の平均値）	1.8件	3.5件	1.4件	2.5件	2.3件
国際学会での口頭発表（回答結果の平均値）	1.5件	1.3件	1.0件	1.5件	1.3件
その他（回答数）	15	6	8	2	31
特になし（回答数）	111	94	75	25	306

2. 学術論文等についての要件

	専門分野				全体
	文系	理系	医歯系	学際系	
大学紀要等への論文掲載（回答結果の平均値）	2.0件	0.8件	2.4件	1.4件	1.9件
全国的な学会誌論文掲載（回答結果の平均値）	1.6件	1.9件	1.5件	1.7件	1.7件
国際的な学会誌論文掲載（回答結果の平均値）	2.0件	1.6件	1.8件	1.1件	1.6件
その他（回答数）	19	25	18	8	70
特になし（回答数）	67	16	32	8	123

Q23. 博士論文の審査委員会の編成についてうかがいます。

貴研究科では、最低何人で編成することになっていますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
2人	0.6%	4.4%	0.0%	2.0%	1.8%	8
3人	74.7%	57.7%	62.8%	62.0%	65.8%	300
3.5人	0.6%	0	3.2%	0.0%	0.9%	4
4人	12.1%	14.6%	16.0%	20.0%	14.5%	66
5人	10.3%	20.4%	9.6%	10.0%	13.2%	60
6人	1.1%	0.7%	0.0%	2.0%	0.9%	4
7人	0.6%	1.5%	0.0%	2.0%	0.9%	4
8人	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.2%	1
11人	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	0.2%	1
15人	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.4%	2
19人	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.2%	1
22人	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.4%	2
27人	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.2%	1
28人	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.4%	2
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	456
回答結果の平均値	3.4人	3.6人	5.0人	3.7人	3.8人	-

その中に、他講座あるいは他専攻の教員が参加しますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
よくある	34.3%	50.4%	83.0%	57.9%	51.9%	224
ときどき	41.6%	40.6%	6.4%	26.3%	32.2%	139
ほとんどない	24.1%	9.0%	10.6%	15.8%	16.0%	69
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	432

その中に、他大学の教員が参加しますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
よくある	19.8%	19.7%	0.0%	12.8%	14.8%	64
ときどき	38.9%	56.1%	11.8%	59.0%	40.0%	173
ほとんどない	41.3%	24.2%	88.2%	28.2%	45.1%	195
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	432

024. 標準修業年限内での博士号取得が困難だとすれば、どのような条件が影響していると思われますか。

1. 論文作成に必要な研究成果を期限内に出すこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	44.9%	59.0%	59.3%	57.1%	53.5%	219
少し重要	26.6%	26.2%	27.9%	19.0%	25.9%	106
どちらともいえない	22.2%	8.2%	7.0%	9.5%	13.4%	55
それほど重要でない	4.4%	5.7%	3.5%	14.3%	5.6%	23
全く重要でない	1.9%	0.8%	2.3%	0.0%	1.5%	6
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	409

2. 学位論文が長いため執筆に時間がかかること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	13.1%	0.0%	0.0%	9.5%	6.1%	25
少し重要	25.6%	8.3%	9.5%	16.7%	16.5%	67
どちらともいえない	31.9%	18.3%	21.4%	28.6%	25.3%	103
それほど重要でない	24.4%	57.5%	40.5%	33.3%	38.3%	156
全く重要でない	5.0%	15.8%	28.6%	11.9%	13.8%	56
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	407

3. 学位論文の要求水準が高すぎること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	13.1%	5.9%	1.2%	14.0%	8.6%	35
少し重要	32.5%	27.7%	27.9%	32.6%	30.3%	124
どちらともいえない	39.4%	41.2%	36.0%	25.6%	37.7%	154
それほど重要でない	14.4%	20.2%	26.7%	25.6%	19.8%	81
全く重要でない	0.6%	5.0%	8.1%	2.3%	3.7%	15
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	409

4. 論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	11.4%	24.6%	9.3%	14.6%	15.3%	62
少し重要	31.6%	33.9%	15.1%	41.5%	29.7%	120
どちらともいえない	30.4%	16.9%	26.7%	17.1%	24.3%	98
それほど重要でない	19.6%	21.2%	32.6%	26.8%	23.5%	95
全く重要でない	7.0%	3.4%	16.3%	0.0%	7.2%	29
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	404

5. 博士号の水準が曖昧なこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	6.4%	0.0%	1.2%	2.4%	3.0%	12
少し重要	16.7%	4.3%	4.7%	16.7%	10.5%	42
どちらともいえない	41.7%	29.9%	35.3%	42.9%	36.9%	148
それほど重要でない	21.8%	34.2%	32.9%	26.2%	28.4%	114
全く重要でない	13.5%	31.6%	25.9%	11.9%	21.2%	85
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	401

6. 博士のテーマ設定が曖昧なこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	16.8%	13.3%	9.5%	14.6%	14.0%	56
少し重要	27.1%	19.2%	21.4%	31.7%	24.2%	97
どちらともいえない	34.8%	33.3%	31.0%	26.8%	32.7%	131
それほど重要でない	14.8%	25.8%	25.0%	17.1%	20.4%	82
全く重要でない	6.5%	8.3%	13.1%	9.8%	8.7%	35
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	401

7. 学部時代の基礎的学習が不十分であること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	21.0%	12.5%	10.6%	17.1%	16.1%	65
少し重要	36.3%	44.2%	25.9%	43.9%	37.1%	150
どちらともいえない	22.9%	24.2%	27.1%	14.6%	23.3%	94
それほど重要でない	15.3%	13.3%	27.1%	22.0%	17.8%	72
全く重要でない	4.5%	5.8%	9.4%	2.4%	5.7%	23
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	404

8. 修士論文のテーマと一貫していないこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	12.2%	7.5%	6.1%	14.6%	9.9%	38
少し重要	17.9%	31.7%	19.7%	26.8%	23.7%	91
どちらともいえない	41.7%	35.8%	27.3%	24.4%	35.4%	136
それほど重要でない	19.9%	19.2%	27.3%	26.8%	21.6%	83
全く重要でない	8.3%	5.8%	19.7%	7.3%	9.4%	36
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	384

9. 博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	14.7%	26.6%	18.6%	21.4%	20.0%	82
少し重要	30.8%	36.3%	32.6%	38.1%	33.5%	137
どちらともいえない	33.3%	20.2%	32.6%	11.9%	26.9%	110
それほど重要でない	15.4%	9.7%	9.3%	26.2%	13.4%	55
全く重要でない	5.8%	7.3%	7.0%	2.4%	6.1%	25
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	409

10. 院生本人の力量が不十分であること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	22.6%	31.1%	25.0%	27.9%	26.4%	108
少し重要	43.4%	44.3%	46.4%	37.2%	43.5%	178
どちらともいえない	22.6%	18.0%	25.0%	20.9%	21.5%	88
それほど重要でない	8.8%	5.7%	2.4%	11.6%	6.8%	28
全く重要でない	2.5%	0.8%	1.2%	2.3%	1.7%	7
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	409

11. 家族を抱えていること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	1.9%	1.7%	0.0%	9.1%	2.2%	9
少し重要	15.8%	8.4%	12.2%	11.4%	12.4%	50
どちらともいえない	38.0%	41.2%	40.2%	45.5%	40.3%	163
それほど重要でない	31.0%	34.5%	20.7%	25.0%	29.2%	118
全く重要でない	13.3%	14.3%	26.8%	9.1%	15.8%	64
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	404

12. アルバイトをしなければならないこと

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	9.5%	4.1%	7.1%	11.4%	7.6%	31
少し重要	28.5%	24.0%	28.6%	29.5%	27.5%	112
どちらともいえない	31.0%	38.0%	28.6%	31.8%	32.6%	133
それほど重要でない	23.4%	20.7%	22.6%	20.5%	22.1%	90
全く重要でない	7.6%	13.2%	13.1%	6.8%	10.3%	42
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	408

13. 企業等で本業の仕事を抱えていること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
非常に重要	8.4%	9.2%	11.7%	22.7%	10.9%	43
少し重要	15.6%	20.2%	16.9%	22.7%	18.2%	72
どちらともいえない	36.4%	35.3%	33.8%	20.5%	33.7%	133
それほど重要でない	27.9%	22.7%	15.6%	22.7%	23.3%	92
全く重要でない	11.7%	12.6%	22.1%	11.4%	13.9%	55
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	395

025. 貴研究科に入学してくる学生の力量をどのように評価されますか。

1. 外国語(例えば英語)を聴くこと：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	8.6%	12.5%	22.4%	16.7%	12.6%	49
どちらともいえない	52.1%	43.0%	44.9%	41.7%	46.8%	182
不満	39.3%	44.5%	32.7%	41.7%	40.6%	158
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	389

1. 外国語(例えば英語)を聴くこと：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	26.9%	36.8%	29.7%	26.5%	30.4%	136
どちらともいえない	50.9%	47.1%	45.1%	53.1%	48.7%	218
不満	22.2%	16.2%	25.3%	20.4%	21.0%	94
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	448

2. 外国語(例えば英語)を書くこと：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	3.1%	1.6%	4.1%	3.3%	3.1%	12
どちらともいえない	43.2%	14.8%	30.6%	29.2%	30.4%	118
不満	53.7%	83.6%	65.3%	64.6%	66.5%	258
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	388

2. 外国語(例えば英語)を書くこと：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	7.6%	6.6%	11.0%	8.2%	8.1%	36
どちらともいえない	52.9%	56.6%	42.9%	55.1%	52.1%	233
不満	39.4%	36.8%	46.2%	36.7%	39.8%	178
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

3. 外国語(例えば英語)を話すこと：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	3.7%	1.6%	4.1%	0.0%	2.6%	10
どちらともいえない	44.2%	18.8%	28.6%	27.1%	31.6%	123
不満	52.1%	79.7%	67.3%	72.9%	65.8%	256
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	389

3. 外国語(例えば英語)を話すこと：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	6.5%	4.4%	7.7%	4.1%	5.8%	26
どちらともいえない	54.1%	50.7%	40.7%	55.1%	50.3%	225
不満	39.4%	44.9%	51.6%	40.8%	43.8%	196
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

4. 作文能力(日本語)：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医歯系	学際系		
満足	12.3%	4.7%	10.2%	14.3%	9.7%	38
どちらともいえない	66.9%	51.6%	40.8%	61.2%	57.7%	225
不満	20.9%	43.8%	49.0%	24.5%	32.6%	127
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	390

4. 作文能力（日本語）：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	29.6%	20.6%	15.4%	26.0%	23.5%	105
どちらともいえない	56.8%	62.5%	68.1%	64.0%	61.5%	275
不満	13.6%	16.9%	16.5%	10.0%	15.0%	67
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

5. 専門分野の知識：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	12.1%	12.7%	18.8%	8.2%	12.6%	49
どちらともいえない	62.4%	69.8%	68.8%	71.4%	66.6%	259
不満	25.5%	17.5%	12.5%	20.4%	20.8%	81
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	389

5. 専門分野の知識：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	33.9%	40.0%	34.4%	40.0%	36.5%	163
どちらともいえない	58.5%	55.6%	62.2%	56.0%	57.9%	259
不満	7.6%	4.4%	3.3%	4.0%	5.6%	25
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

6. 教養的知識：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	9.7%	6.3%	12.2%	6.1%	8.4%	33
どちらともいえない	63.0%	64.6%	61.2%	63.3%	63.2%	247
不満	27.3%	29.1%	26.5%	30.6%	28.4%	111
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	391

6. 教養的知識：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	18.6%	11.0%	12.1%	12.0%	14.2%	64
どちらともいえない	68.0%	72.1%	72.5%	76.0%	70.9%	319
不満	13.4%	16.9%	15.4%	12.0%	14.9%	67
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	450

7. 思考力：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	13.6%	14.2%	14.3%	14.3%	13.9%	54
どちらともいえない	68.5%	66.9%	75.5%	67.3%	68.8%	267
不満	17.9%	18.9%	10.2%	18.4%	17.3%	67
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	388

7. 思考力：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	25.7%	32.1%	25.3%	26.0%	27.5%	123
どちらともいえない	61.4%	60.4%	67.0%	68.0%	63.1%	282
不満	12.9%	7.5%	7.7%	6.0%	9.4%	42
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

8. 博士課程後期学生としての全般的資質：博士課程前期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	9.7%	9.0%	14.0%	10.8%	10.2%	31
どちらともいえない	66.4%	73.0%	72.1%	67.6%	69.4%	211
不満	23.9%	18.0%	14.0%	21.6%	20.4%	62
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	304

8. 博士課程後期学生としての全般的資質：博士課程後期

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
満足	25.0%	28.6%	26.4%	24.5%	26.2%	116
どちらともいえない	62.5%	63.9%	62.6%	67.3%	63.6%	281
不満	12.5%	7.5%	11.0%	8.2%	10.2%	45
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	442

Q26. 日本学術振興会の特別研究員制度についてうかがいます。

(1) 貴研究科で、現在DC（博士課程在学者対象）に採用されている学生はいますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
多数いる	3.0%	10.7%	3.3%	4.2%	5.5%	24
少しいる	22.0%	51.1%	22.8%	35.4%	32.4%	141
いない	75.0%	38.2%	73.9%	60.4%	62.1%	270
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	435

(2) 貴研究科で、現在PD（博士号取得者対象）に採用されている学生はいますか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
多数いる	3.1%	8.5%	1.1%	4.2%	4.4%	19
少しいる	23.3%	53.1%	30.4%	41.7%	35.8%	155
いない	73.6%	38.5%	68.5%	54.2%	59.8%	259
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	433

(3) 特別研究員（DC、PD）に採用されることはどの程度困難ですか。

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
努力すれば採用される	20.5%	18.9%	16.5%	16.3%	18.7%	77
採用されるのはやや難しい	35.9%	37.0%	35.3%	34.9%	36.3%	149
採用されるのは極めて難しい	43.6%	43.3%	48.2%	48.8%	45.0%	185
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	411

027. 大学院での研究生活を充実したものにするためには、以下の事項はどの程度重要ですか。

1. 大学院のカリキュラム

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	54.9%	36.0%	36.2%	50.0%	44.7%	203
少し重要	32.4%	42.6%	39.4%	44.0%	38.3%	174
どちらともいえない	7.5%	13.2%	14.9%	4.0%	10.4%	47
それほど重要でない	5.2%	8.1%	9.6%	2.0%	6.6%	30
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	454

2. 授業の内容

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	65.3%	40.7%	26.7%	54.9%	49.1%	223
少し重要	27.2%	37.0%	54.3%	39.2%	37.2%	169
どちらともいえない	4.6%	17.0%	7.4%	3.9%	8.8%	40
それほど重要でない	2.9%	5.2%	9.6%	2.0%	4.8%	22
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	454

3. 指導教員の研究指導の内容

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	79.9%	75.7%	81.1%	80.4%	79.0%	361
少し重要	17.2%	20.6%	17.9%	19.6%	18.6%	85
どちらともいえない	2.9%	3.7%	1.1%	0.0%	2.4%	11
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	457

4. 指導教員と院生の研究テーマの関連性

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	28.3%	49.3%	56.8%	46.0%	42.6%	194
少し重要	43.4%	40.4%	32.6%	42.0%	40.0%	182
どちらともいえない	22.0%	9.6%	10.5%	8.0%	14.3%	65
それほど重要でない	6.4%	0.7%	0.0%	2.0%	2.9%	13
全く重要でない	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	455

5. 指導教員と相談する機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	50.3%	66.9%	67.7%	58.8%	59.9%	275
少し重要	43.4%	25.7%	26.0%	39.2%	34.0%	156
どちらともいえない	4.0%	6.6%	6.3%	2.0%	5.0%	23
それほど重要でない	2.3%	0.7%	0.0%	0.0%	1.1%	5
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	459

6. 学会参加への経済的支援

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	18.0%	37.5%	17.7%	17.3%	23.6%	108
少し重要	44.8%	50.7%	47.9%	48.1%	47.7%	218
どちらともいえない	27.3%	8.8%	27.1%	23.1%	21.2%	97
それほど重要でない	9.3%	2.9%	7.3%	11.5%	7.2%	33
全く重要でない	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	457

7. 学会で発表する機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	38.2%	65.4%	41.7%	59.6%	49.3%	226
少し重要	48.0%	28.7%	45.8%	34.6%	40.4%	185
どちらともいえない	10.4%	5.1%	10.4%	3.8%	8.1%	37
それほど重要でない	3.5%	0.7%	2.1%	1.9%	2.2%	10
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	458

8. 論文を執筆する機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	59.8%	71.9%	66.7%	73.1%	66.4%	304
少し重要	33.3%	24.4%	28.1%	25.0%	28.6%	131
どちらともいえない	5.7%	3.7%	5.2%	1.9%	4.6%	21
それほど重要でない	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	2
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	458

9. 教育助手(T. A.)の経験

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	6.4%	9.6%	5.2%	5.8%	7.0%	32
少し重要	33.7%	36.0%	37.5%	36.5%	35.4%	162
どちらともいえない	40.1%	43.4%	38.5%	38.5%	40.7%	186
それほど重要でない	16.9%	10.3%	14.6%	13.5%	14.0%	64
全く重要でない	2.9%	0.7%	4.2%	5.8%	2.8%	13
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	457

10. 研究助手(R. A.)の経験

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	7.7%	10.9%	7.4%	7.8%	8.6%	39
少し重要	35.5%	42.3%	42.1%	43.1%	39.7%	180
どちらともいえない	39.1%	40.1%	34.7%	35.3%	38.2%	173
それほど重要でない	14.8%	5.1%	12.6%	11.8%	11.0%	50
全く重要でない	3.0%	1.5%	3.2%	2.0%	2.4%	11
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	453

11. 十分な奨学金を得ること

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	51.1%	56.9%	40.6%	48.1%	50.2%	231
少し重要	33.3%	35.0%	42.7%	42.3%	37.0%	170
どちらともいえない	12.6%	6.6%	14.6%	5.8%	10.4%	48
それほど重要でない	2.9%	1.5%	2.1%	3.8%	2.4%	11
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	460

12. 海外奨学金や留学の機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	26.6%	32.4%	19.8%	34.6%	27.7%	127
少し重要	40.5%	36.8%	50.0%	26.9%	40.0%	183
どちらともいえない	25.4%	25.7%	26.0%	36.5%	26.9%	123
それほど重要でない	6.9%	5.1%	4.2%	1.9%	5.2%	24
全く重要でない	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	458

13. 外国語習得の機会

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	25.1%	32.1%	27.1%	28.8%	28.0%	128
少し重要	40.9%	46.7%	50.0%	53.8%	46.0%	210
どちらともいえない	27.5%	16.8%	19.8%	17.3%	21.7%	99
それほど重要でない	5.8%	4.4%	2.1%	0.0%	3.9%	18
全く重要でない	0.6%	0.0%	1.0%	0.0%	0.4%	2
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	457

14. 図書館の充実度

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	53.8%	27.4%	33.7%	34.6%	39.7%	181
少し重要	31.8%	43.0%	44.2%	42.3%	38.8%	177
どちらともいえない	11.0%	23.7%	21.1%	17.3%	17.5%	80
それほど重要でない	2.9%	5.9%	1.1%	5.8%	3.7%	17
全く重要でない	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	456

15. コンピュータの利用

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	38.4%	45.3%	44.8%	46.2%	42.6%	195
少し重要	40.1%	37.2%	43.8%	36.5%	39.7%	182
どちらともいえない	16.3%	14.6%	11.5%	15.4%	14.6%	67
それほど重要でない	4.7%	2.9%	0.0%	1.9%	2.8%	13
全く重要でない	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	458

16. 専用机や居室スペースの拡充

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	26.6%	36.8%	29.2%	36.5%	31.2%	143
少し重要	52.0%	42.6%	47.9%	40.4%	47.2%	216
どちらともいえない	18.5%	16.2%	22.9%	17.3%	18.6%	85
それほど重要でない	2.9%	4.4%	0.0%	3.8%	2.8%	13
全く重要でない	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	458

17. 他大学の院生や研究者との交流

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	37.8%	42.3%	24.0%	39.2%	36.3%	166
少し重要	47.7%	43.1%	63.5%	49.0%	49.9%	228
どちらともいえない	12.2%	13.9%	11.5%	11.8%	12.5%	57
それほど重要でない	1.7%	0.7%	1.0%	0.0%	1.1%	5
全く重要でない	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	457

18. 学内での研究会への参加

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
非常に重要	40.6%	20.9%	25.0%	27.5%	29.9%	135
少し重要	43.5%	46.3%	59.4%	60.8%	49.8%	225
どちらともいえない	12.9%	26.9%	13.5%	7.8%	16.6%	75
それほど重要でない	2.4%	6.0%	2.1%	3.9%	3.5%	16
全く重要でない	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	1
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	452

Q28. あなたは、博士号に関する以下のような見方に賛成されますか。

1. 博士論文の長さ（ページ数）は、長すぎる

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	23.8%	12.4%	15.8%	18.4%	18.0%	81
そう思わない	76.2%	87.6%	84.2%	81.6%	82.0%	369
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	450

2. 博士論文は、狭くても「一隅を照らす」ような研究成果を示したものである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	58.1%	67.4%	71.9%	62.0%	64.3%	287
そう思わない	41.9%	32.6%	28.1%	38.0%	35.7%	159
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	446

3. 博士論文は、その分野の学問の発展に大きく貢献した研究成果を示したものである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	47.1%	51.1%	45.8%	44.0%	47.6%	214
そう思わない	52.9%	48.9%	54.2%	56.0%	52.4%	236
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	450

4. 博士号は、幅広い分野の学識を有する者に与えられるべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	32.7%	29.1%	28.9%	29.4%	30.4%	137
そう思わない	67.3%	70.9%	71.1%	70.6%	69.6%	314
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	451

5. 博士号は、自立した一人前の研究者としての資質を証明するものである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	88.4%	85.4%	74.2%	86.5%	84.3%	388
そう思わない	11.6%	14.6%	25.8%	13.5%	15.7%	72
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	460

6. 博士号は、その分野の権威であることを証明するものである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	10.5%	6.6%	13.4%	11.5%	10.0%	46
そう思わない	89.5%	93.4%	86.6%	88.5%	90.0%	412
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	458

7. 博士号の全国的な水準を維持するため、他大学の教員を審査員として加えるべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	64.0%	62.9%	54.3%	68.6%	62.0%	279
そう思わない	36.0%	37.1%	45.7%	31.4%	38.0%	171
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	450

8. 博士号所有者は大学教員になることが多いから博士課程で大学教育に関する教育を行うべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	34.7%	22.6%	21.6%	40.0%	28.8%	130
そう思わない	65.3%	77.4%	78.4%	60.0%	71.2%	321
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	451

029. あなたは、大学院教育に関する次のような見方に賛成されますか。

1. 大学における専門教育は学部教育では不十分で、修士段階までの学習が必要だ

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	74.1%	93.2%	65.1%	86.3%	79.6%	351
そう思わない	25.9%	6.8%	34.9%	13.7%	20.4%	90
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	441

2. 修士段階の教育ではじめて、教員の研究と教育が一致する

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	52.0%	60.3%	40.5%	63.5%	53.9%	234
そう思わない	48.0%	39.7%	59.5%	36.5%	46.1%	200
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	434

3. 修士段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	49.1%	18.7%	35.4%	44.2%	36.9%	162
そう思わない	50.9%	81.3%	64.6%	55.8%	63.1%	277
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	439

4. 博士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	40.2%	28.9%	30.9%	33.3%	34.1%	155
そう思わない	59.8%	71.1%	69.1%	66.7%	65.9%	300
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	455

5. 専門職業人の養成を十分に行うためには大学外から専門家を専任教員として招聘するべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	69.0%	66.9%	67.4%	64.6%	67.6%	301
そう思わない	31.0%	33.1%	32.6%	35.4%	32.4%	144
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	445

6. 博士課程後期は、もっと多くの大学に設置されるべきである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	24.1%	15.8%	26.9%	17.6%	21.5%	97
そう思わない	75.9%	84.2%	73.1%	82.4%	78.5%	355
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	452

7. 博士課程後期を特定の大学に重点的に整備するのは、よいことである

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	43.0%	44.0%	36.8%	62.0%	44.0%	199
そう思わない	57.0%	56.0%	63.2%	38.0%	56.0%	253
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	452

8. 大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生数は大幅に増加した

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	23.0%	33.1%	29.7%	36.4%	28.9%	123
そう思わない	77.0%	66.9%	70.3%	63.6%	71.1%	302
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	425

9. 大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生の質は多様になった

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	40.9%	47.6%	41.3%	60.5%	45.0%	191
そう思わない	59.1%	52.4%	58.7%	39.5%	55.0%	233
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	424

10. 大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の大学院教育の質は向上した

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	26.4%	40.7%	34.1%	33.3%	32.9%	138
そう思わない	73.6%	59.3%	65.9%	66.7%	67.1%	282
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	420

11. 博士課程後期と博士課程前期の間に、教育上の連続性が不足している

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	22.4%	26.0%	25.4%	15.7%	23.3%	99
そう思わない	77.6%	74.0%	74.6%	84.3%	76.7%	325
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	424

12. 博士課程前期と学部教育の間に、教育上の連続性が不足している

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	45.0%	33.3%	45.5%	42.9%	41.2%	177
そう思わない	55.0%	66.7%	54.5%	57.1%	58.8%	253
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	430

13. 外国人留学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	63.6%	54.1%	44.4%	56.3%	56.2%	250
そう思わない	36.4%	45.9%	55.6%	43.8%	43.8%	195
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	445

14. 社会人学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	58.7%	45.5%	53.9%	61.2%	54.1%	237
そう思わない	41.3%	54.5%	46.1%	38.8%	45.9%	201
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	438

15. 他大学出身の学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	31.2%	25.2%	29.0%	44.9%	30.4%	136
そう思わない	68.8%	74.8%	71.0%	55.1%	69.6%	311
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	447

16. かつて学部教育で教えていたことを大学院で教えることができなくなった

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
そう思う	69.9%	74.3%	37.2%	68.6%	64.4%	293
そう思わない	30.1%	25.7%	62.8%	31.4%	35.6%	162
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	455

Q30. 貴研究科は、過去10年の間、以下の評価やレビューを受けたことがありますか。カッコ内には評価を受けた回数をご記入下さい。

回答結果の平均値	専門分野				全体
	文系	理系	医療系	学際系	
大学設置審議会による審査	1.5回	1.7回	1.5回	1.7回	1.6回
視学委員（文部科学省）による視察	1.0回	1.2回	1.3回	1.3回	1.2回
それ以外の文部（科学）省による審査等	1.5回	1.3回	1.0回	1.0回	1.3回
文部（科学）省以外の省庁による審査等	1.0回	1.1回	1.1回	0.0回	1.1回
大学評価・学位授与機構による分野別教育評価	1.0回	1.1回	1.2回	0.0回	1.1回
大学評価・学位授与機構による分野別研究評価	1.0回	1.0回	1.2回	0.0回	1.0回
大学基準協会による相互評価	1.0回	1.0回	1.0回	1.0回	1.0回
大学基準協会による加盟校評価	1.0回	1.1回	1.2回	1.3回	1.1回
大学・学部レベルの自己点検・評価（学部教育の評価）	3.2回	3.6回	2.8回	1.6回	3.1回
大学・研究科レベルの自己点検・評価（大学院教育）	2.8回	3.1回	2.0回	2.3回	2.8回
大学・学部レベルの自己点検・評価（研究評価）	2.9回	3.3回	3.1回	1.9回	3.0回
その他	1.0回	2.1回	1.4回	1.3回	1.6回

受けたことがある場合、その年度および教育の改善に役に立つかどうかについての感想をご記入下さい。

1. 大学設置審議会による審査

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	63.9%	85.5%	75.0%	70.6%	75.8%	100
いいえ	36.1%	14.5%	25.0%	29.4%	24.2%	32
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	132

2. 視学委員(文部科学省)による視察

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	75.7%	96.4%	88.1%	71.4%	87.3%	138
いいえ	24.3%	3.6%	11.9%	28.6%	12.3%	20
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	158

3. それ以外の文部(科学)省による審査等

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	50.0%	50.0%	60.0%	25.0%	48.5%	16
いいえ	50.0%	50.0%	40.0%	75.0%	51.5%	17
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	33

4. 文部(科学)省以外の省庁による審査等

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	30.8%	81.8%	50.0%	0.0%	48.6%	17
いいえ	69.2%	18.2%	50.0%	100.0%	51.4%	18
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	35

5. 大学評価・学位授与機構による分野別教育評価

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	36.4%	70.0%	77.8%	33.3%	60.5%	26
いいえ	63.6%	30.0%	22.2%	66.7%	39.5%	17
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	43

6. 大学評価・学位授与機構による分野別研究評価

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	41.7%	66.7%	66.7%	50.0%	57.1%	20
いいえ	58.3%	33.3%	33.3%	50.0%	42.9%	15
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	35

7. 大学基準協会による相互評価

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	80.4%	88.9%	85.0%	88.9%	84.1%	90
いいえ	19.6%	11.1%	15.0%	11.1%	15.9%	17
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	107

8. 大学基準協会による加盟校評価

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	57.7%	76.5%	75.0%	66.7%	67.2%	39
いいえ	42.3%	23.5%	25.0%	33.3%	32.8%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	58

9. 大学・学部レベルの自己点検・評価(学部教育の評価)

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	89.0%	92.0%	96.4%	72.7%	91.0%	203
いいえ	11.0%	8.0%	3.6%	27.3%	9.0%	20
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	223

10. 大学・研究科レベルの自己点検・評価（大学院教育）

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	90.4%	91.9%	94.2%	89.5%	91.7%	209
いいえ	9.6%	8.1%	5.8%	10.5%	8.3%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	228

11. 大学・学部レベルの自己点検・評価（研究評価）

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	89.5%	91.5%	94.4%	83.3%	91.1%	194
いいえ	10.5%	8.5%	5.6%	16.7%	8.9%	19
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	213

12. その他

	専門分野				全体	回答数 (全体)
	文系	理系	医療系	学際系		
はい	90.0%	95.0%	100.0%	100.0%	95.3%	41
いいえ	10.0%	5.0%	0.0%	0.0%	4.7%	2
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	43

3. 質問紙調査票

各 大学大学院研究科 研究科長 各位

「研究科長調査」と「大学院生調査」のお願い

拝啓 時下ますますご清勝のこととお慶び申し上げます。

さて、広島大学では、高等教育研究開発センターを中心とする研究グループが申請した研究課題「21世紀型高等教育システム構築と質的保証」が、2002年度「21世紀COEプログラム」(人文科学)に採択され、現在、鋭意研究を進めているところです。

2003年度は、その一環として、全国の大学院教育に関する調査研究を実施しております。この研究は、博士課程教育の現状と質的保証、学位授与の振興方策を検討することを目的とするものです。このたび、我が国の約900の博士課程を有する研究科の研究科長と大学院博士課程学生を対象とする2種類の質問紙調査を実施することになりました。質問紙は、博士課程への入学、大学院教育のカリキュラム、学位審査と評価などの質問から構成されております。

つきましては、ご多忙のところを恐縮ですが、次の3点についてご協力いただければ幸いに存じます。

1. 「研究科長調査」に対する回答を先生にお願いいたします。

場合によっては、研究科の意見を代表しうるような他の先生にご回答いただいても結構です。

2. お手数ですが、「大学院生調査」質問紙を貴研究科の博士課程後期(医学歯学獣医学等にあつては博士課程)に在学の院生にご配布いただき、回答をお願いして頂ければまことに幸いです。なお、その際、外国人留学生や社会人の院生にもご配布願えれば幸いです。

3. 貴研究科の「学生便覧」「履修の手引き」および「博士学位審査に関する内規」を寄贈していただければありがたく存じます。

ご多忙のところ、お手数をおかけしますが、「研究科長調査」と「大学院生調査」いずれも、回答済みの質問紙は、同封の返信用封筒にて7月末までにご投函ください。

これらの分析結果は、後日、日本教育社会学会、日本高等教育学会など専門の学会での発表の他、高等教育研究開発センターの出版物で公表いたします。

なお、言うまでもなく、回答はすべて統計的に処理し、研究科名および回答者名はいっさい公表することはありませんので、よろしくご協力いただきますようお願い申し上げます。

敬具

平成15年6月

「21世紀型高等教育システム構築と質的保証」拠点リーダー
広島大学・高等教育研究開発センター長 有本 章

なお、調査に関する質問等は、下記までお願いいたします。

山崎博敏(広島大学大学院教育学研究科) 電話 0824-24-6740 hyamasak@hi-roshi-ma-u.ac.jp

葛城浩一(広島大学高等教育研究開発センター) 電話 0824-24-6241 kuz@hi-roshi-ma-u.ac.jp

大学院教育に関する研究科長調査

ご多忙のところ恐縮ですが、下記の質問にお答えいただき、同封の返信用封筒にて7月末までにご返送下さいますようお願いいたします。

なお、医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科など、博士課程（4年）のみが設置されている研究科では、「博士課程後期」を「博士課程」と読み替えてお答え下さい。その場合、「博士課程前期」については無回答で結構です。

また、「博士課程前期」は、研究科によって「修士課程」と読み替えてお答え下さい。

< 貴研究科に関する全体的な質問 >

Q 1. まず、所属大学・研究科名をご記入の上、該当する数字に○をおつけ下さい。

研究科名	() 大学大学院 () 研究科			
研究科の 教育研究分野	1. 人文科学	2. 社会科学	3. 教育学	4. 理学
	5. 工学	6. 農学	7. 医学・歯学	8. 薬学・保健
	9. 芸術	10. 学際・その他		
回答者の地位	1. 研究科長	2. 研究科長補佐	3. 専攻長	4. 教授
回答者の専門	(例：機械工学など)			

Q 2. 貴研究科および直属の学部で授与する学位の名称をご記入下さい。対応する課程がない場合は該当の欄に「なし」とご記入下さい。

(例：博士（文学）を授与する場合、枠内に「文学」とご記入下さい。)

博士				
修士				
学士				

Q 3. 貴研究科および直属の学部の本年度の学生数をご記入下さい。対応する課程がない場合は空欄のままで結構です。

	博士課程後期学生	博士課程前期学生	学部学生
計	人	人	人
うち社会人学生	人	人	人
うち留学生	人	人	人

Q 4. 貴研究科で、平成14年度1年間に授与した修士と博士の学位数をご記入下さい。

	修士号	博士号		
		計	うち課程博士(甲)	うち論文博士(乙)
計	人	人	人	人
うち社会人学生	人	人	人	人
うち留学生	人	人	人	人

<大学院入試に関する質問>

Q 5. 貴研究科の入試の種類と実施回数についてうかがいます。

	博士課程前期	博士課程後期
1年に何回入試がありますか	年()回	年()回
社会人特別選抜はありますか	1.ある 2.ない	1.ある 2.ない
留学生特別選抜はありますか	1.ある 2.ない	1.ある 2.ない
それ以外に特別選抜がありましたら、その名称をご記入下さい。		

Q 6. 博士課程前期の入試（一般選抜、日本人）における外国語についてうかがいます。

1. すべての専攻（特別選抜を除く）で2カ国語を課している
2. 2カ国語を課している専攻と1カ国語を課している専攻がある
3. すべての専攻で1カ国語を課している
4. 専攻によって、外国語を課しているところと課していないところがある (上の質問で、外国語を課している場合、お答え下さい)
1. すべての専攻で、辞書持ち込みを許可している
2. 専攻によって、辞書持ち込みを許可しているところがある
3. すべての専攻で、辞書持ち込みを許可していない

Q 7. 博士課程後期の入試（一般選抜、日本人）における外国語についてうかがいます。

1. 自研究科博士課程前期からの進学者、他大学院からの入学者を問わず全員に課している
2. 博士課程前期からの進学者は免除し、他大学院からの入学者のみに課している
3. 特に課していない
4. 専攻によって異なる (上の質問で、外国語を課している場合、お答え下さい)
1. すべての専攻で、2カ国語を課している
2. 2カ国語を課している専攻と1カ国語を課している専攻がある
3. すべての専攻で1カ国語を課している

Q 8. 貴研究科の平成14年度の入試の状況について、以下の各欄に対応する人数をご記入下さい。

	博士課程前期			博士課程後期		
	計	うち 自大学 出身	うち 他大学 出身	計	博士課程前期から 進学(医学研究科等 では自大学出身)	他大学院・研究科から 入学(医学研究科で は他大学出身)
受験者数	人	人	人	人	人	人
合格者数	人	人	人	人	人	人
入学者数	人	人	人	人	人	人

<就職に関する質問>

Q9. 貴研究科の博士課程前期・後期の卒業生の就職状況をどのように評価されていますか。

	博士課程前期	博士課程後期
現 在	1. おおよそ順調 2. ふつう 3. あまり良くない	1. おおよそ順調 2. ふつう 3. あまり良くない
10年前と比べて	1. 良くなった 2. 変わらない 3. 悪くなった	1. 良くなった 2. 変わらない 3. 悪くなった

Q10. 下記に卒業生の主な就職先を5つ挙げています。博士課程前期・後期それぞれの平成14年度の卒業生について人数をご記入ください。もし該当するデータがない場合は、おおよその%でお書きください。(人数を記入いただいた場合は%は空欄のままで結構です)

	博士課程前期	博士課程後期
1. 大学等の教員	() 人 () %	() 人 () %
2. 高校以下の学校の教員	() 人 () %	() 人 () %
3. 公務員	() 人 () %	() 人 () %
4. 会社員	() 人 () %	() 人 () %
5. 民間企業等の研究者	() 人 () %	() 人 () %
6. 民間企業・病院等の技術者・専門家	() 人 () %	() 人 () %
7. その他	() 人 () %	() 人 () %
8. 無業者	() 人 () %	() 人 () %

<大学院の目的に関する質問>

Q11. 貴研究科が果たしている主な役割は何だとお考えですか。番号に○をつけて下さい。

	博士課程前期	博士課程後期
1. 大学教員の養成	1. そう思う 2. そう思わない	1. そう思う 2. そう思わない
2. 研究者の養成	1. そう思う 2. そう思わない	1. そう思う 2. そう思わない
3. 専門職業人の養成	1. そう思う 2. そう思わない	1. そう思う 2. そう思わない
4. 基礎研究の場	1. そう思う 2. そう思わない	1. そう思う 2. そう思わない
5. 応用研究の場	1. そう思う 2. そう思わない	1. そう思う 2. そう思わない

Q12. 貴研究科にとって、次の1から4に挙げた事項について、どちらが重要だと思われるか。

	博士課程前期	博士課程後期
1	1. 訓練 2. 同等 3. 教育	1. 訓練 2. 同等 3. 教育
2	1. 技能の修得 2. 同等 3. 創造性の開発	1. 技能の修得 2. 同等 3. 創造性の開発
3	1. 専門を深める 2. 同等 3. 幅を広げる	1. 専門を深める 2. 同等 3. 幅を広げる
4	1. 専門職業人養成 2. 同等 3. 研究者の養成	1. 専門職業人養成 2. 同等 3. 研究者の養成

<カリキュラムと学位>

Q13. 貴研究科に修士論文を書かないで修士号を取得するコースがありますか。

1. ある →コース名をご記入下さい()
2. ない

Q14. 貴研究科の博士課程後期のカリキュラムを、他の大学と比べてどのように評価されますか。

1. 優れていると思う 2. ほぼ同等だと思う 3. やや劣っていると思う

Q15. あなたの分野で授与される博士号の水準は、大学間でどの程度異なっていますか。

1. どの大学もおおよそ同等だと思う
2. 大学間でやや異なっていると思う
3. 大学間で大きく異なっていると思う

Q16. 貴研究科で授与される博士号の水準を、他大学の同分野で授与されるものと比べてどのように評価されますか。

1. 優れていると思う 2. ほぼ同等だと思う 3. やや劣っていると思う

Q22. 貴研究科では、課程博士の論文を提出する以前に、おおよそどのような前提条件が公式・非公式に課されていますか。1,2について特に用件がない場合は、「特になし」を丸で囲んで下さい。なお、専攻によって異なる場合、ご所属の専攻についてご回答下さい。

1. 学会発表 についての要件	国内全国学会での口頭発表 () 件 国際学会での口頭発表 () 件 その他 () 特になし
2. 学術論文等 についての要件	大学紀要等への論文掲載 () 件 全国的な学会誌論文掲載 () 件 国際的な学会誌論文掲載 () 件 その他 () 特になし
(以下については、ありましたらその内容をご記入下さい)	
3. 外国語能力の試験	
4. その他	

Q23. 博士論文の審査委員会の編成についてうかがいます。

貴研究科では、最低何人で編成することになっていますか。

() 人

その中に、他講座あるいは他専攻の教員が参加しますか。

1. よくある 2. ときどき 3. ほとんどない

その中に、他大学の教員が参加しますか。

1. よくある 2. ときどき 3. ほとんどない

Q24. 標準修業年限内での博士号取得が困難だとすれば、どのような条件が影響していると思われますか。

	非常に 重要	少し 重要	どちらとも いえない	それほど重 要でない	全く重要 でない
1. 論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと	1	2	3	4	5
2. 学位論文が長いため執筆に時間がかかること	1	2	3	4	5
3. 学位論文の要求水準が高すぎること	1	2	3	4	5
4. 論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること	1	2	3	4	5
5. 博士号の水準が曖昧なこと	1	2	3	4	5
6. 院生のテーマ設定が曖昧なこと	1	2	3	4	5
7. 学部時代の基礎的学習が不十分であること	1	2	3	4	5
8. 修士論文のテーマと一貫していないこと	1	2	3	4	5
9. 博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと	1	2	3	4	5
10. 院生本人の力量が不十分であること	1	2	3	4	5
11. 家族を抱えていること	1	2	3	4	5
12. アルバイトをしなければならないこと	1	2	3	4	5
13. 企業等で本業の仕事を抱えていること	1	2	3	4	5
14. その他 ()					

Q25. 貴研究科に入学してくる学生の力量をどのように評価されますか。

	博士課程前期			博士課程後期		
	満足	どちらとも いえない	不満	満足	どちらとも いえない	不満
1. 外国語(例えば英語)を読むこと	1	2	3	1	2	3
2. 外国語(例えば英語)を書くこと	1	2	3	1	2	3
3. 外国語(例えば英語)を話すこと	1	2	3	1	2	3
4. 作文能力(日本語)	1	2	3	1	2	3
5. 専門分野の知識	1	2	3	1	2	3
6. 教養的知識	1	2	3	1	2	3
7. 思考力	1	2	3	1	2	3
8. 博士課程後期学生としての全般的資質	1	2	3	1	2	3

Q26. 日本学術振興会の特別研究員制度についてうかがいます。

(1) 貴研究科で、現在DC(博士課程在学者対象)に採用されている学生はいますか。

1. 多数いる 2. 少しいる 3. いない

(2) 貴研究科で、現在PD(博士号取得者対象)に採用されている学生はいますか。

1. 多数いる 2. 少しいる 3. いない

(3) 特別研究員(DC、PD)に採用されることはどの程度困難ですか。

1. 努力すれば採用される
2. 採用されるのはやや難しい
3. 採用されるのは極めて難しい

Q27. 大学院での研究生生活を充実したものにするためには、以下の事項はどの程度重要ですか。

	非常に 重要	少し 重要	どちらとも いえない	それほど重 要でない	全く重要 でない
1. 大学院のカリキュラム	1	2	3	4	5
2. 授業の内容	1	2	3	4	5
3. 指導教員の研究指導の内容	1	2	3	4	5
4. 指導教員と院生の研究テーマの関連性	1	2	3	4	5
5. 指導教員と相談する機会	1	2	3	4	5
6. 学会参加への経済的支援	1	2	3	4	5
7. 学会で発表する機会	1	2	3	4	5
8. 論文を執筆する機会	1	2	3	4	5
9. 教育助手(T. A.)の経験	1	2	3	4	5
10. 研究助手(R. A.)の経験	1	2	3	4	5
11. 十分な奨学金を得ること	1	2	3	4	5
12. 海外奨学金や留学の機会	1	2	3	4	5
13. 外国語習得の機会	1	2	3	4	5
14. 図書館の充実度	1	2	3	4	5
15. コンピュータの利用	1	2	3	4	5
16. 専用机や居室スペースの拡充	1	2	3	4	5
17. 他大学の院生や研究者との交流	1	2	3	4	5
18. 学内での研究会への参加	1	2	3	4	5
19. その他(ご記入下さい)					

Q28. あなたは、博士号に関する以下のような見方に賛成されますか。

1. 博士論文の長さ（ページ数）は、長すぎる 1. そう思う 2. そう思わない
2. 博士論文は、狭くても「一隅を照らす」ような研究成果を示したものである 1. そう思う 2. そう思わない
3. 博士論文は、その分野の学問の発展に大きく貢献した研究成果を示したものである 1. そう思う 2. そう思わない
4. 博士号は、幅広い分野の学識を有する者に与えられるべきである 1. そう思う 2. そう思わない
5. 博士号は、自立した一人前の研究者としての資質を証明するものである 1. そう思う 2. そう思わない
6. 博士号は、その分野の権威であることを証明するものである 1. そう思う 2. そう思わない
7. 博士号の全国的な水準を維持するため、他大学の教員を審査員として加えるべきである 1. そう思う 2. そう思わない
8. 博士号所有者は大学教員になることが多いから博士課程で大学教育に関する教育を行うべきである 1. そう思う 2. そう思わない

Q29. あなたは、大学院教育に関する次のような見方に賛成されますか。

1. 大学における専門教育は学部教育では不十分で、修士段階までの学習が必要だ 1. そう思う 2. そう思わない
2. 修士段階の教育ではじめて、教員の研究と教育が一致する 1. そう思う 2. そう思わない
3. 修士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである 1. そう思う 2. そう思わない
4. 博士の段階で、研究者養成のための課程と専門職業人養成の課程を別個に設けるべきである 1. そう思う 2. そう思わない
5. 専門職業人の養成を十分に行うためには大学外から専門家を専任教員として招聘するべきである 1. そう思う 2. そう思わない
6. 博士課程後期は、もっと多くの大学に設置されるべきである 1. そう思う 2. そう思わない
7. 博士課程後期を特定の大学に重点的に整備するのは、よいことである 1. そう思う 2. そう思わない
8. 大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生数は大幅に増加した 1. そう思う 2. そう思わない
9. 大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の博士課程後期学生の質は多様になった 1. そう思う 2. そう思わない
10. 大学院重点化政策が行われたこの10年間に、私の研究科の大学院教育の質は向上した 1. そう思う 2. そう思わない
11. 博士課程後期と博士課程前期の間に、教育上の連続性が不足している 1. そう思う 2. そう思わない
12. 博士課程前期と学部教育の間に、教育上の連続性が不足している 1. そう思う 2. そう思わない
13. 外国人留学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった 1. そう思う 2. そう思わない
14. 社会人学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった 1. そう思う 2. そう思わない
15. 他大学出身の学生が増えたため、授業や研究指導で配慮しなければならないことが多くなった 1. そう思う 2. そう思わない
16. かつて学部教育で教えていたことを大学院で教えなければならなくなった 1. そう思う 2. そう思わない

<大学内外における評価について>

Q30. 貴研究科は、過去 10 年の間、以下の評価やレビューを受けたことがありますか。

受けたことがある場合、その年度および教育の改善に役に立つかどうかについての感想をご記入下さい。カッコ内には評価を受けた回数をご記入下さい。

	回数	評価を受けた直近年	改善に役立つと思うか
1. 大学設置審議会による審査	()回	年	1. はい 2. いいえ
2. 視学委員（文部科学省）による視察	()回	年	1. はい 2. いいえ
3. それ以外の文部（科学）省による審査等（)	()回	年	1. はい 2. いいえ
4. 文部（科学）省以外の省庁による審査等（)	()回	年	1. はい 2. いいえ
5. 大学評価・学位授与機構による分野別教育評価	()回	年	1. はい 2. いいえ
6. 大学評価・学位授与機構による分野別研究評価	()回	年	1. はい 2. いいえ
7. 大学基準協会による相互評価	()回	年	1. はい 2. いいえ
8. 大学基準協会による加盟校評価	()回	年	1. はい 2. いいえ
9. 大学・学部レベルの自己点検・評価（学部教育の評価）	()回	年	1. はい 2. いいえ
10. 大学・研究科レベルの自己点検・評価（大学院教育）	()回	年	1. はい 2. いいえ
11. 大学・学部レベルの自己点検・評価（研究評価）	()回	年	1. はい 2. いいえ
12. その他（)	()回	年	1. はい 2. いいえ

Q31. 大学院教育の質を向上させるには、どのような改善が必要ですか。ご自由にお書き下さい。

Q32. 学位審査のあり方について、改善が必要だと思われる点がありましたら、ご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。回答済みの調査票は、同封の返信用封筒にて、2003年7月末までにご返送下さい。

大学院生の学習・研究活動に関する調査

ご多忙のところご協力いただきありがとうございます。この調査は、我が国の大学院博士課程教育と博士号取得のあり方について検討することを目的とするものです。

回答は無記名であり、数字は統計的に処理しますので、あなたの個人的な情報が漏れることは決してありません。大学院博士課程学生のみなさんの率直な意見をお寄せ下さいますようお願いいたします。

なお、医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科など、博士課程(4年)のみが設置されている研究科では、「博士課程後期」を「博士課程」と読み替えてお答えください。その場合、「博士課程前期」については無解答で結構です。また、「博士課程前期」は、所属する研究科によって「修士課程」と読み替えてお答えください。

回答済みの質問紙は2003年7月末までに返信用封筒にて切手を貼らずに郵便ポストにご投函下さい。なお、この調査に関する質問等がありましたら下記までご連絡下さい。

問い合わせ先

山崎博敏(広島大学大学院教育学研究科) 電話 0824-24-6740 hyamasak@hi-roshi-ma-u.ac.jp

葛城浩一(広島大学高等教育研究開発センター) 電話 0824-24-6241 kuz@hi-roshi-ma-u.ac.jp

I. まず、あなたご自身についておうかがいします。

Q1. 年齢

歳

Q2. 性別

1. 男 2. 女

Q3. 家族の状況

1. 配偶者なし 2. 配偶者あり

Q4. 国籍

1. 日本国籍 2. 外国籍

Q5. 外国籍の方にうかがいます。日本での滞在期間をご記入ください。

年

Q6. あなたの現在の在籍大学・研究科と学年、専攻分野をご記入下さい。

大学の設置者	1. 国立 2. 公立 3. 私立
大学名	大学
研究科・専攻	研究科 専攻
学年・入学年度	博士課程後期()年 ()年度入学(博士課程後期)
専攻分野	1. 人文科学 2. 社会科学 3. 教育学 4. 理学 5. 工学 6. 農学 7. 医学・歯学 8. 薬学・保健 9. 芸術 10. 学際・その他

Q7. あなたのこれまでの経歴をご記入下さい。2つある場合は2行に分けてお書き下さい。

	入学年	大学名	学部・研究科名	専攻分野
学部	19 年	大学	学部	
博士課程前期	年	大学	研究科	

なお、博士課程後期入学以前に仕事に就いていたことがある場合、その期間と職業をご記入下さい。

いつから	いつまで	職業
年	年	
年	年	

また、留学経験があれば、その期間と国名・大学名をご記入下さい。

いつから	いつまで	国名	大学や滞在先の名称
年	年		
年	年		

II. 大学院への進学動機

Q8. 博士課程後期へ進学しようとしたのは、おおよそ、いつ頃ですか。

1. 高校卒業以前
2. 大学入学の頃
3. 大学卒業の頃
4. 博士課程前期在学中
5. 大学(院)卒業後社会に出てから

Q9. 博士課程後期に進むにあたって、特にあなたに影響を与えた人は誰ですか。(3つまで重複回答可)

1. 高校時代の先生
2. 学部時代の先生
3. 博士課程前期の指導教員
4. 博士課程後期の指導教員予定者(博士課程前期と指導教員が同じ場合は「3」を選択して下さい)
5. 大学の同級生
6. 大学の上級生・院生
7. 配偶者
8. 両親
9. その他 ()
10. 特に誰もいない

Q10. 博士課程前期を修了(医歯獣医系では学部を卒業)するにあたり、博士課程(後期)進学以外に、就職を真剣に考えましたか。

1. はい
2. いいえ

Q11. 上の質問で「1. はい」と答えた方にうかがいます。他に考えた職業はどのような職業ですか。

1. 会社員
2. 公務員
3. 学校教員
4. 大学等の教育研究職
5. その他の職業()

Q12. 博士課程後期への進学に際して、以下の事柄はどの程度重要でしたか。

当てはまる数字に○をつけてください。

	非常に重要	少し重要	どちらとも いえない	それほど重 要でない	全く重要 でない
1. 大学で専門をさらに深めたかったから	1	2	3	4	5
2. 将来、専門家として活躍するため	1	2	3	4	5
3. 研究する機会を得るため	1	2	3	4	5
4. より良い就職の機会を得るため	1	2	3	4	5
5. 博士号を取得したかったから	1	2	3	4	5
6. 指導教員の勧めがあったから	1	2	3	4	5
7. 家族からの支援があったから	1	2	3	4	5
8. 職場からの派遣があったから	1	2	3	4	5
9. 日本育英会の奨学金がもらえるから	1	2	3	4	5
10. その他国内の奨学金がもらえるから	1	2	3	4	5
11. 日本留学の奨学金がもらえるから(留学生)	1	2	3	4	5
12. その他の理由がありましたらお書き下さい。					

Ⅲ. 大学院での教育と研究活動

Q13. あなたはこの4月から現在まで、以下のような活動にどの程度の時間を使っていますか。

	かなりの時間 を使っている	少し時間を 使っている	あまり時間を 使っていない	全く時間を 使っていない
1. 博士論文のテーマに関する調査や実験	1	2	3	4
2. 博士論文のテーマに関する文献講読	1	2	3	4
3. 博士論文のテーマ以外の研究活動 (含む R. A.)	1	2	3	4
4. 博士論文の執筆	1	2	3	4
5. 学会誌等の論文執筆	1	2	3	4
6. 学会発表の準備	1	2	3	4
7. 大学での教育活動(T. A. など)	1	2	3	4
8. 授業への出席	1	2	3	4
9. 外国語の学習	1	2	3	4
10. アルバイト	1	2	3	4
11. 大学等での非常勤講師	1	2	3	4
12. 研究室内の院生・学生との研究会	1	2	3	4
13. 学内の院生・学生との研究会	1	2	3	4
14. 他大学と院生や研究者との研究会	1	2	3	4
15. その他 ()				

Q14. あなたは以下のような学会活動をどの程度経験していますか。

	2回以上経験がある	1回だけ経験がある	未経験
1. 国際的な学会での口頭発表	1	2	3
2. 国内の学会での口頭発表	1	2	3
3. 地域的な学会での口頭発表	1	2	3
	第一著者として掲載された経験がある	2番目以下の著者として掲載経験がある	未経験
1. 国際的な学会誌への論文	1	2	3
2. 全国的な学会誌への論文	1	2	3
3. 地域的な学会誌への論文	1	2	3
4. 大学等の紀要への論文	1	2	3

Q15. 現在の博士課程後期での研究活動に、以下の事項はどの程度役に立っていますか。

	とても役に立っている	少し役に立っている	あまり役に立っていない	全く役に立っていない
1. 学部時代の教養教育・一般教育	1	2	3	4
2. 学部時代の専門教育	1	2	3	4
3. 学部時代の卒業研究	1	2	3	4
4. 修士時代の授業	1	2	3	4
5. 修士論文のための研究	1	2	3	4
6. 大学時代の課外活動	1	2	3	4
7. 大学時代の英語の学習	1	2	3	4
8. 高校までの英語の学習	1	2	3	4
9. 高校までの学習	1	2	3	4
10. 大学への受験勉強	1	2	3	4
11. 大学院への受験勉強	1	2	3	4
12. その他（ご記入下さい）				

Q16. 博士課程後期に入学後、博士号の取得までにおおよそ何年間必要だと思われますか。

1. 3年 2. 4－5年 3. 6年以上

Q17. あなたは、博士課程後期在学中に課程博士を取得する見込みはどの程度あると思いますか。

1. 十分に可能である 2. 努力すれば可能である 3. 難しい

Q18. あなたのまわりの大学院生は博士課程後期在学中での博士号の取得をどの程度目標にしていますか。

1. ほとんど全員が博士号取得を目指している
 2. 取得を目指している者がいる
 3. 取得を目指している者は少ない

Q19. 修業年限内での博士号の取得が困難だとすれば、どのような条件がどの程度影響していると思われますか。

	非常に重要	少し重要	どちらともいえない	それほど重要でない	全く重要でない
1. 論文作成に必要な研究成果を期間内に出すこと	1	2	3	4	5
2. 学位論文が長いめ執筆に時間がかかること	1	2	3	4	5
3. 学位論文の要求水準が高すぎること	1	2	3	4	5
4. 論文提出の前提条件を満たすのに時間がかかること	1	2	3	4	5
5. 博士号の水準が曖昧なこと	1	2	3	4	5
6. 自分自身のテーマ設定が曖昧なこと	1	2	3	4	5
7. 学部時代の基礎的学習が不十分であること	1	2	3	4	5
8. 修士論文のテーマと一貫していないこと	1	2	3	4	5
9. 博士号取得の目標達成の意欲が弱いこと	1	2	3	4	5
10. 自分自身の力量が不十分であること	1	2	3	4	5
11. 家族を抱えていること	1	2	3	4	5
12. アルバイトをしなければならないこと	1	2	3	4	5
13. 企業等で本業の仕事を抱えていること	1	2	3	4	5
14. その他 ()					

Q20. あなたの学位論文に関して質問します。

(1) 論文のテーマは決定していますか。

1. はい
2. いいえ

(2) 上の質問で「決定している」と答えた方にお尋ねし聞きます。実際にどのようにして選びましたか。

1. 自分自身で選んだ
2. 指導教員と相談して選んだ
3. 指導教員が実際に選んだ
4. 副指導教員や助手と相談して選んだ
5. 先輩の院生と相談して選んだ

(3) 学位論文に関する研究は、事実上、いつ始めましたか。

1. 学部時代の卒業論文
2. 博士課程前期入学後
3. 博士課程後期入学後
4. 就職後

Q21. あなたの研究テーマは、指導教員の研究テーマとどのような関係がありますか。

1. 自分の研究テーマは、指導教員を中心とする共同研究の一部である
2. 自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域の一部である
3. 自分の研究テーマは、指導教員が得意とする研究領域とは異なったテーマである

Q22. あなたの論文指導教員は博士論文に関して、どのくらい密接にあなたに指導しますか。

1. とても十分である 2. 少な目だが十分である 3. 十分ではない

Q23. あなたは指導教員と博士論文の研究内容についてどの程度の頻度で相談しますか。

1. 週1回以上 2. 週1回程度 3. 月に1, 2回程度
4. 年に数回程度 5. ほとんどない

Q24. あなたは、課程博士を取得するために、どのような前提条件を満たさなければならないか、研究科や専攻の規則や規定をどの程度知っていますか。

1. よく知っている
2. おおよそ知っている
3. あまり詳しく知らない

Q25. 課程博士取得のために必要な前提条件を満たすことは、どの程度難しいと思われますか。

1. 難しい 2. やや難しい 3. 比較的容易である

Q26. あなたは、あなた自身の以下のような能力をどのように評価されますか。

	十分	どちらともいえない	不十分
1. 外国語(例えば英語)を読むこと	1	2	3
2. 外国語(例えば英語)を書くこと	1	2	3
3. 外国語(例えば英語)を話すこと	1	2	3
4. 作文能力(日本語)	1	2	3
5. 専門分野の知識	1	2	3
6. 教養的知識	1	2	3
7. 思考力	1	2	3
8. 博士課程後期学生としての全体的資質	1	2	3
9. 英語以外に読むことのできる外国語があったらご記入下さい。			

Q27. あなたはティーチング・アシスタント(T. A.)の経験がありますか。

1. 現在担当している 2. 担当したことがある 3. 担当したことはない

Q28. (担当したことのある人にうかがいます) T. A.の経験は、どのように役に立ちましたか。

1. 自分の研究活動の発展に役に立った。
2. 基礎的な知識を整理するのに役に立った
3. 大学教育の方法を学ぶのに役に立った
4. たいして役に立たなかった

Q29. あなたはリサーチ・アシスタント（R. A.）の経験がありますか。

1. 現在担当している 2. 担当したことがある 3. 担当したことはない

Q30.（担当したことのある人にうかがいます）R. A.の経験は、どのように役に立ちましたか。

1. 自分の研究活動の発展に役に立った。
 2. 基礎的な研究スキルを学ぶのに役に立った
 3. 研究の方法を学ぶのに役に立った
 4. たいして役に立たなかった

IV. 博士課程での学習や研究の条件

Q31. 大学院での研究生活を充実したものにするためには、以下の事項はどの程度重要ですか。

	非常に重要	少し重要	どちらともいえない	それほど重要でない	全く重要でない
1. 大学院のカリキュラム	1	2	3	4	5
2. 授業の内容	1	2	3	4	5
3. 指導教員の研究指導の内容	1	2	3	4	5
4. 指導教員と自分の研究テーマの関連性	1	2	3	4	5
5. 指導教員と相談する機会	1	2	3	4	5
6. 学会参加への経済的支援	1	2	3	4	5
7. 学会で発表する機会	1	2	3	4	5
8. 論文を執筆する機会	1	2	3	4	5
9. 教育助手(T. A.)の経験	1	2	3	4	5
10. 研究助手(R. A.)の経験	1	2	3	4	5
11. 十分な奨学金を得ること	1	2	3	4	5
12. 海外奨学金や留学の機会	1	2	3	4	5
13. 外国語修得の機会	1	2	3	4	5
14. 図書館の充実度	1	2	3	4	5
15. コンピュータの利用	1	2	3	4	5
16. 専用機や居室スペースの拡充	1	2	3	4	5
17. 他大学の院生や研究者との交流	1	2	3	4	5
18. 学内での研究会への参加	1	2	3	4	5
19. その他（ご記入下さい）					

Q32. 以下のものは、大学や研究室にありますか。

	自分専用のもがある	共用のもがある	ない
1. 机	1	2	3
2. パソコン	1	2	3

Q33. あなたは現在、日本学術振興会の特別研究員（DC）を受けていますか。

1. はい 2. いいえ

執筆者紹介

* 所属は本書刊行時点のもの

総括	山崎 博敏	広島大学大学院教育学研究科 教授
	福留 東土	日本学術振興会特別研究員
	葛城 浩一	広島大学高等教育研究開発センター COE研究員

大学院教育と学位授与に関する研究－全国調査の報告－
(COE研究シリーズ3)

2004(平成16)年3月31日 発行

編 著 広島大学高等教育研究開発センター
〒739-8512 東広島市鏡山 1-2-2
電話 (082)424-6240
印刷所 中本総合印刷株式会社
〒732-0802 広島市南区大州 5-1-1
電話 (082)281-4221(代)

ISBN4-938664-96-8